秘するが花

# 月蒼華　01-10

■秘するが花　月蒼華01

シャルル・ドゥ・アルディは、その重たい扉をそっと静かに持ち上げた。
細く長い、神経質そうな指先で。
まるで、秘密の扉を開くように。
かの伝説の乙女は、決して開いてはいけないという禁忌の扉を、こんな気持ちで解放したのだろうか。
ほんの少しの・・・・罪悪感と躊躇いと・・・どうにも抑えることのできない衝動を総称して何というのだろう。
彼は決して間違えないし、知らないこともほとんどないほどに膨大な知識を蓄積させていたのに。
適切は表現を見つけることができなかった。
息を潜めて・・・彼はそっと行動を起こす。

彼は老獪さも持ち合わせていることをここで自らに証明した。

・・・隣の部屋では、彼の愛するファム・ファタルの健やかな息差しが聞こえる。
二度と、その手を離さないと決めた相手が彼の傍らで眠っている。
一度は、彼女の手を離した。

愛していたから。
愛しているから。
愛し続けていたいから。

だから、彼女が愛する男の元に返した。

彼女と合歓を交わす夜が来ると期待した夜もあった。
彼女の幻を追いかけて・・・期待してそれが叶わぬ夜に身悶えした時もあった。

茶色い髪の、茶色の瞳の人は、大人になって・・・そして彼の目の前に現れた。
偶然でも必然でもなく、彼と彼女は邂逅によってまた惹き寄せられた。
生涯、ただ一人だけと決めた相手が・・・自分の傍らで微笑む日が来るなんて、思わなかった。
一生分の夢を見たから。
一生分の愛を捧げたから。
シャルルは、それで自分の夢も人生も終わったと思った。

また誰かを愛でた。
また彼女に対する気持ちのように、誰かを愛することができるのかもしれないと思っていた。

けれども。
・・・・けれども。

それでも乾きや癒されなかった。

どうして、彼女を愛してしてしまったのか、という後悔はない。
彼女を愛したことを後悔していない。これからも。これまでも。
唯一絶対の人と定めることができるのは、福禄とも言える。

彼の父は、唯一と定めた人を失って・・・そして、それからずっと彷徨っていた。
死ぬまで。
愛し愛された人も居て、子まで成した人もいたのに。
彼の父は、それでも満たされなかった。
再婚を繰り返し、かりそめの愛を繰り返した。
シャルルには同じ血が流れている。同じ性質を受け継いでいる。
けれども、多くの愛を享受するより、たった一人しか定められない、というやっかいな性分を抱えてしまっている。

物憂げな蒼灰色の瞳で、寝台に横たわる小柄な人を見つめた。
静かに・・・安息に沈む彼女を見遣る。
この僅かな距離でさえ、愛おしい。切ない。・・・・片時も離れていたくない。

本当なら・・・彼女が目覚めるまで、肌を合わせて彼女の呼吸音を数えていたいと思う。

けれども、彼はそのまま・・・そのラップトップの扉を開けることにした。
彼女と再会することとなった、このノートパソコンは、マリナへあの男が送ったものであり・・・そして、今、電源を入れられることもなく静かにその役目を終えようとしている。

■秘するが花　月蒼華　02

彼は乱れた白金の髪をかき上げた。
少し長目の髪が左右にこぼれて、音もなく地球の力に従って落ちた。
この小さな空間で、彼女の吐息が聞こえるほどの距離で・・・・あの男の面影を否応なく思い出

させる魔法の破籠について、あれこれ詳細に調べる時間がない。
しかし、「今」しか機会がないことも、彼はよく承知していた。

彼は彼女の部屋に入り込むことはしない。

・・・・戻らない彼女を待ったあの時以来のことだった。

その場所で繰り返された彼女とあの男との会話や会話のない所作や・・・それ以上のことを想像するだけでも苦しくなるから。
あの男を憎めるのであれば、そうしたかった。
彼女を幸せにしてやってくれと願って手を離したのに。
それなのに、彼女を手放したから。
なぜ、何度も彼は彼女を手放すのだろうか。
また戻ってくると慢心しているからか。
それなら、もう二度と、彼に戻すつもりはなかった。
互いに、一度は彼女を解放している。

しかし、結局は・・・彼女を解放することができなかった。
完全なる自由にすることもできなかった。

解放してやるとか、解放されるとか。
そんなことでは彼女は支配できなかった。
彼女の心も躰も、彼女自身だけのものだと言われた。
その時に、彼はその言葉に嘲笑し、身も心も彼に捧げたくなるだろうと彼女に告げた。
けれども。
彼女は・・・彼のファム・ファタルは、シャルルの予想に反して、彼の腕の中からすり抜けて行ってしまった。
あの男を愛しているのだ、と声高に宣言されて・・・シャルルは彼女をあの男に託すつもりはなかった。
彼女がその言葉を言わなかったら、彼女をどこまでも連れて行くつもりだったのに。

■秘するが花　月蒼華　03

とんとん、と細く長い指先で、ラップトップの表面を叩くと、乾いた音が返ってくる。
天板が旧式で厚いことを示すような音だった。
使い古した画材道具と一緒にそれは立てかけられてあった。

今までそれがあった場所には・・・・今はとても薄い新型のラップトップが置いてあった。それはシャルルが彼女のために贈ったもので・・・そしてそれが契機となり、彼らは再び邂逅することになった。
型番の記録も覚えていたので、彼女が大変に古いものを今でも使用していたことに少しばかり驚いていた。・・・そして少し胸が疼いた。

彼女は捨てられなかったのだ。
彼女は変えられなかったのだ。

無精で知識がないから、と本人は言っていたが、いくらでも廉価のものを手に入れることが出来るはずであったのに、彼女はそうしなかった。
画材道具やスケッチブックなど、仕事でどうしても必要なものがあれば、彼女は金銭について拘らなかった。
だから安定収入がなかったあの若い頃、常に彼女は金策に苦労していた。
今では仕事の上では欠かせないツールのひとつになっているはずなのに、彼女は・・・それをそのまま使用していた。
あの男との思い出を振り切ることが出来ない証だと思うシャルルは、僅かに唇を歪めて、嘲笑した。
それは自分自身に対するものであった。

彼は間違えない。たとえ太陽が西から昇ったとしても。
それなのに・・・間違えない彼は、悔いていた。
あの時の選択は、間違っていなかった。
今があるのは、あの時の延長が「今」だからだ。
彼も他の者と恋愛の真似事を愉しみ、一時期は本当にマリナ以外の誰かを愛することが出来ると考えていた。
しかし、恋を重ねるにつれて、マリナへの愛が深まっていった。
一度壊れてしまった愛は、二度とまったく同じには戻らないことも知っていたのに。
だから、この愛があの時の続きなのではなく、あの時の愛がさらに形を変えた亜種になったと彼は考えていた。
・・・そこで彼は嗤う。捨てられないのは・・・自分の方だということに気がついたからだ。

■秘するが花　月蒼華　04

青灰色の物憂げな瞳が、奥で静かに睡郷の住人となっている愛おしい人の様子を映す。
・・・彼女とこうして夜を過ごすことになる日がやって来るとは思ってもいなかった。

自分の呼吸は、死までの退屈しのぎだと思っていた。
けれども、彼女がすべてを変えてしまった。
彼は再び、虚無と透明と孤独という衣で隙なく身を固めてしまっていたというのに。
朝の訪れが待ち遠しい。
彼女からの連絡を焦がれる。
眠っている間に、彼女がシャルルに連絡を取っていたら・・・迅速な対応が出来ないから眠りたくないとさえ思った。

独りよがりの愛だと十分に理解している。
それでも・・・それでも。
恋はしたが愛をすることはもうできないのだと思った。

彼女と一日でも良い。一緒に生きることが出来たのなら、死んでも良いと思っていた。
誇りのためなら死ねる。
けれども。
マリナは彼を違う色に染めていく。
毎日、毎日。
彼女は違う色を彼に教えていく。
この世にあるすべての言葉を使っても、表現しきれないくらいの様々な千紫万紅（さまざまな色彩のこと）をシャルルに伝えていく。
誰も、できないことだった。誰も彼に教えなかった。
彼は間違わなかったが、彼は最初から何もかもを知っているわけではない。
しかし、誰もそのことに気がつかない。
知識は覚えられる。
けれども、知識や智慧だけでは解決できない彼の中の胸の疼きや痛みや苦しさや悶え・・・彼女はそれらも含めて彼に生きる喜びを教えた。
彼女が生きていることについて喜んでいるから。

しかし。一緒に生きることが出来るという状況は、彼を死にたくないと思わせた。
シャルルを臆病にさせる。だから、今、彼は戸惑っていた。
あの男がマリナに贈ったラップトップの中身について、知るべきかどうか、少しばかり迷っていた。彼はフランスの華と呼ばれ、たとえ西から太陽が昇っても間違えないというのに。

■秘するが花　月蒼華　05

日本式に、床に直接座位する形式の空間だった。彼女の空間の切り分けとはとても曖昧だった。
シャルルのように、寝室や繋ぎの間や、応接室など目的に応じていくつもの部屋を持ったりすることはない。
けれども・・・けれども、彼女の中で聖域があるようだった。
秩序だって整頓されているかどうかは別の話であるが。
それが、この、仕事道具を置くスペースだった。
脇には、いつも持ち歩いている大きな鞄が置いてあり、使い込んだ品であるために、端がすでに固さを失い、めくれていた。
そこから、同じように移動の度に持ち歩いているために角がすり減ったスケッチブックの端が見えていた。
仕事をするスペースには、それだけしか置かない。
これはまったく彼にとっては驚くべき発見だった。

・・・昔、彼女に黙ってここに忍び込んだことがある。
やむを得ない事情でそうしたまでだが。
その時にも同じようなことを感じたことを思い出していた。
雑然としており、整理とはまったく無縁の様子に見えていたが・・・彼女は本当に大事にしているものについては、持ち歩くことにしているらしい、ということがわかったのだ。

だから、本当は・・・旧式の重量感があるタイプのラップトップでなかったのなら。
最新の通信事情に対応したものであったのなら。
彼女は間違いなく、スケッチブックと一緒にそれを持ち歩いていただろう、と思った。
そしてあの黒いバインダーのように。
彼女の知人の名前と連絡先が列挙された、彼女の誇りそのものであるような、あの宝物と同じように扱ったのだろう。

・・・それなら、今は、何を後生大事に抱えて持ち歩いているのだろうか。
彼は彼女の秘密の詰まった鞄の中身について、詮索することをやめた。
そこまでして彼女を知りたいと思わない。
それは知るのではない。
調べるに過ぎないから。
それに、彼女は教えてくれるから。
いずれ・・・いつか彼女の口から聞ける日が来るのだろうか。
「私の宝物は貴方よ、シャルル・ドゥ・アルディ」という言葉を。

彼女が一度だけ寝返りを打ったので、衣擦れの音がしてシャルルは気配を消した。
そこで今一度自嘲気味に微笑む。
辛辣な笑みだった。
彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。
彼女の呼吸や動作に自分の行動を変更させる。
誰も自分を変えることは出来ないと思ったのに。彼女は彼を変え続ける。
なぜ・・・なぜ、彼女は特別なのだろうか。これまで生きてきた中で出会った人々と違う存在のマリナ・イケダをどうしても・・・忘れることが出来なかった。
だから彼は彼女と似た人を探した。あるときは容姿であったし、あるときはその心根の類似を恋の対象条件とした。
それなのに、どうしても・・・マリナへの愛が彼を魂のより深い部分に浸食していくだけで、決して、叶わなかった恋の痛みや疼きを洗い流すことはなかった。

それが普段のシャルル・ドゥ・アルディであった。
彼女と過ごした期間は短かった。
彼女の知っているシャルル・ドゥ・アルディは、それまでのシャルル・ドゥ・アルディとも、それからのシャルル・ドゥ・アルディとも違っている。

彼は・・・屈託なく華のような微笑みを浮かべることはなくなった。
彼も大人になり、そして美しい乙女のような顔立ちは彼の端整な顔立ちから消え失せてしまっていた。
今は、雄偉な容貌で彼の周囲の者を魅了する。
しかし、彼はいつも、自分の言葉を思い出す。

「誰もが近付きたいと思う時に近づかず、誰も見向きもしない時に傍に居たいと言った君は不思議な人だね」

だからこそ。
彼は。
彼女をこよなく愛した。全身全霊で、彼女を愛した。死ぬほど・・・愛した。
過去形にすることすらできないほどに。
しかし、今の愛は・・あの時の続きなのかどうか、と思考に耽る時があった。

しばらくの間、彼女の気配に耳を澄ます。
そして彼女は深く眠りに陥っており、朝が来るまで目覚めないだろうと確信したシャルルは、薄い唇から溜息を漏らして、また、視線を戻す。
・・・間もなく、朝が訪れようとしていた。
明け方の瞬間は、どこでも一緒だった。
夜と朝の境界はとても曖昧だ。
彼女のこの空間のように。
一瞬・・・・ほんの僅かな瞬間に朝未（あさまだき）へと空気が変化する刻がある。
彼はそれを良く知っていた。眠れない夜を幾つも経験したから。

眠れない夜は、青春の輝ける時代と彼が呼んだあの頃をよく思い返した。
逡巡していたわけではない。しかし完全に決別できなかった。

彼女と過ごしたいと思い、そうできるのであれば何もかもを彼女に捧げようとさえ思って
眠れない夜を過ごした。
幾夜も、幾年も。
でも。
今、彼女と居るのに。
彼は、眠れない夜を過ごす。
眠ってしまったら、彼の全身で受け止め彼女の全身に刻んだ、互いの温もりや吐息や香りが・・・自分の創りだした夢や幻になってしまうかもしれないと思ったからだ。
彼は静かにそれを開く。
消耗し、すでに故障してしまったそれに、電源を入れた。
静音設計が徹底されていないハードディスクが、中で空虚な回転を繰り返し、そしてやがて画面が一瞬明るくなったが、すぐに暗転してしまった。
不規則な回転音だけがカラカラと音を立てていた。
・・・シャルルは美しい顔を歪めた。
すでに使用されることのないはずのものなのに・・・彼女はまだこれを捨てることが出来ず、そして電源を補充し続けていることを知ったから。
バッテリー容量は少ないはずだから、電源を常に補充しておかないと継続使用することはできなさそうだった。
しかし、どういうわけか・・・彼女はそれでも頻繁に充電しているらしい。
充電器の形をしたランプは、充電警告色が点滅していたが、それでも機能している。
それが彼を虚無の闇に引き戻していく。

彼女の技術ではもう復元することはできないと、彼女自身がわかっているはずであるのに、マリナはそれでも、それを処分することができないでいたようだった。
個人情報が満載であるだろうから、それを廃棄するときには何らかの処置を施さなければならないのだ、という考えが働いていたのかもしれない。
でも、シャルルはそれが理由だとは考えていなかった。
暗い室内で、暗転を繰り返す画面は、やがて、真っ暗になり何も映し出すことはなかった。どのキーを押してもコマンドを打っても何も変化はなかった。
・・・・しかしシャルルは物憂げな青灰色の瞳で、それをじっと静かに見詰め続け居た。
長い時間使用していたので、キーボードのプリント印字が少し剥げ堕ちていた。
日本語配列のそれらを、彼は眺めていた。
先ほどまで繋いで絡めていた彼女の小さな指の温度と感触を思い出す。
その温度を受けて、短く切りそろえられた爪を受けて、そのディスプレイは一体どんな文字を打っていたのだろうか。
彼から送られた言葉を受け、彼女は彼のために愛の文字を送ったのだろうか。
シャルルの知らないマリナのそれまでがそこにあった。
長い時間を隔たって過ごしていたことを思い知る。
シャルルが用意した品よりずっと性能の落ちるそれらを、まだ・・・彼女は動くかもしれないと思って、取り置いていると知ると、彼の胸に何か重いものが音を立てて落ち抜けていくような感覚を覚えた。
何も表示しない画面を、彼はしばらくの間見つめていた。
冷却ファンがやや大きな音を立てていたが、彼女は目覚める気配はなかった。

・・・・どうして自分はこうして、彼女を試してばかりいるのだろうか、と思う。
彼女の愛を確認しないと安心できないことが、どれほど愚かしいのかということも知っているはずなのに。

愛している
ただ、それだけを伝えて繋げていくだけなのに、それがとても苦しい。
一度失ったものを取り戻すには、大変に強靭な精神力がなければならないと知った。
彼の身分や地位を奪還するために、彼は全力を尽くし、そして勝った。
しかし、何と戦ったのだろう、と彼は今でも時折疑問に思うことがあった。
彼の分身のような人間と優劣を競ったとされているが、本当は・・・そうではないのかもしれないと思った。
ふと、思うのだ。彼は、自分と戦ったのかもしれない、と。

■秘するが花　月蒼華　09

だから一度失った恋を抱き締めて、夢の続きを始めることはできなかった。
彼女は恋を知って恋を失って、そして秘めたる想いを胸に抱えたまま大人になった。
そしてシャルルは彼女と出会って、ゼロからでも一からでもなく、０．３から始めよう、と言った時に。
彼女は曖昧な微笑みを浮かべていた。
意味がわからなかったのだろう。
彼はそれを思い出して、くすりと笑った。

・・・マリナ。10の0.3乗はおよそ2になるんだよ。
初歩の数学であったが、彼女はただ微笑んだだけだった。

しかし、シャルルの言いたいことはわかったらしい。
新しく始めるでもなく、あの時からの続きでもない・・・そんな関係を彼女に受け入れてくれ、とシャルルが言ったので、マリナはそれを肯定したのだ。

3人でひとつの恋を分けたわけではない。
そしてマリナのこれまでを切り分け、切除することはできないのだと思った。
彼のこれまでを否定することができないように。

彼女は、長い年月を経て、憂いを知った。屈託のない陽気は笑顔が好きだった。
しかし、彼女の憂いを帯びた微笑みや、柔らかく笑う仕草が・・・愛おしい。
苦しいほどに彼女を躊躇いもなく愛していると囁き続け、そして壊してしまいそうになるくらいに抱き締めてなお・・・彼は満たされない。
あれほど、陽光のような笑顔を見て満たされたと言うのに。
あれほど、彼女の声を聞いて安らいだと言うのに。
自分は・・・彼女を得て、欲深く罪深く・・・彼女を深く、さらに増してマリナを愛してしまった。

抑制がきかなくなる。
彼のそんな狂気にも似た愛念に、マリナが本能的に怯えているのもわかっていた。
あの時の方が自分を律せていたような気にさえなる。

自分は、一度失ったものを手に入れたら、とたんに興味をなくして執着しなくなると分析していたのに。マリナを得たら、彼は恬澹としていることができなくなった。

■秘するが花　月蒼華10

・・・・しばらく暗転したままのディスプレイを眺めていた。

間もなく、夜が明ける。
完全に遮光されているというわけではない、気持ちばかりのカーテンから日差しが漏れて、眠っている彼の運命の人の目覚めを促すのは明らかだった。
シャルルは溜め息をひとつ、ついた。
この回線を通して連絡がなければ、彼は彼女との邂逅を手に入れることが出来なかった。
そして、今夜のような静かな夜明けを迎えることもなかった。
けれども。
このまま・・・幸せという波に溺れて委ねて、彼は心から幸せを噛みしめることはできないのだと思った。
これが運命の再会だとは思わなかったから。
偶然という言葉を使って運命の人の今を定義してしまうことはできなかった。
必然があって、彼と彼女はもう一度出会った。
この広い空の下で、理由があって、彼と彼女は出会ったのだ。

ここには専用の設備がないので、この壊れたマシンを復旧させることは難しそうであった。それに・・・たとえこれを戻してやったとしても、もう一度再利用できるかというと、それは現実的ではなかった。
彼女には新しい機器がシャルルによって送られており、そして今はそれを使用してシャルルと連絡を取り合っているマリナに、もう一度その旧式の機器を使うような特別な用途はないはずだった。
何より、修復がうまくいったとしても、そのことについて彼女が浮かべる表情を想像することは苦しかった。
彼女の笑顔を見たくて、直してやりたいと思う。
けれども、彼女の笑顔を見て、自分は苦しくなるだろうな、と思う。
嫉妬という言葉だけでは処理できない様々な思いが交錯して、きっと・・また、マリナを傷つけてしまうのだろうと思った。

シャルルは大きく息を吸う。夜明けの気配が近づいて来たことを感じたからだ。
薄い窓硝子越しに聞こえる・・・朝の人の気配や獣鳥の蠢く様子が、空気の波に乗って彼の肌を刺激した。
効率的に回転していない冷却ファンが風を不均一に創り出していた。
彼は、目頭を、細く長い指で軽く押さえた。・・・・虚しい穿鑿は彼を貶めるだけにしかならないのに。彼は誇り高い人物であるのに。

彼女の前では・・・それらすらまったく捨て去ってしまって良いと思うほどに、彼女の何もかもを奪い去ってしまいたいと思う。
彼女の過去さえも。
彼女の呼吸さえも。
何もかも、彼の肌から離れることは許さない、と彼女に伝えることはしない。
彼は、もう、彼女を失いたくないから。
自分から手放したのに。もう、失いたくないから。

# 月蒼華　11-20

■秘するが花　月蒼華11

なぜ、彼女にだけそのように固執するのか自分自身について、分析は終わっていると考えて居た。
しかし、分析するのを忘れていた。
彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。
自分自身に問うことを課すことをやめていた。
・・・・なぜ、今の彼女を愛しているのかということを。
長い年月が過ぎて、大人になった彼女に再会したときに、彼は昔の恋を継続するのではなく、その恋を内包したままでありながら、彼女の過ぎた恋も抱えて一緒に生きよう、と言った。
そして彼女も一緒に居たい、と言った。
いや、違う。彼が離れられないのだ。彼女を手放す理由がなくなった。あの太陽な男と幸せになれるのなら、と思ったが、それは永遠ではなかった。
確かにマリナは幸せだったと思う。しかし、こうして彼の傍に居る彼女を不幸にするつもりはない。

もっと彼女の傍に居たいのだ。シャルルが。
もっと彼女の声を聞きたいのだ。シャルルが。

だから、彼は愛を囁き続ける。彼女を知れば知るほど・・・更に深く彼女を愛するようになった。あの時、もうこれ以上誰かを愛することはないと思っていたのに。
夢中で恋をした。
しかし、今の彼女を知れば知るほど・・・・苦しくなるのだ。

愛が増すから。

愛は増えるから。
彼女は良くそう言う。
自分の中に入り込んで通り過ぎて行った愛を否定しない彼女らしい価値観であった。
唯一と決めてしまっていた彼と違うからこそ、シャルルは彼女を求めるのだとわかっていた。しかし、幾つもの数多くの出会いの中で、彼は・・・マリナだけだった。
失いたくない、と思うのは。
この恋を失いたくなかった。だから手放した。
あの時に、あのまま、シャルルと一緒に連れ去っていたら、間違いなく破綻が訪れていた。

壊れてしまった愛は修復しても完全に元には戻らない。
シャルルがかつて、トルソを創り上げた過程を一緒に見ている彼女だからこそ・・・あり得るのだ。
修復を越えて違う形になった愛を認めるようになるには、彼らは若すぎた。
知らず知らずのうちに、彼は計算していたのかもしれない。
このまま連れて行けば、彼女は彼を好きだと言った言葉を否定するようになることがなにより脅威であったことを、彼は認めなかったということに気がついたのは・・・それから随分経過してからだった。

愛は魂の試練だと言ったことがあった。
しかし・・・誰に試されているのだろうか、と思った。
神にだろうか。
いや、違う。
自分自身に試されるのが、愛なのだと思った。
それとも。愛は魂の試練であるが、愛が、彼を試したのだろうか。
その愛を違う形にすることができるのか、と。

朝が近くなってきた部屋の静けさの中で、青灰色の瞳で、彼は安らかな眠りを貪る彼の恋人を見た。

愛しくて、愛おしくて、彼女を時々壊してしまいそうになる。
彼の思い通りにならない彼女の困った顔や泣きそうな顔を見たくなる残酷さを捨てることができない。

たとえ、彼女が、かつての彼女にシャルルが恋をしたまま、時を止めているのだと信じて疑わなかったとしても。

愛とは、想いが通じ合うことだと思っていた。

愛おしいと思ったのは、彼女だけではない。
幾度か、恋をした。愛に似た何かを感じたこともあった。
でも「死までの退屈しのぎ」と言っていた日々を過ごしていた彼を虚しくさせるだけだった。
それもシャルルだ、とマリナが微笑む顔を見て、彼は胸が疼く。そして次に酷く痛む。
互いに時間をなかったことにはできなかった。時間ではないから、と彼女が言うから。
だから・・・だから。

しばらく、ディスプレイを眺めていたが、やがて彼は電源を強制的に落とした。
ここで再現はできない。ハードディスクを持ち帰って、そこで再現するしかなかった。
しかし彼女はここ以外の場所に持っていくことを許可しないだろう。
内容物の情報が失われることには臆さないのに、あの男から送られたその箱が彼女の中でまだ大切な宝物である限り。
シャルルは溜め息をついた。
愛を得れば、その先にも愛の苦しみがあるということを彼は知っていたのに。
それなのに・・・まだ苦しい。

幸せにする。一生かかっても。
もう離しはしない。
ひとりで泣かせたりしない。

彼は幸せだから。
彼が幸せだから。

しばらく長押ししていた電源のスイッチが点滅して、やがてすぐに電源が落ちた。
内部でハードディスクがまだ回転している音がしたが、それもやがて静かになった。

彼女と離れていればいるほど、胸が押しつぶされたようになり、あの頃には味わうことのなかった痛みや疼きや渇きが彼を包む。

甘さは苦さを知ってより甘美であることを知る。
苦さは甘さを知ってより物狂おしいのであることを知る。

彼女の肌のあたたかさを知ったから。
彼女の髪の質感を記憶してしまったから。
彼女の声を聞いてしまったから。

彼はもっと傍に居たいと思うようになった。誰かを傍に置きたいと思うより、強烈な思いだった。
かつて、彼の母を失った時のように。
その喪失感に似た物狂おしさがシャルルを苛む。
彼はまた、溜め息をついた。
手に入ったものはかけがえのないものであり、それを決して解放してやるつもりはない。
数多あった出会いの中で、彼女だけが特別だった。

なぜなのだろうか。
もっと彼女を知りたくなる。
もっと彼女が欲しくなる。
もっと彼女に愛を囁きたくなる。
いつまでも・・・いつまでも。

この仄暗い想いを抱えながら、彼はそれでも彼女をその闇に触れさせることに躊躇いを感じていた。
狂気に近いシャルルの想いが、彼女を滅してしまいそうになるときがあった。
それを知ってなお、彼女はシャルルの傍に居る。
こうして無邪気な寝顔を彼に見せる。

どうしてなのだろう。
どうして彼女なのだろう。
結論も理由も導き出したはずなのに、どうして彼女は・・・それでも屈託もなく笑うのだろう。
「愛の理由を探す時は、愛に躊躇っている時よ」
彼女はそう言う。
しかし彼女をもっと、更に、ますます愛して際限のない広がった世界に身を投じるほど、シャルルは若くなかった。いろいろなことを知った。
失ってからでは遅い。
だから。
彼は、彼女を愛したことを後悔していないと言ったことがあった。
しかし、彼女を愛したことを後悔するほど深く愛していることは伝えきれなかった。

一呼吸するごとに、彼女が愛おしくなる。
瞬きを一度するだけで、彼女の持つ色が違って見える。
無機で単調で色のない世界が、彼女を中心にして、鮮やかな別世界になる。
失いたくないから。失ってからでは遅いから。
もっと大切にしていれば良かったと思いたくないから。
だから、彼女を全身全霊で愛そうと誓った。
もう離さない、とはそういうことなのだ。

■秘するが花　月蒼華13

朝が近付いていた。

いや、すぐそこに朝は居た。

射し込む白い光に、シャルルは目を細めた。
薄いカーテンが窓に縋っている。まったく機能していない遮光性に、シャルルは眉を顰めたが、これが彼女の日常なのだと知って、軽く吐息をついた。
厚く光を遮った闇が広がる静寂の中で、深く就眠するシャルルの日常と違い、彼女は朝を肌で感じ、陽光を目覚ましにして瞳を開く。

シャルルが、なかなか眠れないのは、彼女の部屋で過ごしているからか、もっと違う憂いのためなのか。
彼女の部屋の匂いがした。画材道具と、マリナの香りがする。

慣れ親しんだ家での休息で、彼女は深く眠りに落ちていた。
健康で順応性のある気質の人であったけれども、やはり、安心した時には意識が落ちやすいのだと知って、微笑みを浮かべる。
彼女が自分の腕の中で、眠る様を見るのが、彼は何より幸せだったから。
それでも・・・少し寂しい。
彼の知らない彼女は果てしないほど広がりを見せていた。
彼女を知れば知るほど、もっと知りたくなる。
彼女の声を聞くと、もっと声が聞きたくなる。

献ぐと言うには、彼の愛は・・・・彼女を困惑させるだけのなにものでもなかった。
初めて・・・・愛をしていると感じた時の衝撃を、今でも捨て去ることができない。

夢中になって愛した。
全身全霊で愛した。

自分一人のものにしてしまいたいと思うことができないくらいに。
好きすぎて、独り占めできなかったと言った。
けれども。
そうではない。
本当は、そうではない。
・・・・愛しすぎて。
好きになりすぎて。
際限なくなってしまったのだ。
占有したいという欲求を越えて、彼女の生命そのものが眩しくて・・・傍に居るだけで、彼は自分が滅されてしまいそうに成る程強い晄を感じ、そして目を瞑ってしまったのだ。

だから、あのまま、あの時に連れ去ったのなら、お互いに傷つけてしまっていただろう。
だから、置いて行った。
だから、去った。

彼はそうしなければ、彼であることを保てなくなっていたから。

もう、眠りについてはいけないと彼女は言った。
どんなに苦しいことでも向き合わなければ生きているとは言えない、と言った。
精一杯の彼女の誠意が彼を苦しめた。
好きであるべきだという強迫した思いが、彼女の目を曇らせていた。
いつも真実としか向き合わないマリナが、真実から目を反らした。
それが苦しかった。

・・・・あの男だけに目を向けるのはやめにする、と彼女はシャルルに言った。

けれども。同じ言葉を、シャルルは言うことができなかった。
マリナ以外の者にファム・ファタルという称号を与えることができなかった。

彼は、シャルル・ドゥ・アルディなのに。彼はフランスの華と呼ばれて、できないことは何もないと思っていたし、これまでもこれからもそうであると信じて疑わなかったのに。

それなのに、マリナ・イケダのことに関しては、彼はいつも不確定要素について考慮しなければならならなかった。
それが、彼女を置いて行こうと決めた理由のひとつであることは否めない。
背中を向けて、彼女を彼に託した。そうしなければ、彼の愛は破綻していたから。
せめて、自分の抱えている愛を失いたくなかったから。
だから、マリナを置いて行った。それを彼女は今でも哀しんでいるということも、知っていた。
しかし彼はごめんよ、と口に出すことはしない。決してしない。
あの時間がなければ、今、こうして、シャルル・ドゥ・アルディは彼が定めた運命の人と一緒に時間を過ごして朝を迎えることすら、あり得ない未来であったのだから。

■秘するが花　月蒼華14

外が白くなっていく。こうして、何度、眠れない明け方を迎えたことだろう。
彼女が傍らに居ても、また眠れない夜が訪れるのだろうか。生涯、平穏になれないのだろうか。

どんなことがあっても、もう決して離れないと誓った。
彼女の倖せを願って、自分が去ることはしない。
一緒に連れて行く。
どこにでも、どこまでも。それで彼女が去るのなら、それは受け入れる。
けれども、もう、自分から突き放さない。そうする必要がない限り。
そして彼は彼女の温もりを手に入れた代わりに、新しい痛みを受け入れる。
彼は顔を上げて、窓の外を見た。光が漏れているから、このまま眠ることもできない。
・・・微妙な光線の加減を感じながら、それを無視して眠ることは難しそうだった。

彼はちらりと奥で眠るマリナの様子を見た。
こんな風に・・・夜を一緒に過ごしてなお、彼の夜は彼女のそれより長い。
彼は目の前のラップトップを静かに閉じた。
しかし旧式であるので、かちりという割と大きな音がしたが、マリナは起きる気配はなかった。
かなり深いところまで潜っているようだ。
細く長い指先で、その扉を閉じた。
ハードディスクを再現して、どうなるのだろう。
彼と彼女の遣りとりを垣間見て、そして何が得られるというのだろう。

・・・女々しいな

普段、そんなことを決して思わないシャルル・ドゥ・アルディがそんなことを呟きそうになって唇を閉じた。決してそんなことをしない。彼は誇り高いから。
それなのに・・・・それなのに、彼女のことになるとこれほどまでに彼は自我を抑えられなくなるほどの熱情を思い出すことによって、生きていると実感する。
まだ生きていたいと思ってしまうほどに、彼女を愛しているから。
誇りのためなら命を捨てられる。
けれども、マリナのためなら、持っているものすべてを捨てられる。
でも、命はあげられない。もっと、一緒に生きたいと思うから。もっと一緒に時間を過ごしたいと思うから。
・・・それでも、おそらく、彼女のためなら、命さえ惜しくないのだろう。昔と同じように、今も。前者は執着がないから捨てられる。けれども、後者は執着しているから捨てるのだ。マリナが微笑むのであれば、何もかもを破滅に導いても良いと思う。それで彼女が救われるのであれば。
そんな狂気にも似た気持ちを持ち続けていることに、彼女が怯えないかいつも気配を観察している彼は、もう、どこかすでに狂っているのかもしれないと時折思うことがあった。
・・・・狂者は狂っていることに気が付かない。

よそう。

彼は瞳を閉じた。
忘我を畏れているのは、彼の方なのだから。
閉じたラップトップの上を、眼を瞑りながら軽く撫でた。
彼女の想い出が入っている筐は、もう開くことはない。
・・・・彼はごめんよ、と言った。
彼の大事な友が愛した人を、愛してしまった。
そしてまた巡り逢った。
どうしようもなく惹かれて・・・・また、惹かれて恋に堕ちた。

そっと、溜息をつく。
こんな風に気が遠くなるほど誰かを求める自分が・・・恐ろしい。
いつか、自分の母のように戻れなくなりそうだった。
その時。
彼の指先がぴくり、と動いた。

・・・眼を瞑り、ゆっくりとラップトップに注意深く触れていなければならないほどに僅かな異変に、彼が気が付いたのだ。

上品で物憂げな青灰色の瞳が光った。あまい痺れと疲労が浸透した脳細胞に、何か・・・電流が走ったように、彼の神経は一気に覚醒していく。

僅かな・・・本当に僅かなそれに、気が付くのはおそらくシャルル・ドゥ・アルディだけであっただろう。
マリナは・・・持ち主は気が付かなかった。
そうしてラップトップを閉じたままにしておいたことなどなかっただろうから。

■秘するが花　月蒼華15

彼はそれに気が付いた瞬間から、そこにある秘密に、手を伸ばそうとするまでに、僅かに時間をかけて考えた。彼はフランスの華と呼ばれて、誰よりも速く正確に判断することができる。かつ、次の手を考えることも忘れないという複合的思考の持ち主だった。
それなのに。それなのに、迷った。

・・・・マリナの持っていた古い機種のラップトップは、単なる筐と化していた。

しかし、その底面には、何かが・・・・何かがあった。
僅かな、本当に僅かな傾きがあった。乗せている背の低い卓が傾いているのではない。
そうではなくて・・・その筐の底が僅かに傾いているのだ。
表面を撫でて、閉じた状態で観察しても、普通の人間は気が付かなかっただろう。
実際、マリナはそれに気が付かなかった。今まで。
気が付いていたのなら・・・シャルルとここにこうして居ないだろう。

シャルルだから気が付いたのか・・・それとも、こんな風にして、誰かがマリナの居ないところで、このマシンについて調べる機会があることを想定しているかのような歪みに、シャルルは何かを感じた。
感じる。
根拠のないことは決して信じないのに。
それなのに、彼はじっとその閉じられた筐を見つめていた。
長い時間が経過したようにも思えたし、それは瞬きひとつぶんより短い刹那の時間であったようにも思える。
しかし、彼は思い切って、その筐の両端を持ち上げて、裏返しにした。
先ほどはなんて旧式なのだろうという程度しか感じていなかったそれは、とても重く・・そして秘密めいていた。まだ熱を帯びているからだろうか。
それとも、彼がこれから知ろうとしていることの重さを含み始めているからなのだろうか。
だから、こんなに重いのだろうか。
彼はまず電源のケーブルを引き抜くと、そのまま引き締まった腕に力を入れて、天地を反転させた。抜いたケーブルが床に落ちて渇いた音がした。放電など事故に繋がらないことを確認した彼は、勢いがついたように、もどかしそうにその裏面を眺める。
やはり、彼が感じた違和感はそこにあった。
旧式のそれは、すでに蓄電機能を放棄してしまっていたが、きちんとそこに備わっていた。彼女は部品を交換するということもしなかったのだろうと思った。
何度も開閉した形跡はなかった。
そのように詳しい知識を持ち合わせている人間であったのなら、彼女はこれを「故障した」と言わないだろう。
彼は整えられた爪を立てて、指先に力を入れる。
その小さな突起を持ち上げた。そしてカバーを外した。それを静かに、筐の脇に置く。
カタリ、と音がして、次に黒いバッテリーがすぐに目に入った。とても旧式だった。

だからこそ、気が付いたのだから。底は人為的に、バッテリーの部分が髪の毛一筋分ほど盛り上がっていた。何かが挟まったり、かみ合わせが悪かったりしたということではない。
取り外し用の口開きの部分が・・・僅かに、そう、本当に僅かに、少しだけ、浮いていたのだ。
彼はカバーを見つめた。そして、美しい眉を顰める。

暗闇の中で、見つめるそれは、はっきりと細部まで判別できなかったが、誰かが丁寧に、本当に少しばかり持ち上げるように、改変されていた。

誰にもわからなくても、彼にはわかった。
すぐにわかった。
不良品などではない。これは、人為的作業が施されている。
・・・彼はすぐにわかった。
こんな細かい作業をしたのが、誰であるのか。
マリナが普段使用するにはまったく気にならない程度に。
彼女が決してこういった部品を分解することをしないと確信している人物の仕業だった。
丁寧に同色のシリコン接着剤で、破損防止まで施してあった。

・・・回りくどいな。

彼の声が聞こえてくるようだった。
『はっきり言えよ』
そう言った時のあの男の声が蘇る。今でも、耳に残る、あの独特の声が。
黒い、くせの強い髪を持った黒曜石のような瞳を持った・・・太陽のようなあの男。
彼はその人物を、親友、と呼んだ。

気に入らないな、と彼は心の中で呟いた。
まるで、彼に導かれているようだった。だから、気に入らない。

ラップトップが故障した時、シャルルの元にメールが届いた。
彼が受信するだろうという予定していたのだ。それすら、気に食わないのに。
彼の行動と思考を読み取ることができて、それをシャルルが赦しているのは、友と呼んだあの男だけだった。
彼の従妹にも広大な範囲で許可しているが、彼の思考を先回りすることは赦していない。

シャルルはずっと、彼女に新しいラップトップを贈った後に気になっていた。
彼女の手元にあったものはどうしていたのだろうか。

■秘するが花　月蒼華16

単なる彼の杞憂であれば、それで良かったのに。そうはならないという予想が的中した。

それは予感ではなかった。
必ず実行される未来であった。

シャルル・ドゥ・アルディは、そのバッテリーを見つめていた。
呼吸が規則的ではない。それはわかっていた。
けれども、自分の平穏よりもっと重要なものがそこにあった。

役割を終えて・・・そして、放熱するだけの塊を覆っていたそれに、意味を持たせることが出来るのは、きっとおそらく、彼しかいない。

戻らない。
果てしない路を歩こうと約束した。一緒に。手を携えて。
そしてその未来の路には、排除されなければならない人物がいることに、シャルルは眼を瞑ることができなかった。
彼が居なければ、シャルルはマリナと出会うこともなかったからだ。
そして、虚無で退廃的で無色な世界は・・・生涯、そうであると認識することもなく、彼は言われたままの、希望されたままの人生を歩んでいたのだろうと思った。

そうでないと思う時は、そうでない時を知っているからこそ、比較することができるのだ。

海の塩気も甘みを知っているからわかるのだ。
寒さは温かさを知っているからわかるのだ。

彼は喉元が干上がるのを感じた。何も彼を圧迫するものはない世界で。
唯一・・・彼が揺らぎ、声を失わせる相手が、シャルルに向かっているような気がした。

メールが届いた時に、彼は考えるべきだった。
その仕様について。

ラップトップのメインHDがダウンしたからメールが届いたのではなく、バッテリーに異常が生じ蓄電が不能になったから、メールが送信されたのだということに、気がつけば良かったのに。

つまり、彼の仕掛けた装置に・・・刺激が伝わったから、それは送信されたのだ。
マシンがダウンしたからではなく、一定期間、その部位に、誰も接触しなかったら・・・つまり、断線しなかったことによって・・・それは発動した。

彼女のパソコンが寿命を迎えたことと、それにあわせて、誰もメンテナンスをしなかったことが

条件になって、そのメールは送られた。

シャルルに救助を要請するメールが送られた。

浅はかだな。

シャルルはそう思った。二重三重に条件を付与しなければならない間柄ではないのに。
ただ、一言「彼女を頼む」と言えば良かったのに。
なぜ、彼の親友はそうまでして、彼に気兼ねするのだろう。
彼に親友を持ってはいけないと宣言しているかのように感じる時がある。
どんなに心を開いても、彼の心の隙間であったり深淵であったり・・・・近い場所に居続けることの恐怖をそうとは感じないで近寄ることのできる人間は、とても少なかった。
そして、彼が運命の人と定めるほどに近しく寄った人物は、たったひとりだけだった。

シャルルは彼の名前を口に出そうとして・・・そして唇を閉じた。
綺麗な唇を閉じて、秘めることにした。
あの人の名前。この部屋で、何度も囁かれた名前。彼が最も愛するマリナが憂えた相手。
・・・それなのに嫉妬すらしない。まるで、あたかもそこにいるかのように、息苦しささえ感じる。なぜ、彼は、彼女を・・・ずっと好きだった彼女を手放してしまったのだろうか。

それは理解できた。
シャルルが、彼の友でなかったら・・決して理解できなかったのだろうに、と思う。
理解できなかった方が良かったのだろうか。
それとも。
理解できないから理解できたと言った方が、彼の真意に添う回答になるのだろうか。
そんな、唯一を導けない思考の波が、今は・・・煩わしい。

行き着く場所は・・・決まっているのか、決まっていないのか・・・
それすら、わからない時に。彼は、これを用意したのかと思うと・・シャルル・ドゥ・アルディは居たたまれなくなった。

■秘するが花　月蒼華17

嫉妬をまったく感じないかと言ったら嘘になる。
あの男のことを愛していると告げた時の彼女の表情を、今でも忘れることができなかった。そう言うのだろうな、と想定していたのに、それでも・・・・彼は胸が割れそうなほどになった痛み

を今でも時折感じることがある。
そう・・・・今もそうだった。

彼は彼女の何もかもを手に入れたいと思っている。
彼女の心に住まう、すべてのものから、彼女を遠く連れ去りたいと思っている。

それでも、彼女は・・・マリナはこうして、あの男との記憶を捨てることができない。それが、彼の愛したマリナ・イケダであるのだと理解していても、それを受け入れることができない瞬間を迎えることがあった。

彼はもう、あの時のように自由でなくなった。
失われていく。
何かが。
命であったり、自由であったり、彼の何かはいつも少しずつ漏れ出ているような気がした。
だからそれほど命は惜しくなかった。
そして、彼女のためになら、今でも躊躇わずに、彼の持っているものすべてを捧げるつもりであった。

あの時は、若かった。
しかし、輝いていた。

大人でもなかった。しかしこどもでもなかった。

今は長い年月が過ぎて、あの時の痛みは、薄れる瞬間もあった。
しかしそれは忘れたのではなく、単に、鈍くなったのだと思わざるを得なかった。
幾度も眠れない夜を迎えることによって、彼は正面から向き合うことをやめた。鈍感になることを覚えた。

忘れられないから。
諦められないから。

忘れたわけでもないし、諦めたわけでもなかった。
元気で居るだろうか、倖せにしているだろうか、と考えた。
それが、彼の倖せだった。

誰かを愛することは素晴らしいことなのだ、と彼女が教えてくれたから。
だから、彼女のことを思うだけで彼は微笑むことができた。

それなのに。
今は、彼女のすべてが欲しいと願う。
それなのに。
これほどまでに欲深な願いを持ちながら、彼はもう一方で、違うことも同時に考えていた。

・・・・マリナがあの男を愛したという事実を、彼女が否定することはないということについて安堵している。
シャルルを理解し支えた親友に、マリナが心惹かれるのは、避けられないことだった。
それなのに、なぜ、切ないのだろう。なぜ、これほどまでに苦しいのだろう。

マリナの涙を知っている。彼女の笑顔を知っている。

彼に躊躇いながら好きだと言ったその言葉だけを頼りに、今のシャルル・ドゥ・アルディが居る。
彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。
フランスの華と呼ばれて、何もかもを手に入れた。
しかし、それすら惜しくないと思えるほどに、彼女を・・・深く愛してしまった。

彼は青灰色の瞳でそれらを眺めた。役割と機能から脱却したそれらを見つめながら、シャルルは注意深く・・・・ひとつずつ、確認していく。
ハードディスクの記録を確認すれば、彼と彼女の軌跡は追いかけることができただろう。いつ、これが贈られて、いつ、あの男がメール送信するようにプログラムしたのかも。
しかし、今、確認したいのはそのことではなかった。
何の変哲もない部品たちを眺めながら、シャルルは僅かに吐息を漏らす。
・・・自分の考えすぎなのかもしれない、とさえ思えてきた。そこに何かあるという先入観が彼の神経を鈍らせている。そう感じた。

・・・それほど残された時間は多くはなかった。

間もなく、彼女は目覚めるだろう。
その時には、彼は、何事もなかったかのように振る舞う予定だった。

そして・・・・最後に、彼は何もないことを・・・熱を帯びたバッテリーが安全面で問題がないことを確かめると、肩を下ろした。
緊張していたのだ。フランスの華が。
・・・秘められた筐の謎を解くという喜びや昂揚感はなかった。
ただ、見てはいけないものを見てしまうという後ろめたさだけしか湧いてこない。

必要がないのに。そうしても意味がないのに。
だから、そこに何もないことが彼の愁眉を開かせた。

彼女に関してだけは、彼は・・・・シャルル・ドゥ・アルディであってシャルル・ドゥ・アルディでなくなるのかもしれない。
彼は決して他者にはならないと宣言したのに。自分でなくなることはない、と彼女に言ったのに。
それなのに、今、彼は・・・・どうにかなりそうなくらい、彼は・・・・シャルル・ドゥ・アルディであることが恨めしい。
シャルルでなかったら。あの男を友と呼ぶ立場に居なかったら。そして、彼女と無から始めることができたのなら。もっと・・・もっと楽になっただろうか。

いや、それでも、彼はきっと、この路を選ぶのだと思った。
もし、という未来はあり得ない。少なくとも、彼に限って言えば、たとえ、太陽が西から昇っても間違えることはない。だから、ファム・ファタルを定めたことを後悔もしていないし、間違ったとも思っていない。

・・・やめておこう
彼はそう心の中で呟いた。
誰にも秘めたる想いがある。彼の中にも。そして、マリナの中にも。
それは誰にも消し去ることのできないものであるし、マリナはあの時を経て、そしてシャルルを選んだのだから。
もう、それを過去にはさせないが。
決して彼女を離すことはしないが。

彼のすぐ近くに、朝の白い光が射し込んできた。
冷えた空気を感じる。明け方の気温差が彼の肌を刺激した。
・・・・・夜が明けたのだ。

■秘するが花　月蒼華18

マリナの過去も欲しいと思う。
未来が欲しいと思うのと同じ程度に強く渇望している。
けれども、彼女は自分の心は自分だけのものだと言う。
決して、シャルルのものだ、とは言わない。

そんなところは、シャルルとマリナは似ている。
自我を譲らない情強であるところなどは特に。

いつか、彼女から語ってくれることもあるだろう。
なぜ、彼と別れたのか。なぜ、シャルルと居るのか。なぜ・・・・
彼は唇の端を持ち上げた。

彼女は彼にすべてを与える。
それまで、彼が欲したものも、その一方で、欲しなかったものも。
フランスの華と呼ばれているというのに。
それなのに、彼は太陽のような彼女に向かって、ただひたすらに花瓣を向ける情けない薔薇でしかない。

彼はそれ以上の按検を留保した。やめるのではない。いつか、知ることになるが自分から知ろうと積極的になる件ではないと判断した。

彼は神経質そうな指先で、カバーを取り上げる。
復元するつもりだった。
ここに何かあるのは確実であったが、準備が整っていなかった。
マリナが望まないことも、彼女が知らないことも、そこにはあるのだろうと思った。

彼と彼女に、もう一度出会え、と知らせた筐は役割を終えた。
ただ、それだけだ。
ただ・・・・それだけでしかない。

彼女のぬくもりが恋しかった。愛おしい人の体温を感じながら、彼は眠りに落ちたかった。
眠れなさそうだったが、それでも、彼女を抱いて、背を曲げて目を閉じてみたいと思った。
何かをしたわけでもないのに、酷く疲れていた。脳を酷使したときや、幾日も眠らない日々を過ごした後のような怠さがあった。身体が重かった。
静かに夜が明けていく。小さな部屋の中で、彼は吐息を宙に絡ませた。

そして。
カバーを持ち上げて、それを元に戻そうとしたときに、青灰色の瞳を大きく見開いた。
どうしてそこに僅かな仕掛けがしてあったのか、その時にわかったからだ。
・・・・彼は小さく声を漏らした。まったく周囲の音が聞こえなくなった。自分の声さえも。

『発作だな』

あの男の声が蘇る。
全身に震えが走る。
息をすることも瞬きをすることも忘れて、それを凝視した。

秘密があったのは、そのマシンそのものではなかった。
カバーの裏面にあった。
そこを開いて、注意深く観察する者でなければ、決して分からない場所にそれはあった。着脱可能な場所でありながら、マリナが決して見ないところ。
バッテリーの交換は想定していたらしい。
だからそこには何も残さなかった。
その時にはわからないように。
彼女にではなく・・・・シャルルにあてて彼はそれを残した。

つまらない悪戯をするなよ

彼はそう呟いた。

目の弱い彼女には判読できなかっただろう。
小さな文字でそこに刻まれていたメッセージはフランス語であった。
これを誰が読むのか、わかっている者が残したものだ。

彼はそれを読んだ。そして、もう一度視線を走らせた。何度も繰り返す。
彼は決して繰り返さないのに。それなのに、何度もそれを読み、低く呻いた。
声にならなかった。
息ができない。
苦しい。

■秘するが花　月蒼華19

たった一言だった。

「また倖せになれ。ふたりで。」

喉の奥から込み上げるものがあった。

堪えきれなくなって、彼は大きな・・・・大きな溜息をついた。
唇が震える。
指先が震えたが、シャルルはそれを抑制しながら、そっと・・・そっと静かに、筐に戻した。
これ以上、眺め続けることはできなかった。
もう二度と見ることがないとしても、それでもそれを元に戻した。
名残を愉しむ余裕さえない。
触れることさえ罪深いように思った。

彼はいつも誰かにマリナを託していった。
マリナを頼む、とか。
マリナを守ってやってくれ、とか。
そうではなかった。

彼女を倖せにしてやってくれ、と書いたのであれば、シャルルは憤慨し落胆しただろう。
どうして倖せにすることができなかったのか、と彼を責めただろう。
自分こそ彼女を幸福にすることができる唯一の人間であるとは考えていなかった。
しかし、誰も彼女を永遠に倖せにすることはできないだろうと思った。
それは彼女が誰かに倖せにしてもらう人間ではなく、自分が倖せになるために行動する人物であったからだ。
それ以上に、他者の為にどこまでも・・・何も気にせず捨てられる強さがあった。
昔・・・シャルルが倖せになるために、彼女は彼について来た。

あの困難な状況の中、あの男の傍に居れば安全であったのに、彼女はそうしなかった。
だからこそ、深く激しく彼女を愛した。

夢中になった。
忘我するということを知った。

そして、愛しすぎて彼女を突き放した。誰を愛しているか知っていたから。
誰と一緒であれば、彼女はいつも笑顔でいられるか、知っていたから。

最後にシャルルが彼女に贈った言葉を、彼は覚えていた。
倖せになれ、と言った。

だから、それを覚えていて・・・・いや、違う。彼は思考を切り替えた。
これは旧式のものだから、購入してすぐに・・・彼はこれを書いたのだ。
頻繁に開閉する箇所ではないから、おそらく、セッティングしている時に行ったものだろうと思った。あのメールの設定も、初期値のものがほとんどだった。それなら・・・最初に、これを書

いたのだ。
シリアルナンバーや機種から見ると、シャルルと別れてほどなくして入手した品であったはずだ。

彼は。
そこに、刻んだ。
いつか訪れるその時に備えて。

今度こそ倖せになれ、とか。
もっと倖せになれ、とか。

そうではなかった。
そうしなかった。

あの男は、まったく、狡い奴だ。

彼はそう呟いた。
彼の名前を呟いた。

もう一度、倖せに。

シャルルとマリナが一緒にいたあの時間を、彼は肯定したのだ。
ふたりで過ごした短い時間は幸福だった。

そして、生涯の夢をすべて見たと言ったシャルルに、こうして問い掛ける。
また夢を見ろと言う。
青春の輝きと呼んだ時代の幸福を思い起こす。彼はあの時幸福だった。
苦しかったが倖せだった。満たされており、同時に、愛の苦しみについて考えていた。

彼は・・・マリナとあの男が過ごした時間も否定していなかった。
それはとても幸福だったのだろう。
そして彼らは、ふたりの別れを不幸と思っていない。
彼女は決して彼の話をしないし、その後会っている様子もなかった。
シャルルは彼の友であるから、再会しない可能性は低いはずなのに。
それなのに、それでもこうしてシャルルと一緒に居る。

傲慢だな、と彼は笑ったが、それは自分自身に向けたものだった。

だから「また」なのだ。
シャルルが彼女を倖せにすると・・・彼女がシャルルを倖せにすると信じているからだ。
また、倖せに・・・・彼はそう書いた。
彼女はいつも倖せだ。
誰と居ても倖せなのだ。
だから、得た倖せについて否定することもしないし、比べることはしない。
それでも。
ふたりで、倖せになれとあの男は書いた。
誰かを倖せにするのではなく。自分で倖せを求めるのでもなく。

ふたりで。
新しい倖せを作れと・・・・・彼は言葉を残した。

■秘するが花　月蒼華20

シャルルは、嫉妬や猜疑について考えに耽っていた自分の行為について、改めることにした。
静かにラップトップを元の場所に戻した。
それまでの作業はとても時間の経過が遅かったのに。
彼はゆっくりと戻したのに、それでも一瞬でそれは終わってしまったように感じる。
マリナに見咎められてもそれでも良かった。
・・・彼女に糾弾された方が、まだ安らいだのかもしれない。

やはり、見てはいけなかったのだと思った。
しかし、見なければわからなかった。

彼の声を聞いた。

『シャルル、月蒼華という言葉を知っているか』

月が蒼く光り、その光を受けて華が蒼く輝く。そしてその華は月に向かって咲く。
循環する天地の恵みと美について述べた言葉だ。
まるで、シャルルのようだと言って彼は笑ったが、シャルルはそれに何も応えなかった。
フランスの華と呼ばれて久しい。
しかしそれは彼だけに赦された称号だ。
彼は何かの歯車ではなく、ただ彼一人しか存在しないから。

死闘を繰り広げたあの当主争いの前は、その考えが顕著だった。
だから、その言葉がシャルルのようだと言った彼の意見に賛同しなかった。
彼が知らないことはない。
だから、皮肉だと思った。万物の事象についての美辞はたくさんこの世に存在する。
他者との付き合いを極端に嫌うシャルルに対して、あの男が苦言を呈しているのだと思い、無視することにした。

人も巡り廻っていくのだから、もっと違う接し方をしろと言われていると思った。
「今の品種改良に成功したら、その言葉を和名でつけてやるよ」
彼はそれだけ言ってその話を終わりにしてしまった。
癖の強い髪を持った男は肩を竦めて、シャルルらしいと笑った。

月は巡り、蒼く巡り、華に巡る。
それは邂逅だった。彼と彼女はまた、愛を始めた。
廻って最初に戻ったのではなく新しい場所に行き着いた。

ふたりで。・・・・ふたりで・・・
この意味がどれほど大きいのか、大人になって、様々な出会いと別れを繰り返さなければわからなかった言葉だ。
あの男は、あの時に・・・・それを既に悟っていたのだとしたら。

彼は唇を噛んだ。
込み上げてくるこの衝動が何であるのか、理解していたからだ。

己を知るために彷徨した。誰かをもう一度愛せるかもしれないと思った。
それでも・・・・マリナと再会した。
もう止められなくなった。
もう一度彼女に逢えば、もう、止められないとわかっていたから会わなかったのに。

幾年経過しても、どれだけ忘れようとしても、彼は決して彼女のことを想い出にすることがなかった。
シャルルの中では、彼女の声や笑顔や涙が巡っては消え、そしてまた思い起こされた。
彼女を人目憚らず抱き締めた時。彼は走って行った。すべてを投げ出して、走り寄り、彼女を抱いた。
もう、終わりだ、と思った。始まってしまったから。
彼の中で、何かが動き出すのを感じ、その瞬間に、終わりだ、と思った。
たとえ、彼女があの男と居たとしても、それでも愛することを諦めることはもうできないと思

った。

深く窪んだ双眸に軽く指をあてた。白金の髪の下で、彼は眉を寄せ、苦悶に満ちた顔をして・・・必死に堪えた。もう、彼は大人になった。
涙を見せる時は上を向けばよいと言った少年時代を経て、彼は、涙を堪える術を他にも覚えた。
呼吸を調整し、感情の抑制をし、そして、彼は堪える。しかし、それでも塞き止めることができない。

このラップトップにはもう触れることはないだろう。
またひとつ、彼の秘めたる想いが増えた。それで良い。
ひとつひとつ重ねていくたびに、彼はこうして・・・愛を深めていく。

おまえに言われなくてもわかっているさ。

彼はそう呟いた。
他者を気にする男であったが、それでも彼は彼女をこよなく愛し、そして彼女から去った。今度は誰にも託さなかった。
彼女自身で選び、心を寄せろと言うかのように。
そして彼と彼女の時間は決して不幸でも悲壮でもなく、彼女の今を構成している。

それが最後のメッセージだと思った。もう、彼は何も言わないだろう。
彼の痕跡はもうどこにも見つからないだろう。

・・・シャルルは探し続けるのかもしれないが、それでも見つからないと感じていた。

またひとつ、一段深い場所に堕ちてしまった。
そう、思った。しかしそれも悪くはない。
どこまでも底のない果てのない深みに堕ちることに恐怖は感じていない。
親友の恋人を愛してしまった業についても後悔していない。
必要だったから。
彼が、生きていく上で必要だったから。

■秘するが花　月蒼華21

「・・・泣いているの？」
か細い声がして、部屋の奥から声が聞こえてくる。同時に、布の擂れる音も。大きく静寂を破る小さな囁きが、シャルルに届いた。
彼は顔を大きな手の平で拭っているところだった。
「いや・・・」
「シャルルは嘘が不得手ね」
マリナはそう言って笑ったが、寝起きであったので声が少し掠れており、そして彼女の方こそ涙声であった。
闇に慣れた目は、朝の光を僅かに感じるだけでも強い刺激となって、彼と彼女に射し込んでいた。
「こんなに明るくて・・眠れる方がどうかしている」
「悪かったわね・・・そう、私はどうかしているのよ」
彼女はそれだけ言うと自分の言葉に笑った。大きく伸びをする気配がする。
彼女の覚醒は始まったのだ。
シャルルは同じ姿勢で座って居たことによる筋肉の緊張を解すために、少し腕を伸ばした。
「自覚しているのであればそれで解決だ」
彼はそう言って静かに微笑んだ。
青灰色の瞳が少しだけ潤んでいたが、それも彼女は気がつかないだろう。
目の弱いマリナは、少し離れてしまえば、シャルルの僅かな表情の変化については判別できない。
それなのに。声も聞いていないのに、泣いているのかと言われた。
それを受けて、シャルルは言葉を濁したので、マリナが指摘したのだ。
彼は彼女の方を見ないままに、返答した。
「オレも、どうかしているけれどもね」
「シャルルが？」
含んだ笑い声が聞こえた。
「そう」
彼は白金の髪を掻き上げた。頬に煌めきが散らばり、マリナは目を細めた。
漏れて射し込んできた光が、彼の髪に魅入られたように吸い込まれて行く。
静かな空気が徐々に和らいで薄らいで行く。

それは決して切ない曙天の光ではなかった。

生命の希望に満ちた力強い・・・そう、目の前に横たわる茶色の髪の、彼がただひとりだけだと定めた運命の人のような光であった。
運命とは定められたものではなく・・・命を運ぶ人のことだと思う、と彼女は囁いた。
ファム・ファタルのことについて、当人であるマリナと話をしたことはない。
けれども彼女は知っていた。
知っていたらからこそ、そのような話をするのだということをシャルルが理解していることも、知っていた。
「間違いなく、君は命を運ぶ人だよ・・・・マリナ」
彼は微笑んだ。
彼女を見るのは、今はまだ辛い。
けれども、視線がそちらを向いてしまう。

彼の身体が・・・全身が、彼女を求めている。
どうしてあれだけ長い時間を隔てていられたのだろうかと思うくらいに。
燻っていた疼痛が彼を貫き、そして彼は一度だけ高く浮遊し、次の瞬間には深く沈む。

「月蒼華」
ぽつり、と彼女は言った。シャルルの美しい眉が僅かに動き、頬が持ち上がった。
「・・・・何だって？」
彼は普段聞き返さないのに、彼女にそう言ってしまい、唇を噤んだ。
普段の彼ではないことに、マリナはとうに気がついている。
「・・・・命は巡るっていうことよ」
彼女は微睡みの中でそう言った。静かに。でもはっきりと。
どうして、彼女は自分の欲しい言葉を、無防備な瞬間に投げつけるのだろうか。

幾つもの命を見送ってきた。そして自分の命さえ、消えかけた。それでも。
今、こうして生きているのは・・・・
彼はそこでようやく大きく息を吸った。
生きるために。
息ができないほど苦しいけれども・・・生きるために。
いつ死んでも良いと思った。
死までの退屈しのぎに生きていた。
それに意味と価値を与えたのは、目の前に居るマリナ・イケダである。

そして。
あの男からの言葉が・・・・彼に再び、生きる執着を与える。
マリナに、倖せになれ、と言った。
しかし、あの男は、ふたりで倖せになれと残した。この違いについて、彼は考え続ける。

■秘するが花　月蒼華22

マリナは言葉を続けた。
「・・・私の好きな言葉。とても好きな言葉。
・・・・昔、教わった。
ふたりで倖せになれる約束の言葉だと・・・」
「倖せになるって、どういうことなのだろうか」
シャルルが珍しく、彼女に問いかけた。
倖せの定義は人それぞれで、そしてなお、彼の問答は生涯に渡って続く。
それでも、彼は・・・・それをやめることはしない。
愛をすることをやめはしない。

誰から教わったのか、彼は尋ねなかった。
けれども・・・・どれでも、マリナのこたえとシャルルのそれは一致していた。
「決まっている。・・・ふたりで作るもののことよ」
それから、彼女は横臥したまま、言った。布に顔を埋めて、彼女は夢見るように言った。
「月蒼華という言葉はシャルルのためにあるような言葉ね。月と蒼と華は、すべてシャルルのことを言っているみたい」
「そうだろうか」
「そうよ・・・容姿ではなく、命が巡るから。
ひとつしかないから。
月も蒼も華もひとつずつ次に巡る。
・・・だから、いつか、スケッチさせてね」
彼女はそれだけ言うと、再び微睡みの世界に脚を踏み入れそうになって、甘い咳嗽を昊に放った。

シャルルはそれを見届けて、そして彼女に願いをかける。
もし、シャルルが月の化身であるのだったら。
それなら・・・・それなら、誰かに願いをかけられるのではなく、自分自身に願いをかけることも、赦されるのかもしれないと思った。
願い。
彼は根拠のないことは信じないし実行しない。
けれども・・・・マリナに対して思うことはいつも願いであった。
理由もなく、根拠もなく、ただ、惹かれる。強く激しく彼を突き動かす。

君に愛されたい。

彼はそれだけを望んだ。
彼女を愛することは誰にも赦しを乞うつもりはなかった。
もう、どんなに赦されなくても、止められない。

だから、彼が望むのはひとつだけだ。
・・・たったひとつだけだ。

この世の終わりが来ても・・・彼女の傍に居たい。
この世の果てに巡っても・・・彼女が傍に居て欲しい。

「良い言葉だと思うよ」
優劣や評定についてはあまり言葉を出さないシャルルが、そう言った。
静かに。
けれども強い口調で。

「月は蒼へ。蒼は華へ。華は月へ。・・・それぞれに巡り、そしてまた出会う」
それはまるでシャルルとマリナの邂逅を表しているようであった。
たとえ・・・たとえ、あの男が用意した邂逅であったとしても。
その先を選んだのは、シャルルとマリナなのだから。

「まったく脈絡がないね」
彼はそう言って笑った。
そして、少し離れた彼の恋人は、彼に微笑む。
それがどれほど待ち侘びた瞬間であるのか、シャルルはこれから伝え続けなければならない。
「オレは君とやり直しているつもりはないよ」
「だから月蒼華なのよ」
微睡みながら、彼女はそう言った。彼がまだ彼女に近付かないことの理由に、気がついたようだ。
「やり直すことができないから、人の命も・・・何もかもが巡る。だから素晴らしい。一度しかないから。やり直せないから。だから、何もかもがきらきらと輝くのよ」
「なるほどね・・・それが君の価値観か」
彼は少し満足そうに頷いた。
「また出会って・・・シャルルは0.3から始めようと言った。無でも続きでもなく・・・」
「そう。だから、オレとマリナは・・・・・ふたりでこたえを出すことになる」
マリナは笑った。天才のシャルルと共同で考えることは難しい、と言った。

「それなら、マリナは検証担当だな」彼は笑った。朝を迎えて・・・白む空と光を受けながら交わす会話ではなかった。
けれども、どういうわけか、昂揚していた。

・・・・彼の目元に浮かんだ水泡は、すでに消えていた。

彼女を倖せにする。
生涯かけて。
もう、決して離さない。誰がなんと言おうとも。
そして、全身全霊で愛する。
いや・・・そんな風に決めてしまうより前に、彼女に向かって意識が飛ぶ。

■秘するが花　月蒼華23

彼は彼の親友の名前を心の中で発音した。
どこまでも優しく、どこまでも残酷で、それでいて、かけがえのない彼の理解者で・・・彼が認めた、彼の親友。
同じ人を好きになった。
同じ人を愛した。
だからといって同じ倖せになるとは限らないし、どちらに優劣が付されることもない。

「その言葉が気に入ったのなら・・・次に改良する薔薇の花言葉にしよう」
「私はこれから描く予定の・・・シャルルの絵にその名前をつけようと思ったのだけれど」
彼女がそう言ったので、シャルルは唇を横に引いた。
「マリナ。いつになったら、君はその言葉を実行するのかな」
「・・・・どうなのかしら。倖せだと、描けないものもあるし、倖せだから描けるものもある」
「都合の良い言い訳だな」
彼女は大きな溜息をついて、俯せた。
背中を伸ばし、首を伸ばして完全な目覚への準備に入る。

彼はその様子を眺めると、もう一度、顔を両手で覆った。

・・・長い・・・長い夜が明けた。彼の夜明けだった。

あの男は、もうずっと、別れの逆覩（※予知）を抱えていた。
だからこんな風に・・・・こんな風に、随所に仕掛けをしていた。
自分で言えば良いのに。
彼は、そうしない。
彼の愛がまだ燻っているのであれば、それが彼女に向かって手繰り寄せられる道しるべになると・・・・あの男は、そう感じていたのだ。
自分がどう思っているのかほとんど口にしない。誰にでも近寄ることができるが、誰にでも優しい代わりに己には優しくなかった。
何か・・・自分に罪があると思っているのではないのかと疑う程に、あの男はいつも・・・いつも誰かを優先する。
けれども、マリナの事に関してだけは彼は譲らなかった。
それでも・・・彼はシャルルがマリナを連れて行くときに、行くな、と言わなかった。
シャルルを探しに、モザンビークまで単身で乗り込んだ程の豪胆さを持っているのに。
彼はマリナに・・・・・シャルルと行くな、と言わなかった。
逆だった。
行け、と言った。

彼女を愛している男と一緒に行け、と言った時の彼の心情を考えると、シャルルは今でも胸が疼く。それでも・・・わかっていても、彼は止められなかった。
あの男は、自分が行動するときには、彼女を伴わなかった。
当時、シャルルが滞在していたあの国は危険だからという理由もあったが、もっと別の理由もあったように推察している。
どうしても必要だった。彼にはマリナが必要だった。
それを知っていたから、彼は・・・あの男は、シャルルと行け、と言ってマリナの背中を押したのだ。

「月蒼華。・・・巡りの言葉か・・・君は詩人だね、マリナ」
彼が囀るようにそう言うと、彼女は毛布に顔を埋めながら不満を漏らした。
「シャルルに言われると、なんだかもっと違う意味に聞こえるから不思議ね」
「君はオレを随分と過小評価しているね」
彼は笑った。
「オレがこうして・・・ここに居ることの意味をもっと考えてくれよ」
「だから、それが月蒼華」
「・・・もっと説明しなければ情報が少ない」
彼がそう言ったので、マリナは、壁側に顔を向けた。シャルルに背を向ける格好になった。
彼女の白い首と、茶色の髪がこちらを向いたので、シャルルは黙った。

少しの間、彼女は黙っていたが、やがて、低い声で言った。

「・・・・月を見て泣いた。
青灰色の昊を見ると泣いた。
・・・そして薔薇の華を見る度に・・・・切なくなって恋しくなって逢いたくなって泣いた。
・・・私にとって月蒼華はつまり、そういうことなのよ」
「マリナ」
彼は腰を浮かせた。シャルルはフランスの華と呼ばれているのに。すべてを手にしたのに。
それなのに・・・・本当に欲しいものはひとつだけなのだと叫び出しそうになった。
手にしたすべてを放棄しても、すべてを捧げても・・・・ふたりで出す幸祐についてのこたえを手にすることができるのであれば、彼は何も望まないと思えた。

■秘するが花　月蒼華24

何もかもが赦された、恵まれた愛ではなかった。
彼女は外国人であり、彼はフランスの華だった。
そして、彼女は、彼の心の拠り所と言っても良いほどに近い場所に居た、あの男の恋人だった女性だった。

決して好きになってはいけない相手だと思った。
最初に会った時から、わかっていた。

彼女は、彼が好きなのだと。
彼は、彼女が好きなのだと。

わかっていたのに、好きになってしまった。
わかっているのに、愛してしまった。
わかっているのに・・・止められない。

傍に居たい。
傍に居て欲しい。

月蒼華とは、そういうことなのだ。
それでも巡る。想いが巡り、止められない流れに抗えない。
だから、彼女はファム・ファタルなのだ。
届かないと分かっていても、愛をすることを止められない。

誰かの涙が降り積もっても。
誰かの吐息が聞こえても。
それでも・・・それでも、彼女を求める気持ちを静めることができない。

彼はゆっくりと立ち上がると、彼女の傍に寄るために、脚を伸ばした。
低い天井に、狭い壁と壁の狭間に居ながら。
彼女に向かう距離はとても計り知れないほどに大きく隔たりがあるように思える。
ほんの数歩先なのに。それでも、彼女の横臥する場所には、彼は行き着けないように思った。
彼は穢れていると思っているから。
決して愛してはいけない人を愛したから。
それを忘れるために、苟且（※かりそめのこと）の俗情に身を浸したから。
「月はすべてを浄め、蒼はすべてを照らす。華はすべてを満たし、そして月によって洗われる」
彼女はそう言った。
彼に、背中を向けたまま。
その言葉がどれほど大きな意味を持っているのか・・・シャルル・ドゥ・アルディは悟った。
だから、彼から近寄る。彼は誰にも近寄らないのに。
決して。
それなのに、彼女の言葉に惹かれてシャルルは、身体を動かす。
神託を受けたかのように。
痺れる全身を動かすのがやっとである。

・・その次の瞬間は・・・・絶対的存在の降臨にさえ、似ていた。

届かない想いを届けるかのように。

苦しくて息もできないのに。

これほど近くに互いの温度を感じながら、それでも苦しい。
これが恋でも愛でもなかったのなら、一体何だというのだろうか。

■秘するが花　月蒼華25

「マリナ、起きるか喋るかどちらかにしたらどうかな」
シャルルは薄く笑った。
「そうだけれども・・・目が醒めたらシャルルがいなかったから」
「それは理由にならないが」

彼女は声を漏らして笑った。
同時に大きく伸びをする。
身体の向きを変えて、朝ね、と言ったので、朝だよ、とシャルルは応える。
これがふたりの朝であった。
台詞が逆転することもある。
そちらの方がほとんどだった。
朝の弱いシャルルに向かって、マリナが朝よ、と語りかけることで彼は目覚を迎える。
しかし今日は違った。
彼女は、シャルルが眠っていないことを知り、そして、遠回しにそれを指摘した。
小柄な彼女が肢体を伸ばしても、彼に手を伸ばしても、彼女の指先は彼に向かっていたとしても・・・余り距離が縮まらなかった。
その距離さえ、愛おしそうに・・・・宙に伸びた指先の動きを、シャルルはじっと青灰色の瞳で追った。

「朝に目が醒めたら、ひとりではないということの重要さを、シャルルはもっと知るべきよ」
彼女が、シャルルが眠らずに起きていたことに気がついて、そう言ったので、シャルルは言い返した。
「オレは誰かがいると、眠れないから」
嘘つきね、とマリナが小さく言った。
「事実を歪曲しているつもりもないし、事実と異なることを言っているつもりもないよ」
彼女は首を起こして、シャルルを見つめる。
毛布の下から彼女の茶色の瞳が好奇心という光を灯しながら、シャルルを眺めた。
「それなら、私は何て答えれば良いの？」
「そうだな・・・」
彼は唇を歪めた。彼が、彼女に、ともに夜を送り朝を受ける間柄であることを言わせたいのだとわかったマリナは、困った様子であった。
自分の立場や恋人同士の交わす囁きについて、彼女は不得手であると自覚しているようである。
実際に・・・彼と一緒に過ごすようになってから、彼女は冗談でも「シャルルの恋人です」と口にしなくなってしまった。
それが嬉しくもあり、寂しくもあった。
なぜなら・・・昔、彼女が幾度か口にした『自分は、シャルルの恋人だ』という言葉は、それを強く望んだ言葉ではないということを思い知るからだ。
それでも、良かった。
今、言わないということは、彼女がそれを自覚しているということだからだ。

あの男もそうだった。
マリナを好きだと言ったが、自分の恋人であると言ったり、占有したりすることを強く面に出す

ことはしなかった。

「オレがいないと眠れない。そう言わせてみたいね」
「残念でした。・・・それはない」
マリナは否定したので、シャルルは少し眉を顰めた。
彼は彼女が居ないと眠れないと訴えているのに、彼女は彼が居なくても良いと言ったからだ。
誰かと一緒だと眠れないシャルルは、マリナは唯一の例外だと言っているのに。
シャルルは美しい曲線の唇から、溜息を漏らした。
「確かに、君はどこでも眠れるだろうね。繊細とはほど遠いから」
「シャルル、情報が足りない。それで判断するのは早計だわ」
マリナはそう言って更に否定した。
すでに彼女の口調ははっきりしており、目覚の会話を愉しんでいた。
彼女は上向きになり、天井を見上げて、瞼を閉じた。
そして、ぽつりと言う。
天井が低いね、と言った。
ここは彼女の日本での住まいであり、ここはパリの天井の高いシャルル・ドゥ・アルディの邸ではなかった。
微睡みを弄びながら、彼女は言った。

「・・・シャルルが居なくても、ひとりだと思わないから。いつもシャルルと一緒に居るような感じがするの。
どこに居ても。ひとりでも。
だから、少しも・・・・寂しくない」

しばし沈黙が訪れた。
マリナの言葉を引き継がなかった。
いや、引き継いで、気の利いた言葉を言うことができなかったのだ。
彼は・・・・言葉にならない想いというものが、存在することを知った。
彼はフランスの華なのに。
それなのに、この気持ちをどう表現して良いのか、すぐに言葉にすることができなかった。

かつて。
彼は彼女に言った。
傍に居たいと・・・離れられなくなるまで彼を愛するようになるだろう、とマリナに言ったことがあった。
しかし、その先があるとマリナは言う。
傍に居なくても傍に居ると思えるほどに、思い合い、通じ合い、そしてまた深く愛することを、彼女は知っている。

そうだった。

彼女は・・・・最愛のあの男とほとんど一緒に過ごしていないのにもかかわらず、あれほど強い絆を結んだ人だった。
だから、彼は彼女を誰よりも強く求めて、深く激しく愛したというのに。

「・・・・君はオレの月蒼華だよ、マリナ」
シャルルは少し黙った後、そう言った。声が掠れていた。

「・・・月よりも遠くに居たのに。・・・そして蒼（※陰陽五行説では東に配する色）の国に住まって、オレの傍に居なくても平気だと言う。それなのに・・・・鮮やかな華のようにオレに君を忘れることを赦さなかった」
マリナはその言葉をじっと聞いていた。
忘れられないのは、彼の特徴であった。
記憶力が絶群であり、彼は誰もが認める天才であった。
「忘れなくて良いよ」
「そこは、忘れないでいて欲しいと願うところだよ、マリナ」
彼は苦笑した。目元が潤んでいる。声も震えていたが、彼女は気怠さで気がつかないというようなふりをした。マリナは、そういう時には何も言わなかった。ただ、眼を瞑り、彼に涙を零しても誰も見ていない、と無言で告げる。それが堪らなく彼を切なくさせることも知っているのに。
・・・本当に酷い人だ。
彼はそう心の中で呟いた。

■秘するが花　月蒼華26

「朝から難しい話ね」
「そうかな？脳の活性化には適切な程度だと思うが」
彼はそう言ったので、マリナはまた子供のように声を出して笑った。何が可笑しかったのか、シャルルには理解できなかった。しかしそこにはひとつもごまかしや嘘はなかった。
彼女はいつも・・・正直だ。磊落（らいらく：心が広く豁達なこと）で、それが、彼には眩しかった。彼の月蒼華は、彼の耳に懐かしい笑い声を聞かせる。あの時のままに。
彼女は非常に幼く見える。若く見えるのではない。幼いのだ。
ただ無邪気で居るだけではなかった。それでも彼女はこどもでも少女でもなくなった。
恋を失い愛を知り、そしてまた・・・新しい愛を築くことに、シャルルのように躊躇ったり戸惑ったり憂えたりしない。正確に言えば、躊躇を感じているが、それでも臆さないで・・・ひとり

よがりの愛に溺れることをしない強さと潔さを持っているのだ。
飛び込む勇気を知っているが、その先にあるのがいつも必ず自分の望んだものであると限らないことも、よく知っていた。
それが彼をどんなに強く惹きつけているのか、知らない。

彼と彼女は大人になった。

抱き合わない夜も知っている。
互いの温度を感じる夜を知っている。

「シャルルは忘れられないのでしょう・・・いろいろなことを」
「そう。だから時折、君のようになったら、さぞかし苦労するのだろうなと思うことがある」
「楽になるのではなくて？」
彼女が不平を漏らしたので、シャルルは微笑んだ。
「忘れたくないから」
「そう・・・・そうなのね」
マリナが静かに言った。朝だね、ともう一度言った。
彼女は顔を起こして、外を見た。乱れた茶の髪が彼女の頬や、竦めた首筋で躍っている。
「眩しい」
「それならさっさと起きたらどうだ」
「一度目が醒めてから眠るのは、とても贅沢で倖せなのよ。・・・まだ眠いし怠い」
「それは怠惰と言う。マリナ、倦怠を感じるのは時差を感じているからだ。しかし君は時間通りに眠っただろう・・・」
「ああ、シャルル。そうじゃない」
彼女はそう言うと、スプリングを軋ませて、毛布を身体に巻き付けながら起き上がった。
「倖せを感じることは怠惰ではない。倖せは倖せなのよ。ひとつひとつを変換するのはとても勿体ないことだと思わないのかしら」
彼女は首を傾げて、纏う毛布の端で顔を拭った。
まだ眠気を感じるというのは本当らしい。

「もう起きないといけないの？」
彼女は眼を細めて、周囲を見回して朝の気配をもっとよく感じ取ろうとした。
マリナは目が弱いので、そうしなければ周囲を知ることができない。
「いや・・・まだ少し時間がある」
彼はそれだけ言うと、ゆっくりと彼女の傍に寄った。日本式の住居なので、彼は素足だった。静かにゆっくりと僅かな衣擦れだけを伴にして、彼は彼女に近付き、腰を落とした。
次に、マリナを毛布ごと、大きな胸の中に入れる。
「シャルル」

「しばらく、このままで」
彼は彼女の茶色の髪に頬を傾けて、目を閉じ・・表情を埋める。
背中に腕を回して、彼女を包み込んだ。眠っていないので、目の端が痛む。
こうしていることすら、夢のようだった。一生分の夢を見たと言ったのに。
彼はまた夢のような空気を纏うことを赦された。生涯、もう、誰も・・・誰もこんな風に、彼に夢を見させる相手は現れないだろうと思った。

彼の腕は小刻みに震えていた。肩も僅かに震動を伝えてくる。
マリナは黙って彼の腕と胸の間で呼吸を繰り返した。
蒼灰の瞳をした・・・月の夜空の下で咲くような、フランスの華が哀しんでいた。
ひとり眠れず、憂えていた。それがマリナの覚醒を促す。
もう離さないと言って彼女を抱き締めた時に似ていた。

マリナは腕を伸ばした。身動きが取れなかったので、手の平を彼の胸に伸ばす。
浅い呼吸が繰り返された。互いが、呼吸ができなくなるほど苦しいと想いながら、どうにもならなかった。愛をするということは、こういうことなのだ。胸躍ることばかりではない。愛おしすぎて、好きになりすぎて・・・・また愛する。
命が巡るように、愛も巡る。繰り返すのではなく、更に大きな違うものになって、それまでのものも内包しながら、更に・・・巡る。彼女と彼の体内を巡り、滾らせ、そしてまた・・・静寂さえ共有する。

「シャルル」
マリナが囁いた。彼の白金の髪に顔を寄せて・・・そして耳元で囁く。
「また・・・また私は倖せになる。シャルルもまた・・・倖せになってくれる？」
シャルル・ドゥ・アルディの腕の力が強くなった。
ますます深く、彼女の髪に顔を埋める。
息もできないほど、強く彼のファム・ファタルを抱き締める。
彼は溜息混じりに言った。
皮肉屋で、何に対しても冷淡である彼が、シャルルの内に眠っている激しい感情すべてを凝縮したような想いを込めて、彼女に言った。

「オレはずっと・・・最初から、倖せだよ」
それだけしか言わなかった。
マリナは、ありがとう、と言った。
「ふたりで・・・ふたりで、倖せになるのよね。また、倖せになるのよね」
「マリナ。これで最後にしてくれ。
君がオレ以外の誰かと紡ぐ新しい倖せはやって来ないから、そのつもりで」

■秘するが花　月蒼華27

マリナは大きく息を吸った。
それは肯定だった。
次に、もう・・・このまま眠ってしまいたいと言った。
彼女はそうやって、事実と異なる願いを口にする。
本当はもう目が醒めており、微睡みの世界と決別しているのに、彼女はシャルルがまだ眠っていないことを知って、眠りに誘う。
彼は笑った。

いつもマリナの願いを叶えてしまう。
たとえどんなに困難なことであっても、叶えてやりたいと思い、そしてそれを実現できるのはシャルルだけであるということを確認する。
決してそうしてはいけないと理解しているのに。
それでも・・・抗えない。彼女の願いを叶えることで彼は倖せを感じていたから。
奉仕とは違っていた。魂の試練だった。
愛の前に、理をねじ伏せた。
・・・死の帳を吹き払い、死に行こうとしている者を生者の世界に蘇らせることもした。

彼女はそれを深く憂えている。今でも深く憂えている。
だから、彼には何も望まないように努めているようにさえ思える。

シャルルは憂える。
払暁を越えているのに、彼女はシャルルの微睡みを願う。
そして、気怠げな様子の彼女を彼は静かに受け入れる。
一緒に眠り、一緒に笑い、ともに過ごしたあの短い時間だった。
共有した何もかもが鮮やかに蘇る。音も香りも彼は記憶していた。
今の彼女の髪は、あの時と同じようで違う香りが漂っていた。
記憶しているはずなのに、なぜだろう。
・・・・曖昧であることをシャルルは愉しんだ。
「ああ、もう一眠りしたいところよね」
「朝だ、と言ったのは、君なのに」
「眠る時は幸福を感じながら眠ることにしているの」
彼女はそう言って、シャルルのような言葉を述べてしまったと言った。
涙を流し、眠れないが目を閉じなければならない夜を知っているからこその発言だった。

豪胆な気質のマリナが、眠れない日々を知った。大人になって、それらの日々を重ねてそしてまた彼女は一枚一枚薄い衣を脱いでいく。他者と彼女が違うところはそこであった。人は皆、年月を経ると鈍感になっていく。衣を纏っていき、傷つくことに鈍くなることで均衡を保持し続ける。

彼女は畏れていない。倖せが去っても、また彼女は倖せになれる。
だからわかるのだ。
彼が眠れない理由を。
そして、眠れない理由を、孤独とともに内に深く抱えるシャルルに意識を向ける。
それが苦しい。
彼は彼女の額に唇をあてた。
彼女の温度は彼を浸食する。

心地好い波に酔う。
・・・・たったこれだけのことなのに。
こうしているだけで、彼は満たされていく。

「月蒼華という言葉は悪くないね。・・・次の薔薇に名付けることにするよ」
彼はそう言って目を閉じた。
別れと出会いを繰り返し経験しなければわからないその言葉の意味を、あの男は、いつからわかっていたのだろうか。
彼女にも教えたのだろう。いつか・・・その言葉がシャルルに向かって発せられることを予想した。
その言葉が今・・・マリナの唇から流れるということは、偶然でも不可避でもなかった。

その時が来たから。
ただそれだけが理由だった。

シャルルが筐の中の秘密を見たように、彼女にも・・・決して言うことはないと思っていたであろう秘密の言葉を宙に放った。
それがシャルルの躰に風となって吹き抜ける。
彼の声を聞いていないのに、聞こえてくるようだった。
彼は、言葉しか遺さなかったのに。それなのに、声が蘇る。

「シャルル。・・・・あのパソコンは、もう、動かない」
彼女は彼の肩越しに、部屋の反対側にあったそれに視線を移したようだ。茶色の髪が僅かに動いたので、それを知る。

大きく溜息をついた。彼女がいつから目が醒めていたのか・・・・まだ、尋ねることが出来なかった。
それを問いただしても、彼女は決して真実を述べないで微笑むだけだということもわかっていた。
「希望するなら、修理するが」「いえ・・・・」
マリナは静かに彼の申し出を辞退した。
「役割を終えた。ご苦労様と言って見送る対象でしかない。また呼び戻せば、それは巡りから外れた行為になってしまう」
彼女は、まだ、あの時のことを気に病んでいるようだった。
彼女の友を救うために、彼が罪深いことをしたと思っている。
だから、何かを・・・・終えてしまったものをもう一度やり直すとか、再生させるというようなことにマリナはいつも心を穏やかにさせることができなかった。
「必要があるなら、それは可能だと思うよ。もう、部品がないだろうから・・・外観は相当変わるが、ハードの記録は・・・」「シャルル、本当に良いの」
マリナがそう言って、彼の肩に額を埋めた。

そして静かに言う。
「・・・私は捨てなられない」
「良いよ」

彼は即答したが、苦悶に満ちた表情を彼女に見せまいとして、唇を噛んだ。
彼女は捨てられない。あの男との日々を捨てられない。そう言ったから。
それでも良いと思ったばかりなのに。実際に彼女の口からそれを聞くと、張り裂けそうな痛みが彼を襲うので、彼は高潔であろうとして、すべてを赦そうとして・・・犇めく環状の波に、気が遠くなりそうになる。

■秘するが花　月蒼華28

「捨てることはないだろう」
彼は囁く。
自分の言葉が機械的だと思ったが、それでも抑揚を極力抑えた物言いに努めた結果であるから、致し方ないと判断した。
甘くて苦いものが彼の唇に堕ちてきたが、極力、それを感じさせない口調で、そう言った。
「もう、あれに電源を入れることはない。けれども捨てられない。」
彼女の最後の質問に、シャルルは目を細めた。彼女は残酷だ。
「わかっているよ」

「わかってないわ」
マリナが溜息をついた。ゆっくりと瞬きをする。そして躰を起こし、彼の頬から顎にかけて、自分の手の平を置いた。小さな手の平が、シャルルの貌を覆う。
白金の髪と青灰色の瞳の青年がそこに居た。
少女のような面立ちは消えていた。
高い鼻梁に薄い唇に・・・深い彫りの眸がそこにあった。
視線はマリナに向けられており、その瞳の中に彼女が映り込んでいる。
彼は大人になった。それが嬉しい、と彼女は言った。彼が愛しているのか、過去の彼女なのかもしれないと憂えて居るのに。深呼吸をして、彼の顔を覗き込んだ。
茶色の目が、瞬きを忘れて彼に言葉以外のものを伝えようとする。

やがてマリナは静かに言った。
「・・・シャルルを喚んでくれたから」
そして小さく気恥ずかしそうに笑った。
「・・・シャルルが私のことを忘れないでいてくれたことを知ることが出来たから」
シャルルは目を閉じることさえしなかった。
彼も・・・瞬きを放棄して、彼女の顔をじっと覗き込んでいた。
朝が来て、真白の光がふたりへと向かって射し込んでいく面を広げていく。
どうして、彼女はいつも・・・シャルルの想定を越えた言葉を紡ぐのだろう。
どうして、彼女はいつも・・・シャルルに更に深い愛を刻むのだろう。

確かに、残酷な人だ。それでいて、いとおしい。
もう離れてはいられないほどに、惹きつけられる。
彼女に何かがあったら、彼女が真っ先に喚ぶのは、彼であって欲しいと強く願った。

掠れた声で返答する。

「・・・オレはここにいるのに？」
「・・・私はここにいるのに」
彼女はそう言って笑った。少し首を傾げる。彼と彼女の繋がりを蘇らせたそれは、すでにもう・・・再現する必要はなかった。シャルルとマリナをもう一度引き合わせる目的は果たされたから。そして、シャルルに伝えるべき言葉も伝え終わったから。

「・・・・だから、捨てられないものもあるのよ、シャルル・ドゥ・アルディ」
彼女はそう言って、起きようかと言った。
「眠るのは勿体ないわね。・・・・朝の散歩に行きましょうよ」
彼女はそう言って立ち上がろうとする。

彼の胸から離れようとして両手をシャルルの端整な貌から離したその時のことだった。
シャルルが、そっと・・・淡雪に触れるかのように、そっと、彼女の手の甲を自分の手の平で、包んだので、彼女は動きを止めて、しばしシャルルの貌を見つめていた。
吸い込まれそうなほどに美しい彼の眸が少しだけ濡れていたように思えた。

「少し眠りたい」
「良いわよ。どうぞ。ひとりで散歩してくるからその間に休んでいて」
彼女はシャルルの希望に頷いた。
そして彼女は躰を引き離すので、シャルルは手の平を滑らせて、彼女の両の手首を細く長い指先で絡めて捉えた。
彼は微笑んだ。
「オレは君と眠りたいんだ」
「もう眠くない。・・・・シャルルは少し眠った方が良い」
落胆しかもたらさないマリナの回答に、シャルルは淡く溜息を落とす。
彼女はまったく雰囲気というものを理解できないから、彼を失望させるということに気がついていない。
そして白金の髪の下から、青灰色の瞳をちかりと一瞬だけ強く光らせると・・・そのまま指に力を入れて、彼女を自分の方に今一度引き寄せた。
小さな悲鳴が聞こえたが、彼はそれを無視した。
「シャルル・・？」
彼女が戸惑った声を出していた。
それでも、少しも力を緩めることのないシャルルは、彼女に貌を近付けて甘い誘惑をささめいた。触れそうで触れないほどに近い場所で彼の唇が動く。
「・・・・ひとりで眠る時には、何を考えている？」
「何も」
彼女が目を反らしたので、彼は彼女の額に自分の額を押しつけた。
「本当に？何も？誰のことも考えないで？眠れない夜を過ごすときに何も考えない？」
「ああ、シャルル。さっきから、シャルルは質問ばかりよ。眠気で機嫌が悪いとしか思えない」
彼はほとんど質問をしない。理解できないものについて誰かに尋ねるのではなく、情報を収集するための問いかけしかしないことも、マリナは良く知っていた。
それなのに、ただ・・・こうしてひとりの男として彼はいつもマリナに言葉を注ぐ。
目の前のシャルルは、フランスの華という称号も、アルディ家の当主という肩書きもなかった。
ただのシャルルだった。白金の髪の、青灰色の瞳の青年に吸い込まれそうなほど強烈な惹力を感じている。
美しいから。
知能が高いから。
古の家柄の主だから。
それらは、マリナにとっては付加価値でしかなかった。

彼に附随しているだけだった。
彼女はそれらを差しだそうとすれば、いらないと言うだろう。
マリナが本当に欲しいと思うものは本当に少なかった。
それを思い知る。
だからこそ、惹かれる。
彼女は何もかも失った彼についてきた唯一の人だった。

あの時。
・・・・あの男は彼女を託した。
あの時。
窮地のシャルルに随行したのが、マリナではなく、あの男がついてきたら。
この未来はもっと違ったものになっていたのかもしれない。
けれどもそれではシャルルは救われないと思ったあの男は、マリナを・・・最愛の人を、シャルルについて行かせた。
この意味を、考えるのだろう。これからもずっと。こたえを確認することができないから。
そしてそのことを考える瞬間、彼は、ひとりの男になる。

彼女は、彼が何の称号も持たない時期を知っている。
そして、彼がアルディという名前に拘る理由も知っている。
何より・・・彼が誇り高いことを・・・マリナは良く知っていた。

■秘するが花　月蒼華29

「捨てられないのは・・・過去ではなくて、未来なの」
彼女は大きな秘密を吐露する瞬間のように、そう言った。
静かに・・・けれどもはっきりと。
「過去じゃない。シャルルとの再会をもたらしてくれた様々なものを拠り所とする私はとても・・・とても惨めだと思うけれど、それでも捨てられない」
「どうして惨めなのか、理解できない」
彼はそう言って、彼女のこめかみに頬を押しつけた。
唇を重ねることもできた。更に、肌を重ねることもできる。
彼女はシャルルの行動を拒否しない。
しかし、シャルルはそうしなかった。
何も言わずに、彼はじっと彼女の温度を確認しているかのようだった。
・・・彼女の貌が近かった。

震えとともにシャルルが呼吸する。拒絶されるかと思ったのだろうか。
身を固くしたマリナのことを無視して先に進むかと思ったのに。
シャルル・ドゥ・アルディはそこで行動を停止することができた。その先に進むことも。
しかし、彼はそこで・・・前者を選んだ。
懇願の響きを持つマリナの声に反応したからだ。
うまく交わらない彼と彼女の何かについて、シャルルが深く傷ついていることを知る。
「・・・今、オレのことを試しているの？」
「なぜ？・・・私はシャルルのこたえを求めていない」
痺れに似た感覚が、マリナとシャルルを各々包む。何をするべきなのか、わからない。
けれども・・・彼は、マリナの貌を直視することができそうもなかった。

「・・・これが伝わらなかったら、それでもよい」
「諦めるということかな」
「ああ、シャルルは質問してばかりね」彼女は笑った。
「そうではない。・・・・伝わらなくても伝えたいことについて、自己満足に浸っているだけ」
「自己満足ね・・・」
シャルルは苦笑した。
自分だけの満足で彼女が何かを発信することはなかった。
彼女はいつも・・・他者のことを思って何かを言うか、心の内のままに何かを告げる。
それらに、ごまかしはきかない。触れあうだけで、重ねるだけで、それだけでとても苦しい。それなのに、いつまでも触れていたい。
「君を・・・つかまえておくよ」
「シャルル・ドゥ・アルディらしからぬ弱気な発言ね」
彼女は苦笑した。
あの男の思いを知ってしまったからなのかもしれない。
声を残さずに、文字だけを残した。そして・・・彼と彼女をもう一度引き合わせた。
やり直すのではなく、最初から・・・そう、愛を最初から始めるために。
どこまでも自分を出さない人だ。
しかし、彼女を・・・マリナを愛しているという点では、シャルルと同じだった。
共通点を誰かを見いだすことで、安堵する者も居るが、シャルルはそうは思わない。
彼は唯一ひとりだからだ。誰も彼の代わりにならない。
誰も彼を越えることは出来ても、彼そのものになることはできない。
だから、シャルルの愛し方とあの男の愛し方は違う。
決して手を離さない。
それを一度決めてしまえば、覆さない。
独占できないくらいに愛してしまった。けれども、独占しないことが彼女を悩ませるのであれば、彼は生涯をかけて、彼女を占有しようと思った。
どこに行っても、帰る場所は彼のところだけだと思わせる。

数多の者たちと、シャルルが異なることを証明してみせる。
彼女が他の誰を愛そうとも。シャルルが彼女を愛しているという事実は消えない。
残酷なのは、シャルルの方だと思った。
けれども。
それでも、こういう愛し方しかできなかった。
「・・・・オレは君をこういう愛し方でしか愛せない。それでも良いかとは尋ねないよ」
「わかっている」
マリナがそう言ったので、彼は安堵の吐息を、彼女の髪に混ぜた。
あの日々は戻らない。苦しくてそれでも生きていると実感し、無色であった景色が、一瞬にして鮮やかになった日々。
取り戻せないから美しいのだとわかっているが、それでも、そこに戻りたいからマリナが必要なのではなく・・・その先を夢見ていたいから、彼女を欲しているのだと・・・彼自身がよく承知していたことであったのに。
それでも彼女にうまく伝えられない。
彼はフランスの華なのに。
彼は・・・彼にできないことはないと思っていたのに。
彼女への想いだけは、うまく処理できない。

■秘するが花　月蒼華30

「捨てられない」
マリナが静かにそう言った。もう一度だけ。
彼の肩越しに・・・閉じられた筐を見つめていた彼女は、彼の肩に額を擦りつけて、静かにそう言った。

今が、その時だよ、と・・・・

誰かに背中を押されたかのように。
それでいて、最初からシャルルにそう言うことを決めていたかのように。
彼女は、目を閉じて、彼の腕の温もりを感じながら、朝の光の中で、言った。
彼が最初からそれを気にしているのは知っていた。だから、眠った。
自分が眠りに落ちている間に、彼がどんな行動をするのか、わかっていた。
それでも、特に気にしていなかった。
巡るから。
命は、巡るから。
彼はマリナの運命の人であるから。

彼はマリナの月蒼華であり、マリナは彼の月蒼華であるから。

「大事に持っていれば、これが動いている限り・・・いつか・・・私の月蒼華に・・逢いたい人に逢えるからと言われたからよ」
マリナの背中に回されていた指先に、力が入った。
あの男の言う言葉を信じたマリナを切ないと思うのか、また逢えると思って大事に使用し続けたマリナを愛おしいと思うのか・・・もう、どちらなのかわからなかった。
彼はフランスの華であるのに。彼にわからないことはないのに。

動かなくなった時に。
連絡が来た。だから、あの男の言うことには、矛盾があった。それを使い続けているうちは、彼と彼女は逢えなかったからだ。
つまりは・・・それが寿命を迎える時ほど、長い年月が経過して、それでもなお、互いが求め合うのであれば、それは運命だから、と彼は言いたかったのかもしれない。
それほどの年月が、必要だったのだろう。
こうして抱き合うまでになるようになるまでには、とても・・・長い年月と邂逅が必要だったのだろう。
巡って、そして始まった。やり直すのではない。始まったのだ。
月蒼華という言葉について考える。
それは唐突ではなく、月が満ちて、そして蒼い華を咲かせた。
あり得ないとされたその薔薇は、今ではまったく考えられない不可能な華ではなくなった。
時が来て・・・奇蹟のような邂逅を経て・・・そして今に至る。
「オレは決して・・・長いと思わなかったよ」
「そう」
マリナはそう言って笑った。あの時、アデュウと言ったのに。
それなのに、彼女はまた逢えると・・そしてあの男はまた出会うだろうと信じていた。
なぜ・・・これほどまでに、彼らは不器用なのだろう。
連絡をすることなど簡単なのに。最初に連絡してきたときと同じように、メールを流せばすむ話であったのに。
それでは、駄目なのだと知っていたのだろうと思った。

彼女は与えられる幸せは必要としない。
自分で幸せになるために進んでいく。どこまでも・・どこまでも。

彼は彼女を抱き締める。
朝の光が強く射し込んできて、彼女は瞬きをした。
「シャルル、そろそろ・・・寝るか起きるかどちらかにしたら？」
「君の提案は受け入れない」

彼はそう言って彼女の躰を倒した。背中から、スプリングの軋む音がして、マリナが小さな悲鳴を上げる。
体軀の差がありすぎるシャルルがマリナに被さると、彼女は大変に小柄であるので、すっぽりと覆われてしまった。急に視界が変化し、低い天井しか見えなくなったので、マリナがシャルルの背中を軽く叩いたが、それを無視して、シャルルは彼女の首元に唇を寄せた。
「待つのは平気だ。待たせるのも然り。けれども、自分の意志に反して待たされることには耐えられない。オレを誰だと思っているのか、君に尋ねたいくらいだ」
「シャルル・ドゥ・アルディ」
彼女が怒ったようにそう言った。覚醒を終えたマリナは、彼の睡臥に随伴するつもりはないらしい。全身の力を込めて、彼に抗おうとしたが、彼の躰の重みがマリナの自由を妨げた。
「離さないと言っただろう」
彼はそう言って、彼女の温度を確かめる。

しかし、そこでふと、力を緩めて、シャルルは身を離した。急に脱力したので、眼を固く瞑って、唇を噛んでいたマリナが目を見開いた。
「・・・でも、ここでは抱かない」
彼はそれだけ言うと、完全に躰を起こして、白金の髪を掻き上げ、乱れを直した。
「マリナ。ティーを煎れろ。喉が渇いた」
「シャルル」
マリナがシャルルの物言いに抗議した。
彼は冷たい視線を彼女に向けて、高い鼻梁を横に背けた。すでにいつものシャルル・ドゥ・アルディであった。驕慢な言い方に、彼女を息を呑んだ。
優しい囁きを、今、彼女に向けたばかりだというのに。シャルルの感情のスイッチがわからないとマリナは呟いた。それを聞くと、彼はじろりと、青灰色の瞳をマリナに向けて、頬を緩めて唇を歪める。
「何だよ・・・起きると言ったのはマリナだろう？オレに何か抗議をしたいのであれば、それなりの理由を言え」
彼女は貌を朱くして頬を膨らませた。
シャルルの行動にはいつも理由があり、一連の繋がりがあるが、それをマリナがすべて理解しているとは限らないということを、マリナは知っている。
だから、憤慨するのだ。
理解していても、同意はできない。
彼をすべて肯定しない彼女をシャルルが面白がっているようにさえ思える。
彼がフランスの華であり、大変に繊細で知性があり誇り高い人物であるが・・・それ以上に、大変に扱いにくい人物であることを思い知る。
理性と感情の相克が、彼を形成しているのだろうと思う。
しかし、彼はそれ以上に・・・推し量ることの出来ないもっと複雑な何かで構成されている。

彼女が眼を瞑っている間に、彼は何を思い何を知ったのだろうか。
何かが、少しだけ変わったような気がした。
そんな考えを、彼のファム・ファタルが思い巡らしていることも、手に取るようにわかったフランスの華は、綺麗な微笑みを浮かべる。
「マリナ。・・・ひとつだけ忠告しておこう」
彼はそう言って彼女を見下ろした。
まだ梳られていない髪が揺れて朝の光で白く輝いて見える。
「・・・・眠っている演技をするならば、君は失格だね。・・・もっと寝返りを打たないと、人間の生理学上、その頻度はあり得ない」
どこから目を醒ましていたのか、それとも最初から起きていたのか、彼は尋ねなかった。
もう、どちらでも良かったからだ。
彼女がここに居る。それだけで、十分だった。
彼の物思いは、秘めたる想いとして永遠に胸にしまい込むと誓った。
だから、彼は何も言わなかった。
すべてを知ることが、愛ではないと知っているからだ。
それを教えたのは、マリナである。彼のただひとりのファム・ファタルが、彼に輝く限り・・・
彼は月蒼華という言葉の意味を幾通りも考える。

命が巡ること。
再び邂逅すること。
そして・・・時期が来て華を咲かせる愛は、決して枯れはしないのだということだ。

唇を横にぎゅっと引いて絶句しているマリナに、シャルルは微笑んだ。
彼女をこのままここで自分の体温で温めることも可能であった。
けれどもそうしなかった。
彼女とこうして言葉を交わすことの愛おしさを、もう少しだけ味わっていたかったからだ。
もう、離さない。

月蒼華という意味を知っているか？

あの男の声が再び聞こえて来た。

愛を魂の試練だと言ったフランスの華は、長い試練にも似た年月を経て、二人寄り添い決して手を離さないと誓う相手に巡り会った。

その時ドアが乱暴に叩かれる音がした。
大家の息子のノック音だ。彼はチャイムコールを嫌ってこうしていつも扉を叩く。
彼の師と同じ癖を持つ、マリナの小さな友人が尋ねてきたのだ。

「ああ、こんなに朝早く・・・・」
マリナが顔を上げて、扉を見遣った。そして目を細めて、躰を起こし、床に転がったままの小さな目覚まし時計に顔を近付けて、次に小さな悲鳴を上げた。
「忘れていた！・・・今日は散歩をしようと約束していた」
彼女は慌てて飛び起きた。目を擦りながら、シャルルの方を向かない彼女に、呆れてシャルルは声をかけた。
「マリナ。君は、ダイと朝から散歩？オレが居るのに？」
彼が顔を顰めたので、マリナはちらりと彼の顔を見て、そして不思議そうに言った。
そして扉を不均一に叩き続ける音にむかって、宥め賺すように声を漏らしながら近付いて行く。
そして、そのついでといった様子で言った。
「そうよ。だから散歩をしようと誘ったのに。・・・シャルルも来たかったらついて来たら？とっておきの・・・スケッチに向いた場所があるの」
シャルルは溜息をついた。彼のファム・ファタルは、恋人よりも・・・小さな友人との約束の方が大事らしい。
シャルル、と言ってマリナは微笑みながら言った。身支度をしながら、言った。
「逢いたい人に逢いたい時に逢えるというのは・・・とても恵まれたことだということがわかったの。だからね、シャルル。私は逢いたい人に逢えるということはとても・・・幸せなのだと思うの」
「それが君の幸せ？」
「そう。私はそう思うからいつも幸せになれる」
その言葉を聞いて、シャルルは目を細めた。

彼女は誰かに幸せを与えてもらうのではなく、自ら幸せになる人物で・・・・そして、各々の幸せに優劣をつけない。いつも、最上の幸せを創り続ける。

彼女は創作者であるが、これからも・・・幸せという・・・月蒼華という最高の作品を創り続けるのだろう、と思った。

シャルルは独り、ベッドに残されて、白金の髪を掻き上げた。
こちらからは死角になって見えないが、扉を開けて、向こう側の来訪者に玄関で待つように言うマリナの声が早口で聞こえてくる。
相手は相当むっつりして不機嫌そうだった。待ち合わせにだいぶ遅れてしまったので、迎えに来たらしい。
・・・ここは、彼が出て行くべきだろうか。玄関の様子から、来訪者が居ることは、彼にはわかっているはずだった。

彼女が慈しみ、彼女を守ってきた小さなナイトに、彼女を渡すつもりはなかった。

ここはやはり、マリナの動揺する顔と、彼女を見届けてきたナイトの不機嫌そうな顔を交互に見て愉しむことにする。どんな言葉をかけようか、彼は考えを巡らせ始めた。
マリナとシャルルの薄い夜着姿を見せたらどんな顔をするだろうか。
こたえがわかっているのに、想像するだけで苦笑が漏れる。

シャルル・ドゥ・アルディは苦笑しながら・・・ゆっくりと立ち上がった。
寝不足の懈さもどこか心地好く感じる。

朝の光の中で。彼はゆっくりと・・・・眩しい光のような人に向かって歩いた。
声のする方に、導かれるように進む。
背を伸ばした。
初めて、この場所を訪れた時から、さらに彼は背が伸びた。
あの時も小さな狭い部屋だと思った。今もそう思う。・・・けれども。
ここに、宇宙のような広がりがあると思った。

残された言葉を、確かに受け取った。

彼はそう呟きながら、酷薄そうな微笑みを浮かべた。
いつもの、シャルル・ドゥ・アルディだった。

一生分の夢を見た、と言ったのに。
また今ひとたび・・・彼は夢のような倖せを味わう。

ふたりで・・・また、倖せになろう。

彼は強く心にそれを刻んだ。秘めたる想いと同じくらい、強く。

フランスの華と呼ばれる白金の髪と青灰色の瞳の青年は、青春の輝きの時代を越えて・・・倖せに満ちた微笑みをしていた。

（FIN）

# 秘するが花　01

日本では「沈黙は金なり」とか「黙するが吉」とかいうのだろうか
沈黙していること、沈黙している間に何を思うのか、はまったく別の話である。
もうどのくらいこの気持ちを封印しているのだろう
封印していること自体が「日常」になってしまっていた

あのとき
あの瞬間
どうして手を離してしまったのだろう
「やって後悔の方がいい。やらなかった後悔で悔やみたくないの」
彼女はよくそう言っていた。
彼にとっては、その行動すべてがその結果について容易に推測できていたから、
なぜ人がそのように後悔をするのかわからなかった。
だったら、最初から何も行動しなければ良いのに。

だけど。

今でも夢に見る
柔らかな頬
日本人にしてはやや色素の薄い茶色の髪、茶色の瞳
視力が良くないせいか、眼鏡を取ると、一瞬焦点が合わずに
不安げな表情をする表情豊かな顔
人が自分に群がっているときには見向きもしないのに
誰も残らなくなったあの「暗黒の時期」に「そばにいる」と言った彼女
本当に変わってる
完璧なカーブの頬を緩ませた
回想しているときはいつもこうだ
幸せな気持ちになれる
もう、十分だ
そう思っていた
そしてもう何年も経っているのにもかかわらず
彼女は未だに彼の心の奥深くで
彼のあまたある関心という分野のうちの、大きな範囲を占めているのだ。
記憶は薄れていくモノなのに、日に日に　思い出すたびに
鮮やかによみがえっていく
彼はその人の名を小さく呟いた

誰にも聞こえないように
自分自身にさえ聞こえないように
彼女が自分を呼ぶいらえが聞こえるようだった
ざわっとした小さな波が　紋を作って広がっていくようだった
明らかにこのキーワードが
彼の記憶のシナプスを刺激するのだ

逢いたい
逢いたい
逢いたい

どうあっても彼女を手に入れることなどできないのに
彼の頭の中では　どうやって彼女を捕らえるか
何万通りものシュミレーションを行ってきた
でも　結果を導くための材料、ピースが足りなかった
それは彼女の気持ち

もう愛情なのか執着なのかそれすらもわからないくらいに
彼は彼女のことを考え続ける

秘めたる花
運命のひと
彼にとって彼女は一体何なのか

問われたところで　表現する言葉は無限にある。
要するに、自分にとってどのくらい大切であるかを
表現することができないのである

この燻りを　今日も消すことができなかった

オレのファム・ファタル
彼女を形容する言葉の前に「オレの」という言葉を追加するときだけは
彼女を独占することができる
一種の言霊信仰ではあるが
彼女を束縛できるものがあるのであれば
彼は何通りもの言霊を彼女に向けて発することができる

それこそ絶え間なく。

元気でいるだろうか
幸せだろうか
泣いていないか

# まえがき

▼まえがき

シャルルとマリナのその後というのは、やはり、ふたりが少し大人になってからなのでしょう。
愛と恋との区別がつき、それでも分別が一緒について回るので、連絡が取れない状況。

自分の年齢のせいもありますが、**20**代後半に突入したばかりでぎこちなさは残っているけれど大人になりきれない・・・そんなもどかしさが出ると良いなと思い創作。

ばったり再会というシチュエーションも考えたのですが
ある日突然、大事な人から**Mail**が来たら・・・そんな平成版の再会を書いてみようと思います。

**tomogon**

■01　Mail・Mail・Mail

***Charles

彼女の様子については、調べれば簡単にわかることだったけれど。
敢えて、そうはしないままに数年が経過していた。

調べれば調べるほど、彼女と「彼」とのその後も知ることになるからだ。

だから彼はそれを知りたいという欲求を無視するために、仕事に没頭した。
というよりはむしろ、彼女に出会う前の自分に戻ろうとした。
かなり積極的に。

結果、一日の睡眠時間と生活時間以外は移動時間でさえ仕事に費やした。
よほどのことがない限りは他人と過ごすこともなく、プライベートとビジネスの区別がつかなくなっていった。
完全なワーカホリックだ。

そんな中でも、彼を受け止めようとする人が皆無ということではない。
肌を合わせるだけの関係もあった。
生涯の恋人と思えるような相手ができたこともあった。

だがしかし、彼は彼女達を選ばなかった。
いや、彼女達が彼を選ばなかったのか。

移動中の飛行機の中。
離陸までの間、ぼんやりと考え事をしていたが、やはり「考えたくないこと」に思いを馳せてしまう。

もう、何年も繰り返してきたその行為は、彼の中では無意識の行為になりつつあった。

けれど、彼には無意識に無自覚に行う行為はたった一つしかなかった。
ある意味、意図している行為なのかもしれない。

軽く頭を振ると、癖のない白金の髪がしゃらんと動いた。

そのわずかな仕草にCAが手を止めて、こちらをちらちらと見ていることさえが煩わしい。

彼はひとつ溜息をつくと、薄いラップトップを開いた。
最近はインターネットが普及したおかげで、一度にいろいろなことが処理できるようになった。

モザンビークの状況を含めての各国の世界情勢
今日の株価
分析結果の速報

見たいと思う数字を調べることが効率的になってきた。

その一方で、情報の海から真実を見つけるための時間が惜しいときもある。
こういったときは自分の手と耳と足で調べることにしている。

「手と目と足で、自分が見たモノだけを信じることにしているの！」

そう言い切った、少女期特有の甲高い声が耳に響いた。

・・・自分と折り合いをつけるはずではなかったのだろうか。

今一度、そうやって自己に言い聞かせて、彼は膝上のパソコンから、そのほとんどが不必要であろうと思われる情報を頭の中に入れようとした。

そして、離陸前にチェックしたはずの未読メールが、今また大量に届いていることに軽く舌打ちをしながら、重要そうなアドレスやタイトルを確認し始めた。

彼宛に届くメールは膨大な量で、すぐにメールボックスがいっぱいになってしまう。
そのような事態を回避するために、専用の大型サーバを立てて、振り分けをし、必要最小限のメールのみ彼に転送されているのはずなのに、追いつけない量の案件が彼の判断を求めて届くのである。

いつもの仕草であったけれど、それはいつもの仕草でなくなってしまった。

彼の、画面をスクロールする手が止まった。

***Marina

私のフリーメールアドレスを知っている人は、ほとんどいない。
昔は電話やFAXでやりとりしていた仕事の打合せも、今はメールがほとんどだ。

そのほとんどがフリーメール特有の広告メールで、仕事用のメールアドレスは専用のアドレスがクライアントから支給されていた。
情報漏洩の防止のためということらしいが、新聞もテレビもほとんど観ない私の唯一の情報取得手段がインターネットであるというのも、ちょっと前の自分には当てはまらない環境だった。

今ではキーボードをたどたどしく叩きながらも姉や妹との近況報告を交わす程度にはタイプできるようになった。
私の姉と妹はかなり使いこなしているようなのだが、私は自分から新規送信のメールを送ることさえできず、届いたメールに返信をするだけで精一杯だ。

かつ、メールの返信というのはやっかいなものだという刷り込みがあるので、なかなか返信をしない私に向かって、呆れたように「RE：***」しかできないの？と妹が苦笑したことがあったっけ。

おまけに、パソコンというものが日進月歩で進んでいくので、とてもついて行けず、それならそれでいいやと開き直っていたら、ますます出遅れてしまった。
今、使用しているパソコンさえもが古い機種で早々に取り替えなければいけないと何度も妹から忠告を受けていた。

こういったものは苦手だ。

情報を収集するのはやはり手と目と足で・・・という考え方が根底にあるのからかもしれない。
メールも大変に便利なものであることは承知しているのだけれど、その一方で顔の見えない相手に送る文章というのは、二の足を踏んでしまうのだ。

もちろん、近況を尋ねたい相手もいるから、連絡先は？と聞かれるとちょっと戸惑ってしまう。
皆、メールアドレスを尋ねているのだ。

私の友人達は折に触れて季節の便りを寄越したり、近況を知らせてくれたりすることもあるが、私からはいつもどおり「元気にしているよ」という、ごく短い返信を返すだけだった。

元々が、連絡をこまめにするような細やかな友人はあまりいない。

彼らと一緒に過ごした時間は、本当に一瞬と言えるくらい短いものであったから、本当に頻繁に連絡を取りたい人がいるのであれば、それはそれで良いのかもしれない。

「便りのないのはよい便り」
よく言ったものだ。
きっと、変わり者の友人達は、自分のことをそういう風に言って、笑って無沙汰を許してくれるだろう。

もちろん自分からメールを送りたい相手がいないわけではなかった。
今や世界的なヴァイオリニストとなってあちらこちらを飛び回っている薫。
弾上家継いだ美女丸は忙しい毎日を送っていることだろう。

そして。

そして。

気むずかしいけれど孤独な麗人
シャルル・ドゥ・アルディ・・・

今でも彼を思い出すと胸が痛む。

小菅でシャルルと別れたあと、カズヤと過ごした時間は生涯の思い出だ。
でも、私の中にシャルルが居るとわかったとき、カズヤは笑って別れることを選んだ。
私はカズヤと共に在ることを願ったのに。

「おまえの願いがオレの願いなんだよ」
「思うままに生きてくれ」

そう言ってカズヤは私から去った。

その時の虚無感。
その時の喪失感。

何もかもに手がつけられず、ただただ、唖然呆然とするばかりだった。

あのときは・・このまま死んでしまうかもしれないと思った。

でも、まだ生きている。

相変わらず不定期な仕事をして、相変わらず毎日を自由奔放に生きている。
姉や妹を観ていると自分の自由さがいかに世俗にそぐわないものなのかがわかる。

それでも大人になるって不思議なもので、今では小さな号数だったらギャラリーに置いてもらえるような風景も描くことが出来るようになった。
おべっかは苦手なのであまり引き受けないが、人物カットの依頼も来るようになった。

・・・・カズヤ。

嫌いで別れたわけじゃない。
そう信じている。
その程度の絆は、まだ感じている。

でも、あのとき、カズヤの方が私より何万倍も大人だったのだ。
精神面でも肉体面でも拙い私に教え諭すように、彼はいろんなことを教えてくれた。

この旧型のラップトップもそうだった。
もう過去形だね、カズヤ。
「これからはインターネットと言って、情報を自分で拾う時代だからね。
　マリナの作品の資料集めに良いと思って」

彼がプレゼントしてくれたものだ。
今では完全に旧式で、時々「からから」と本体から奇妙な音がする。
寿命が近いのは明らかだけれど、自分が新しいモノを求めて購入する気持ちには到底なれなかった。

どうにもならない調べ物の必要性があって、久方ぶりにラップトップを開いた。
電気屋で観るパソコンの2倍以上の厚みが、間違いなくある。

電源を入れると、起動中であるメッセージが出てきて、すぐにぶつっと電源が切れた。

「え？」
私は首を傾げた。
電源は入れたはずなのに、電源が落ちた。

これは明らかにおかしい。

もう一度電源を入れるために、スイッチを押す。

からからからから・・・と中で何かが空回りする音がして、ぶうぅぅぅんとディスプレイが明るくなる。
が、今までと違う、真っ黒い画面に、私は唖然とした。

・・・！！！
壊れちゃったよ！！！

原始的に叩いてみたけれど、熱を帯びただけの四角い箱は、期待はずれの黒い画面が移るだけだった。
これまでのとおり、数分待てば現れる、いつもの見慣れた画面が開くどころか、撫でても摩っても揺すってダメ。
電源は入っているらしいというのはわかったのだが、ディスプレイがやられてしまったらしい。

「あ〜あ」

ぺたん、と座り込んで、ノートパソコンを恨めしく見つめた。

こういう危機管理ができてないよね、と、もうひとりの自分が責める。
でもしょうがないじゃないの、大事に使ったじゃないの。
と、言ってのけるもうひとりの自分が私を慰める。

明日、もう一度トライすれば直っているかも？
そんなことを思いながら、しょうがないので強制終了することにした。
ディスプレイが映らないので、電源コンセントを引き抜いたのだ。
旧式で、当然にバッテリーも消耗しきっているから、電源コンセントを抜けば、そのうち電源が落ちるだろう。

今の自分には、新型のパソコンを買い直す蓄えも少しばかりはあったのだけれど。
それをどうやって設定すれば良いのかわからなかったし、とにもかくにも「明日になれば直っている」という妙な期待があったので、私はそのまま放置して、考えないことにした。

これが邂逅の合図だと気がつかずに。

---

■02

***Charles

細くて長い指が一瞬、動きを止めた。

タイトルは「Marina・Ikeda」
差出人は「Kazuya　Kurosu」
あり得ない文字列に、指が止まった。

ウイルスかどうか、などということは考えになかった。
すぐに開封する。
ウイルスであれば対処できる。
だからそれは躊躇する要因にはならない。

シャルルが独自に開発したウイルス対策に対抗できる者と言えば双子のミシェルぐらいだった。

内容は、ごく素っ気ないものだった。
「下記の設定でマリナにPCを送ってくれ。大変に困っているはずだ　Kazuya」

シャルルは最重要のフラグをつけて、ジルに必要事項を指示するメールを送信した。

転送する指がわずかだけれど震えた。
そして、その設定がいくつか古いものであることを確認すると、ひとつふたつ修正を加えて、追加送信した。

これで明日には、マリナに新しいPCが届くはずだ。

時間で言えばほんの5分程度の出来事だった。
だがしかし、シャルルは時間の経過を忘れ、息をすることさえもどかしそうにこの一連の作業を終えた。
彼にとっては10時間の作業にも思えた。

中距離を走った時のように、大きく息をついて、柔らかな背もたれに寄りかかる。
あと少しで、ここが空上だということを忘れてしまうところだった。
息が苦しかった。

しかし、その息苦しさは不快ではなかった。

まったくもって。
彼の中の、音叉が反応するように、予定調和であるかのように、いんいんと響き渡るその波紋が彼の長身を包み込んでいった。

そして息を整えると、青灰色の瞳が輝きを増していく。
彼の思考が働き出す合図だ。

まずは。

どうみても旧式の設定であった指示事項。
明らかに数年前の設定だ。

ということは、マリナがまだ旧式のパソコンを使用していて、これがクラッシュしたためにカズヤがヘルプのメールを送って寄越したということだ。

次に。

その程度の設定のマシンであれば、カズヤの小遣い程度で購入できるだろう。
しかし、マリナがそれを良しとしないのかもしれない。
が、自分にメールを送ること自体に、なにか違和感を感じる。

さらに、日本語で送って寄越したのも気になる。
彼が日本語しか話さなかった時代は「青春の輝き」のほんの一時期だ。
シャルルが日本語の翻訳パッチをメールソフトに入れている可能性はごくわずかだ。
にもかかわらず、カズヤはこれを日本語で送りつけてきた。

「すごい自信だよな」
シャルルは自嘲気味に笑う。
まだ、8年を経過してなお、彼女を想う自分をカズヤは想定しているんだな。

確かに、彼女は自分のファム・ファタルだ。

永遠の女性。
永遠の恋人。

そして叶わなかった恋。

人生のほんのひとときしか一緒に過ごさなかったのに。
彼女の影響力というものは、思ったよりも大きかった。
今の彼の人生を大きく左右した。

ほかの数多あるメールよりも、彼女の名前の文字が入ったメールが最優先される。

まだ、彼女を想っているのだろうか。
まだ、自分の中の炎を消すことが出来ないのだろうか。

彼の中のさざめきがざわめきに変わるのに、さほど時間はかからなかった。

パソコン・・ね。

彼女が接続すれば、すぐにそれとわかるように設定指示を書き込むことは簡単だった。

あとはマリナ次第だ。

ことり。

シャルルの中で、何かが動き出した。
それはあまりにも小さな動きだったので、彼はまだよくわかっていなかった。

いや、気がついていたのかもしれないが。
彼はそれには鈍感でいようと敢えて心を閉ざしたのかもしれない。

---

■03

***Marina

思いもかけない宅配便が来たのは、パソコンが壊れた翌日のことだった。

もう一度電源を入れれば何とかなる、という浅はかな考えをもって一夜を明かし、電源を入れてみたものの・・・

壊れてしまったという事実を受け入れざるを得ないという、悲しい状況に意気消沈していた時だった。

「お届け物です」
朗らかな宅配便の配達員の声が響き、受け取りの印鑑を持ちながら解錠すると、配達員の男性は遠慮なくどかどかと部屋に踏み込んできた。

「オプションで、設定まで承っております」
「はぁ？」
「設定は社で済ませてしまいましたので、あとは接続と設定の確認のみです。
あ、その伝票にサインを御願いしますね」

言われている意味がわからずに、届け物とされた梱包物を早速開封し、電源コンセントを探しているお兄さんに呆れつつ、発送人の伝票を確認した私はまたもや思わず声をあげてしまった。

シャルル・ドゥ・アルディ。

差出人は彼からだったのだ。

なぜ、私のパソコンが壊れて窮しているのがわかったのだろうか。
なぜ、今になって突然このような行動を起こすのだろうか。

ひょっとしてここに監視カメラがあるのだろうか？
きょろきょろと見廻したが、そのような心当たりも、カメラと認識できるものも、この殺風景な部屋にはなにもないことは、住人である私がよく承知している。

「まったくもって理解できない」

そう呟いて、それから、思い当たる出来事を思い出して、くすっと笑った。

だって、これは彼がしばしば私に向けて発した言葉だからだ。

そうこうしているうちに、設定はあっけなく終わり、宅配のお兄さんは私の印鑑が入った伝票を受けとると、次の配送先に向かって走り出してしまった。

遺されたのは、銀色に輝くどう見ても最新式のノートパソコンだった。

電源も充分に充電されているらしく、インターネットの設定も終了しているようだった。

私はそのパソコンに近づくと、こわごわ、それを持ち上げて、ディズプレイを見ることとなった。

禁断の扉

そのラップトップを見て、私はそう思った。

シャルルからの贈り物。

8年を経て、今なお私の記憶に鮮やかに蘇る、慕わしい知人。

そのシャルルから送られてきたものに、何かあると思う反面、しばらくぶりの知人の名前に、何かほっとするというか、安堵する自分が居た。

自分自身を大事にしてね

彼に、よく言ったものだ。
私はその奇麗な銀色の箱を見ながら思った。

彼は、まだ生きて、少なくても私を気にするぐらいの余裕がある生活を送っていると言うことなのだ。

私の住所もまだ変わっていない。
彼が、最後に訪れたあの時のままだった。

変わっていないのは、私だけなのだろうか。

・・・それとも、彼は変わってしまったのだろうか。

---

■04

***Charles

自分にも専用のラップトップを用意しようかと考えたが、普段使用しているものをそのまま使うことにした。

理由はひとつだ。

マリナからの連絡をすぐ受信できるように。

カズヤからのメールはテキストであった。
いろいろと推測するに、どうも購入したときに設定したプログラムらしい。

カズヤは言いたいのだ。
「購入したときには自分が居たけれど、クラッシュしたときには自分が居ないかもしれない。だから、後は頼む」と。

後に調べてみてわかったことだが、マリナはずいぶん古い機種をそのまま使用していたらしい。
今般、シャルルが送ったパソコンは無事開通したものの、まだ使用していないようだ。

彼が送ったものを使用することに戸惑いがあるのか。
未だに、カズヤが傍にいて、そんな必要はないということで決着がついているのか。

どちらにしても、シャルルは一種の賭をしたにすぎないのだ。

彼から送られたPCを使用すれば、カズヤと別れていることになる。
PCを使用しなければ、無用の長物だと言って、カズヤが新たに彼女に新機種を与えていることになる。

どう考えても、マリナがシステム関係に詳しい路を選ぶとは思えなかったので、シャルルはその2通りの選択肢しか用意しなかった。

どうしてこんなメールを送って寄越したのか、意図を知ろうとしても、シャルルには情報が少なかった。

そして・・・

自分が長い時間、彼らに関する情報を遮断していたことを思い知った。
それがあまりにも長い時間だったので、ほんの少しだけその時間の長さに眩暈がした。

あれから・・・こちらの生活が本来の自分だと思うような日々を送ってきた。

彼の「青春の輝き」は終焉を迎えてしまった。

もう、戻れないことも充分にわかっていたから、そこから目を背けることにした。

もし、彼らが一緒に暮らしたり結婚したりすれば、喜んで祝福しようと思っていた。

彼の誇りにかけて、それくらいの取り繕いは出来ると思っていた。

---

■05

***Marina

電源を入れるときにはさすがに躊躇いを感じた。
シャルルからの贈り物であるということは
このパソコンに電源を入れた瞬間に、これまで長らく耐えていた、彼との縁を復活させるということに、私が同意したということと同意なのだ。

シャルルのことを考えると、今でも胸が痛む。
小菅での別れは今でも思い出すだけで辛い。

長い年月が、癒してくれるかと思ったけれどそうではなかったことを思い知るだけだった。

でも・・・

背に腹は代えられない

もう、なるようになれ、と半ば叫んで電源を入れた。

これまでの旧式PCとは違い、ぶうぅぅんと音がした後に、パソコンは　いつもと違うリンゴの形のロゴとともに速やかに起動した。

洗練された薄いラップトップ。
タイプするキーボードのキータッチは薄くて軽い。
最新式であることが、事情通でない私でもよくわかった。

起動までの時間。

ほんのわずかな時間であっても
彼の事を思い出さずにはいられなかった。

シャルル。
シャルル・ドゥ・アルディ。

シニカルで、でも情熱的な古くからの友人であり
かつての恋人の無二の親友の人。

「マリナちゃん」と私を呼んだ彼は・・・

今の自分をどう見るのだろうか

客観的に言って、過去の自分とはずいぶん様変わりしたと思う。

身長はすこしだけ伸びたし
髪も伸びた
コンタクトにしてメガネはやめたし
すこし痩せた

身の回りの環境も少しだけ変わった。
相変わらず、都内のアパートに住んでいるけれど、
仕事は変わらない。
毎日の生活を心配することがなくなっただけだ。
定期的に入っていくる仕事は、自分の意に沿わない仕事もあった。
悔し涙を流したこともあった。
でも、生きてきてる。
好きなことだけ、好きなときにすることができる時代は、終わってしまった。

要は、「どこにでもいる20代後半の女性」なのである

そんな自分を魅力的だとシャルルが思うのであろうか

このパソコンが接続されたとき、それは無償の贈り物としては高価すぎる。
彼になにがしかの御礼なり連絡を取らなければならなくなる。
彼は私からの連絡を待っているのだろうか。
それとも、迷惑だと思うのであろうか。

そのときに

私は無心でいられるかどうか
自信がなかった

自信がないかどうかというより
明らかに平静でいられないだろうという確信があったのだ

---

■06

***Charles

祈りにも似た気持ちで、数日を過ごした。

正確には2日と16時間。

彼が手配したPCはとうに彼女の手元に届いているはずである。
あえて考えないように、いつも通りの仕事をこなしていくのだが、それも集中していないのが自分でもはっきりとわかる。
いつもの時間の１．３倍、処理時間がかかっているのだ。

彼の仕事は経年してもはや「仕事」ではなく「作業」になっていた。
その「作業」そのものに時間がかかる。

要するに、「そわそわしている」わけだ。

かといって、今、立ち会っている臨床実験についての結論が出るまでは、彼自身が他人に任せておけないものだったし、その点をのぞいても、彼を解放してくれる余裕も時間もその理由さえもまったくなかった。

それでもこれは作業に他ならない。
退屈な毎日の中で、心奪われる他の出来事がある・・・
そんな経験はこれまで、経験したことがなかった。

かつての自分であれば、きっと、すべての作業（彼の中では日々の仕事は「作業」だった。）を中断させて、パソコンの前に一日座り、日がな一日微動だにせず、彼女の「知らせ」を待ち焦がれただろう。
否、待ちきれずにこちらからコンタクトを取ろうと思ったかもしれない。

年数は彼に躊躇とか臆病とかいう言葉を教えた。

それでも、日々の生活の中で、合間を見てはパソコンを開き、何かを確かめる様子に、周囲の人間は「あのシャルル・ドゥ・アルディでも、気にするものがあるんだな」という程度に彼の情熱と感心は彼自身によって、鎮められていた。
我を忘れる恋
遠い日の記憶

執着なのか、くすぶる炎なのか、区別が付けられなかった。
区別したくないのかもしれない。

これを分類してしまえば、自分の中の永遠の炎が消えてしまうと思った。

彼の指示した設定では、メールには初期設定で彼のアドレスを入れており、電源を入れる度にメーラーがそのアドレスを指定していつでも送信できるようになっていた。

もちろん、彼のアドレスは今回のためだけに新たに設定したアドレスだ。
彼女からのメールしか受信できないようになっている。

シャルルはその長い神経質そうな指を組んで、肘をついて膝を組み、見据えるようにディスプレイを見た。
1分おきに更新されるメールの受信設定。
かすかに、アプリケーションが更新をかけている光が点滅する。

待ち人来たらず、か。

シャルルは自嘲した。
完璧なカーブの頬を歪めて、目を少し細める。

疲れたときの、彼の表情だった。

マリナ。
マリナ。

元気にしているだろうか。
幸せなのだろうか。

当たり障りなく、カズヤにメールの返信をした。
ごく短く、要件のみを伝えたものだ。

メールを受信したこと
内容はともなく、品物を送ったこと。
どうやら届いているようであること。
ごくごく短く、送ってみた。

送信後、メールは戻って来ていないことから、このアドレスはまだ生きていて、このメッセージをカズヤは受け取っていることになる。
だがしかし返事はなかった。

---

■07
Mail・Mail・Mail

***Marina

そのパソコンは電源を入れると、メールソフトが自動的に立ち上がる設定のようだった。
新しい機種はよくわからない。

未だに、モバイルと呼ばれるものはほとんど持っていない。

設定のお兄さんが、これまでのメール設定を行っていってくれたので、そのまま使用できるはずである。
シャルルの心遣いというか、私の機械音痴を知ってか知らずかの配慮に。

半分感謝　半分憤慨

メールソフトが自動的に立ち上がり、見慣れないアドレスが宛先に指定されている。

そして、本文を入れるテキストには「何かあったらここに連絡するように　シャルル・ドゥ・アルディ」と書かれた素っ気ない一文が入っていた。

シャルル。
シャルル・ドゥ・アルディ。

懐かしい名前だった。
もう何年口にしていないだろうか。

つと、ディスプレイに映る文字を指でなぞってみた。
液晶画面が指で押されて文字がにじむ。

慌てて指を離した。
シャルルの名前が消えることが、ひどく怖かった。

「これは、メールを書けということなのね」

私は少し息をついて、呼吸を整えた。

どちらにしても、このような高価な贈り物は受け取れない。
彼にとっては微々たる出費（それこそ出費といえないのだろう）であろうとも
私の金銭感覚では、久しぶりに連絡を取り合うことさえ躊躇われる相手から、気軽に受け取れる代物ではなかった。

でも。
でも。

なぜ、彼が私の様子を知っているのかという謎は知りたかった。
私は一息つくと、ゆっくりキーボードの上に指を置いて、手元とディスプレイをにらめっこしながら、しかめ面で、文字を打ち始めた。

***Charles

そのメールを彼は私室で受信した。

「マリナ・イケダです」

タイトルはそう始められていた。

『先般、パソコンが届きました。壊れてしまい困っていたので、大変に助かりました。
でも、どうしてそのことをあなたが知ったのかも含めて、近況をお知らせください。
追伸：ワタシは元気です』

来た！

待ち焦がれた彼女からのメールだ。
シャルルの青灰色の瞳が輝き、頬に生気がともる。

パソコンを凝視した。
彼女からの連絡。
実に8年ぶりである。

ごく一般的だけれども健全な家庭で育った彼女は、こういった礼に篤い。

内容も前半は儀礼的だけれど、戸惑っている様子が文間から読み取れた。

シャルルは少し考えて、とんとんと指で軽く机を叩く。

そして指をキーの上で躍らせた。

『マリナちゃん　久しぶり。元気にしていたかい？
　種明かしすると、君のパソコンには緊急時対策で、ヘルプメールの設定がされていた。
　その宛先がオレのメールアドレスになっていたわけだ。
　各種設定が転送されて、再現できるようになっていたわけ。
　それにしても古いマシンだね。似たようなものを探すのに苦労したよ。
　シャルル・ドゥ・アルディ』

ごく自然に、つとめて明るく彼はメールを返信した。
たくさん書きすぎるのは良くない。
彼女は過ぎた贈り物に困惑しているようだ。

そして、また、待つこと数時間。
時差があって、とても今、彼女が活動している時間ではないことに気がつくまでに、相当時間を費やしてしまった。

彼はシャルル・ドゥ・アルディなのに。

---

■08

Mail・Mail・Mail

***Charles　＆　Marina
『大変に助かっているけれど、こんなに高価なものはいただけません。
代金を送金したいので、金額と振込先を教えてください。
マリナ・イケダ』

『君がまだへっぽこ漫画家を続けて居るのであれば、30回分くらいの連載料だな。
悪いと思うのであれば、オレがびっくりするくらいその稚拙なパソコンスキルを上げておいてくれ
シャルル・ドゥ・アルディ』

『ひどい！相変わらずの毒舌ね。これでも少なからず仕事が入ってくるようになったのよ。
仕事の関係でメールを使うことがあって、パソコンの件は大変に助かりました。
ここはシャルル・ドゥ・アルディに免じて、無償無期限貸与ということで許してあげましょう。
マリナ・イケダ』

彼女のやり取りは日に1回。
時差があることを考慮するとその程度のやり取りしかできない。

彼女は決まっていつも同じ時間にメールを寄越す。

シャルルは決まっていつもその時間にメールをチェックする。

メールは、わざとそれだけで会話を終えることの出来ないように、細心の注意を払って投げかける。

最近、楽しそうね

一瞬の時間しか共有しない女性達が彼を見ると口を揃えてそう言った。

その時間が来るとそわそわし、毎日が「楽しみ」でさえあるのだ。
・・・もっと返信を寄越してくれれば良いのに。

彼はそう思う。

彼女からのメールを受信すると、彼はすぐさまメールを返信する。

そして暫くの間、何度もメール受信をチェックする。

が、しかし、返信が来るのは1日のうち1通だけ。
決まった時間だけ。
当たり障りのない短い言葉で返ってくる、友人としての会話。

儀礼的に礼を述べているだけなのかもしれない。

---

■09

Mail・Mail・Mail

*** Marina

メールを送信した後はすぐにパソコンの電源を落とすことにしていた。

返信があることを期待する自分が居て、その返信を待つことだけに専念してしまうと、
自分の生活そのものが滞ってしまうからだ。

インターネット中毒という言葉を聞いたことがある。
依存症の一種で、常にチェックしていないと落ち着かないというものだ。
一種の精神病であるが、私はそのような状態に陥ることが怖かった。
そのような状態になりそうな不安があった。

だから、近寄らないことにした。

でも彼からのメールは非常に巧みで、返信せざるを得ないような内容を送って寄越す。
内容は至極簡潔で、事情を知らない人が見れば、他愛のない状況報告にしか見えない。

だけど。

こくん、と私は息をついた。

だけど、私はそれ以上の「何か」を期待している。

ここ数日の自分のメールチェックぶりは、やはりどこか浮かれているんだと思わざるを得ない。

私は怖かった。

いらぬ期待をすると失望も大きい。
それはもう、よく充分過ぎるほど承知していた。

だから、怖かった。

ようは、自分は期待しているのだ。

そして自分が期待している「何か」について、私はよくわかっていたし、そのことに更に考えを巡らせようとしている自分に嫌悪していた。

だｋら、メールは一日に一度しか返信しない。

シャルルのメールは時差も考えると、私が返信したすぐさま返信されている。
送信時間を確認すること自体、私は後ろめたいと思う。

罪悪感

この言葉がぴったりだった。

何に対しての罪悪感なのだろうか。
その答えもちゃんとわかっていた。

---

■10

Mail・Mail・Mail

*** Marina

『パソコンの調子はどうだい？
マリナ　君の仕事レベルでは十二分かと思うけど
シャルル・ドゥ・アルディ』

彼の署名が『シャルル・ドゥ・アルディ』とされていることが、何となく私との間に透明な壁を作っているようだった。
署名自体が対外的で、友人との会話に使用されるものとは明らかに違うその署名。

ということは、彼が私に送っているメールというものは、社のビジネス用であることと変わりがなく、とどのつまり、私との会話はすべて「必要最小限である」ということなのだ。

そう感じること自体が私のいらぬ想像力を刺激しているのかもしれない。

「やむを得ない義理ということであるならば、もうこんなコンタクトは必要ないのになぁ」

私は小さく呟いた。

仕事は不定期だけれど順調だ。
恋人は、こんな生活だから当然に出会いがないので、いない。

昔と比べれば信じられないが、社交的でないのでこれまで培ってきた交友関係という貯金を食いつないでいるだけ。

どんどん、連絡できない人が増えていく。

最近

私の分厚いアドレス帳にある、よく連絡を取っていた友人が亡くなった。

これまでは友人の親御さんが亡くなるという訃報を聞くことがあったが、もうこの年代では友人本人が亡くなってしまうという訃報を聞くことがあるのだとイヤと言うほど思い知らされた。
そういうことがあって、私はこの、古くからの友人が送って寄越す連絡に躊躇しながらも、その連絡を自ら絶つことが出来ないのかもしれない。

二度と会えない
二度と話が出来ない

幸せかどうかも確認できない

そういう状況が私の胸を疼かせる。

***Charles

『マリナちゃん
　何かあったのか？返信がないのでさぞかし締切前で創作に勤しんでいることだろう。
　素晴らしいマンガが描けていることを祈るよ。
　シャルル・ドゥ・アルディ』

最後のメールは彼からの送信で終わっていた。
以降、もう一週間も返信がなかった。

シャルルはわかっていた。
パソコンという贈り物に後ろめたさを持っているマリナが、やむを得ず返信を送り続けていたことを。

でも、それでも良かったんだよ。

シャルルは薄い唇を歪めて、笑った。

それでも。
それでも良かったんだ。

彼女が毎日、自分を思い浮かべてメールを返信する。

その事実だけで良かった。
その事実だけが彼に伝える真実だった。

24時間という一日のうち、何分の一、何十分の一の時間を、彼女が自分のために費やす。
それだけで彼を歓喜の渦に巻き込み、至極穏やかな感情の波が彼を包むのだから。

## 11-20

■11

Mail・Mail・Mail

*** Marina

『マリナちゃん。
何かあったのかい？
返信がないのでさぞかし締切に勤しむほど素晴らしいマンガが描けていることを祈るよ。
シャルル・ドゥ・アルディ』

一週間ほど返信を怠っていた。

元々、私は「筆まめ」ではない。
生活の中で、毎日パソコンでメールをチェックすることがあり得ないのだ。

「いつもの生活に戻っただけよ」
私は独りごちた。

シャルルからの返信を待つ自分が怖い。

かつての恋人を忘れて、その無二の親友であり、自分の恋人でもあったあの人のことにまで思慮が及ばない行動をしてしまうことが怖い。

彼に対する感情を一言で表すと「畏怖」なのだ・

8年続けた自分の生活が壊れるのが怖い。
彼に「そんなつもりじゃなかった」と言われるのが怖い。

怖い・怖い・怖い・・・・・

自分の独りよがりが、思いもかけない波紋を広げることが怖かった。

この一週間は長かった。

仕事に没頭し、積極的に外に出ることにした。
打合せ、下調べなど、家にいないようにする理由はいくつでもあった。

もう、あのときには戻れないんだな。

私はそう思わざるを得ない。

---

■12

Mail・Mail・Mail

*** Charles

その日、久しぶりに女を抱いた。

彼の中では「情事を楽しむ時」というのは大抵決まったパターンだった。

しかし彼のパターンを読み取る人が現れない限りは、彼は「気紛れに愉しむ男」という形容しかできない、気紛れで読解不能な麗人であり続けた。

頭の中は、マリナ・イケダのことだけだった。
彼女と夢のひとときを過ごしていることを妄想して、彼は一時の情事に身を任せることにした。

こんな自分を彼女が知ったらどう思うのだろうか。

あのとき。
10代の青春の輝きの時代。

自分は、確かに生きていた。

日々の生を感じていた。

今はあのときの自分と比べれば間違いなく死んでいるも同じだ。

ただ、欲求に任せて夜の花を次から次へと渡り歩き、気怠い翌日の朝を愉しむことなく貪る。

ただ、それだけ。

マリナ。
マリナ。
マリナ。

彼女の名前を呟いた。

でも、彼女は胸の中に居ない。

彼女からの返信を諦めた夜。

彼は獣であることを選んだ。

その一方で、自分がこの半月ほど、毎日が充実していたことに気がついた。

彼女を倖せにしたい。

これまではそう思っていた。

でも、でも。

でも、倖せになりたい。

彼はそう思った。

---

■13

Mail・Mail・Mail

*** Marina

悩んだ末に、今後のメールは彼のホットライン（とおぼしき）メールアドレスではなく、署名に記載されていた研究所のメールアドレスに送信することにした。

きっとこれで、彼もわかってくれるだろう。
何をわかれと言うのか、私にもわからなかったけれど。

いや、そんな自分のひとりよがりは別として。

これは、
「儀礼なのだ、とうことでお互いに納得した状態にありたい・・・」という私なりの策だったわけだ。

『差出人：Marina　Ikeda』
『本文タイトル：マリナ・イケダです』
『本文：マリナ・イケダです。
おかげさまで仕事にも恵まれ、ここ数ヶ月は忙しい日々を過ごしています。
シャルル、本当にありがとう。
この御礼はいつか、きっと。
今後、ネームから最終校正にあたり、いろいろと雑事に追われる時期に入ります。
また連絡することもあるかと思うけれど。

どうか、お元気で』

当たり障りのない、簡潔で爽やかで、返信も許さないという、自分なりの精一杯の「拒絶」のメールを返信した。

送るときは簡単だ。
単に「Enter」キーを押せば良いだけである。
以前のように、エアメールを送ろうか送るまいか迷ったり、何通も書いた便せんを破ったり修正したりすることは、もうないわけだ。

メールも一長一短よね・・・・

私は軽く吐息をついた。

年月。

結局のところ、私を躊躇している理由は、この言葉に他ならない。

10代の私は「元気？」と言って気軽に国際電話をかけたかもしれない。
そして旅行代金をシャルルに無心して、取材旅行だと言い張ってパリに長期滞在したかもしれない。

シャルルが女だったら良かったのに。

何度もそう思った。
何度も何度もそう思った。

気むずかしい男勝りの音楽家や、セレブで世間知らずのお嬢様や、数多居る湯人達のひとりとして、そんな彼女達と同じ様に接することが出来ただろう。
きっと・・・こんなこともなかったはずなのに。

異性は難しい。

そんなことを考え始めたのはつい最近だ。
性も国籍も、すべて私には関係のないことであった10代とはすっかり変わってしまっていた。

価値観が変わる。

私にとってはそれはこれまでの自分の信念を変化させる屈辱的なことであり、これまでに友人に豪語していた言葉を否定することになる。

「あたしは変わらない。変わりたくない。」
という言葉を、自ら否定する生活を晒すことが怖かった。

必然的に友人達との交流も減り、日々の生活を重んじる蛍光に陥りがちになる。

だからこそ、シャルルには迷惑をかけたくなかった。
だからこそ、シャルルにはがっかりして欲しくなかった。

うん、こちらの方が理由に叶っていた。

私はシャルルにがっかりして欲しくないんだな・・・。

これが、ここ数日私を突き動かしていた感情だった。

私は納得した。

私は‥‥‥まだ‥‥まだ・・・・シャルルを愛しているんだ。

8年も経過するのに、まだ彼の一挙手一投足に気を取られている。

私は、まだ、シャルルが怖いのだ。

言葉のひとつひとつが嬉しいのに、近況報告を聞こうとしない。
友人への接遇と反する行為だ。
要するに、シャルルの近況を聞くのが怖いのだ。
でも、近況を知らせてください、という言葉しか彼の返信をつなぎ止める言葉が見つからない。

矛盾している。
そう思う。

彼の近況を聞きたくないし知りたくないのに、メールの返信はねだる。

さもしい自分に辟易した。
吐き気さえ覚える。

---

■14

Mail・Mail・Mail

***Charles

シャルル・ドゥ・アルディとしたことが、この醜態はないだろう・・・
しとけなく眠っている、彼女とは別人の裸体を横目に、彼は出立の準備を整えた。
この行為には愛がない。

自分に行為を寄せている女性と肌を合わせることは便利だった。簡単だった。

相手がどう思っているかなどとは関係ないからだ。

愛とか恋とか、そのようにわめき出す女を彼は選ばないし、彼との一夜を過ごす女性はみな「次のステップ」を期待するが故に、面倒なことは言い出すことは、まず、ない。

後腐れのない関係は、今のシャルルには必要不可欠ではあったが、それが逆に彼を追い詰めていることにシャルルは心を砕くことはしなかった。

眠れない夜がまた訪れた。
肉体を酷使すれば仮眠が取れるが、それは解決にはならないことはシャルル自身がよくわかっていた。

疼く。
疼く。
疼く。

精神の疼きには、処方箋がないのだ。

彼にとって毎日は「死までの気晴らし」にしか過ぎなかった。
毎日が楽しくないし、毎日が真綿で絞められているような、泥に沈んでいくような、感覚を感じるしかなかった。

たまに、実験や研究結果に満足することがあっても、彼を充足させることはまずない。

あれこれ考え、何度も書いては消して、シャルルはついにこの数日間で訪れた僥倖を手放すことを決意した。

『宛先：IKEDA　Marina』
『件名：無題』
『本文：やぁ、マリナちゃん、元気かい？パソコンは無事起動しｈているようなので何よりだ。

それでは。
元気で。

シャルル・ドゥ・アルディ』

この行間に、いくつものいくつもの思いを込めて、彼はこの短いテキストを送信した。

作成までに１日かかり、送信までにさらに何時間か躊躇った。

本当は、こんな言葉で終わりにしたくない。
まだ、メールテキストで良いから、繋がっていたかった。

彼女と繋がっていたい。

それが、シャルルの今の欲望であり、希望であり、願望なのだ

最初は、困窮に陥っているマリナを救えればそれで良かった。
でも、カズヤとのその後が、どう考えても自分に都合の良い展開にしか想像できないことが彼の妄想をかき立てた。
そして、希望という絶望と背中合わせのはかない期待を生じさせてしまったのだ。

なぜ、少しのことで満足できないのだろう。

もっと
もっと
もっと

自分の貪欲さには底がない。
知識への欲求と同じだ。
際限がないんだ。

シャルルは苦笑する。

それなら、自分は一体何を望んでいるんだ？
ただのメール送信数通に、自分の今後を夢見てしまった。

傍らで微笑むマリナを想像し、他の女と一緒に居るときでさえ、彼女を感じていると妄想した。
自分と今の年齢以上の歳月を寄り添う光景を夢見た。

「一生分の夢を見た」
あのとき言った言葉は、嘘じゃない。
彼女を解放し、彼女の倖せだけを祈ったあのとき。

あれから、自分はどれだけ穢れてしまったのだろう。

自己嫌悪を感じるには、彼は脆すぎた。

---

■15

Mail・Mail・Mail

***Marina

日々の生活サイクルを元に戻すのに、それほど時間はかからなかった。

サイクルを戻す、といっても、思いもかけずに飛び込んできた嵐が去っただけなのだから。

だが、再び同じ嵐がやって来た。
前回が台風1号であれば今回は台風2号だった。

「件名：マリナさんへ　Jillです」

それは懐かしいたおやかな女性からの久方ぶりのメールだった。
「・・・ジル！」
思わず、声をあげてしまう。

彼女は欠かさず季節のグリーティングカードを送ってくれる几帳面な友人だ。
シャルルの従妹であり、良き理解者。
当時は彼の代役もしていたほど、シャルルにそっくりな容姿を持つ。
そんなシャルルにとっても、私にとっても特別な人から、メールが届いた。

もう、随分会っていないけれど、元気でやっているだろうか。
自分よりシャルルを優先させた日々から解放されているだろうか。

いそいで開封する。

『マリナさん　ご無沙汰しています。ジルです。
今、シャルルは日本の東京に居ます。そちらの時間であさってまで滞在しています。
ホテルはこちらです。セキュリティガードが厳しいかもしれないですが、私の名前を出せば、面会できます。急ぎお知らせです。』

メールの下部には、滞在先の都内のホテルの部屋番号が記されていた。
そして、来日中のスケジュールが簡単に記載されている。

どうも、学会の発表で日本に来ているらしい。

ということは、シャルルはアルディ家の当主を務めつつ、研究所での研究生活も続けているということのようだ。

当主の座を追われて、逃げる日々はもう遠い昔だ。
今は、その座をきっちり守っているということなのだ。

幸せであれば何よりだ。
こうして、何かの折に、伝聞でも良いから古き友人の健在ぶりを聞くに付け、私はそう言い聞かせる。

都内のホテルであれば、私の自宅からもそう遠くない。
だがしかし、会いに行くことはしないつもりだった。

---

■16

Mail・Mail・Mail

***Charles

それとなく

マリナに自分の行動予定を知らせて欲しいというような要望を遠回しに、従妹でもあり、彼の半身でもあるジルに伝えてから出立した。

ジルには「それとなく」は通用しない。
彼がマリナへパソコンを調達した際の、日本業者への仲介をしたのも彼女だし、マリナへと宛てるメールアドレスのアカウントを新規作成ように指示を出した先もジルだった。

必要最小限の言葉ですべてを察する相手には、隠し事はできない。

彼の女性遍歴に心を痛めているジルは（彼女は実際に何度かシャルルに忠告をしたものだった）、まるでリセに通う少年のように怖々マリナに接するシャルルを静観し、何か思うところがあったに違いない。

今回の来日に関しても、きっと、彼女へ連絡を取るに違いない。

かつ、シャルルもマリナも傷つかない最良の表現で。

彼女のことになると、途端に臆病にも大胆にもなるのね。
いつか、ジルがそう言ったことがある。

呆れているのではなく、心底吃驚しているようだった。
シャルルは何手も先が読める。
なのに、マリナに関してはまるっきりその先を読めていないからだ。
読めないのか、予測不能で読めていないのか。

とにかく、これは彼の予定範囲内のジルの行動だった。

学会での研究発表は、論文だけ提出すれば良かった。
研究発表会は、各々論文を読み上げるだけだったし、質問の事前に用意されているものばかりだ。

論文は発表するが、学会へは出席しない。
それがシャルルのスタンスであり、どんなに招かれたとしてもよほどの事情がない限り、国外へは赴かないことにしている。

理由がある。

ひとつは、二足のわらじのアルディ家のことを蔑ろに出来ないから。
もうひとつは、興味が湧かないから。

今回の日本行きを決めたのは、マリナのことがあったという私的な要素も含まれていたが、急遽、どうにもならない事情が発生したということもあった。

研究所での研究結果を添付するはずが、分析に時間がかかり、結局当日にシャルル本人が説明しないと論文の結論が理解できないという事態が生じたのだ。

いつもの彼なら、ここはジルに来日させるか、WEB会議で事を済ますか、とにかく時間を浪費しないようにする手立てはいくつも選択することができたはずだった。

敢えて、日本へ行くことを決めたのは。

・・・・やっぱり、このまま終わらせられない。

そう思ったからだ。

---

■17

Mail・Mail・Mail

***Marina

ジルから送られてきたメールに書かれていたシャルルの日程は、簡潔であったけれど、自分ではとうていこなすことのできそうもない、ハードな日程だった。

来日の予定は4日間。
学会の発表、レセプション、大使館主催のパーティー参加、そしてまた別の学会の発表に、臨床試験薬の説明会等々。
自由時間は移動時間くらいだろう。
この予定では、日本にいる友人と語らう時間さえないに違いない。

「この日程で、どうやって会えると言うのよ！」
思わず叫んでしまった。

そしてはっと息を呑む。

先刻まで会うつもりは毛頭もない、と言い切っていた自分と、正反対の台詞を吐いたことに、自己嫌悪に陥る。

正真正銘の多重人格だ・・・

心と体が違う。

理性と無意識が真逆のことを言い出す。

そんなことをシャルルが聞こうものなら。
「是非、その真逆な思考をする脳を輪切りにさせて欲しいものだ」
と言うに違いない。

「どうすりゃいいのよ」
誰に告げた言葉でもないが、私はそう言って大きく溜め息をついた。

何をするにも、シャルルに繋がる。

もう、8年だよ？
8年も経過していれば、いろいろなことが変化する。

実際、自分は変わらずに居られただろうかと言えば、そうではなかったことくらい、誰に言われなくてもよくわかっていた。

「溜め息つくと　幸せが逃げてしまうわよ」
姉がよくそんな類の言葉を言っていたように思う。

私は膝を立てて、小さく蹲った。

シャルルには、純粋に、パソコンの御礼をしないといけないと思う。
プレゼント、で済まされるような贈り物ではなかった。
そして、自分は間接的であれ、シャルルの来日日程を知ってしまった。

かつ、無理をすれば会いに行けないような距離でない場所に私は居る。

・・・・くよくよ悩んでも仕方がないわね

私は顔を上げた。

ジルの思惑はわからなかったけれど、こうして宿泊先まで事細かに連絡してくるくらいだから、シャルルに会って行け、というメッセージだと受け止めることにした。
私に都合の良いことなのかもしれないけれど。

来日が近く、そんな中に日本の古い友人が困って居ることを知って、気紛れに彼が手配したプレゼントで助かっていることは事実なのだ。

御礼に出向かない行為は誠意がないだろう。

そして、出向いても会えなかったら、それはそれで良いではないか。

自分は少なくても、会いに行こうと努力した。

なにはともあれ、社会人として、恥ずかしくない行動をしよう。

よし。

シャルルの出席する学会会場は、私の住んでいる飯田橋から電車で一本の場所にある。
かつ、出不精の私がなかなか行けなかった場所で、用事をひとつ済ませることができる。
更に、姉の勤務するテレビ局からほど近くであり、数日前に自分を訪ねてくるように、という姉からの連絡に、返事をするところであった。

それならば。

そう決心した。

会えなかったら会えなかったでそれは良いかも。

こうして、訪日を知らせてくれたジルに応えるために。

そうだよね、何を身構えているんだか・・・・

私は明日、彼の居るであろう場所に近づくことを決心した。

---

■18

Mail・Mail・Mail　燻る

***Charles

僥倖を手放すと決めたのは自分だったから、最後のメールを返信した後、アカウントを削除することにした。

その少し後に、オフィスアドレスにマリナから儀礼的ともいえるぎこちないメールが届いていたことを知った。

自分がアカウントを削除したから、送信できずにこちらに送信したのか。
それとも、自分を拒否するためにわざとオフィシャルアドレスに送信してきたのか。

それは、もうどうでも良いことであった。

今、シャルルはマリナの居る日本に居る。
マリナの居る日本に。
それを考えるだけで狂おしい感情に流されていた青春の輝きの時代を思い出す。

・・・今回の滞在は、4日という短い滞在時間だ。

そして、彼女が転居していなければ、それほど遠い距離の滞在予定時間ではないはず、だった。

「あんたが元気で幸せに暮らせていればそれで良いのよ」
彼女はそう言った。

一日一日が、長く思えたあの日々。
彼女が、生きる事を教えてくれた日々。

出会って良かった。
彼女と出会うことで自分が生きている意味がわかった。

彼女が微笑むだけで息苦しくなり、彼女の一挙手一投足を見守りたいと思った。

自由でとらえどころのない彼女に、自由でなかったシャルルは惹かれた。
いや、必然に惹き付けられたのだ。

胸から消えない痛みを払うように、彼はシガレットケースから細身の煙草を出して、紫煙を燻らせた。

肺に、煙を大きく吸い込む。

医師資格を持ち、その煙草に侵された肺を見てきたはずなのに、彼は煙草を時々、吸う。

この瞬間だけ、彼は自由だった。
彼の生命が少しずつ、煙になって空気に吸い込まれて行く気がして、煙が消えるまで眺めているのが好きだった。

ふぅ、と息をついて、何があるわけでもないけれど、斜め45度前方を見上げた。

自分の青春の輝きが、煙になって消えていく気がした。

来日して、1日目。
彼女は会いに来なかった。

彼は、来客があればそれとわかる場所が会場であることも、承知していた。
ガラス張りで、後援する雛壇の正面は出入り口である。

こういった学会では、講演が始まると照明が暗くなるため、中途入場をするものはひとつの出入り口しか使用することが出来ない。
また、スライド上演も頻繁に行われ、質疑応答も活発であることから、学会員でない一般聴者は決まった場所にしか座れない。

フランスの要人が来会しているわけだから、厳戒態勢が敷かれ、入場者のチェックは厳しく行われていた。
加えてシャルル・ドゥ・アルディ本人が臨床実験の結果報告を発表するというので、その業界の人々が、学会会場の臨時入場受付に殺到し、入場制限がなされるほどだった。
セキュリティ・チェックの人間が、会員証も名刺もない、入場するに値する理由も持ち合わせていないだろう人間を早々簡単に入れ込んでしまう可能性は皆無だった。
ガラス張りの大きな講演会場で、彼は淡々と職務をこなしていた。
すでに半年前に終えている実験であり、その結果は結論が出ているものの、根拠資料の仕上がりが遅れてしまったために、渋々参加している学会だ。

でも、この分野はこれから10年後には最先端分野になるであろうから、ここで実績を上げておくことはマイナス要素ではなかった。

実りはあった。

来日の結果はそこそこ出したはずだ。
彼はそう思うことにした。

学会は良い。
研究を第一信条としている、自分と似たような学者達が集う会合は、あまり苦痛ではなかった。
苦痛なのは、凡人の相手である。
講演後のレセプションや政財界の中心人物達との会合など、自分と言うよりはむしろ、シャルル

・ドゥ・アルディに繋がりを求める輩の相手をしなければならない時が、彼にとっては何よりの苦痛であった。

みな、同じ話。
同じ会話内容。
それに努めてにこやかに応対しなければならない虚無感。

国外の講演は、こういった雑事の方が多く、彼が積極的に国外に出たくないという気持ちにさせてしまう理由のひとつだったわけである。

---

■19

Mail・Mail・Mail　　DRAGON　Bridge （スイープエコー現象）

***Marina

「鳴き龍を聞きに行かないか」
姉からそんな意味深な誘いを受けていた。

報道関係に従事する姉のユリナは、すぐ下の妹の私を外へ誘い出す名手だった。

自身は恋人を亡くすという辛い過去を持ちながら、今は元気に過ごしている。
タフな性格は姉妹全員が同じで、「仕事が恋人」と言って親泣かせの整理府をここ数年繰り返している。
長続きしない恋と日々を愉しんでいる享楽的な姉。
でも、心の奥底では、きっと、例の彼を愛おしんでいるのだろうなと思う。

彼女と恋愛話をしたことは、ほとんどなかった。

「日光東照宮のあの鳴き龍？東京のど真ん中で鳴き龍？」
そう聞き返すと、
「あんたの情報収集能力はエリナに遠く及ばないわね」
姉はばっさり言い切った。

ここは銀座の、女性のみ入店できる喫茶店だ。
姉の取材帰りの小一時間、私たちはお茶を愉しむことにした。
もちろん、姉の経費で落ちる外食ほど甘美な食事はない。

私と良く似た茶色の髪を耳にかけながら、姉は優雅にお茶を飲み干した。
「この先の国際フォーラムには、偶然の産物なのだけれど、鳴き龍現象（※スイープエコー現象）がある空間があるのよ。
で、私はこれからそこの取材アポを取りに行きたいの」
「・・・・私の出幕はないと、思うのだけど・・・」

季節限定のモンブランケーキを食しながら、私は気のないフリをした。
姉はそんな私の演技はお見通しだった。
カップを置くと、ぎらっと私を睨む。
「あんた、今、興味ないフリをしたでしょう」
「・・・え？」
「とぼけても無駄よ」

姉の野生のカンは、ごまかせやしないのだった。

「この間、日本の遺産を舞台にした話を描くとか何とか言ってたでしょ。
・・・この私が協力してあげようって言っているのよ。ほら、良いじゃない。
日光に行かなくても鳴き龍、取材できるんだよ」
「・・・鳴き龍だけ題材にするマンガを描くつもりがあるとは言ってないけれど」
「じゃぁ描けばいいじゃないのよ」
澄ました顔で涼しい顔で、姉は言い放った。

「これからあんたをお供にして、そこに行くんだからね。
ああ、その飲み込んだお茶とケーキの料金分は働いてもらうわよ」

どうも、姉の狙いは、国際フォーラムで近々催される、あるイベントの取材の申し込みをしたいらしかった。
彼女のシナリオはこうだ。
「漫画家の取材に同行して、面識を作っておき、後日改めて取材申し込みするアポイントをその場で取り付ける」
・・・我が姉ながら、お粗末なシナリオだなぁ
私は内心、これで良く取材業界で生きていけるものだと半ば呆れていた。
彼女くらいのキャリアがあれば、そんなアポイントは、他の者がやっても良いのではないのだろうか。

でも、こうちった業界は名刺を持っているかどうか、知り合いかどうか、口をきいたことがある

かどうかが左右される。
私自身も、同じようなことをして取材することがある。
彼女が「どうしてもアポイントを取りたい理由」については、他に理由がるのだろうと思ったが、敢えてたずねないことにした。

そこは、シャルルが学会で講演している場所だった。
姉との待ち合わせの前に、入り口を偵察してきたから、彼が今日、講演会場に待機していることはわかっていた。
でも、尋常ならざる入場者数であると聞いていたし、学会員でないと入場できません、と看板には書いてあったし・・・とてもとても、この学会開催中は、立ち寄れる空間でないことは確かだった。

なのに、姉は今から、そこに行くと言う。

「あの、ね。ユリナちゃん。今日は、何だかイベントがあって、たいそう混雑しているから、何も、今日行かなくても・・・」
「何言ってるのよ！」
きっ、とアーモンドみたいな目をつり上げて、姉は私を睨んだ。
さすがだわ、目でモノを訴えている・・・・

「あんたはテレビなんてほとんど見ないかもしれないけれどもね、私は結構忙しいのよ。それを熟れない漫画家の妹が、先般、漫画の取材にしたいと言った「スイープエコー現象」が東京でも再現することができるということを聞きつけて、是非、創作のインスピレーションになればと思って・・・・・」
以下、まだまだ続く。機関銃のように。

姉は昔っからそうだったものね。
溜め息をついた。

結局は私を理由にして、取材に行きたいわけだ。

はいはい。
承知しました。

幸いなことに、その場所は「知る人ぞ知る」場所なので、イベント開催の妨げにならないと言う。

何だか、何かに引っ張られている気もしないでもないなぁ。

何が、見えない紐があって。
シャルルに向かって、自分が引っ張られている気がする。

でも、それは単に期待であって。

彼と自分は生きる世界は違っていて。

ほんの少し。
ほんの少しだけ。

交わった時期があったけれど基本的には捻れの世界だと思っている。

彼に声をかけられるだけでも、奇跡というものだ。
自分を卑下するわけではないけれど。

今更、合わせる顔なんてないわけで。

姉の申し出には興味が湧いたけれど、だからと言って、それを口実にして近くまで来たから、と。
それだけの理由を全面に出して、この大混雑の中、面会を求める気にはなれなかった。

昔々の友人がたまたま、近くに来たので寄ってみた。
それで充分だろう。

パソコンの御礼に来たのだけれど、あんまりにも忙しそうだったので帰りますね。
また今度！

そういうメモを残していけば義理は立つ。

偶然の再会？
そんな三流漫画のような偶然は、自分にふりかかるとは思っていなかった。

だから。
今回もきっと、ねじれてかみ合わないだろう。

そう思ったのだ。
いや、そう思うことにした。

---

■20

Mail・Mail・Mail

***Charles

会えるかどうかはわからないけれど、自分を訪ねて来る友人に「マリナ・イケダ」という人物が居たら、会員証がなくても通して欲しい。

学会の講演会が開催されるときに、できるだけ平静を装って学会の担当者に伝えた。
思いついたように、軽く。

学会での発表は、彼にとって苦痛極まりない。
すでに結果の出た内容を意気揚々と喋る時間があったのであれば、次の実験に取りかかりたい。
彼は鑑定医でもあるし、臨床医でもあるし、なによりアルディ家の当主でもあるのだ。

このように自由に飛び回れるのは、ジルをはじめ協力者の尽力によるところも大きかったが、アルディという家名を背負うためには、これくらいの「繁忙」というスパイスがなければ、毎日をとうてい過ごすことは出来なかった。

当主の仕事は本当につまらなかった。

「死までの退屈しのぎ」
彼は良くそう言った。

日々、退屈で気鬱で、どんよりとした毎日を過ごすことを繰り返してきた。

自分の意味、自分のやりたいこと、そんなことは考えてはいけなかったのだ。
いや、それが仕事なのだ。

今、自分は考えがまとめられない状態だ。

****

2日目。

学会での発表は数十分だった。
学会の開催期間の講演を理由に、来日することにしたのは言うまでもなく、マリナが自分に会いに来てくれるのではないかという淡い期待があったのだ。

そうでもしないと、アルディ家の当主として、長らくパリに不在で居る時間を作ることが出来ない。
本来なら一日の滞在で充分だった。
だいたい、海外に滞在している時間は、一日か、酷いときには数時間だった。
そんな毎日を数年繰り返してくると、いつの間にか、それが当然のスケジュールとして組み込まれるようになる。

こんなにゆっくりした滞在は、何年ぶりなのだろう。

マリナとカズヤと別れてから、何度か日本に来たことがあった。

でもしかし、連絡が取れないくらい分刻みのスケジュールのうえ、アルディ家を長らく不在にできないという理由から、いつもとんぼ返りだった。
「青春の輝き」の時代に得た、たくさんとは言えない彼の友人達に逢うことも無く、慌ただしく帰国していたものだった。

■21

Mail・Mail・Mail　　DRAGON　Bridge

***Marina

「あんた、何か行きたくない理由でもあるの」という姉の鋭い問いに、
「実は友人が来日していて、そこで今日学会があるようなのよね。でも忙しいスケジュールのようなので、会えたらいいなと思っている程度。」
と言うと、ユリナ姉は目を見開いて、私を説得にかかった。

「ねえねえ。その友達に会うのに、理由や偶然が必要なの？
今日、あたしがこうして誘ったのだって、何か運命的な出会いというか、必要性を感じないの？」
「・・・別に」
「・・・まぁ　そんなスピリチュアルな話はどうでも良いけれど、人一倍、友達との関係を重視するあんたが、そんなことでどうするのよ」
姉は、先般、亡くなった友人のことを遠回しに言っていた。
彼女とも面識がある人物だった。
会いたいときに、会おうと思っているのに、会わずにいる友達とは、その機会を逃したら、二度と会えないかもしれない。
大事な人を亡くしたからこそ、そのように言えるのかもしれない。
軽口風だったけれど、彼女の眼差しは真剣だった。

「我が家の家訓。覚えているわよね？」
姉は悪戯っ子のようにくすくす笑いながら言った。

１．　売られた喧嘩は買え。
２．　後悔なき後悔はなし。
３．　篤くあれ。

この3箇条だ。

はいはい。

やった後悔はしてもいいけれど、やらなかった後悔はしてはいけない、でしょう？
わかっています。

私は肩をすくめた。

言いたいことはわかっている。
会って行け、ということなのよね。

「何だか忙しいみたいで、どうなのかな。宿泊先は聞いているから、会えそうだったら会って来る。
今日はユリナちゃんの取材もあるのでしょう？
あたしの話は良いから、取材には付き合うよ」
そう言った。
「以上、この話は終わり。」

姉は何か不服そうに口を尖らせたが、これ以上小言を言っても、この強情な妹の考えを覆すことは出来なさそうだということを悟り、
「じゃ、行こうか」と言って立ち上がった。

5分ほど歩いて、道路をひとつふたつ隔てた場所にそこはあった。
東京栄に限りなく近い有楽町駅にその場所はある。
地下鉄と接続しており、交通の便が良い空間であるため、しばしば国際会議や展示会、その他様々な催しが予定されていることが、各所に張り巡らされた予定一覧のポスターから窺い知ることが出来た。

鳴き龍と同じ現象が起きるということで、そのクリスタルの廊下の途中に説明の看板が立てかけられていた。
あまり人に知られていないらしく、周囲は、平日だというのに静かなものだった。
「取材はしやすいのだけれどもね」
姉がそう言いながら、許可された範囲をデジタルカメラで周囲の画像を撮り続けている。

私はその一方で、単に、デジカメで画像を撮るのに夢中になっている姉をよそに。
足元に広がる光景に気もそぞろであった。

手を叩いてみる。
ぼぉぉぉぉぉんという何とも言えない音が反響した。

もう一度手を叩いてみる。

なるほどなるほど。
これが偶然に発生した現象だと言うのであれば、確かに面白い。

この小さな空間に発生した現象。

シャルルだったら、なぜその現象が起きているのかという理由に「面白い」と言うのだろうな。

ふと、そんなことを考えて、それから、周囲を見廻した。
「あら、下は催し物の最中ね。マリナ、ひょっとしたら。友達がいる講演会場はここではないの？」
そう言われてぎくりとする。そこは透明な廊下だ。
渡り廊下の役割も果たすここからは、下から上は見えないけれど、こちらから会場の様子は丸見えなのだ。

位置的には、確かにそうだ。

先ほど学会の受付正面を迂回してきたから、たぶん、ここが会場だろう。

姉との待ち合わせの前に一度、先ほど一度通っているから、間違いない。

全席満席のようで、音声は聞こえないものの、会場の熱気が伝わってくるようだった。
講演中のようで、なにやら演壇ではスライドを見ながら説明をしているらしく、レーザーポインタの光の直線がちらちらと動くのと、不定期に画像が切り替わるスライドだけが光っている。

自分には縁のない空間だ。

そう思いながら、私は目が彼を捜していた。
はるか向こうに見える招待席に、シャルルらしき人物が座っているような気がするのだ。
ぼんやりと、外国人数人グループで座っているような気が、する。

コンタクトにしてみたものの、私の視力は逞しくない。
来てはいけない空間を上から見下ろすという、あまりない立ち位置が私を大胆にさせていた。
下の空間の人々が、誰もこちらを見上げていないことを確認して、身を乗り出した。

高所恐怖症ではないけれど、足元が透明で、かつ、その下は広い範囲で会場設備が施されており、その遙か向こうの演壇で、懐かしい友人が座っている（と、おぼしき）様子がなんとなく感じるだけ。

肝心の人影ははっきり見えないし、胸に花を付けている人がシャルルなのかもしれない。

・・・なんだか自分ががっかりした。
彼も容姿が変わっていることだろう。
こういう会場だから、全員がスーツ姿だし、はっきり見えないし、彼だと確信することが出来ない。

どんなに遠目からでも、彼のことはすぐにわかるという自負が、何となくあった。
でも、実際、こうして目を凝らして彼を捜しても、自分にはシャルルがそこに居る！という認識ができないまま、こうやって身を乗り出してみっともなく、廊下にへばりついている。

これが再会というのであれば、一方的な再会、だ。

彼は「特別な人」だ。
だから、物理的な距離も、時間的な距離も、彼は距離を超えて来てくれると思っていた。

「・・・してくれる」？
私は物欲しそうな顔を、今、しているに違いない。
いつも受け身で、誰かが何かをしてくれることを願っている。さもしい人間だったのだろうか。

シャルルと過ごしたあの頃は違っていた。
彼を守りたいと思った。
今も、彼の幸せを願ってやまない。
それは真実だ。

でも、でも。
私は、何、期待してたんだろう。

シャルルを一目で見分けられなかった自分にがっかりした。

そして、劇的な再会で、

彼が自分へ会いに来てくれることを期待していた。
でもそんな夢物語のようなことは、あり得ない。

ユリナ姉が関係者と話し込んでいるところをよそ目に、私はそんなことを考えていた。

やらなかった後悔。

きっと、シャルルに会わなかった後悔のことだ。

やった後悔。

それもわかっていた。

シャルルに、会った後悔。
会ってしまったが故の後悔だ。

会ってしまったが最後、彼と友人という距離を保てるのかわからなかった。

今、どちらとも言えない「後悔」という波が私を襲い、砂の城を一瞬で破壊する大波のように、私にしか都合の良くない夢の城を打ち砕いた。

---

■22

Mail・Mail・Mail

***Charles

事務連絡のメールが何通か、入っていた。
自らアカウントを削除したはずなのに、彼宛の私信、待ちわびた差出人のメールが入ってないか検索をする。

もちろん、彼女が住んでいる場所は把握している。
まだ、あの場所に住んでいた。

都合をつければ、タクシーで何十分かの距離であった。
でも、そこには明らかに行き着けない結界が張り巡らされている気がした。

会いに行こうか。
そう考えたこともある。

だけれども、そこを訪ねて行って、何があるのだろうか。

きっと、あいつと幸せに過ごしていて、予測しない訪問者に戸惑うであろう。

突然の自分の訪問に、びっくりしたような、困ったような、それでいて呆れたような顔をするのだろうか。

今は、どんな容姿をしているのだろうか。
自分は彼女を見分けることが出来るだろうか。

背は？
髪は？

ああ、東洋人は童顔だから、予測が出来ないな。

加齢に伴って、大きな瞳も切れ長になっているだろうし、扱いにくそうだった茶色の髪も色素と質感が変わっているだろう。

薄い唇を歪めて、ちょっと笑った。

彼は、8年前の彼女しか知らなかった。

ばかばかしい。

自分が想っているのは、思い出という幻影なのかもしれない。
でも、それが今の自分を支えている唯一の拠り所であるのも間違った解ではない。

自分だって変わってしまったではないか。
気紛れに逢瀬を愉しんだり、日々の作業に没頭することに何も感じなくなる日々を過ごす自分が。
変わってないと言えるのだろうか。

「今日はますますいっそう、心ここにあらずという感じね」

ベッドの端に腰掛けて、シャワー後の身支度を始めるシャルルに、気怠げな声が降りかかる。

日本に来て、都合が合うとたまにこうして一緒に時を過ごす都合の良い相手だった。
東洋人独特の湿り気のあるきめ細やかな肌は、誰かを彷彿とさせた。

その問いかけに対して彼から返事があることは期待していなかったのだと言うように、軽く首を振り、彼女も彼と反対側のベッドの端に身を起こし、身支度を始めた。

情事の後の余韻などというものは彼に存在しなかった。

ことが終わると、お互いに黙々と支度をする。

ただ、それだけの関係だった。

「久々で楽しい時間だったよ」
身支度を終えた彼は、機械的にそう言うと、彼女の額に軽く口付けをした。

これは次も逢っても良いよというサイン。
彼は気がついていないかもしれないけれど。

彼女は唇の端を歪めて、シャルルの支度が終わったかどうかを確認することもなく、
「じゃ、またね」と言って部屋を出た。
「ああ、また」と短く答えただけで、シャルルは見送りもしない。
そのさばさばとした割り切り具合が、彼と野関係を続ける秘訣であることを察する程度には、彼女の知的レベルはシャルルの望む「都合の良さ」を充足させるレベルには達していた。

彼は彼女が部屋を出て行く音を聞くと、電話の受話器を上げて、ルームサービスを呼んだ。
「ベッドメイキングを頼む。これから部屋を出るので、その間に」
流麗な日本語で伝える。

そして、私用の軽装に着替え、ブルーブラックのカーディガンを羽織ると、ちらと時計を見た。
まだ、少し時間があるから、バーで煙草を吸いながらちょっと一息つこう。
今日は、来日の疲れ、という名目でレセプションは途中で切り上げてきた。
だからおおっぴらには外出できない。

バーで一服したあと、部屋に戻って、指示してあった研究の報告を受ける予定だった。
とは言っても、時差があるので、新しい指示はしても、すぐさまレスポンスがあるわけではない。

そして、束の間の情事。

確かに多忙だな。
彼は苦笑する。

やはり、早くパリに戻らないと。

宿泊先のホテルは何度か滞在したことがあるので、勝手がわかっていた。
階下のバーでは、シガレットコーナーがあるはずだ。

煙草が吸いたい。
ひとりで。
部屋を出た後、彼はまた強烈にそう思った。

煙を薫らせて、軽い疲労感を楽しみ、アルコールを摂取して眠りにつくのだ。

フロントからとおぼしきコールが、部屋を出た直後に扉の向こうから聞こえた。
さっき、これから部屋を出ると伝えたばかりなのに。

だが彼はそれを無視して3台あるうちの右エレベーターへと乗り込んだ。

急を要する案件は、彼の携帯電話にかかってくるはずだったし、FAXがホテルに到着していれば、そういった用事は、まとめてホテルの者が持参するはずだった。
今日は予定を繰り上げて帰ってきたので、外線着信の可能性も低かった。

---

■23

Mail・Mail・Mailそして託言

***Marina

「じゃあ、そのお友達に会えると良いわね」
軽く食事を済ませた後、そう言い置いて、姉は会社に戻って行った。
タフな姉。
彼女はどうやら自分の目的を済ませたらしい。

私は姉を駅まで見送った後、そこから少し歩いて、シャルルの宿泊先のホテルの玄関ロビーまで行き着いた。

ジルの知らせてきた予定では、まだシャルルは戻っていないはずだった。

フロントにメッセージを頼んで、終わり、にする予定だった。
これで一連の儀式は終わり。

私は過ぎた贈り物に対する御礼を、自分なりにしたはずだし、古い友人の日々の生活や予定を邪魔する事なく、去ることが出来る。

また、再会することがあるかもしれない。

これまでの経験の中で、いつどんなときに誰と再会するかわからないことは良くわかっていた。
また、会えると思っていると、逢えなくなってしまくことも良くわかりすぎるくらいにわかっていた。
そのときに、気まずい思いや後悔はしたくないし。

考えられる可能性が実現する確率は相当低いのだろうけれど。

用意して来たメッセージカードと、小さな包みを手に、私はフロントに足を運んだ。
高級感溢れる、静かなホテル。
とても東京駅に隣接しているとは思えない。

そして私はいかにも「宿泊客ではない」風体であるにもかかわらず、眉ひとつ動かさずにホテルのフロントマンは「いらっしゃいませ」と言って深々と礼をした。

「あの」
私はフロントでおずおずと話を切り出した。

「今日、ここに宿泊されている、シャルル・ドゥ・アルディ氏に伝言を御願いしたいのですが。
それから、差し支えなかったら、これをメッセージと一緒に」

小さな、自己流で包装した包みとメッセージカードを差し出した。
ホテルのフロントにあるメモ帳でさえ、もっと高級そうで洒落た紙を使用しているのを横目で見ながら、私はそう言った。
コンシェルジュが出てきた。

そして、もう一度私が同じ話を繰り返すと、
「お客様の宿泊情報はお伝えできませんので・・・お約束はされているのでしょうか」
やんわり、否定される答えだった。
当然か。
いくらなんでも、不審物を受けとるようなことは、しないわよね。

さて、どうしようか。

・・・・。
・・・・。

私は仕方なしに私の名前と、身分証明書と、ジルの名前を告げた。

すると、まるで秘密のパスワードであったかのように、合点がいったようにコンシェルジュは大きく頷いた。
「ああ、伝言を承っておりますよ。でも、ご滞在の最終日にいらっしゃるかもしれない、と伺っておりましたので・・・」

ジル、私の行動はすべてお見通しというわけだったのね。

確かに、姉からの呼び出しがなければ、最終日にここを訪れる予定だった。

あはは、と私は笑った。
「予定が変更になって、突然おたずねしてしまいました。申し訳ありませんが、これを渡してもらえませんか」
先ほどの、「いかにも営業スマイル」が一転して、この怪しい訪問者に彼らは破顔した。
「イケダ様。ジル・ド・ラ・ロシェル様から、伝言をお預かりしています」
もったいぶって、そう言った。
最初から名前を告げれば良かったのかな。

メッセージカードと小袋は、大きな透明の袋に入れられ、内容物を書かされて、タグをつけられ

て奥の部屋に運ばれて行った。

ああ、きっと爆弾か何かだと思われているに違いないなぁ

私が差し出したものと引き替えに、見た目にも女性の筆跡だとわかる、優しい文字が飛び込んできた。
「マリナさんへ」
と書かれたカードを受け取った。
差出人を見ると、ジルからのものだった。

彼女は、自筆で、わざわざこれをホテルに送って寄越してあったのだ。

中身を見ると、メッセージは簡潔だった。
「マリナさん。ジルです。
このメッセージカードを読んでいるということは、無事、ホテルに到着したのですね。
また連絡をください。
このメッセージに意味はありません。
それでは。
ジル」

ジルが直筆のカードを送って寄越すことで、きっと、私がここに来てもセキュリティチェックに引っかかることがないように、という手はずだったということに気がついた。
ジルの用意周到さに感心しながらも、家に帰ったら、彼女に御礼のメールを送ろう、と思った。

「今、アルディ様は外出されているようで・・・」
メッセージを読んでいる間に、部屋に電話をしていたらしい。
すまなさそうに言われたが、慌てて手を振った。

「いえ、伝言だけ残せれば良かったんです。ありがとうございます」
そう言って、立ち上がった時。
「イケダ様。ジル・ド・ラ・ロシェル様から、こちらの品をお預かりしております。どうぞ」

引き取りのサインをして、受け取った封筒の中身は、ホテル内の飲食券だった。
VIP用という金色の印字があって、ジルらしい気遣いを感じる。
でも、もう食べ放題とか食べ歩きとかいう年齢じゃないんだけれどもなぁ。
ふふっと吹き出してしまう。

きっと、ジルの中では、あのころの私のままなのだろう。
有り難く頂戴することとしよう。

確かに、先ほど、姉が「あそこのホテルの食事もスイーツも最高だ」というような話をしていたことを思い出した。
何でそんなことを知っているのか、という疑問は別に投げかけるとして。

シャルルもいないことだし。

もうこのようなホテルに来ることもないだろう。
見れば、チケットには有効期限が書いてあって、その期限までに次にここに訪れる予定はなさそうだった。
先ほどの、待たされている間にフロントに置いてあったチラシを思い出した。
「季節のスイーツ　限定ショコラをどうぞ　お土産付き」

彼に逢うことも無く、用事をすませることが出来た、という安堵感が気を大きくさせていた。
灯台もと暗しよね。
どうせなら、これを利用してから帰ろうかな。

時計を見ると、ちょっと一杯飲んで帰るにはちょうど良い時間だった。
私は丁寧に礼を述べると、このチケットを今、使用して良いか、とたずねた。
断られることもなく、気持ちよく応対してもらえたのは、ひとえにシャルルがVIPでスイートに泊まっている（だろうと思われる。彼のことだから。）ことと、ジルの気遣い故だ。

今、生憎とレストランもカフェも満席であるから、と言われて。
ホテルのバーに案内してもらうことにした。

何か、予感めいたものがあったのか？

後に、問われたことがあった。
・・・・？ううん？まったく。ない。
がっかりさせるような記憶しか、残っていなかった。

とにもかくにも、場違いなら場違いの体験というものをしてみようという、好奇心があった。
ただ、それだけだった。

エスコートされて、3台あるうちの真ん中のエレベーターに乗り込むと、ぴかぴかに磨き込まれた

エレベーターの扉に、どうみてもドレスコードにひっかかるでしょう、というような出で立ちの自分が映っていたことだけは、はっきりと記憶している。

---

■24

Mail・Mail・Mail

***Charles

照明を落として、客の目線が外の夜景に向けられるように設計されたそのバーは、混雑していた。

受付の黒服の男が、シャルルの姿を見つけて、近づいてくる。

自分は宿泊中の者であり、現在部屋をクリーニング中なので、どこかで寛げないか、という旨の話をしたところ、係の者はちょっと困った顔をして、手短に状況を説明した。

「あいにくと、本日はレストランもカフェも満席でして・・・個室も空きがないのです。カウンターであれば空いているのですが」
「煙草が吸えればそれで構わない」

日本人のように、空席ができるまで待つことになれていない彼は、素っ気なくそのように言った。
そして、程なくしてカウンターに案内される。
彼がシャルル・ドゥ・アルディだと知ったら、そのような対応はしないのかもしれない。
でも、彼は誰かに傅かれることに少しだけ退屈していた。

ひとりでぼんやりとしたいときには、ソファ席は好ましくない。

背中を向けて、ウイスキーやブランデーを片手に、煙草の煙を吐き出す瞬間には、彼の端麗な容姿に見とれる観客はいらない。
邪魔なだけだった。

できることなら部屋で飲みたかったけれど、女の香りの残る部屋で寛ぐことは出来そうもなかったし、かえって疲れそうだった。

今はしばし、この人工的な気怠さに身を任せて、夜景を楽しんでおく程度で我慢しようと思った。

明日は3日目。
今日、レセプションをさぼった分だけ、ハードな一日になるはずだ。
4日目早朝には帰国する。

何を期待しているのだろうか、オレは。

そんなことを考えながら、通されたカウンターの長脚椅子に座り、その長い脚を持て余し気味に座った。

****Marina

バーは混んでいた。
間接照明のせいか、明るいエレベーターから降りると、そこは暗すぎで、目が慣れてきてようやくガラス張りの壁の向こうが都内の夜景であることを認識できた。

レストランもカフェも満席だったから、当然のようにここが混雑していても、仕方がないのかもしれない。

入った時に気がついたが、このホテルは外国人がよく滞在するようだ。
バーの雰囲気も日本独特のそれではなく、外国語が行き交い飛び交い、いろんな空気が混ざるパブのような空気だった。

私は入り口でしばし待たされた。

まぁ、ただで入場するわけだしね。

鞄から、小さなメモ帳を取り出して、記憶の断片を書き留めることに没頭した。
こんな場所は取材で来ることさえ躊躇われるので、いつか何かの時のための取材メモとして、待ち時間を有効に利用しようとしただけだった。

デジタルカメラも携帯電話も持ち合わせていない（必要がないからだ）私にとっては、この取材メモが後々に大切な資料となる。

確かに、インターネットの普及によって、いろんなことが調査なしにわかるようになってきた。

でも、質感とか、空気とか、自分の感触を投影しないといけないものもあって、そういう時には、二次元の情報はあてにならないのだ、ということはよくわかっていた。

自分の手と足と耳で

五感の記憶を使って描く世界は、知識だけの成果より、より立体的で、色彩濃く描くことが出来るような気がした。

チケットを渡して、短時間しか滞在しないので、カウンター席でも良いと答えた。

特段、何か思いついて飲みたかったわけではない。
帰り道、ほろ酔い気分で帰れる程度のアルコールの提供があれば、それで良かった。

ちょうど今、満席だから少し待って欲しいと言われて、私は頷いた。

はぁ

忙しい一日だったなぁ。

シャルルへの伝言を果たしたわけだから、ここ半月ほどの懸案事項はこれで解決されたはずである。

明日からは、読み切り連載のネーム打合せに入る予定だった。

そうなれば当分の間、外出もままならないし、メールの返信について悩むという余裕さえなくなるはずであった。

シャルル。
元気に過ごしていれば、それで良かったと思いたい。

毎日、今の自分は想像のつかないような生活をしていることだろう。

体に気を付けて。

ジルに心配をかけさせないように。

いつか、彼女と結ばれると、良いなと思った。
大好きな、大好きなジル。
ジルが、相手だったら、心から祝福できるような気がした。

でも、シャルルの花嫁は、私のまったく知らない相手の方が良いのかもしれない。

私には嫉妬という感情が欠けているそうだ。
姉だけではなく、ほかの人にも指摘されていることだ。

人を妬んだり、嫉妬したりする感情が描けないから、私は恋愛物語を描けない。

そういう気持ちを丁寧に描写したつもりでも、担当からNGだと言われ、いつしかそういうテーマの仕事は来なくなってしまった。

それなりに、それなりの恋愛はしたはずだったのに。

どこまでも優しかった私の恋人。

夢の中の出来事とは到底思えなかった、古代に住む人は、せつないという言葉を私に教えた。

それでも私には何かが足りない。

---

■25

Mail・Mail・Mail

***Charles

チェックを部屋付けにするように言付けた後、程なくして、フロントか伝言があった。

紫煙を燻らせていたシャルルの元に、銀盆に乗せられたメッセージカードが届く。
「To　Charles」
彼女の筆跡だった。
間違いなく。

「メッセージカードと一緒にお預かりしたお届け物は、お部屋にお持ちします」
そう言って、手渡されたメッセージカードを、急いで開封する。
煙草の灰が落ちそうになることを忘れ、くわえたまま、もどかしく開封した。

「それで、彼女は」
「お帰りになりました」

『彼女』と言った相手が、メッセージカードの主だと察した勘の良い従業員からの即答だった。
いつ帰ったのか、聞いたか聞かないか、覚えていない。

中身は一枚、カードが入っていた。

『シャルル。このたびは困っているところを助けてくれてありがとう。助かりました。
日本に来ているとジルに教えてもらい、近くまでたまたま立ち寄ったので、メッセージを遺すことにします。
どうぞ　お元気でお過ごしください。　マリナ・イケダ』

ブルーブラックのインクで書いてあった。

つと、長い指で静かにその文字をなぞる。

確かに、この紙の上に彼女の手の平が触れ、手の平の重みを遺し、この文字を遺していったのだ。
ロックのグラスを持っていたたために湿っていた指でなぞったものだから、インクが少し滲んでしまった。

この近くに居る。
彼女が、この近くに居る。

そう考えただけで、いてもたってもいられない衝動が彼を襲った。

来てくれた。

くわえていた煙草の火を消し、立ち上がった。

逢いたい

逢いたい
逢いたい

逢いたいんだ
逢いたいんだ

一目でいい。
一目でいいから。

言葉を交わさなくても良い。

逢いに行こう。

彼はチェックサインを済ませると、席を離れ、カードをポケットに入れて出口へと向かった。

先ほどまでの疲労は消し飛んでしまっていた。

---

■26

Mail・Mail・Mail

***Marina

自由に生きることと引き替えに
無くしたものもあったことについて
事実として受け止める冷静さは持ち合わせていたつもりだった。

無くしたもの。

ひとつではない。

優しすぎた恋人。
私の初恋の人。

どこまでも優しく
どこまでも穏やかで
どこまでも静かな恋

それ故に、彼に甘えることが出来なかった。

静寂に身を浸すことが出来ない生き方を自分が選んだとき。
頭に浮かんだのは、長らく時をともにしていた恋人ではなく・・・

彼の無二の親友であり
私を常に否定し続け
そして最後には「好きだ」と言った
優雅で醇美で孤独な彼の姿だった。

私は。
今の、自分が好きだ。
今までは好きになれなかった自分が好きだ。
カラーとペンで汚れた自分の指先が好きだ。

これが私。
今の私。

誰に好きになってもらわなくても、自分は自分を好きで居よう。
そう決めてから、長い年月が経過した。

待っている間に、入り口のラフスケッチを描き上げた。
夜景と極力落とした照明が素晴らしい空間
私には縁がないけれども。
きっと、シャルルのような
華やかな世界に存在する人には
当たり前の景色なのかもしれないな

「お待たせしてしまいまして申し訳ありません」

係のホテルマンが、すまなさそうに近寄ってきた。

「おひとり、チェックを済ませているところでいらっしゃいますので、今しばらくお待ちください」
私は頷いた。
こちらは人と待ち合わせしているわけでもないし、何よりチャージ料やサービス料がかからないわけだから、詫びられると返って恐縮してしまう。

その間にと言って、お気を悪くされては恐縮なのですが・・・

ホテルマンは、陶器の平皿を差し出した。

先ほど、チラシにあった「季節限定ショコラ」が、差し出された。

皿はほどよく冷やしてあり、この高級菓子を食するに最適の温度が保たれていた。

ショコラは、固くもなく柔らかすぎずでもなく、ほどよく冷やされていた。

女性のひとくち分に相当する大きさであり、きっと、このような雰囲気のバーの、ウイスキーなどに添えられることを前提につくられているのだろう。

「実は、その薔薇のつぼみの開花加減で、中身が違うのですよ」
ホテルマンがそう教えてくれた。
「ん？開き加減？」
私は目を凝らした。

間接照明で薄暗い室内では、その金箔の薔薇の開き加減などというのは目を凝らさないとわからない。
顔を近づけて、平皿の上に鎮座するショコラをひとつひとつ、眺めた。

本当だ。

満開・七分咲き・三分咲きと、良く見ると、何種類か、花弁の開き具合が違うショコラが、一見ランダムに、でも計算されて並んでいる。

時間稼ぎの説明なのか、VIP待遇の招待券を持つ客に対する特別サービスマニュアルなのかわからなかったが、どうぞ遠慮なく、という具合に差し出されて、平皿のショコラを自由に選ぶことが出来た。

「中身のフレーバーに特徴がありまして。満開はローズ、七分咲きがレモン、三分咲きがマンゴー等々、工夫を凝らしております」
説明を聞くまでもなく、一粒、手にとって、口に含んだ。
上品な甘さというか、ショコラと独特手法によってペーストされた柑橘系のフレーバーが口いっぱいに広がる。
白金の髪の、少女の様な顔立ちをした少年を思い出した。

もう一粒。

手を伸ばした瞬間、目の前を、誰かが横切った。

私は待合の椅子に腰掛けていたので、腰の部分までしか視界に入らなかったけれど。
ものすごいスピードで店を出てきたその人は、廊下を横切り、エレベーターの下ボタンを、もどかしそうにカチカチと押し続けて呼び出しをする外国人の男性だった。
ブルーブラックのカーデの端と、白蝶貝のボタンが一瞬、目の前を横切った。

私がショコラを物色して、斜め45度を見ている状態の、一瞬の出来事だった。

しゅっと一瞬風が横切り、続いて、ふわっとしたシャンプーのような女性的な匂いと、煙草のにおいがした。
続けて、チンと鳴って、エレベーターの扉が開く音がした。

外国人でもボタンを連打するんだ？

3台もエレベーターがあるのだし、すぐに来ると思うけれど・・・

せっかちなのは、日本人だけだと思ってた！
日本はその一方で、そういう所作は恥、という文化でもあるはずなのだけれどもね。
ホテルマナーの守れない客というものは、どこの世界、どんな高級ホテルにでも存在するのね。
そんなことを思った。

「ありがとうございました！」
慌てて背後から声をかける店の従業員に、その客は振り向くこともなく出て行ってしまった。
どうも、宿泊客らしい。
「このチェック、宿泊精算時に加算しておいて」

伝票を持ってきた店員が、そう言っていたのが聞こえた。

このお客さんが退店するから、きっと次は私ね。

私はメモ帳をしまい込み、口の中にほおばったショコラを味わいながらも早めに食べる、という難解且つ高度な複合動作に熱中してしまっていた。

口の中のショコラが消えてなくなると同時に、「お客様、お待たせいたしました」という声が聞こえて、廊下で待たされていた私は、慌てて立ち上がった。

*****Charles

カードの受け取り時間は、今から少し前の時間だった。

間に合うか？

慌ててバーを出て、エレベーターに乗り込む。
まるでC級のホラー映画のように、ロビー階のボタンを押す。
ボタンを連打すると停止階の停止ランプがキャンセルされるのだということに気がついた。
手を止め、そしてその時にようやく冷静になった。

まだ。
まだ・・・・
近くに居るのか？
近くに居るのかい？

君に
君に、逢いたい。
逢いたいよ。
逢いたいんだよ。

自分を突き動かす衝動に耐えかねるかのように、下降する箱の中で、彼は壁によりかかり、両手

で自分を抱き留めた。

愛おしいを通り越して、狂おしい感情が、突如として彼に波となって襲ってきた。

カードを見て。
カードを見ただけで。

彼が、その文字を滲ませてしまった瞬間。
しまったと思い、慌てて指で湿気をなぞってしまった瞬間。
彼は、理解しつつ悟った。

今の矛盾する行為を。

湿った指で触れれば、インクは滲む。

乾いた布でカードの表面を押さえれば、滲みは防げたはずなのに。
我を忘れて、また、滲んだ文字に慌てて指で湿気を拭いた。
結果、また紙面が滲んだ。

自分の妄想の中で成長したマリナと、今の現実の彼女に差があるのかもしれない。

でも、これで終わりに出来なかった。

また、生きていればいつか逢えるという希望だけが彼を生かしていた。

「死までの退屈しのぎ」
そう揶揄していたけれど、本当のところは「再会するまでの時間つぶし」でしかなかった。

わかっていたはずだった。

手の届かない、手に入らないものを指をくわえて見ているこどもと同じなのだ。

でも、見ているだけで幸せになり、考えるだけで穏やかになるこの感情を、誰も止める事なんてできやしない。

この気持ちは、オレだけのものだ。

ロビー階に到着し、フロントに大股で近寄った。
「ここに、マリナ・イケダという人物がたずねて来たと思うが」
「先ほどお知らせした通りです。Monsieur」
いや、聞きたいのはそんなことではない。

「それで、彼女が帰ったのは、何分前なのだろうか」
「ほんの数十分前です。
その後、自分が来たことは後ほど知らせるだけで良いというお話でした。
館内の施設に立ち寄るということでしたので、上階のバーをご案内しました。
ただ、当初はレストランかカフェへのお立ち寄りご希望でした。
あいにく、どちらも満席の旨お伝えしたところ、空席が出なければバーに向かわれるとのことです」

何てことか。

シャルルは軽く舌打ちをした。
自分がそのフロアに居る事がわかっているのに、マリナが来ていることを知らせずに居たのか。
彼はそこではっとした。

部屋を出るときのあの内線電話。
あれは、マリナが来たことを知らせるフロントからの電話かもしれない、ということに思い至った。

気怠さと、汚れた部屋から離れたいと思っていたせいで、ドア越しに聞こえた呼び出し音を無視したのは、他ならぬ自分だった。

細々とした短い事実の断片が、彼と彼女が行き違ってしまった時間軸を正確に差し示す。

苛立った勢いでもう一度短く舌打ちし、プラチナブロンドの髪を乱暴にかき上げて、最後まで話を聞くか聞かないかの時点で、今来た道を逆送する。

彼女がまだこのホテル内にいるとして。
どうやって足止めさせようか。

緊急警報装置を作動させて、全エレベーターを停止し、避難通路も封鎖して、完全に出られないようにしたとしても、間に合うだろうか。

状況を整理すると。

マリナは、メッセージを届けた後、このホテル内の飲食施設に立ち寄ったらしい。
満席の状況からして、彼女はバーに立ち寄るつもりで移動した。
レストランとカフェは満席であるから、自分が立ち寄ったバーに向かっているか、今、滞在している最中のはずだ。
時間の経過からして、まだこの建物内にいる。
シャルルは再びエレベーターを呼び出し、急いで乗り込むと、先ほど自分が居た階数のボタンを乱暴に押した。

タイミングが最悪だ。

いろいろな意味で、彼女と自分はタイミングが悪いのだと思う。

それは意図されたものではなく、彼と彼女の「相性」だと言っても良い。

だが、タイミングでシャルル・ドゥ・アルディの予定は変えられないんだ。
シャルルは思った。

もう、離さない。
もう、逃がさない。
何が何でも捕らえるよ。

彼の青灰色の瞳が開いた。

---

■27

Mail・Mail・Mail

***Marina

カウンターに通されたとき、カウンターに専属のバーテンダーが灰皿を片付けているところだった。

脚長のカウンターチェアは、まだ暖かかった。
先ほどのお客さんのものかもしれないわね

異国に来てまで、お酒を煙草を嗜み、かつ、たぶん、この状況からすると一人で来ていたのだろう。

足をぶらぶらさせながら、頼んだカクテルが到着するまで、私は差し出された「口直し」のショコラを皿に移した。

レモン味のチョコレートが口内いっぱいに広がる。

うん、おいしい

ひとりで店に入る。

度胸というか。
勇気というか。
厚顔無恥さは
姉妹共通の性質だった。

なんでも共有しないとその存在価値を認めてもらえなかった学生時代。
ひとりだけ、そうでなくて良いよ、と言ってくれた、後の世界的音楽家の友人が声をかけなかったら今の私はいない。
以来、「誰かと一緒でないと入れない場所」以外は、よほどのことがない限り体験してみることにした。
彼女が開いてくれた価値観を否定するようなことは、これから先できないだろうし、何より、この好奇心を満たすことが出来るうちは、そんな恥じらいはまったくもって必要ないと、断言できた。

この建物の中にシャルルが宿泊している。
それだけで、何だか落ち着かない気分になった。
でも、急いで離れる気にもなれない。なぜだろう。

ジルの予定表によれば、あと数時間でホテルに戻ってくるはずだ。
それより前には、確実にここを出発していなければならない。

‥‥『出発していなければならない』？？

そう。
私は、シャルルに逢ってはいけないのだった。

思い出は、時間が経過するほど美化される。
それは誰もが経験することだ。

シャルルだって、ほんの気紛れで私に施しをしただけなのだ。
証拠に、私は、念のため、今日外出する直前に、シャルルのアドレスにメールを送ったものの、アカウント存在なし、で戻って来てしまったのだ。

削除されてるんだ・・・・！

私は小さな痛みを感じた。
小さくても、そのトゲのような痛みは、刺さった場所が明確であり、痛みが小さかったと言って、痛んでいるという事実を消すことが出来ないくらい、存在感があった。

誰にとっても、いつも私が特別であるとは思わなかったけれど。
少なくとも、この古い知己には私は「よう、久しぶり」と言ってそれまでの空白を埋めるような言葉をかけてくれる程度の、「何か」を共有していたはずだった。
言葉に出来ないぼやけた思いであるが。

また、私はがっかりしている。

小さく笑った。
ちょうど良く、頼んだカクテルが差し出された。

サクラ

もう、櫻の季節ではないけれど、彼がこよなく愛した日本の花。
その名の通り、ピンク色をしたカクテルは、微炭酸なのだろう。
小さな気泡を含んで、白濁した薄紅色をしていた。

くいっと一息で飲んだ。
あまり品の良い飲み方ではない。

そして席を立った。
「お次の飲み物はいかがですか？」
声をかけられたけれど、もう帰ります、と言って、出口に向かった。

周囲を見る余裕はなかったけれど、この高級店で自分はさぞかし雰囲気にそぐわないオブジェとして、奇異の眼差しを投げかけられているのだろうと思った。

生きる世界が違う

シャルルが滞在する、ホテルのバーでさえ、このような気持ちにさせられる。
きっと、彼の過ごしてきた生き方と、私の生活は、交わらないんだ。

交わることを願っていたの？

自分の中のひとりがそう皮肉を言った。

いいえ・・・
いいえ。

彼との生活を望んだことがないかといえば、嘘になった。

あの人と別れた後。

何度となく襲った孤独という強敵は、私に罪深い妄想を抱かせた。

シャルルと結婚すれば。
こんな日々からも解放されるでしょ？

シャルルの元に戻れば。
こんな苦しい創作の日々から自由に創作できる身分に変わるでしょ？

だけれども。
その囁きを受け入れることはしなかった。

それが、今の私を存在させている理由である。

今の自分が好きだから。
今の自分を嫌いになりたくない。

自由だけれど、自由じゃない。
解放されているけれど、解放されていない。

そんな自分を惨めに思いたくなかった。
実際、ちっとも惨めではなかったし。

これで良かったんだよね。

そう、呟いて、ホテルを出ることにした。

もう帰るの？と言いたげなバーの店員に丁寧に礼を言って、エレベーターに乗り込んだ。

先ほどまで、少し明るかった夜景が、もうすっかり闇にのまれて建物の光が眩しくなった。
暗く感じた間接照明も、いつの間にか目に慣れて、ほどよい柔らかさだと感じるようになっていた。

さて。
帰ろうか。

エレベーターで、誰も乗り込んでこないようだと確信すると、ちょっとだけ伸びをした。

いつもの生活に戻ろう。

これで、これでいろいろなことが解決なのだ。

---

■28

Mail・Mail・Mail

***Charles

フロントには、マリナ・イケダに対応した係の者がまだシフトチェンジしていなかったので、彼女がホテルを出て行くところを見たのであれば、そのまま留めて欲しいと釘を刺した。

こんな小さな空間の中で、行き違っているよ、マリナちゃん・・・

シャルルは苦笑した。

なんだか、母との思い出を彷彿とさせる。

小さいとき、病中の母がほんの短い期間だけアルディ邸に戻って来たことがあった。
短い時間であったけれど、母がいて、父がいて、自分がそこにいることが、何より嬉しかった。
短い滞在であることがわかっていたからこそ、濃密な時間だった。
そして、すぐに療養所に戻っていくことになり、その当日。
自分も一緒に行く！と駄々をこねた。
病気をしている人しか、行けないところだから。
父がそう言った。

それなら、僕も同じ病気になる。

シャルルは、そんなようなことを言ったところ、母は小さく笑って、
「それでは、支度をしていらっしゃい」と言った。

母を乗せた車が、自分が必死に荷物を詰め込んでいる間に、とっくに出発してしまったことにも気がつかずに、彼は、トランクに詰められるだけの荷物を詰め込んで、体重より重いトランクを玄関まで引きずっていったことを思い出した。

溢れるほどの荷物は詰めなかった。
母が待っていると思ったから。

でも、そこに待って居たはずの黒塗りの車はすでになく、彼は汗を掻きながら持ち運んだトランクを片手に、途方もなくただ立ち竦んでいた。

涙は、出なかった。

なぜだか、その光景を思い出していた。

そのときに、自分がどう感じたかはもう、封印してしまったから、思い出さなかった。
感情というものは、彼に派いらないメモリだった。

涙さえ出ないで居る自分。

のろのろと部屋に戻る自分。

その映像だけが、鮮やかに蘇る。

---

■29

Mail・Mail・Mail

***Marina

出口に向かうと、先ほど対応してくれたコンシェルジュが、近寄ってきた。

「イケダ様」

何か、忘れ物をしたのだろうか。
それとも、先ほどバーで飲んだアルコールと、季節限定のショコラの代金でも請求されるのだろうか。
ちょっと身構えていると、コンシェルジュは意外な話しを切り出した。

「ほんの数分前に、アルディ様がフロントにいらっしゃいまして。
イケダ様がまだ館内にいらっしゃるようであれば、自分も戻ってきているので、そのまま待って居て欲しいという旨の伝言を承りました」

・・・・・！

シャルルが戻って来ている！
私は腕時計を見た。
まだ、戻ってくる時間ではないはずだ。

予定変更になって、戻って来ているんだ！

胸が早鐘を打ち、ぽかんと口を開けたままだった私に、丁寧にコンシェルジュは言った。

「館内にいらっしゃることは間違いありませんから。
そちらのロビーホールのソファでおかけになっていただけませんでしょうか」

「いえ、あの。今日は逢うことが目的ではないのです」

私は慌てて言った。

「今日は、その。言伝をしてもらえるだけで良くって・・・。
あの。私、もう帰らないといけないので、帰ります」

彼がこの建物内にいて、どうやら私が訪問したことを知ったらしい。
探してくれているのは嬉しいけれど、こんな気持ちのままでは会わない方が、良いのだなと思った。

8年ぶりの再会には相応しくない格好だ。

私は先ほど一気に飲んで、回り始めたアルコールで火照った顔をぐいと押さえた。

ペンだこでつぶれて、手入れの行き届かない指。
指先は、カラー色が抜けていない指がある。

今日は歩き回ったから、息苦しくないようなコットンのバギーパンツに着脱可能なショート丈のジャケットに、白いシャツというラフな格好だ。
歩きやすいような低めのパンプスだし。

鞄は必要最小限しか持ち合わせていない。

伸び放題の髪の毛は、さすがにまずいと重い、ホテルに入る前に簡単に束ねた。
前髪だって伸び放題だから、斜めに横分けしているが、うっかり目に入って、コンタクトに引っかかりはしないかと冷や冷やする。

早く、早くここを出ないと。

彼に会ってしまったら。

私はその次にどうすれば良いのかさえ、予測することが出来ない状態にいた。

帰ります、ともう一度口を開きかけた時。

「あ、いらっしゃいましたよ」
コンシェルジュが、エレベーターホールを見ながら、そう言った。

****Charles

たとえ、彼女の自宅に押しかけてでも、今日という今日は声を聴くなり、その姿を見るなりして、この気持ちに決着をつけようと思い始めていた。

パリとは違い、東京はとても狭い。
行動できない距離ではなかった。

このどうにもならない燻りを、8年かけて抑えてきた。
何も、今日でなくても良かったのかもしれない。

だがしかし、彼女の自分へあてた直筆カードを見たら、もう何もかもがどうでも良くなってしまっていた。
8年を経過してなお、あのころの記憶が鮮やかに蘇った。

マリナ
マリナ

今、逢いに行く。

君の気持ちはお構いなしだ。

この世で、彼が顔色を窺う人間が3人いる。

母親と父親と、マリナ・イケダだ。
すでに両親は故人であるから、この世で唯一、彼が「どう思われているのか気にする」人間だった。

マリナの戸惑いを想像する自分を、この瞬間に捨てた。

エレベーターが下降を止めた。
目的のフロアに到着したのだ。

彼は息つく暇もなく、もどかしげに扉から出た。

「シャルル」
思いもかけずに声をかけられて、ぎくりとする。

・・・・・先ほど情事を愉しんだ彼女だった。

「急いでいるんだ」
つい今し方まで、愉楽を共有した自分物に、シャルルは冷たく言い放った。
彼の興味は、もうそこにはなかった。

「冷たい言い方ね・・・まぁ、どうでも良いけど」
彼女は唇を歪めて、はい、と脇に挟んでいた書類を手渡した。

「明日の関係書類よ。変更点がいくつかあるから、明日までに読んでおいて」

今回の来日の目的でもある学会の最重要関係者でもあるかの彼女は、そう言って書類をシャルルに押しつけた。

「今は、そんな暇はない」
「手ぶらのその格好で、そんなことを言われてもね・・・
書類を届けるために、わざわざ戻って来たのよ。これから、また会場に戻るけれど。
・・・じゃ、渡したから」

妖艶に笑い、視線は遠くを探すように彷徨うシャルルにおかまいなしに、つと、一歩進んで、彼女は軽く抱擁した。
豊満な胸とくびれた腰を押しつける、秘密を共有する間柄だけに許される抱擁だった。

「また明日ね」
彼女はそう言って、くるっと踵を返すと、彼に背を向けてロビーに向かった。

途中、彼女をじっと見る、小柄な場違いな女性が目の端に止まったけれど、彼女は気にせずに出口に向かった。
扉を出る頃には、もう、仕事のことで頭がいっぱいだった。

---

■30

Mail・Mail・Mailそして邂逅

***Marina

「いらっしゃいましたよ」

私とすれ違ってホテルの出口に向かった女性が纏っていた鴻巣に花織が私の記憶の映像を呼び起こしていた。
それは、先ほどバーで席に座ったときに感じた香りだ。

そして、その香りは男性が身につける類のものではなく、凜とした女性の、しかも知的レベルのかなり高い女性が身につけるという印象を与える匂いだった。
先ほど、目の前を駈け抜けて行った男性からも香った匂いだ。

つまり、先ほどの、バーの入り口で入れ替えになった男性は、私の座る前にバーに座っていた男性で、今、エレベーターから降りてきた男性。
その上、残り香が移り・・・それは彼女のものであるのだろう。

手と耳と足で。
そして、五感すべてで。

私は事情を察した。

視力が弱い私は、ホールの前で何かを受け渡しをして、その後抱擁をする二人がぼんやり見えた

だけだったけれど。
その間柄が何となく、親密な気もしたし、まわりの客人達が振り返って立ち止まった、エレベーターの前で抱擁する二人を微笑ましげに眺めていた気配から察すると、相当お似合いの二人であったのだろう。

だけど。

だけど。

エレベーターから降りてきた男性は。

あろうことか、シャルル本人だったのだ。

シャルル。
シャルル・ドゥ・アルディ。

ちらっと見た、先ほどのブルーブラックのカーデを身につけている人は、シャルルだったのだ。

何てこと。
私は、彼とすれ違っていた。

彼が近づいてくるにつれて、シャルルの様子がはっきり見て取れた。
私に向かって歩いてくるその様は、生涯忘れられないと思う程、眩しかった。

誰もが見惚れる、長身。
白金の長い髪。
彫刻のように整った顔立ち。
青灰色の瞳。
シニカルな微笑みとともに、毒舌を撒き散らした薄い唇。
昔は、少女のようなあどけない童顔だったけれど、今はどこをどう見ても、立派なジェントルマンだった。

ん？？

その時、私の中でしこりが残ったけれど。

「マリナ！」

記憶しているシャルルの声より、幾分低い声が、私を呼んだ。
私が立っていた場所は、限りなくホテルの出口に近いところであったから、その良く響き渡る声で呼び止められると、周囲にいた人達が一斉に、何事かとこちらを振り返る。

シャルル、久しぶり！
でも、その大声は・・・・ちょっと恥ずかしいよ

そう、口を開きかけた瞬間、私はシャルルのブルーブラックのカーデの波にのまれていた。
久々の再会、という感動より先に、つん、と先ほどの女性の香りが鼻をつく。
ノータイでカーデを羽織っているところを見ると、一度部屋に戻って、私服に着替えているはずだ。
ということは、私服にまで残り香を移す、あの女性は誰？？？？

これって、今の抱擁でついた香り、ではないよね？
だって、さっき、私は同じ香りをかいだよ？

目の前がブルーブラック一色になってしまったとき、バサリ、という派手な音がして、足元に書類が飛散するのが見えた。
そこでシャルル・ドゥ・アルディはようやく、腕の力を緩めてくれた。

私はもう少しで窒息しそうだった。
彼の腕の力強さに。
彼との邂逅への驚きに。

「書類、落ちちゃったよ」

私の第一声は、何とも情けないもので始まることになった。

■31

Mail・Mail・Mailそして邂逅

***Charles

ロビーにいた　その人をマリナ・イケダだと認識するのに、彼にしてみれば、通常の時間よりほんの少しだけ時間がかかった。

もどかしげに、足早にその人に近づく。

色素の薄い日本人の女性が立っていた。

近づくにつれて、8年前と違う点があることに気がついた。

背が伸びた。
髪も伸びた。

びっくりするような大きな瞳。
予想通り、年月を経過して、仔猫のような瞳から、アーモンドのような切れ長の瞳に形が変わっていたが、黒目がちで白目が少ないのは、以前のままだった。

メガネは、もうかけていなかった。

茶色の髪が、背中まで伸びて、サイドの髪を後ろで束ねているため、顔の輪郭がくっきりわかる。
その髪型のせいで、小作りな印象を与えた。

東洋人特有の象牙色の肌。
職病柄なのかもしれないが、日に焼けておらず、陶器のような白い肌をしていた。
平均より小柄であることは確かだった。

大きなバックを抱えており、それがまた彼女の小柄さを際立たせている。

マリナ・イケダであるかどうかを確認しなくても確認できていた。

彼は近づくなり、マリナを抱き締めた。

先ほどの抱擁とはまるっきり違っていた。
存在を確かめるかのように、するりと手からこぼれ落ちないように。

彼は、その両腕に全神経を傾ける。
待ち望んだ瞬間を楽しむ余裕はなかった。

茶色の髪に顔を埋める。
小柄な彼女の小さな足が、床からほんの少し浮く。

何かを考えたり、言葉をかけたり、そんな余裕はなかった。

彼女を見て、そして次の瞬間にはこうしていた。
ただそれだけだった。

「書類、落ちちゃったよ」

戸惑うような声。

彼の覚えている甲高い声より、幾分トーンが低い声だったが、澄んだ高めの音域が彼の耳に入ってきた。

そう声をかけられて、はじめて、自分が持って居た書類を、床一杯にぶちまけてしまったことに気がついて、腕の力を緩めた。

---

■32

Mail・Mail・Mailそして邂逅

***Marina

そんなこと気にもしてなかった、とでも言うように、腕を緩めた男性は、もう私の知っているシ

ャルルであって、そうでなかった。

煙草とほんの少しのアルコールの香りと、先ほどの移り香。

白金の髪をかきあげて、彼は振り返って、その場に居たホテルマンに
「順番はどうでも良いので、拾っておいてくれ」と言った。

そして、腰を落として書類を拾おうとする私の二の腕を、ぐいと強引に掴んだ。

「マリナ。こっちを向いて。顔を良く見せて」

「ああ、シャルル。あなたの書類、大事な内容じゃないの？」

かみ合わない会話。
これが何年ぶりかに再開する二人の会話なのだろうかと思うくらいだ。

「いいから。さぁ、顔を上げて。でないと、下からのぞき込むよ」

彼はそう言って、ぶちまけてしまった書類を気にする私の前に跪いた。
下からのぞき込まれて、私は目を見開いて硬直する。

「ちょっと・・・わかったから！わかったから、シャルル、立って！」
恥ずかしさのあまり、そう叫ぶ。

彼はちょっとアルコールが入っているらしい。
青灰色の瞳が潤み、頬が薔薇色になっている。

渋々、私は立ち上がった。
こう見ると、シャルルはずいぶん身長が伸びたのだと感じる。

「マリナちゃん、ちょっとは成長したじゃないか」
シャルルはそう言って、ぽんぽんと私の頭頂を手の平で撫でた。

ああ、こういうところは変わらないね。

私たちは、通り一遍の儀礼を通り越して、会話を始めることになってしまった。

「シャルルこそ。
あんまり素敵になったので、びっくりしちゃったわ。
逢えると思っていなかったから。
ああ、本当に驚いてしまった」

彼は、くすりと小さく笑った。
目を離すことのできない、美しい笑いだった。

「ところで、オレ達は、8年ぶりの再会だというのに、ホテルのロビーの真ん中で何をやっているんだろうね」

その言い方も相変わらずだった。

「と、言っても、ロビーもラウンジも、レストランもカフェも満席で、バーもさっき行ったけれど、ゆっくり話すことができない状態だったからな・・・」

「もう、帰るから、気にしないで」

私は努めてあっけらかんと聞こえるように言った。
ぐっと、肩にかけていた鞄を持つ手に力を入れて、この長身の紳士を見上げた。

長く見つめるには、眩しすぎる。

---

■33

Mail・Mail・Mailそして邂逅

***Charles

久しぶりの再会なのに、やけにあっさりしたマリナの応対に、シャルルは少し戸惑っていた。
自分との再会を喜ぶよりも前に、床に散らばった書類を気にする。
目を合わせようとしない。
明らかに、困惑している。

だが、彼女の伏し目がちな表情からは、なぜ彼女が困惑しているのかという原因を読み取るには

、判断材料が足りなかった。
東洋人はリアクションが少ないので、心の機微がわかりづらい。

彼女が帰る、と言い出したので、どうやって引き留めようかと思い、一瞬の間にあれこれ考えを巡らせた。

彼の考え得る限り、穏やかな方法で澄まされる方法という選択はひとつしかなかった。

「もう遅い。タクシーを呼ぶよ」
「いえ、電車も近いし、それほど遅い時間でもないわ」
「ちびっ子はこんな遅い時間に一人歩きしないものだよ」
「ちびっこ！」

そう言われて、初めて彼女は顔を上げて、シャルルと目を合わせた。
小柄であることを言われるのは、やはり気になるらしい。

頬はほんのり上気していて、悔しそうにシャルルを軽く睨んだ視線の強さは、8年前のあのときと全く同じだった。

ああ、やっぱり君なんだね。

シャルルは内なる心の震えが伝わらないように、努めて冷静に彼女に説得を試みた。
腕を組み、軽くとんとん、と左の人差し指を組んだ右腕の上で動かして、理論武装をして口を開く。

「遅い時間かどうかは文化の違いだけれど。
マリナちゃん。
久しぶりに会った友人が、床に書類を広げてしまい、恥ずかしさでいっぱいのところに、このまま立ち尽くしたままで待機しろと言うのかい？
それは拾ってくれているホテルマンにも気の毒だし、かと言って宿泊客であるオレに拾わせるわけにもいかないという事情を察してあげてくれよ。
つまりだ、ここを立ち去るのが、最良の選択なんだよ」

「じゃ、私がこのまま出口に行って、シャルルは部屋に戻る、でも結果は同じよね？」

間髪入れずに、マリナが反撃してきたので、彼は嬉しくなって言葉を続ける。

「君のへっぽこ漫画連載料の30回分くらいのパソコンを贈った相手に、その冷たい反応はどういうこと？」
うっと答えに詰まるマリナに、シャルルはたたみかけて続ける。

「オレは明後日にはパリに戻るし、明日はどうしても時間が作れそうにない。
今度、日本に来るのはいつになるかわからないし、ミニバーで期間限定ショコラとシャンパンでもつまみながら、ほんの数十分、昔話をしようというオレの気遣いを無視しようというわけだね？」

最後の言葉が終わる前に、
「お邪魔します」
と言ったマリナが、あまりにもシャルルの予想通りの反応だったので、思わず吹き出してしまった。

ショコラとシャンパンで男の部屋に乗り込む女！

外見は変わっても、中身はほとんど変わっていないわけだ。

マリナ、注意散漫だよ。

「シャルル。ミニバーがついている部屋に泊まっているということは、あなたのことだから、このホテルのロイヤルスイートにでも泊まっているんでしょう。
今度、漫画の背景に使いたいから、スケッチさせてね」

加えて彼女がそんなことを言い出したものだから、シャルルはここ何年か漏らしたことのないような、声で笑った。

---

■34

Mail・Mail・Mailそして邂逅

****Marina

この、微妙にかみ合わない会話が、これまで逢わなかった年月も、わだかまりも「何となく」押し流してしまっていた。

この「何となく」という曖昧さを受け入れることができるようになったということは、私もも

う10代のあのころの私ではないのかもしれない。

それは良くわかっていた。

私は、8年ぶりに再会する古い友人を見上げた。

ゆっくり話しをするには、彼の提案通りに、彼の宿泊中の客室に行くしかなかった。
ゆっくり話しをしたかったわけではないけれど。

半分は。
この美しくも怜悧な雰囲気を纏うフランス人を、もう少し良く眺めていたいという絵描きの性分である美的欲求。
四分の一は。
久方ぶりの再会に、もう少し話しをしたいと思うという、昔を懐かしむ気持ち。

そして、残りの四分の一が、「判別不能な何か」だった。

彼の申し出は断ることが出来なかった。

そもそも「期間限定ショコラ」「シャンパン」（これを言うと「シャンパン」という定義についてシャルルに怒られそうだ）というキーワードと、この豪奢なホテルのロイヤルスイートがどのような部屋なのか、見てみたい、という好奇心が、私の口から「お邪魔します」という台詞を引き出していた。

私はこの年齢になっても好奇心を抑制することができない。
シャルルがそんなことを耳にしようものなら
「脳の一部が肥大化して、感情を抑制する機能が圧迫されているのかもしれないね」
と言うのかもしれない。
そして「是非、解剖させてくれ」と、言うのであろう。

くすり、と私は一人で笑った。

エレベーターに乗り込むところだった。

シャルル・ドゥ・アルディは、ひとりくすくすと笑う私に向かって、ちょっと不機嫌そうに眉根を寄せて、
「何？」

とこちらを見据えた。

ほんの、数十秒。

エレベーターという空間の中で、私とシャルルは浮き上がっていた。
シャルルをそっと、見る。
盗み見るといった方が正しい表現かもしれない。

声変わりが完成されて、低いけれどもよく響く声が私の頭の上から聞こえてくる。

長らく、日本語を使っていなかったのかもしれない。
流麗な日本語のほんのごくわずかな、本当にわずかなイントネーションが、外国人特有のそれだった。
背も伸びていた。
良く鍛えられた細い鋼、という表現がぴったりだった。
着衣は私服なのだろう。
ゆったりしたものであるが、彼の体刑がバランス良く整えられていることは隠せなかった。

長くて細い指。
太すぎない眉。
陶器のような透明な肌。
薄い唇は心なしか端が持ち上がっていて、微笑んでいるかのようだった。

白金の髪は、心なしか覚えている昔のプラチナブロンドより薄く見えた。

もう彼を女性とか少女とか見間違える人間は居ないだろう。
れっきとした、大人の男性がそこにはいた。

エレベーターの壁にもたれかかり、気怠げに何かを考えている風体は、ここが日本で、本当に狭い空間であることを忘れてしまいそうだった。

瞳は青灰色で、暖色のライトの下で見ているせいか、吸い込まれそうなほど澄んでいる。
「吸い込まれそう」
この表現は言い過ぎではなかった。

日本人が好んで着用するブルーのカラーコンタクトとは違ったブルーだった。
透明な、どこまでも透明な青灰色。

ブルーブラックのカーデに、薄い水色のシャツ。
細身のグレーのウールパンツは、気にならないくらいの白いストライプが入っていて、彼の腰から下の長さをさりげなく強調していた。
ネクタイはしていない。
だから余計に、喉元の白さが目立つ。

「ほんとうに綺麗になっちゃって」

私は溜め息をついて改めてまじまじと見つめながらそう言ったけれど、目的のフロアに到着するチャイムと、その声は偶然にも同時に発生したので、シャルルは「なに？」と聞き返すことになった。
「なに？」
もう一度、彼は聞き返してきたが、私は首を振った。

「ううん、何でもないわ」
「そう」
彼は心ここにあらずといったような、気のない返事をした。

通された部屋は、やっぱり、予想通り、このホテルでもっとも豪奢なスイートだった。

まぁ、シャルル・ドゥ・アルディともあろう人が、ビジネスホテルクラスのホテルに泊まるとは思えないし、ここのホテル自体が、セキュリティが高く、外国の要人がよく利用するホテルだ、と輸贏名が基礎知識を披露していたっけ。

---

■35

Mail・Mail・Mailそして邂逅

****Marina　再び

「さ　どうぞ」
恭しく、アルディ自らが招き入れる。
ナイトのような儀礼でもって迎えられた扉。
このフロアが、特別な宿泊客のためにしつらえた特別な空間であることを思い知らされる。

通された客室は、一言で「豪華絢爛」だった。
この言葉を使わないで、うまく表現できる日本語を知らなかっただけだけれど。

「これまた贅沢な部屋ね」

私は周囲を見廻した。
二方がガラス張りのリビングは、まだカーテンが閉められていなくて、都内の夜景が一望できた。
目を凝らして良く見ると、遠くに、時間によってイルミネーションが変化するブリッジや、観覧車が見えた。

「ああ、始終、いろんな人が立ち寄るから。朝のミーティングをここで始めてしまうこともあるし」

私の知らない長髪の紳士は、部屋に入るなり、ポケットから煙草を取り出して、いきなりたずねた。

「吸って良い？」
と言い、私の答えを求める前に口にくわえた。
まるで、それを許可してもらえる空間をさがしていたかのように。
まるで、部屋の香りをかき消すかのように。

彼が取り出した煙草の外箱は、日本語が記載されていた。
シャルルのことだから、煙草を吸うときにはきちんとシガレット・ケースに入れていると思う。
けれども、剥き出しの煙草の箱は、彼がかなりの頻度で喫煙していることを表していた。

と、いうことは、彼が日本に来てから購入したものであり、彼は、普段煙草を常喫としているのであるということは推測でも憶測でもなく、きっと事実だろう。

「・・・煙草、吸うの？」
「ああ、ときたま、ね。吸っても良いかな？」
すでに口に細身の煙草をくわえて、火を灯しながら彼は短く言う。
たまに吸う人の台詞ではないでしょう。
私は薄く笑った。

私は内心苦笑しながらも。

「どうぞ」と言った。
なにより、ここはシャルルの客室なわけだし。

私があれこれ言う筋合いではない。

彼の健康を気にする人はたくさんいるはずだから。

---

■36

Mail・Mail・Mailそして邂逅

****Charles

彼女は、警戒しないで部屋に入り込んだ。
いや、警戒の気配を感じさせないで部屋に入り込んだ。

「これまた贅沢な部屋ね」
入るなり、吐息をついて彼女はそう言った。

そうかな。
自嘲する。

仕事でプライベートもオフィシャルもない彼にとっては、この程度の贅沢は贅沢ではなかった。

朝起きると。
しばしぼんやりする。
朝食を兼ねながら、書類に目を通し、目が醒めてきた頃にシャワーを浴び、用意された、いくつかの着衣の中から、自分でその日の気分で衣服を選んで、ネクタイを決める。

髪を梳き、タイを締めてよく磨かれた靴を履く頃には、その日の仕事に関するメールやFAXがたくさん届いている日々。

帰ってくれば、もう夜明けで、それからまた少し雑事を片付け、シャワーを浴び、ほんの少しアルコールを摂取して軽い眠りにつく。

そんな日々をうらやましがる者も多かったが、彼女は、羨望の様子は見せず、ただその時に感じ

たことを無機質に発しただけだった。

その素っ気なさが、
「あなたの本当に望んだ生活なの？」
言外でそう、言われているようで、落ち着かなくなった。

ポケットにしまっておいた煙草を取り出して、「吸って良い？」と尋ねる。

ガラス張りのリビングから見える夜景に夢中になっていた彼女は、「・・・煙草、吸うの？」と尋ねた。
「ああ。ときたま、ね。吸っても良いかな？」

もう、口許の煙草には火がついていたけれど。

部屋に入った瞬間、ほのかに、先ほどまでの秘め事の香りが漂った気がした。

それに彼女が気がつかなければ良いのだけれど。
彼は、まるでその痕跡を隠すかのように、煙草に火を付ける。

リビングのテーブル上の灰皿には、すでに綺麗に片付けられている。
ほんの数刻前までは、口紅のついた煙草と、彼のよく吸う銘柄が混ざり合っていたのだが。

情事の後に、別の人物・・・とくに、待ち望んだ相手を招き入れることに、彼は緊張を感じていた。

とくん。
とくん。
とくん。

軽い興奮といった方が、近い衝動、かもしれない。

でも、彼女に今日、逢えると思わなかった。

部屋に通さないで、近くの別の空間を確保することだってできた。

でも、それすら判断できないくらい、彼は彼女に吸い込まれていた。
軽い疲労とアルコールと、これまでの夢想が、彼を異次元の空間に誘っているかのようだった。

甘えていたのかもしれない。

マリナ・イケダはかつての彼女の面影を留めていながらも、まったく外見が変わっていた。

色素が薄いな・・・

彼が、ロビーで彼女を見たときの印象だ。
シャルル自身、色素が薄い人種なのだが、マリナは東洋人でありながら、色の薄い女性だった。

茶色の黒目がちな瞳が、そのような全体的な印象を与えていたのかもしれない。

昔の「青春の輝き」の頃と、体重は変わっていないかもしれないが、身長が伸びたせいで、ほっそりした印象を受ける。
伸びた髪も、サイドに流して軽く留めているせいか、顔の輪郭が以前よりも鋭角的であるように見えた。
印象的なのが、象牙色の肌、だ。
これは、東洋人にとっては、「白い」に相当する。

長らく太陽光にあたっていないせいだろう。
肌理も細かく、漂白したか、切り出したばかりの象牙を思い出させる。
大きな目が、年齢よりも幼く見せていた。

ラフな格好ではあったけれど、彼女が一介のOLなどではなく、何か創作系を生業とする人物であることは見て取れた。

ああ、君は変わったけど、変わらないままなんだね。

紫煙の中、彼はまるで幻を見るかのように、目を細めた。

まだ、二人は部屋に入ったばかりで、彼女と会話を交わす前に、すでに彼は、その彼女の姿を見ただけで、万感の思いを味わってしまっていた。

まるで、天女の衣を、触ってしまった漁師のようだ・・・
その衣を返さなければ、天女は天に帰れないけれど。

でもそれを返せない。
・・・返さない。

日本の古典を、思い出していた。

---

■37

Mail・Mail・Mailそして邂逅

****Marina

警戒しないで部屋に入ったわけではなかった。
相当の、年齢を重ねた男の人の部屋に、入るという意味がわからなかったわけではない。

だからこそ、最初は帰るとあれほど言い張ったのだ。

だけれども。

でも、そういった男女の煩わしさをシャルルにかぶせて、長らく音信が絶えていた、苦境を乗り越えて成功した友人にねぎらいの言の葉を差し出せないくらいの狭量な自分であることは耐えられなかった。

目の前に立つ、シャルルは私が想像していた以上に、洗練されていた。
別れたすぐ後は、きっといろいろと大変だったに違いない。
その大変な次期を、私は自分の恋に夢中になっていたせいで、連絡をすることを怠っていた。
彼の近況を想像することを忘れたくらい、想像力が欠如していた。
だから、頻繁に連絡を取ることが出来ないであろう環境であることは充分わかっていたのに。

そんな後ろめたさが私の口数を少なくさせていた。

夜景を眺めながら、私は豪華なソファの脇に、鞄を下ろした。
彼を眺めることが出来なかった。

「本当に久しぶり」

万感の思いを込めて、吐き出すように、そう言った。

煙草の煙が流れ込み、彼の煙を吐き出す「音」が聞こえていただけだった。
静かだね・・・

そう思いながら。

「元気にしていた？
本当に、この間はありがとう。
こんなにインターネットが普及する世界がやって来るなんて、思っても見なかったよ。
いつか・・シャルルが言っていたとおりの世界になっちゃったね、あはは」

明るく、そう言ったけれど、シャルルからはいらえがなかった。

沈黙は、私を落ち着かなくさせる。

ソファの周りをぐるぐる動き回り、窓際の夜景をなぞるように無駄に歩き回る。

「どうしていたの？元気だったの？明後日に帰るということは、ずいぶん慌ただしい日程だよね
ああ、日程と言えば、ジルから連絡が来て、ここにシャルルが泊まっていることを知ったのよ。
なんだか、押しかけファンみたいで、いやね」

つまらない、意味のない言葉だけがすらすらと出てくる。

本当は、こんなこと、言いたかった訳じゃないよね？

「・・・マリナは・・・倖せ、だった？」

ソファの反対側に座り、私の様子を一部始終見聞きしていたシャルルは、煙草の尖端を灰皿に押しつけると、短く、そう、言った。

---

Mail・Mail・Mailそして邂逅

****Charles

部屋に戻った瞬間、しまったと思った。
先ほどの情事の痕跡を、マリナに感じ取られては決まりが悪いと思ったのだ。

確かに、マリナと自分は恋人同士でない。
だからこそ、知って欲しくない自分の生活に、彼女が踏み込むほど鈍感であったのなら、彼はこれほど気を回すこともなかっただろう。

知って知らずか。

マリナは、少しだけ開いている窓辺に向かって歩いて行った。
「これまた贅沢な部屋ね」
彼女は、確かに、そう言った。

ポケットから煙草を取り出して、意味もなく煙を出すことに専念する。

こういうとき、喫煙者は表情をごまかし、精神を安定させ、あまつさえ、先ほどの情事に耽った痕跡さえ消し去ろうとするものであるということを・・身をもって知った。

8年ぶりに再会した、何度も夢に見た光景とは違う現実だった。

再会したときは、日本のロビーで書類を床に散乱してしまったことに気を取られる彼女を抱き締めるだけで精一杯だった。

このまま、パリに攫っていってしまおう。
とか。

部屋に連れ込んで、軟禁状態にしてしまおう。
とか。

彼の妄想は尽きることがなかったのに、いざ、彼女を前にしてしまうと、口数少なく、ようやくゆっくり話ができる空間に立ち並ぶことを実現するだけで、彼は四苦八苦していた。

■39

Mail・Mail・Mailそして邂逅

****Marina

「元気に過ごしていたわよ」
私は、そう言うのが精一杯だった。

煙草の火を消し、こちらに向かって視線を投げかけるシャルルに、言葉が詰まった。
涙が、出そうになる。

「シャルル、元気だったの?元気にしていたの？ちゃんと近況報告してくれないとダメじゃない。
私たち、友達でしょ？
8年間、誰が訪ねても良いように、引っ越しもしないし電話番号も変更しない毎日を想像してよ」
たたみ掛けるように続けた。
言葉が止まらない。

「ちゃんと寝てるの？ご飯は食べているの？
こんなに短くて忙しい滞在を繰り返しているの？
あなたの大事な人達は元気にしているの？」

「マリナ、マリナ」

記憶に残る声より、トーンの低い声で、シャルルは座っていたソファから立ち上がった。

綺麗に清掃された部屋。
生活の匂いがしないホテルの一室。
まるでシャルルの生活そのものだ。
彼はクリスタルの世界に住んでいる。
綺麗で荘厳で、だけれども透明で自分自身が透けて見えてしまうから、自分自身をその内側に隠してしまうような世界。

シャルルは、立ち上がって、意外な行動を取った。

くるっと背中を向けて、ミニバーに向かい、シャンパンプールで冷やされたシャンパンのボトルと、隣に用意された銀分をこちらに運び込んだのだ。

「感情の起伏の沈静化には、アルコールと糖分だよ、マリナちゃん」
彼はそう言って、先ほどの約束ごとであった、シャンパンとショコラを私に差し出した。

ショコラは先ほど味わったものと同じで、金箔の薔薇の開き加減が微妙に違う、繊細なつくりのリキュールボンボンだった。
シャンパンは、きっと、どの味のショコラにも合うのであろう。
ロゼ色の液体が泡立ち、目の前のグラスに注がれていった。

「さ。お食べ。脳内に栄養を行き渡らせて、このシャンパンで再会を祝おう」

シャルルなりの、再会の開始宣言だったに違いない。
私はグラスを受け取った。

---

■40

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

****Charles

彼女の、スローモーションのような瞬きが何よりも印象深かった。
黒目がちな瞳であるが故の仕草であった。

一瞬、一秒一秒、その瞬間を自分だけが特別な装置で時間を留めているかのような、そんな錯覚を覚えた。

恋い焦がれた相手が、数年ぶりに同じ空間に居るというのに。
彼の妄想の中では、彼女を押し倒し、有無を言わさず自由を奪い、そして永遠に彼のものにする、性急な方法でしか、彼女のすべてを手に入れることができなかった。

だがしかし。

再会は思いもかけなく、始まってしまった。

彼女は、数多いる友人のひとりと再会した、としか思っていないらしい。

自分をかつて好きだと言った男の部屋に入り込んだ者の、シャンパンやルームサービスのショコラに喜び、夜景に感心して、部屋の間取りをスケッチしたいと言い出す。

理解不能で予測不能がマリナ・イケダなのだ、とわかっていても、ただひたすら彼は驚くばかりだった。

オレ達は、時間を埋めるような会話を、まだ始めていないだろう？

「煙草を吸っても良いかな」

それは、彼の開始の合図だった。

いや、シャルルのメッセージはマリナには伝わらなかったわけだから。
これは彼の儀式でしかなかった。

なんの儀式だ？
自分で自分に問い掛ける。

数時間前に味わった、怠惰の愉楽を浄化するように。
彼女が、彼の結界の中で、出られなくなるように。

呪術めいた気持ちでもって、煙草を吸った。

■41

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

****Marina

煙草をたまにしか吸わなかったら、そんなに慣れた仕草で吸わないわよ。

さすがのシャルル・ドゥ・アルディでも、その衝動は抑えきれないのだろうか。

私は小さく溜め息をついた。

ソファに小さく腰掛ける。
彼が注いでくれたシャンパンは、淡いピンク色をしていて、先ほどの櫻色のカクテルを思い出したが、また違った色合いだった。

少し高く掲げて私は微笑む。

捧げる言葉は決まっていた。

再会に。
シャルルに。

「乾杯」
「再会に、乾杯」
シャルルが言い直した。

ボトルを見ると、なにやら高そうなラベルが貼ってあった。

私には極上のものや芸術を理解できる五感は鍛えられていたけれど、私自身がそれを紡ぎ出すことが出来ないということは、よく理解しているつもりだった。

シャルルはこれらを無造作に享受することが出来る環境にあることもわかっていた。

それで、私は一体何をしたいのだろう。

アルコールがほどよく回っていた上に、またシャンパンを飲んだものだから、私の思考能力が麻痺していくのを感じる。
少し、目を細めて、目の前の人物が幻でないか確認する。

沈むソファに互いに向かい合わせに座り、間には磨き込まれたガラスのローテーブルがある。
それは、どうにもならない距離のように感じてならなかった。

かつて、良きにつけ悪しきにつけ、抱擁し、相手のために泣いたり怒ったり笑ったりした間柄だ。
それなのに、今、こうして距離を置いて向かい合っている。

自分で距離を開くような発言をしたのに。

一体、自分は何を求めているのだろう・・・

私は、支離滅裂な自分を認めたくなくて、考えを振り切るかのように、フルートグラスに注がれた薄桃色の液体に口を付けた。

この間、シャルルが何を観察していたのかは、まったく気がつかなかった。

ただ、解っていることがひとつだけ。

私服であるシャルル。
ということは、ベッドメイキングをされた部屋は、不自然だった。
一度部屋に戻ってきて、私服に着替えたシャルルは、誰かをこの部屋に入れたのだ。
仕事なのかプライベートなのかは考えたくなかったけれど。
空気の入れ換えを行い、喫煙するシャルルのために空気清浄機が盛んに稼働していたが、私の嗅覚はそれほど鈍くなかった。

数時間前まで、ここに居たであろう、女性らしい香りをかいだ。

・・・この香り。何度も吸った香気だ。

一度目は、バーの待合場所で、すれ違った人から。

二度目は、フロント入り口ですれ違った女性から。
三度目は、私との再会を抱擁で迎えてくれたシャルルから。
四度目の香りだ。

私は、何をしたいのだろうか。

■42

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

****Charles

最初は、他愛もない話だったはずだった。
まずは、パソコンの御礼を、またしても改めて述べるマリナから話は切り出された。

シーソーゲームのように。
二人の声が交差した。
でも、大抵がマリナの質問に答えるだけだった。

彼がこれまでに習得した知識と実戦の中には、
「あまり親しくない人物と、久しぶりに会話した際の、話を進める法」というレシピがちゃんと容易されており、どんな相手でも会話を退屈させないノウハウは持ち合わせていた。

「あまり親しくない人物」のカテゴリにマリナ・イケダが当てはまらないことは明確であるが。
話の希望かもしれないけれど。

このシャンパン、美味しいね、とか。
このショコラ、さっきバーで食べたのだけれど、美味しかった！とか。
仕事のこと。
転居しないでかつての場所でまだ生活していること。

彼女はソファに浅く座り、美味しそうにショコラを頬張り、シャンパンの色合いに興奮していた。
純粋に、今の空間とシチュエーションを愉しんでいる。

ショコラを頬張るときに、彼女が思わず口許に左手を持っていった際、彼女の指にはリングがないことを確認した。

とくん。

また、何かが動き出す。

「バー？オレもさっき、居たよ」
「そうなの？実は、私もさっきまでそこに居たのよ」
「どこに？」
「カウンターに座った」
「オレもだよ・・・」

ああ、そうね。
何もかも承知していたかのように、マリナは軽く頷いた。
「実はシャルルとはあそこですれ違っているのよ」

ぎょっとして目を見開き、凭れていたソファから身を起こした。

マリナは少し得意げに時間経過を説明し出した。

「カウンターで良いならすぐ席を用意できるけれど、あいにくと他は満席だからと言われて、入り口で座って待っていたの。
そうしたら、目の前をシャルルが通り過ぎて・・・
後でその人がシャルルだと気がついたので、その時にはわからなかった。
ああ、座っていたし、目の前を通り過ぎる腰の辺りの部分しか見えてなかったの。
最初はわからなかったけれど、その上着の色と、香りがシャルルのものだったわ」

香り？
先ほどシャワーを浴びたばかりで、彼は何も身に纏っていない。

嫌な予感がして、吸いかけていた2本目の煙草を、じゅっと灰皿に押しつけた。

マリナはシャンパンに口を付けながら、言った。
まるで死刑宣告のように。

「その香り。ロビーですれ違った女性と同じ香りだった。
移り香だよね。
ねぇ、シャルルの彼女？
遠目でよく見えなかったのだけれど、ものすごい美人とハグしているの、見ちゃったよ」

悪戯っ子のように、好奇心旺盛に、かつ朗らかに言うマリナを。
一瞬、自分がどんな顔で見つめているのか解らなかった。

「そうか」
シャルルはそう短く答えただけだった。

反撃を、しないといけない。

■43

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

****Marina

慣れ、というものは不思議なものだ。
こうしてある一定の距離を保ったまま、アルコールという、感覚を麻痺させる小道具を遣いながら、談笑することが苦痛でなくなるまでには、それほどの時間はかからなかった。

シャルル・ドゥ・アルディと向き合っている。
思いもかけず。

互いの近況を、ごく簡単に話した。
そして、その近況は本当に私が知りたかったものでなかったし、彼に伝えたい内容でもなかった。

仕事が定期的に来るようになったこと。
ときたま、銀座の画廊に号数の小さい画を出させてもらえるようになったこと。
その代わり、絵付けの教室など、漫画以外の仕事を引き受けるようになって、銀座や東京にはちょこちょこ出てきていること。
家族は元気でつつがなく暮らしていること。
贈ってもらったパソコンの調子はすこぶる良好であり、大変に助かっていること。

シャルルは相変わらず、美しかった。
美しい、とい表現が相応しいかどうかわからない。

昔より逞しくなり、伸びた髪が頬にかかり、目つきも少しだけ、鋭くなった。
記憶していた青灰色より、少し薄い瞳の色でこちらを見る。

「そういえば」
頃合いを見計らったわけではなかったが、私は切り出した。
かねてよりの、疑問を投げかける。

「パソコンが壊れてしまったこと、どうしてわかったの？
あまりにも、タイミングが良すぎない？
セキュリティメールが入ったとは聞いていたけれど・・・」
「もう話したと思うけれど」
ぽつっと彼はそう言った。

私とシャルルの会話は、シャルルが言葉を選んで話すことで成立する。
シャルルは、私がわかるような語彙範囲でもって話をする。
当然、言葉数も少なくなるわけだけれど、彼はそれ以外にも、何か考えながら言葉を切り出しているかのようだった。

他の話題に移りたいようだ。

「君のパソコンの外部機器に異常があったり、ソフトが正常に動かなくて復旧プログラムが働かなったりした時に、自動的に設定されたテキストが、オレのアドレスに転送されるようにプログラミングされていたんだ」
「私、そんなことは到底自分でできないわよ」

わかってないな、そんなこと当たり前じゃないか、とでも言うように、シャルルは少し苛立たしげに言った。
「カズヤだよ。・・カズヤが設定したんだよ。・・・聞いてないのか？」
「うん・・・」

責められているようで、なんだか辛かった。
カズヤとの会話を思い出しても、そんなことはまったく聞いてなかった。
私が思い出せないのかもしれないだけなのかもしれないが。

けれども、彼との会話、教えられたこと、日々与えられた安らぎのひとつひとつを忘れることなんてなかったはずだ。

「聞いてない、と思う。・・・覚えてないだけかも」

■44

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

****Charles

信じられない。
頭を、軽く振る。

「マリナ。状況を整理して、オレが理解できるように話をしてくれ」
言い方がきつかったかもしれない。
彼女はむっとして、それまで伏し目がちだった顔を上げた。

「そんな言い方、ないでしょう」
言いかけて、また唇を噛んで黙り込んだ彼女を美しい、と思った。
両脇を持ち上げた髪の毛がすこしほつれていて、頬にかかっていた。
悔しそうに唇を横に結んで、こちらをきっと睨む。

彼女は黒目が大きいので、童女のような視線がシャルルを昔に引き戻していき、彼を落ち着かなくさせる。
その一方で、即答できないでいらえに詰まっている彼女に苛立ちを感じていた。

「OK。じゃ、一問一答で。解説はその後だ」

シャルルは強引に自分主導の土俵をしつらえた。
「ウィかノンで答えれば良いよ」
そう言ってから、次々に彼女に質問をする。

これは心療実験でもよく行われることで、患者に回答の時間をほとんど与えずに、矢継ぎ早に質問することで、本人の真意と、反応時間から何を問題として抱えているのか調べる問答方法だった。

自分の知っている、あるいは予測できる回答を用意しながら、シャルルは短い質問を繰り返す。

「パソコンの設定はカズヤがしたんだね？」
「そう」
「そのような設定がされていることを、君は知らなかった？」
「そう」
「消耗期がおとずれて、壊れたときには、セキュリティメールが送信されたことも気がつかなかった」
「そうよ」
「その後、壊れたパソコンを誰も修理していない」
「誰か使うと言うの」
「と、言うことは、カズヤとは別れて、今は一人で。君を守るナイトはいないということだね」

マリナは導かれる回答を予測していなかったかのように、目を見開いた。
その回答を口にすることが、禁忌であるかのように。

「・・・・・そうよ」
くいっと、シャンパンをミネラルウォーターのように、マリナは飲み干した。
手酌でシャンパンを空のグラスに注ぐ。
また、飲み干した。

「カズヤとは別れたの。小菅でシャルルと別れてから、ほどなくして。以来、逢っていない」
「その説明では、わからない、マリナ」
わかっていたけれど、わからないフリをした。
要するに、カズヤとマリナはすでに破局していて、自分はその事実を知らず、まったく外の銀河系の星のように、彼女達の行く末さえ知らずに、無為な日々を過ごしていたわけだ。

■45

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

****Marina

「何を怒っているのか、わからないのだけれど」

アルコールは、偉大だ。

私をこんなに挑戦的で好戦的な性質に変えてしまう。
これは所謂「絡み上戸」というやつなのかもしれない。

明日は朝早い、とか。
今日は歩き回って疲れた一日だから、早く帰りたい、とか。

そういう煩悩が吹き飛んでしまうくらい、体中を下から上へ、何かが駆け上がっていった。

私は、ここ数年はあまり怒ることはなかった。
神経が、鈍いのだと思う。
怒りが湧いてくる頃には、大抵のことが終わってしまっていることが多かった。
昔の、瞬間湯沸かし器だった時代より、感情の起伏が乏しくなったように思う。

泣いて、笑って、怒った。
時にはふいっと出国してしまうような自由気儘さを持ち合わせていた10代は、もう、はるかかなたの出来事だった。

シャルルは、長い脚を組み直した。
間接照明の下で、ウールのパンツのストライプが、ちかちか光った。

挑戦的な、シャルルの瞳。
青灰色の瞳が大きく開かれて、瞬きの回数も、心なしか先ほどより減った気がする。
彫刻のような、その仕草。

8年前から変わらない。

彼が何かを考えている時の状態だった。
息をすることさえ、忘れているかのような・・・微動だにしない無表情さが私を息苦しくさせる。

ああ、変わってないんだね、こういうところ。

でも、私は変わってしまった。
変わってしまったと思う。

夢見たシーンが突如として再現されたのに、これを夢みたいと思う一方で、現実として受け止めている。

彼女は？と藪から棒に、無神経を装って尋ねてみたり。
カズヤとのその後をシャルルに、まるで問診のように尋ねられてむっとしたり。

支離滅裂で、今の私はちっとも理路整然としていない。
シャルルと正反対だ。

■46

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

****Charles

怒った顔がたまらなくそそるね

そう言おうものなら、彼女はすぐさまこの再会の空間から立ち去ってしまっただろう。
下唇を軽く噛み、両手が軽く握られて、まるでお説教されているこどものようだった。

「君が言いたくないのであれば、いつか、また聞くとして。」
和矢と別れたという事実を確認したかどうかで、その後の話の進め方が違う。

「・・・さっきの説明の続きだけど。」
シャルルは続けた。

「オレのアドレスに、緊急警告のメールが届いた。
それで、オレは君のパソコンが復旧不能であることを想定して、仕様を指
示してパソコンを送っただけだ。」
「・・・それは感謝してる。」

それは？

「それは感謝してる」ってなんだ？
では、何に不服だというのであろうか。
明らかに、彼女は何かに不服であるようだ。

こんなに、すいすいシャンパンを飲み干し続けているというのに。
相当、アルコールが好きなようだ。

でも、あまりアルコールには強くないのかもしれない。
彼女の目尻は見る間に赤く染まり、見開かれた瞳が、ひとまわり、小さくなったのが認められた。

「何を怒っているのか、わからないんだけど」
彼女がやぶからぼうにそう言ったの。

「それはオレの台詞だよ」
もう一度身を起こして、彼女を、ぐいっと見つめた。

目が合うと、そらすんだね。

「今の君は、まったく支離滅裂だよ。わかってるの？」
「・・・」

返事はない。

「順序立てて、オレ達の交わした会話を説明すると、だ」
ゆっくり、言い聞かせるように言う。

「ホテルの中で行き違ってしまったことは、詫びよう。」
シャルルは譲歩した。

「レディに、右往左往させてしまった不手際は、シャルル・ドゥ・アルディとして恥ずべき失態だと思うので、ここでこっそり謝ることにする。」

だけれども。

「でも、久々の再会で乾杯をして、君は部屋の中のスケッチを始めたいと言うし、酒は進むけど、君の今の近況はちっともわからない。

ーーーーあいつのこととか。
ダンジョウは元気か、とか。
オレと君には、そんなに共有したいと思う情報が少ないのだろうか」
少なからず、彼は憤っていた。

マリナが、何に怒っているのか、察しはついていたが、それを口にさせることにためらいを感じていた。
きっと、自分に決まった相手がいると、彼女は想っているに違
いない。

エレベーターで、思わぬ光景を見せてしまった。
この言い方から推察するに、断片的ではあるが、シャルルが女性と一緒だったことはわかっているはずだ。

しかも、移り香を指摘されるということは、この部屋での情事を察していてもおかしくない。

そんな部屋に通したことを怒っているのだろうか。

では、なんと説明するのか？

体だけの関係だから、君とは別の存在だ、とか。
君をまだ想っている、とか。

答えは、ノン　だ。
そんな言葉が彼女を満足させられるとは、とうてい思えなかった。

ーーーーそもそも、彼女とは、数時間前に再会したばかりではないか。

■47

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

**** Charles ＆ Marina

「オレのほうこそ、わからないよ、マリナ。
　君がなぜそんなに怒ってるのか」

ゆっくり、区切るように、シャルルは言った。
身を乗り出し、膝の上で肘をたてて、じっとマリナを見つめる。

挑戦的な青灰色の瞳。
くせのない白金の髪がそこにかかって、月夜見の神様が舞い降りたかのような、
そんなイメージが頭に沸いた。

こんなに怒りっぽい神様は、なかなか、いないけれどもね。

くじけるのは、マリナの方だった。

軽く笑って、グラスを置く。
そういう笑いを身につけてしまっていた。

「怒ってない、わ。」
マリナから一筋たりとも視線をはずさないシャルルの顔を見ないように、伏し目がちに答えた。
表情を読まれたくなかった。

「ただ・・・ただ、そうね。びっくりしただけ。」
息を吸って、吐いた。

シャルルの前で、言葉を飾っても無駄だ。

彼は医師で心理学者でもあるわけだから。
かつ、人間というものの心を把握するための知識は、計り知れないぐらい膨大な量をその頭の中にしまい込んでいる天才であることを、再認識した。

まわったアルコールがマリナ・イケダの口を饒舌にさせた。
まとめる前に、口から出てしまう言葉に責任が持てなかった。

「忘れたわけではなかったわ。
でも、その・・・カズヤを連想させるあらゆるものが、煩わしくなって・・・距離を置こうって決めてしまって。
どうにもならなかったの」

最後の言葉は、ただただ途方にくれてしまったあの頃を、思い出しながら、ようようはき出した状態だった。

マリナはまた、うつむいた。

まだ、まだあの頃の痛みが彼女を支配する瞬間がある。
ジェットコースターの急下降のように。
臓腑が持ち上がる感覚に襲われる。

「・・・・顔を上げてごらん」
静かにシャルルがそう言った。

「もっと顔を良く見せて」

涙が出そうだった。

懐かしい再会。

あの日の風景、一コマ一コマが映画のコマ送りのように、よみがえる。
ただただ、憧憬が彼女を包んでいた。

稚拙なあの頃の自分。

戻りたいとは想わないけれど。

幸せで幸せで、輝いていた日々。
明日の自分なんてわからなかったし、どうなるかは考慮する必要がなかった。
どんなにどんなに苦しくても、次の日がやって来るのはわかっていたからだ。

「顔を上げないと、下から見るよ」
シャルルが、そう言った。
さっきと同じ台詞だね。

マリナは、唇の端を少し上げて、顔を上げた。
私は、これまでの生き方を悔いてはいない。

けれども、けれども。

シャルルと逢わずにいた後悔だけは、マリナの中で「仕方がなかったんだよ」と赦すことのできない、小さいけれど冷たくて固いいしこりとなっていた。

■48

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

**** Charles & Marina

「顔を上げてご覧」

そういったシャルルとマリナの距離は、いつの間にか近くなっていた。

それまで対面で座っていた彼と彼女の距離が、いっきに近くなった。

シャルルが90 度斜めに移動して、対角線上に席を移した。

伏せがちだった彼女の顔が、こうして横からのであればよく見える。

「まず、いろいろな誤解を解いて、順序立てて会話できる状態にしないといけない」

シャルルはそう言った。

そして、残り少ないシャンパンをマリナと自分のグラスに注ぐと、彼女にさらにアルコールを勧める。

彼はアルコールに酔う女性が好きではない。
男性もしかりであるが。

ろれつが回らなくなり、思考がおおざっぱになり、根拠もなく楽観的になる様は、見ていてあまり好感の持てる状態ではなかった。

だがしかし、今宵は違った。

アルコールの力を借りないと、行動を起こせない気がした。

‥‥こんな風に自分から距離を縮めたいと思う相手は少なかった。

もっと、彼女の顔を見たい。
もっと、彼女の話を聞きたい。

そういう欲求が、彼を疼かせた。

疼く。

その表現は適切だった。

何年も前に封印したはずの、箱が、今、開こうとしている。

■49

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

**** Charles ＆ Marina

「誤解・・誤解ねぇ」

マリナはぼそっと言った。

「まずは、その怒っているような態度を改めてくれ」
憮然として抗議する。

これまでの材料から彼女が不本意でないが、憤りを感じているのは間違いない。
彼は計算した。

計算だった。

推測ではなく、測定だった。

まずは、彼女の予想した再会とはほど遠い凡庸な会話で始終していること。
カズヤとの別れを詮索されたくないことからくる自己防衛。

アルコールの影響による、対人接触障害。いわゆる、からみ上戸というやつだ。
思いつく限りの理由は、これだけあったが。

逆にこれだけしかなかった。

彼女は、何が不満なのだろうか。
言わなければ伝わらないでしょう

いつか、かつての恋人がそう言ったことを思い出していた。
言わなきゃわからないことは、言ってもわからないだろ。

そう、切り返したのを記憶している。
しかし、今、シャルルは、マリナに何を伝えれば良いのかわからなかった。

「こどもみたいな拗ね方はよしてくれ」
彼はそう言った。
マリナが立ち上がる。

「そうね。お互い、大人だもんね。
再会できて、お礼が言えて良かったわ。
帰るわね。
・・・・終電もなくなりそうだし。」
マリナの表情が曇る。

引き留めて欲しいなら、そう言ってくれ。

でも、引き留めるオレを望むのであれば、君を、滅ぼすよ。

■50

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

**** Charles & Marina

「こどもみたいな拗ね方はよしてくれ」

シャルルにそう言われたマリナは立ち上がった。
自分が、なんだかひどく惨めだった。
彼に何かを期待していたことを、彼に悟られてしまったのだ。

移り香の女性とはどんな関係なの？
今、あなたのそばには誰かがいるの？

私は、恋がしたい。

誰かと。
シャルルと。

・・・・そうだろか。
本当にそうなのだろうか。

刷り込みされる雛のように。
今、シャルルへの何かしら情動を伴う期待が生じたのであれば、それは、慣れ親しんだ環境とはまるで違う空間と、アルコールに酔っているだけだと、数時間後には笑い飛ばす自信があった。

だから、だから。

一刻もここを離れなければならない。

怖かったのだ。

最初は、シャルルをがっかりさせたくない、と思ったから、逢わないで去ろうと思っていた。

でも。

シャルルとこうして再会してしまった。
後悔はしてない。
偶然に、再会してしまった邂逅だから。

でもしかし。

偶然を必然と信じて、これを運命だと断言できるほど、強くなかった。

・・・私は、こどもだ。

相手に、言いたいことを伝えられず、だだをこねている子供と一緒だ。

「・・・遅いから、帰るね」
そう言って、立ち上がる

シャルル。
ごめんなさい。

私はこれっきりであなたと縁を絶つことができない。

だから、嫌われてしまう前に、退散することを選ぶ。
何を怒っているのか、わからないから、がっかりさせないうち
に、消えてしまおうと思う。

私が立ち上がると、反射的にシャルルも立ち上がった。

紳士のたしなみとして身についているのであろう、計算されたと言うよりはむしろ、自然な習慣のように、流れる一連の動作でシャルルは動き始めた。

「マリナ　まだ、明けたばかりのシャンパンが残っているよ」
2 本目のシャンパンを指さして、シャルルはそう言ってくれた。

「ありがとう。もう、十分いただいたわ。もう帰らないと。
ああ、できればおみやげに持って帰っても良いかしら。」

彼に会うのであれば、もっとましな服装だって考えたかもしれない。
でも、これが普段の私だ。
TPO にあわせて、変更するような予定も洋服も持っていない。
住む世界が違う住人とは、長く一緒にいてはいけない。

私は立ち上がり、「ごちそうさま」と小さく言って、ソファの端に置いておいた、仕事用の鞄を手に取った。

「マリナ。」
シャルルは足早に扉に向かうマリナに近づいた。
見上げると、すぐそばに、彼が居た。

「・・・元気で」
元気で。
小さく、もう一度、繰り返した。

私は、右手を差し出した。
友情の印の握手。

抱き合うことは、できなかった。

先ほどの抱擁が思い出される。
力強く、だがしかし、遠慮深げな抱擁。
もう二度と、その腕にくるまれることは、ないと思っていたのに。

「・・・帰ってしまうのか？」
「うん。明日は朝から打合せがあるしね。
シャルルも、予定が入っているって言っていたじゃない」

男女が集う時間にしては、さすがに夜更けと言える時間であった。

終電、間に合うかな。
間に合わなければ、タクシーでもやむを得ない。
最悪、歩いて帰ったって問題ない。
目の前のシャルルに別れを告げることと、終電が云々が同列であることが悲しかった。

「いやだ」

「・・・は？」

あとは扉を開いて、エレベーターで出口に向かうばかりの、この状況で。
シャルルは、そう言った。
絞り出すように、低く。
静かに。

そこで、もう一度シャルルを見上げた。
長身の、白金の髪。
整った顔は、横を向いている。

今度は、こちらが「顔を見せて」と言わなければ、その表情がうまく読み取れなかった。

「あの。よく、聞こえなかったんだけど」

「いやだ、と言ったんだ。」

「・・・はあ」

私は素っ頓狂な声を上げた。

シャルルが何を言っているのか、まったく理解できない。

えーと。

しびれた頭で、考えをめぐらす。
私とシャルルは、会話をちょっとして、でもかみあわなくて、気まずい思いをして、それで私は明日の仕事をおもんばかって、帰ろうという、その瞬間だよね？

「何が、いやなのかわからないんだけど」

私は怪訝な顔していたと思う。

「このシャンパンをお土産に持って帰ることがいやなの？

だったら、後で飲めばひとりでも　誰か他の人とでも、飲めば良いのではないの？」

・・・・・無神経な女。

シャルルは、そう思った。

マリナ・イケダという人物は、昔からそうだった。

無神経で、配慮に欠け、相手の心の機微を読み取るまでに時間がかかる。
でも、少し息を整え、片手にシャンパンのボトルを持ったまま、白金の髪の王子は、部屋の扉のノブを、その優雅な細い指を持つ手のひらで隠してしまった。

・・・そうして、少しの沈黙。
彼女は困惑していた。

いや、彼が自分を引き留めたいということはわかっていたけれど。

遊び相手の帰宅を悲しむ童子のように。
彼は、所在なげに目線をそわそわさせていた。

少しの沈黙を、お互いが受け入れることにした。

沈黙の間、互いが考えていたことはそれぞれ違っていたけれど。
シャルルは辛抱強く、一言一言を区切るように、思い切ったように言った。

「君をこのまま、帰してしまうことが、イヤだという意味だ」

■51

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

**** Charles & Marina

「ちゃんと座って。話をしよう」

シャルルの言葉。
ねぇ、シャルル。
私とあなたは十分、話をしたと思うけど。

「話って・・・。ねぇ。
私は帰ると言っているのだけれど。
また、今度、話しましょ。
そうだわ、メール。メール頂戴。ね。」

期待をしてがっかりするのが怖かった。

彼女は扉のノブを回そうとして、手を伸ばした。

「・・・・ダメだ」

「ダメって、シャルル。」

私は悲鳴に近い声をあげた。
彼が何を意図してそう言っているのかわからない。

「あなたの言っていることのほうが、支離滅裂だわ。」
「・・・君の方が、常識人だね。」

酔っている風でもなく、シャルルは歌うようにそう小さく呟いた。

今、部屋の出口で、帰る・帰らないで押し問答をしている様は、明らかにあれから8 年を過ごした、シャルル・ドゥ・アルディではない。
大人の態度ではない。

完全に、マリナと最後に別れたときのシャルルであった。

・・・・抑制がきかない。

ダメだ。

オレは、君をこのまま帰せない。

期待をした結果が得られないことを想定したくなかった。

■52

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

***Charles

「・・・シャルル、わたし達は、友達でしょう」
「そんなの、知らない。」

シャルルは、吐き捨てるようにそう言った。
マリナが、少し呆れたように口を開いた。

「君はずるいな、マリナ。」

彼女の言葉を待つより前に、そう言って、怒りとも困惑ともつかない表情でシャルルを見上げるマリナを軽くにらんだ。

憎らしくて、愛おしい。
愛おしいのに、憎らしい。

そんな存在は、この世で彼女ひとりであることに、どう伝えたら、彼女本人は気がつくのだろう。

「あの。本当に帰らないと。」

マリナは困ったように、首を少し曲げて、また、ゆっくり瞬きをひとつ、した。
彼女のこの仕草が、シャルルに、完璧に築き上げた理性という砦をひとつずつ崩していくことに、知って知らずか。
彼女は、もうひとつ。ゆっくりと、ゆっくりと、茶色の瞳を伏せがちにして瞬きをした。

「シャルル。困らせないで欲しい。」
「君は、本当に、常識人だね、マリナちゃん」

ゆっくり、シャルルが動いた。

何かを合図としたわけではなく。

ここまでの道程の、緩やかな斜面を登り切って、一度に同じ角度の斜面を墜ちていく。

そんな突如とした、でも予定されたかのような動きだった。

「君を帰れなくするのは、簡単なんだよ。」

そう言って、シャルルは、マリナに一歩近づいた。

片手に鞄をさげ、七分丈の上着を片手に持ち、ほんのり上気した彼女。

ーーーー彼女を壊したい。

その衝動が、彼を動かした。

次の瞬間。

マリナ・イケダは、きょとんとした表情になった。

何か起こったのか、まったくわからなかった。

本当に、状況を把握できなかった。

本当に、無心の表情で立ち尽くした。

■53

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

*** ちょっとだけ　Marina

私は、泣きそうになったが、口をつぐむと、涙が代わりに出てきそうだったので、笑うことにした。

ごまかしの笑いは、むなしかった。

「・・・シャルル、わたしは、あなたの、友達でしょう」

笑いながら、そう言った。
ゆっくり言った。
早口で通り過ぎることの出来ない言葉だった。

彼は首を振った。

「そんなの、知らない。」

シャルルは短く、即答した。

知らないって・・・。

私はどうすればいいのよ。

肩に提げた、仕事用の鞄が、ぐっと重みを増したように、感じた。

シャルル。

私はシャルルを、一時の情事の相手に選ぶことなんて、できなかった。
ここで、アルコールのせいにして、彼の言葉を都合良く受け止めても、きっと傷つくだけだった。
彼が何を伝えようとしているのか、わかっているようなわかっていないような、そんな状態を愉しむ事なんてできやしなかった。

きっと、シャルルを後悔させてしまうことになることはわかっていた。

彼は、否定をしなかった。

彼にまとわりつく女性の影と香り。

私は、「遊びだから」と割り切れる関係になれないであろう、ということは自分の性質上、よくわかっていた。

だからこそ。

この空間・この時間に酔いしれることができないのであれば、この結界から逃れなければならないと思い至ったのだ。

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

***　再び　Charles

手に持っていた、シャンパンを、彼女の頭の上から、かけたのだ。

全部。
本当に、全部。

ぱっと、あたりにシャンパン特有の芳香が漂った。

次に、瓶から出た炭酸が、しゅわっと泡立つ音が、響く。

全部注ぎ終わるまで、ちょっとした時間はかかっていたはずだったのに、彼女はその状況が理解できないというかのように、微動だにしなかった。

ピンク色の液体は、彼女の頭頂部から、頬に流れ、胸元、そして全身へと広がった。

立っている靴と、冷たい質感の玄武岩の玄関床との間に、水たまりができて、それが時間を経過すると同時に面積を広げていった。

「―――ほら、これで帰れなくなった」

シャルルは、少し得意げに、言った。

瓶が空になるまで、彼女に注ぐと、彼は瓶をその場に置いた。

からん、と中身が空であることを知らせるように、想像するより大きめの音が、響いた。

これが合図であったのかのように、静止していた彼女が、ゆっくりと、動き出した。

最初は、やはり瞬きだった。

一回か二回、大きな瞳が、まぶたに隠れては現れた。

そうして、ゆっくりと、鞄を提げていなかった方の手で、下を向き自分の胸・腰・股に触れて、最後に、自分の頬に自分で触れた。

次に。

また、ゆっくりと、靴元の水たまりを見て、股・腰・胸と目線を上げていった。

シャルルと、目が合う。

ぼんやりとした焦点の合わない目つき。
状況が把握できていないときの、特有の目線だった。
もう一往復、目線を上下させて、彼女はぽかんと口を開けた。

茶色い、黒目がちの瞳が、シャルルを捕らえた。

「シャルル！！！！！」

■55

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

***Charles

彼女の第一声は「なんて・・・なんてもったいないことをするのよ！」だった。

この反応には、シャルルの方が、驚く番だった。

「あああああ！！！飲み物をムダにするなんて！これ、すっごく高そうなシャンパンなのに！！！」

マリナは、その場で地団駄を踏んだ。

シャンパンの泡が残る床上の水たまりの上で、足踏みをする都度、パシャパシャと音がした。

ヒールの低いパンプスを履いているので、靴にまで液体が浸透したようだ。

雨上がりを愉しむ長靴姿の子供の姿を連想させる。

「・・・地団駄踏む成人女性を初めて、みたよ」

皮肉な言葉をかける、というより、思わず口を突いて出た言葉だった。

「あんた、自分が何をしたのか、わかっているの？？」

マリナは、怒りを爆発させた。

まだ、地団駄を踏んでいる。
顔が赤いので、赤鬼のようだ。

シャルルはそう思ったが、口に出さないことにした。

彼女が、自分を怒っている。
どういうわけか、それが嬉しい。

■56

Mail・Mail・Mailそして邂逅　　燻る

***Marina

最初に、何が起こったのか、さっぱりわからなかった。

冷たい液体が、頭の上から、シャワーのように降りかかって、それが自分のからだを、洋服を、床を濡らしていたことが、自分事でないかのように、見えた。

次に、シャルルが、空になったボトルを放りだして、
「ほら、これで帰れなくなった」
と、得意げに頭上から声をかけなかったら、私は我に返るに要する時間が
もっともっと長かったに違いない。

「あああああ！！！何をもったいないことをしているのよ！」

私は憤った。

憤りのあまり、彼に平手打ちをすることもできたのだが、怒りのあまり、体が動かない。

肩に提げた鞄はびしょ濡れでしずくがしたたり落ちているし、しずくと言えば、髪の毛は頬や額に貼りつているし、つまり、全身ずぶ濡れの状態だった。

「シャルル！あなたね！！！
私がお土産に持って帰りたいって言ったのが、そんなに腹立たしかったの？だったら言えばいいじゃない！！！
あああ！！！！もう！
ほんとにもう！
なんなのよ！
なによ　これ！！！
ほんっとに金持ちのやることはわからない！信じられない！」

私は軽く足踏みした。

憤りを表現できない人間は、地団駄踏むんだなと、身をもって証明したようなものだ。

「怒っても、いいけど。」

こんな状況を作った本人が、いとも冷静に、言った。

なぜか、彼は余裕の笑みを浮かべている。明らかに、状況を愉しんでいる。
軽く腕を組み、こちらを見下ろしていた。
玄関の、間接照明が、彼の頬の輪郭をくっきりとうつしていた。
ため息をついている場合ではない。

それに、彼のこの不適な笑みが気になった。

「その状況で帰れないだろ」

そこで、私は初めて自分の状況を認識した。

あああああ！！！！！！

思わず叫び出す。

白いシャツは、まだらの薄桃色に染まり、下のキャミソールが透けて見えている。
モスグリーンのバギーパンツは、股にぴったりと張り付き、このまま歩き出せば、下着のラインがくっきりと現れそうだ。

豪雨に降られてしまったときのように、靴の中身まで水浸しだったし･･･いや、酒浸しか･･･髪の毛は頬に張り付いた状態だった。

憤りのあまり、言葉がうまく出ない。

「しゃ、シャルル・・・」

唇をかんで、彼を見上げると、彼は、にやりと笑った。

「ほら、簡単だ。」

抗議する権利は、私にはあったと思う。

でも、憤りを通り越して、顔が赤くなったり青くなったりで、拍子抜けしてしまったというのが、正確なところだった。

■57

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Charles&Marina　どちらかというとMarina

「部屋から出られないのだから」

シャルルは、出口から再びリビングに場所を移した。

「シャワー入ってくれば？このままだと、風邪を引くし、シャンパンの糖分で、
じきに服が張り付いてくるよ」

そうして、何事もなかったかのように、一本、煙草を取り出して火をつけた。

最後の一本だったようだ。
箱をくしゃっと丸めて、ごみ箱に放り込んだ。

‥‥毒気を抜かれてしまった、というのが正直な表現だった。

こんな行動を取るとは、思ってなかった。

そうして、今のこのほんの数分間の所業を謝るどころか「ああ　大変だね」と、他人事のように言っている。

「ちょっと・・・シャルル！自分が何をしているのか、わかってるの？
どうしてくれるのよ！これじゃ帰れないじゃない。」

「だから。」

シャルルは、ソファで煙草の煙を吐き出しながら、視線をこちらに流した。

「帰らなきゃ、いいだろ」

ああ、もう。
堂々巡りだ。

とにかく。

彼の行動は後で追求するとして。

私は大きく深呼吸を三回ほど、してみた。

まずは、起こってしまったことは仕方がないから、この濡れねずみの状態を何とかしなければならない。

この様子では、電車どころかタクシーにも乗れない。

それより、濡れて水滴の光る安物の腕時計を見て時間を確認すると、終電はとうてい乗れそうにもない時間だった。

「シャワー、借りるわ。ゲストルーム、借りるわね」

そう言ったところ、「メインルームを使ってくれ」シャルルはそう言った。

「タオルもバスローブも揃っているはずだ。」

ゲストルームは、あの、大切な人のための空間なのかもしれない。

大切な人との時間だったら、ゲストルームこそ、使わない空間なんだけどなぁ。

体温であたためられ、香り始めたシャンパンの匂いにくらくらしながら、返事をした。

「・・・わかった。じゃぁそっちを借りる」

おとなしく頷くと、そこだから、と指を差し示された、広々としたメインルームの扉を開いた。

■58

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Charles

マリナがシャワーを浴びている。

落ち着かない衝動が彼を襲った。

煙草をもう一本、吸おうとして、もうないことに気がついた。
先ほど、最後の一本を吸ったばかりだ。

今日は、ずいぶん吸うな。

ちょっと笑って、テーブルの上に残されたグラスに注がれた、すでに気が抜けた
シャンパンを飲み干した。

残りは、みんなマリナにかけてしまった。
自分の幼稚で大胆な行動が信じられなかった。

あのときの、マリナの表情。

当分、いや、ひょっとすると、彼の記憶に一生刻み込まれても良いような表情だった。

大人げない行動であったことは十分承知している。

いや、こどもっぽい行動であることを責められても、仕方がないと思った。

だがしかし。

これで、彼女がこのままこの場にとどまってくれれば、彼は今夜、眠らずにいることも厭わなかったし、「そのとき」が来れば、彼女を眠らせない状態にすることはできた。

でも、彼女を部屋に、泊めたいという理由ではなかった。

「泊めたい」と言うよりはむしろ、「留めて」おきたかった。

次の日のシャルルの行動予定を気にしたり、終電が、と気にする彼女を見たくなかった。

理由はシンプルだ。
そして彼は予定していない行動に理由を作った。

■59

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Marina

メインルームは、すでに、清掃されていて綺麗な状態だった。

無機質な、整頓されたバスルームで、服を脱いだ。

シャルル・・・行動予測ができないよ。

私は張り付いた服を脱ぎながら、彼の行動の意味を考えた。

お互いに、あの人について語るには、時期尚早だった。

まだ、8 年も経過するのに、まだ、うまく話せない。
まだ、言葉にできなかった。

シャルルを、どう思っているのか。

そして、彼が、10 代の若い頃のシャルルでありたいという気持ちが、私を帰らせたくないという気持ちにさせているんじゃないかと、思った。

今。

この瞬間のマリナ・イケダという日本人を、彼はどう思っているのだろうか。
がっかりさせたくないから、早く離れようと思ったのに。

バスルームは広くて、心地よかった。

このバスタブに、誰か別の女性と沐浴を楽しむシャルルを想像した。

熱めのシャワーを浴びながら。
軽い眩暈は、シャワーを急に浴びたからだと思うことにした。

私はこのあと、いったいどうするべきか、考えた。

始発の電車までは時間があるし。
それに、この酒臭い服では、出歩けない。

どうしたいのか?
私は考えた。

シャルルの予測できない行動が怖かった。

シャンパンをかけて足止めするシャルル。
移り香を残しながら、マリナを抱擁するシャルル。

シャルル、何をどうしたいのか、わからないよ。

だた、彼は、この古い知己をこのまま帰したくないらしい、ということはわかっていた。

痛いほどよくわかっていた。

彼は、昔から美しくて、そして孤独だった。

だからこそ、昔の彼を知り、彼ほほほえみを得ることができる無二の親友を知る私に、一緒にいて欲しいと願うことは、彼にとっては贅沢でも何でもないことなのだ、と思った。
私を見て、彼を思い出すのだろうと思った。

熱いシャワーを浴びていると、酔いが覚めてくる。

さて。
これから、すべきこと。
水蒸気で曇ったバスルームの鏡を、見た。

そこには、年齢を重ねた、平凡で凡庸な化粧っ気のない女が、いた。

彼の隣で微笑む女性は、自分では、ない。
それはよくわかっていたけれど。

それならなおさら、彼にとってあまたいるであろう、恋の相手には、決してならない。

彼の寵愛を求めて、泣いたり笑ったりして、彼とのつながりを絶つことはできないし、耐えられない。

そう、決めた。

思ったのではなく、決めた。

■60

Mail ・Mail ・Mail

***Marina　再び

バスルームを出るときは勇気というか、思い切りが必要だった。

特段、化粧はしてなかったがこの「風呂上がり」の状態はやはり堂々と見せるものでない。
特に特にシャルル・ドゥ・アルディには。
風呂上がりだというのに、酔いが覚めてきているのであろう。
鏡の向こうには、青白い顔の、平凡な日本人がたたずんでいた。

真っ青なバスローブは、袖口に銀の刺繍が施されていた。
ホテルにありがちな色あせも、洗いざらしの感触もない、上等のものだった。
シャルルが使うはずだったに違いない。
小柄な私には丈が長く、袖は余ってしまっていたし、腰紐の位置も低すぎた。
着るものがないのだから、仕方がない。

ため息をついて、「ほんと　信じられない！」と一人毒づいた。
着物の裾上げの要領で身頃をたくし上げ、バスルームの紐で調節する。

ああ、シャンパンが。

もったいない
もったいない
もったいない！！！

稚拙な行動を取ったシャルルに対して、怒りがふつふつと、再びこみ上げてきた。
だが、いつまでもメインルームのバスルームを占領することはできない。

久々に都内に出てきたこともあり、体が疲れていた。
できることなら、明日のネーム打合せの前までには、少しでよいので仮眠を取りたい。

私は、もし、仮眠を取るのであれば、ゲストルームか、リビングのソファを使わせてもらうつもりだった。

酒浸しになった服は軽く水洗いして、干しておけば程なく乾くであろう。
着色が落ちにくいであろう部分もあったが、上着は濡れなかったので、これで隠しながら何とか帰宅できるかなと、思う。

靴は、水洗いはできない。
仕方がないので、水気を切って、そのままにした。

バスルームを出ると、メインルームのベッドルームに、出た。
どきん、とした。

先ほどは夜目になれていなかったせいもあって、気にならなかったが。
シャルルが寝起きしているベッドルームだ。

バスローブと同系色の紺色のベッドカバーが、シワ一つなく伸ばされて広がっている。
ふかふかの枕。
スプリングは最高級品だろう。

最近の和洋折衷のはやりを取り入れているらしく、ベッドは高さが低いもので、和室の御殿布団を思い出させるような高さだった。

ベッドに意識を集中している自分が、何となく彼の私生活を盗み見しているようで、後ろめたかったので、あわてて視線をそらした。

完全に遮光されたカーテンが、外の景色さえ、見えない暗い空間を作っていた。
夜型のシャルルのことだから、朝日が差し込むと目が覚めてしまうことを危惧して、宿泊先であるホテルに特別に注文したのかもしれない。
部屋の中は完全に光が遮断されていて、かろうじて薄く光る間接照明で、足下の床がおぼろげに、ぼんやりわかるくらいの程度だった。

リビングに戻ると、シャルルは電話で何かを話していたらしく「じゃ　よろしく」と、流暢な日本語で受話器を置くところだった。

煙草や、アルコールの代わりに、薫り高いエスプレッソを飲んでいた。
ミニバーで、自分で煎れたらしい。
コーヒー豆の香りが、リビング一杯に広がっていた。

「そろそろ、寒いから窓を閉めるよ」

わずかに、空気循環のために開いていたと思われる窓を、彼は順番に閉めた。
そうすると、外の雑音もまったく聞こえなく、ただただ、静寂が訪れるだけだった。

「着替え」

そう言われて、マリナは彼の流れる動作を見惚れるという状態
から他ならぬシャルルに、現実に引き戻された。

「え？」
「一式、そろえてもらった。」
「・・・サイズ、わからないでしょ」
「わかるさ」

シャルルの答えに、マリナは、また、頭を抱えた。
「一式」ということは、今回、濡れてしまった上から下までの衣類一式を差していて、下着から、靴のサイズから、洋服のサイズまで、見ただけで、シャルルはマリナのサイズを把握して、たとえホテルの人間であったとしても、第三者に、そのサイズのものをそろえるように、指示出しをしたわけである。

「シャルル・・。それって、シャルル・ドゥ・アルディだから
赦される行為だわよ」

軽く、にらんだ。

しかし、にらんだとしても、シャルルはまったく涼しい顔で、「そうだね」と言ってエスプレッ

ソを味わっていた姿勢を崩そうとしなかった。

彼の行動が、私を窮地に立たせる結果になったとしても。
彼を憎めるはずはなかった。

「帰らなきゃいいだろ」
と言われてしまったあのときに、目線を外した私の方が負けたのだ。

負けるとか勝つとか、勝負するようなことではないけれど。
その天使のような、絵画のような整った顔立ちで、遠い夜明けのような、透明な青灰色の瞳で見つめられたら。

誰だって、「しょうがないよね」と理由にならない理由で、彼の行動を肯定してしまうに違いない。

それくらい彼は魅力的だ。
前にも増して。

■61

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Charles

マリナが、長い時間のあと、バスルームからおずおずと出てきた。
汚れた衣類の始末もしていたのだろう。
すっかり酔いが覚めた状態のようだ。

マリナは夜目にも弱いらしい。

メインルームの扉を開けると、ライトの電源場所がわからなかったらしく、暗闇の中をバスルームに向かっていった。
あちこち体を打つ音がする。

ようやくバスルームまでたどり着いたようだ。

暗いと戻れなくなるだろう、というマリナの防衛策として、リビングとの境界にもなっていた可動式の扉が、半分開かれていたままだった。

バスルームに入った、マリナの作る音はあまりよく聞こえなかった。
衣擦れの音、シャワーからあふれ出る水が彼女の肌を叩く音。

すべてを聞きたかったのに。

くぐもった声で、

「もう！信じられない！あああ　もったいないなぁ　絞れないかなぁ　このお酒」
といった叫び声とも悲鳴とも呪詛の声ともつかない高音だけが、聞こえてきた。

「相変わらずだね」

くすっと　シャルルは笑った。

その間、シャルルはフロントを呼び、床に拭かせ、その間、エスプレッソを煎れて飲むことにした。

煎れ終わるまでの間、シャルルは一本、電話をかけた。

マリナの着替えを用意しなければならない。

用意しなくても良い状況でも、彼はちっともかまわなかったし、この状況がそうさせるのであれば、願ってもないことだった。

もう、マリナは帰れないはずだった。

日本の終電は早い。

電車で帰宅はもうできない。

タクシーで帰るにしても、濡れた服ではシートが汚れるので、いやな顔をされるに違いない。

マリナのことだから、歩いて帰ると言い出すことだけが、懸念事項だった。

■62

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Marina

あれこれ、時間がかかったものだから、その間に、シャルルはいろいろなことを完了させていた。
ここから見える限り、シャンパンの空瓶も、濡れてしまった床もきれいさっぱり何事もなかったかのように存在さえしていなかった。

きっと、清掃させたのだろう。
シャルル・ドゥ・アルディが自分でそんなことをするはずがなかった。
リビングは、ミニバーでシャルル自身が煎れたのだろう。
エスプレッソの香りが満ちていた。

こういう手間は、きっと惜しまないんだろうな。

「君の分もあるよ」

テーブルの上に、青い花柄のエスプレッソカップがちょこんと乗っていた。
湯気がたっているので煎れたてだろう。

「いただくわ」
私は酔い覚ましの意味もあって、その申し出は断らないことにした。
香りがこちらまで漂うくらいの豆のひき方を想像すると、相当においしいに違いない。

シャルルは、先ほどの様子から着替えていた。

ウールパンツにシャツ、ブルーブラックのカーデから、緩やかなコットンパンツに、襟の大きなゆるやかなシャツになり、靴下は脱いでルームシューズになっていた。

「シャルル・・・私がシャワールーム使っている間に、ベッドルームに入って着替えたの？」
顔を赤くしたり青くしたりしながら、私は驚いて訪ねた。
あの呪詛の言葉も聞いていたのだろうか。

「ゲストルームで着替えたよ。オレの身の回りの荷物は、あっちにあるからね。」

説明なのか、なんなのかよくわからない説明をシャルルはした。
そうして、その説明に満足していないかのように、ぷいっと、彼は横を向いた。

私はその横顔をスケッチしたいと思った。
彼の横顔。
再会して、初めてしげしげと眺めた気がする。

完璧な角度をもつ、あごのカーブ。
もう夜遅いというのに、無精ひげさえ生えない、つるんとした肌。
体毛が薄いから、そう見えるのかな。
視力が弱いので、あんまりよく見ることができない。

「・・・何？」

シャルルは、不機嫌そうに横顔のまま、視線だけをこちらに向けてにらみ返してきた。
これは確かに「にらむ」という視線の種類だった。

「スケッチさせて！ちょっとで良いから！」

私は、立ち上がって、濡れた鞄を取り出した。
鞄は、濡れてしまっているから、玄関近くの壁に立てかけてあった。
大きなコットンの黒い鞄が、びしょびしょになっていて、軽いはずの鞄がずいぶんと重たくなってしまっていた。

コットンだから、洗濯すればいつも通りに使えるはずだけれども。
何度も洗濯して少し城っぽくなってしまった鞄が、水気を含んで黒光りしていた。
中身のスケッチブックは見るも無惨な状態になっているに違いなかった。

■63

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Charles

「スケッチはいつでもできる。」

シャルルは切り出した。
マリナがきっとこちらを向いて、反論した。

「できないでしょ！あんたは明後日には・・いえ、もう明日か。
フランスに帰ってしまうんでしょ。」

「じゃぁ、君が」

シャルルはそこまで言って、言葉を句切った。

・・・聞いてるのか？

マリナは、画材道具を鞄から取りだそうとしているところだった。

「マリナ、マリナ。」

シャルルは立ち上がって、濡れそぼったスケッチブックが台無しだ、と嘆くマリナに近寄った。

「ちゃんと話をしよう。
頼むから、ソファに腰掛けてくれないか。」

マリナは、少し不服そうに何か言いかけたが、口をつぐむと、おとなしくリビングのソファに腰掛けた。

バスローブのサイズか合わないせいか、沈んだ体が小さく見える。

シャワーに入り、髪の毛が湿気を帯びているので、茶色の髪が鳶色に見えた。

青いバスローブに埋もれた小柄な体。
細くて小さな首。
袖からほんのわずかにのぞく、短く切った爪がピンク色だった。

きめの細かい肌が、彼の理性を失わせそうだった。

■64

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Charles　ふたたび

マリナはおとなしくソファに座り、勧められるままにエスプレッソを飲み干した。

少し、濃いめに煎れたから、苦かったのだろう。
顔をしかめたものの「おいしい」と言った。
アルコールの後のカフェインは、有効だ。

そして、マリナはかたん、とカップを元に戻すと、シャルルをふいっと見つめた。
今まで眼をそらしていたのに。

先ほどと・・・違う人物がシャルルを見ていた。

水に濡れて、鳶色になった髪の毛。
前髪は、後ろになでつけられて小さな額がむき出しだった。
けぶるような眉。
小作りな顔だち。

もう
何年も年々も追い続けたマリナとは違っていた。

でも
まさに
彼女だった。

守ってやらねばならない存在だった彼女。
小さなオレだけの花。

「・・・シャルル」

彼女は小さく、言った。

「私は、シャルルのことが、好き」

思い切ったようでもなく、普段の話をするかのように、マリナは小さく、そう、小さく言った。

・・シャルルは息が止まりそうだった。
待っていた言葉。

かちんとカップの音を立ててしまう。

待ち焦がれた言葉。

「でも、私は、シャルルを好きにならない。」

その言葉に、シャルルは息をのんだ。

マリナの固い口調が、シャルルの息を止めた。

■65

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Marina

静かな空間。

リビングのカーテンも遮光カーテンであると同時に、遮音効果もあるようだった。
先ほど、窓を閉めて、カーテンを厚く引かれてしまうと、まったく何も聞こえない空間に放り込まれてしまった。

「私は、シャルルが好き」
そう言った。

そう言った瞬間、シャルルの手がとまり、私を見つめた。
彼の視線は、私を射貫いた。
私を貫いた。

シャルル。

私は、あなたをなくしたくないと思っている。
続けて、私は正反対の言葉を口に出した。

「でも、私は、シャルルを好きにならない。」

自分言い聞かせるかのように。
ひとつひとつの母音と子音が、意味を持つかのように。

「でも、私は、シャルルを好きにならない。」
もう一度、言った。

「へぇ。面白い話だね」

シャルルは、髪の毛をかき上げて、そう言った。

「今の言葉のロジック。
　君は説明できるのかい。」

そう言って、少しあごを持ち上げて、彼はマリナを見た。
冷たい、冷たいまなざし。

ふうっと、彼との距離が開くのを感じる。

「ええ。そうね・・・そうだよね」

私は大きく、息をついた。

もう、何度この部屋で、深呼吸したことだろう。

私にとって、深呼吸は穏やかに生きていく上で、必要な儀式だった。

穏やかで優しかった彼。
彼のように生きたかった。

「笑って別れよう。いつか、再会するときのために」
あのとき。
彼は、深呼吸して、震える声でそう言った。

■66

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Charles

「君はそのロジックを説明できるのかな」
もう一度、シャルルは挑戦的に言った。

さぁ。

2 杯目のエスプレッソを注ぐ前に。
このカップの液体を飲み干す前に。
君の返答次第では、次の瞬間、君のいる場所が、ベッドルームになるのか、廊下になるのか変わるよ。

それは、君が、決めることだ。
それは、君が、決めて良いことだ。

マリナは酒が抜けて、ちょっと落ち着いたようだ。

だがしかし、本来の好奇心というか探求心というか、思いついたら止めることの出来ない欲求が、彼女を支配しているところはその特質は、10 代のあのころとまったく変わらなかった。

気が向けば、ふらっとパリにも来るだろう。
思いついたら、いつでもだれでも「スケッチさせて！」と言って、スケッチする。
新しいモノへの欲求は抑えることができなくて、過去より未来へ興味を注ぐ人物だ。

そんなマリナが羨ましかった。
自分とまったく違う、生き方を実現できる人。

彼女は、無神経であるが無関心になれない人物だった。

人には、自分と他人との距離があって、各々人によって距離が違う。
だから、時に、人は距離を間違えて、近づきすぎたり近寄れなかったり、する。

無神経な女だな。

最初は、そう思っていた。
だが。
彼女は、無神経な女だったから。
シャルルの入ってはいけない領域に、ずかずかと入ってくる。

しかも「お〜い！」と相手に声をかけて「今からそっちに行くからね
！」と宣言してから、ひょいと、いとも簡単にこちら側にやってくることができる。

そんな彼女が、羨ましくもねたましくもあった。
そんな彼女を好きになった自分は、まだ血の通った人間だったんだと思い知らされた。

あのとき、どうして一緒にいると言ってくれた彼女の手を離してしまったのだろう。

若かったから？
いや、そうではない。

相手の幸せを願い、相手が満足すれば、それで良かったという青春の日々を終えて、今なら思う
。

幸せに、なりたいのだ。
そして、それは、幸せな自分と一緒にいることで幸せになるマリナがいるということが必要条
件だった。
彼女の幸せを想像するだけで幸せだった。

最初の数年間は。

今は、どうだろう。
彼女に再会してしまった。

姿を見て。
声を聞いて。
その体温を感じた。

帰したくない、帰さない、帰せない、帰してはいけない。

そう思って、自分で制御できない行動に出た。

これをなんと呼べば良いのだろう。
もう、答えはわかっていたけれど。
そう思いを巡らせている間に、マリナが言う。

「シャルルを好きにならない」と。

「言葉の説明義務が、発信者にはあるんだよ」

シャルルはそう言って、極上の笑みで彼女を見た。
この笑みが、相手への宣戦布告であるということに、マリナが知ってか知らずか。

彼女は、切り出した。

「シャルルのこと好きよ。
困っているときに助けてくれる。
してくれる、とか、してあげる、とかいう気持ちや駆け引きなしに。」
「・・・」
「幸せになって欲しい。
　逢うたびに、笑って別れて、また次に逢う時を楽しみにしたいの。
　シャルルを思い出すたびに、連絡がなくても、たとえ、こんな風に、8年ぶりに会ったとしても。
ああ、元気だった？と軽く言って、またね、とすれ違えるような。
それがいいの。」

マリナは一息で言って、また、息をついた。

「それが、いい。」

「だから、オレを好きにならないというのは、説明にさえ理由
にさえなってないけれど。」
シャルルは、反撃した。

マリナに好きだと言われたのに。
好きにならないという意味が、彼は納得できなかった。
理解できなかったわけではない。

「だから。」
マリナは顔を上げた。

「シャルル、シャルル。
私とあなたは、友達だって、今、ここで、確認したいの。」

絞り出すような声が、悲鳴のように聞こえた。

マリナ、オレは絶対に、認めない。

■67

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Marina

「説明してくれ。」

シャルルの声に怒気が含まれてきた。
シャルル・ドゥ・アルディという人物は、会話のキャッチボールを好まない。
簡潔に、結果だけを受けていたいのだ。
会話をしているうちに、違う結論になったり、相手の意図を確認したりという、
ディスカッションは彼には不要のものなのだ。

相手とコミュニケーションを取る必要がない、世界で数少ない希少な人。
実業家であり、元貴族であり、医師でもある、フェンシングもピアノも上手な、美しくて、美しすぎて、神様に愛されているけれど、孤独な人。

「だからね」

言いながら、頭の中で、言葉を組み立てようとしたけれど、その作業は、普段から言語分野を使用していない私には、とうてい難しい試練だった。
それでも、彼に向かって、必死で言った。

「だから。だから。
私はシャルルのように賢くないから、言葉も筋道も正しくない
かもしれないけど。」

そう言って、こくん、と息をのむ。
彼は、その間、私から視線を外さず、微動だにしなかった。
先ほどの、甘い視線を私に投げかけていることもせず、ただ、冷静に、私を観察していた。

そう。

観察、という言葉が正しいと思う。

濡れた唇はきゅっと結ばれていたし、軽く足を組んで、ゆったり背もたれに背をもたれかけていたけれど、全身で、その体中の筋肉が緊張しているのが、その雰囲気から明らかだった。

「・・・うまく言えないのだけれど」
「前置きはいい」
ぴしゃりと言われて、私は泣きたい気分になった。

「シャルル。シャルル。私はあなたの周りにいる、たくさんの
衛星の一つで、たまに、こうして、軌道を外れてシャルルに近づくことがあるかもしれないけど。
長くは居られないことは、わかってるんだよ。」
続けた。

「奇遇ね、といって何年経っても、笑顔で挨拶できる自信は、ある。
　でも。でもね、シャルル。
　私は、カズヤのことを忘れていないし、そのことがある限りは、ほいほい次の人、っていう風に、一つのことに夢中になれない。
絵も面白くなってきたし、毎日の生活や、いやなことも多少は
あるけれど、毎日を過ごせることがとても楽しい。」

「・・・それで？」
シャルルは頬杖をついた。
そして、私の言葉を促す。

おもしろがっているのか、愉しんでいるのか、憤っているのか。
まったくうかがい知れない無表情無感動の声。
斜めに眺める目線が、憎らしいのか愛おしいのか、もう、今の私には、わからない。

「それは、シャルルがいなくても、送ってこられた日々なんだよ。」

それは、私にとって、残酷な一言だった。
私の現実を、シャルルを目の前にして認めなければいけない、
残酷な現実だった。

「私は、シャルルが恋しいのか、恋が恋しいのか、わからない。」

正直に、そう言った。
苦しかったけれど、嘘は言えなかった。

「だから、きちんと、考えようと思う。
ここで、もし、もしよ。
シャルルにくらくらして、
ふらっと、その、戻れない関係になって、あとで反省はしても
後悔はしたくないの。」

彼と恋を始めれば、甘美で完璧な恋を成就できたと思う。
私とシャルルは、ゼロからでも、イチからでもない距離にいたから。

「シャルルは素敵だわ。あの頃より、何倍も。何千倍も。」
私は、窓辺に立った。
音も光も遮った窓であったが、ほんの少し、冷気が漂ってきた。

■68

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Charles

「だから」

マリナは息を吐いた。
そうして、シャルルをまっすぐに見た。
これまで、眼を逢わせることすら罪悪であったかのように行動していた彼女が、シャルルを見た。

「これは恋じゃない。恋にしてはいけないの。」

そう言い切った瞬間。

シャルルは素早く行動していた。
二人の間にあった、物理的な障害物、すなわち、ソファやカップや、その他すべての物質に頓着することなく、彼はマリナに近づき、そして、両腕をつかんだ。

「どうして」

今度はシャルルが饒舌になる番だった。

腕をつかんだまま、少しかがんで、彼女の薄い茶色い瞳をのぞき込んだ。
何度か視線を動かして、マリナが顔を伏せようとしたので、シャルルはかっとなった。

かっとなる。

何年ぶりのことだろう。

片方、マリナの腕をつかんでいた手を離し、あごに強引に手を
かけた。

「マリナ。こっちを見ろ。」

マリナはあごを押さえられ、シャルルの顔とほんの近いところに顔を近づけられた。

彼は、ぎりっと唇をかんだ。

憎らしいよ、マリナ。
本当に。

「オレと君は、こうして、また出会った。
お互いに求め合ってると思うのが間違いや思い込みだったら、君は今すぐここから出て行けば、いい。
何度も言わないから、よく聞いてくれ。」

「シャルル！・・・やめて。やめようよ。」

悲鳴のような、マリナの哀願するように叫んだ。

顔を背けて、自由を奪われた体の自由を取り戻したいようだったが、さらに力を込めた彼に、今度は完全に自由を奪われてしまった。

■69

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Marina

「君は、まったく、贅沢だよ」
シャルルは続けた。

私は二の腕を捕まれて、さらに、あごをシャルルの長い指に挟まれて、シャルルに視線を合わせざるをえない状況にされていた。

ここで、彼が、本当に憤慨していることにようやく気がついた。

白い頬が紅潮し、ブルーグレーの眼が見開いている。
指には、力が入っていた。

「まったく、贅沢だよ。」
もう一度、彼はそう言った。

「オレとの関係は恋でないという。ここまで来て、こうして部屋で一緒に過ごしているのに。
じゃ、それなら、オレと寝れば満足か？
それとも、ナイトとプリンセスのように、別々の部屋で、じゃぁねと言って寝れば良かったのか？
8 年ぶりに会った大切な人と会話して、幸せにしているかどうか、元気でいるかどうか、困ったことはないか、無二の親友と思っている男と別れたと言って理由も明かさない、古くからの知り合いの様子を、確認したいというほんの少しの願いを無視して。
マリナちゃん。

男をもてあそぶのは、いい加減、やめてくれ。」

シャルルが、たたみかけるように言った。

「友達でいたいとか、恋じゃないとか、そんなことを決める選択権は、君にはない。」
そこまで言って、言いたいことを言ったかのように、彼はあごを押さえていた手を離して、ふうっと息をついた。

そうして、白金の髪をかき上げると、視線をそらさずに、また歌うように穏やかに言った。

先ほどの激情が嘘のような、冗談のような穏やかさでもって。

その昔「好きだったんだよ」と言った、あのときと同じ口調、

同じテンポ、同じトーンで。

「もちろん、オレにもないけれどね。」

■70

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Charles

「選択権は、ないんだよ」

そこまで言って、込めていた力を一瞬で、全部解いた。

力の加減が出来ずに、腕もあごもつかんでしまったから、皮膚の薄い肌質であれば、2日目くらいから、内出血であざになるかもしれない。

バスローブを腰紐で軽く結んだだけの格好であったので、腕をつかんだときに、
白いのど元がちらりと、見え隠れした。

彼の、先ほどまでに散らしたはずの情動が、また煽られた。

友達にする　とか
恋にしない　とか

選ぶことが出来れば、彼はマリナ・イケダという女性を運命の女性と定めることを躊躇ったであろう。

そして、その属性を変更することが出来るのであれば、これもやはり彼は迷うことなく。

友人

その無難なカテゴリに当てはめたはずだ。

理由は、マリナと同じだ。
叶わない恋であれば。

一生、逢えなくなるのであれば。
友達の方が、いい。

マリナにとって、自分が恋の対象かどうかはわかりかねた。
彼女が、望んでいるものが、はっきりしなかった。

ただ、恋人にはできないが良いお友達でいましょう　というごくありふれた退屈な結論を、ひとりでさっさと導き出してしまったことに憤慨した。
でも、憤りながら、その一方で、少なくともこれが最後の再会、であることを希望していないのは、痛いほどわかった。

だから。
客室に入るのも、好奇心から以外の何ものでもなかったのだろうし、彼に会わずにエッセージを残すのみで帰ろうとしたことも、よくよく考えてのことだったのだろう。

帰る、と言った時の彼女は、そこまで思慮深かったかどうかは別であるが。

「君がオレを選んだんじゃない。オレが。
　シャルル・ドゥ・アルディが君をオレのファム・ファタルだと
　決めたんだ。」

熱っぽく、彼は話し出した。
怒っている口調ではあったが、頭の中は冷静だった。

「マリナ。もう一度、始めてくれないか。」
「シャルル。それは無理な話よ」
何がムリなのか、彼女は困ったように首を振った。

「私は、シャルルとともだちでいたい。一緒に、泣いたり笑ったり、時々お茶をして・・・
お互いに結婚して子供ができても、年を取っても、元気？って言い合う関係でいたい。」
「そんなことは、望んでない。」
シャルルは言った。

これから先の、「死までの退屈しのぎ」が、ひどく怖くなった。
彼女のこと考えるだけで、楽しかった。
今はどうしているだろうか。
想像通りの女性になっているだろうか。
相変わらず、短い爪をして、カラーが爪の間に入ったまま、食事をしているのだろうか。

そういうささいなことだけが、彼の快豁とはほど遠い生活の唯一の、一条の光だったのに。

「今でなくてもいい。今日は何もしないで帰そう。でも、オレは、新しく、始めることも、終わらせることも、できないんだ。」
彼は、もう一度、強く、言った。

「できないんだよ」

■71

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Marina

「始めることも、終わらせることもできないのであれば、止めるしか、ないよな」

シャルルは、彼女に向かっていったのか、自分自身に言い聞かせたのか。
どちらともつかないような言い方をしたので、返事を躊躇ってしまう。

「私は始めない。」
そう断言しただけだった。

でも、それは断言と言うほど強い語気ではなかった。

語尾が消えゆくような、ピアニッシモのささやきと言った方が正しい表現で、
はっきりとした言い方をすることができなかった。

掴まれていた二の腕と、アゴが痛んだ。

さっきの憑かれたようなシャルルの手のひらの熱さを思い返していた。

力では、負けてしまう。

シャルルは、優しげな表情にダマされてしまいそうになるが、自分とは体躯も違う。

いざとなったら抗えない。

・・・抗う？

そんなこと、そもそも、できるのだろうか。

■72

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Charles

「それなら、君はどこから始めると言うんだ？
友達か？顔を知っている知り合いか？それとも。」
そう言って、口をつぐんだ。

運命の人と自らが望んだ人が、自分との恋を否定する。
その一方で、そんな残酷なことを言った同じ口で、彼とずっと逢っていたいから、と言う。

「それとも、お互いが知らなかった時から、かな」
「ゼロからは、始められない。一からの私も、ありえない。」
それが、彼女からの答えだった。
ゼロからというのは、友達から。
一からというのは、マリナが自分とともに在ると言ってくれた
あの瞬間から。

どちらでもない、ということは、恋も友情も、どちらにも属することができないということ。

「マリナ、マリナ。」
シャルルはわかならい、という風に首を振って、何年も待ち焦がれた相手を、ゆっくりと、焼き付けるように強く、見た。

もう、隠せない。
君を帰したくないと思った自分を。
君を帰したくないと思ったばかりに、不相応な行動を取った歯止めのきかない自分を。

彼女は明らかに困惑していた。

普通の状況だったら、情愛を交わしていてもおかしくない間柄
の距離であり、通常のシャルルであれば、こんなに長い時間、一人の女性の承諾を待って時間を過ごすことは、なかった。

彼が他人と一緒に一つの空間を過ごせる時間は、ごくわずかな時間だ。
理由はひとつで、必要がなかったから。

でも、この腕に抱くこともせず、ただ、ひたすら、短い会話を交わし、
彼女に恋を始めよう、と懇願する自分は、まったく自分の想像のつかない自分だった。

「マリナ、マリナ。」

シャルルはまた愛おしい、人前で口に出すことは長らくなかったであろう、その人の名を呼んだ。

■73

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Marina

私は困惑していた。
シャルルの声が歌うようななめらかな口調になったかと思うと、だんだん熱を帯びて、甘く、この上なく甘美な誘惑を囁き始めたのだ。

「オレと、始めてくれないか。いや、続けてくれないか。」

告白。

こくん、と息をのんだ。
シャルルをそっと見ると、彼は、いつの間にか、私の前に立ち、静かに見下ろしていた。

一度は立ち上がったのに、その瞳にどんどん吸い込まれそうになって、次にはすとん、とソファに座り込んでしまう。
いわゆる、腰が抜けた状態だ。

これは夢なのだろうか。
私の、白昼夢なのだろうか。
妄想かもしれない。

「私・・・私ね、シャルル」

先ほどのシャルルの告白に答えることもせずに、うつむいて、自分の膝に両手を置き、手のひらを固く結んで拳を作った。
そして、思い切ったように、口を開いた。

シャルルはまだその姿勢を変えず、きっと立ったまま、私を凝視しているに違いない。
上から降り注ぐ視線が、痛かった。
それでも、私は話さなければいけない。
きちんと、向き合ってくれたシャルルのためにも。
自分に踏ん切りをつけるためにも。

「私ね、シャルル。
　笑って、シャルルと別れたいの。
　泣いたり、怒ったり、嫉妬したり。
　そういうの、まだ、まだ、受け入れられない。」

そうして、大きく息を吸った。
深呼吸をひとつ、吸って吐いた。

どういう訳か、癖髪の、漆黒の瞳の彼を思い出していた。

「シャルル。シャルルが、好きだわ。」
そこまで言うと、踏ん切りがついた。

「でも、シャルルの毎日と、私の毎日は、違う。
　一緒にいることは、できない、と思う。
　今の、毎日の生活に満足しているし、シャルルを一番にすることができない。
　なんと言われても。
　私は、シャルルとのこれからを想像できない。」
「毎日の、生活、ね。」

シャルルが、頭上で、まるでとてもつまらないことのように、単語ごとに、区切って繰り返す。

シャルルもわかっていると思う。
私が言ったその言葉の意味。

本当は、本当は一緒に居たいと思う。
これが、恋なのか、一時の妄念なのか、わからない。

単純に、今日、再会したという偶然を運命の再会と言って、溺れることができない。

私は、遠いところまで来ちゃったみたい、だよ。
でも、彼とは縁を絶つことができない。

また、逢いたい。

今願うのは、ただ、それだけだった。

元気でいるかどうか、幸せでいるかどうか、人づてではなく、自分の目と耳と口で、確認したい。

たとえ、自分が彼のそばにいなくても、彼が毎日を生きていてくれるなら、それで良いって、思っていたじゃない。

いつの間にか、私は静かに泣いていた。

困った状況に在るせいなのか。

恋に出来ないという理性と、恋に墜ちたら楽なのに、という誘惑との戦いに目をそらしたかっただけなのか。

その両方かもしれなかった。

■74

Mail ・Mail ・Mail　そして邂逅

***Charles

「君を困らせたかったわけじゃ、ない」

ソファに膝を立てて、両腕を抱いて、静かに涙を流すマリナを見下ろしながら、シャルル・ドゥ・アルディはそう言った。

完全に顔を腕に埋めてしまっているので、彼女の泣き顔は見えなかった。

むせび泣く、というよりは静かに涙を流す。
そんな、彼女の泣き方は初めて見た。

これまで、彼女の表情はすべてロードしたつもりだった。

8 年前から、今の、この瞬間に至るまで。

怒った顔、笑った顔、困った顔、考える顔。

表情だけでなく仕草さえも、今も彼の脳内で、鮮やかに再現することができた。
でも、こんなに静かに泣く彼女を、初めて見て。

初めて見た映像は、記憶に留めておかねばならない、という普段の習慣とともに、ひとつの感情が、彼を突き動かした。

跪き、ソファで小さくなるマリナの方を、そっと包んだ。

彼が跪く、たった一人の女性を、彼は抱えた。

赤ん坊をあやすときは、きっとこんな感じに違いない。

触ったか、触れてないか、羽のように軽く、力をこめないよう
に、彼女を抱いた。

「マリナ、君を困らせたかったんじゃないんだよ」

穏やかな声で、彼はそうささやいた。

■75

Mail ・Mail ・Mail　そして諸恋

***Marina

彼は、先ほどの激情を洗い流してしまったかのように、そっと、私に触れた。
髪に触れ、頭を抱き、私の肩に反対側の腕を回した。

抱くという行為には遠い、「触れる」というか「触る」といった程度の、
羽毛のように軽い抱擁。

しばらくの沈黙の後。

「・・・シャルルが、す、き」
絞り出すように、そう言った。

「うん」
シャルルは、耳元でそう言った。

「わかっていたよ　そんなこと」
涙声で、小さく、小さく続ける。

「でも、一緒にいられない」
「・・うん」
「でも、もうまた、逢いたい」
「・・・うん」
「でも、幸せになって欲しい」
「・・・うん」
絞り出すような、そんな声だった。

涙を静かに流す。

そういうことができるのは映画の中の俳優だけだと思っていた。
人は、泣きたいときは大声で泣くし、鼻水も出るし、嗚咽だって出るはずだ。

でも、今は違う。

ただ、ただ。
静かに泣いていた。

悲しいのか、切ないのか、もどかしいのか、よくわからない涙だった。

涙が頬を伝わって、どのくらいの水分が自分の涙腺から出てくるのか、全く予想ができない状況。

唇をかんで、嗚咽をこらえる。
代わりに、涙が溢れる。

人は悲しいときと嬉しいときと、涙の成分が違うという。

今の涙は、どうなのだろうか。

シャルルが、少し、ほんの少し動いた。
そうして、そっと。
さっき回した腕にかかる力より、もっと軽く。
顔を少し上げて、髪に顔を埋めた。

「今は・・・今は、それで良い。」

顔を合わせることができず、下を向いていたのに、髪に触れた唇の感触にびっくりして、涙という鎖にからまれていた体が、呪縛から解けたように、かっと熱くなった。

次に、シャルルは、形の良い唇を、マリナのこめかみに押しつけた。

これもまた、軽く・・・・短く。

押しつけた、というより、うっかり触れてしまった、という表現が近かった。
びっくりして、顔を上げると、すぐそこにシャルルの端正な顔があった。

あんまり近くにあったので、少し驚いて、噛んでいた唇を少し開いた。

また、涙が、一筋、頬を伝って顎を流れ、首にまで達した。

シャルルは、じっと、私の目をのぞき込んだ。

彼の瞳に移る自分がわかるくらい、近かった。
蒼い瞳が、静かにこちらの様子をうかがっていた。

「コンタクト、落ちるぞ」
彼はそう言って、親指の腹で、涙を下から上へ、そっとぬぐった。

ぬぐいきれずに、人差し指と中指でも、同じ動作を繰り返す。

やがて、両方の手のひらは、いつの間にか私の頬を覆って、その涙の落下を遮っていた。

「ソフトレンズなの」
少し笑った。
泣き笑いだった。

これで踏ん切りがついたかのようだった。

言うことを言って、すっきりしたせいかもしれない。

また、小さく笑って、目を細めた。
そのままシャルルを見つめるには、まぶしすぎた。

何が合図だったのかは、わからない。

一瞬のことだった。

シャルルは、また、羽のような軽さでもって、私にキスをした。

キスというよりは、唇が触れる程度の、瞬間の出来事だった。

私の瞬きよりももっと早い動作だった。

■76

Mail ・Mail ・Mail　そして諸恋

***Charles

躊躇した。

シャルル・ドゥ・アルディが、躊躇した。
ありとあらゆる行動に、彼は躊躇った。
ひとつひとつの動作に、少しずつ時間がかかった。
彼女の涙を拭くときにためらいを感じた。

彼女の髪に触れるとき、全神経を集中して、とても、とても丁寧に触れた。
このまま、マリナに触れれば、もう止められないとわかっていた。

彼女の唇に触れたとき、この上なく甘美な感覚が電流のように流れた。
彼女にもこの電流は流れたのだろうか。

壊れやしないだろうか。

マリナは、ゆっくりと瞬きをした。
一筋、二筋涙が落ちて、やがてとまった。
充血し、焦点が合わなくなった瞳が近い場所にあった。
思ったより長いまつげが涙で湿って重たげだった。
吸い込まれる。

彼は、もう一度、額を寄せて頬を近づけた。
額を、彼女の額につける。
頬を両方の手のひらで包むと、マリナの顔がすっぽりと埋まってしまう。

「オレはまだ。あのときの、ままだ。」
シャルルは絞り出すように、言った。
舌が、もつれるように痺れる。

それでも、喋り続ければその痺れが消えると信じているかのように。

・・・・囁いた。

「マリナ。マリナ。こうしてまた逢えた。逢えたんだよ。
　君が倖せであれば、それで良いんだ。」

君の倖せはオレの倖せだ。

彼は呟いた。

■77

Mail ・Mail ・Mail　そして諸恋

***Marina

シャルルの唇は、びっくりするくらい冷たかった。

手のひらも、冷たかった。

涙を流し、顔が充血していたから、その温度の差かもしれないが、
その冷たさが心地よかった。

「だから、始めてくれないか。新しく。」

シャルルは、マリナから離れると、そう言った。
見上げると、目の前に、ブルーグレーの瞳があった。
首を振った。

「最初から、とは言わない。ゼロからとも言わない。」
「それなら、一体どこから始めれば良いの」

私自身が、支離滅裂であることはわかっていた。

うまく伝わらない。

言葉で伝えることができない、もどかしさがあった。

こんなに近くにいるのに。
伝えることができない。

私は、矮小だ。

恋に墜ちれば、彼女はその気持ちを止められなくなることがわかっていた。
その境界を越えることがひどく怖かった。

夢で、幾度か見たことがある。
いやなあの夢を見たときと同じような感触だ。

電車とホームの間が広く空いていて、小柄な彼女は勢いをつけて電車に乗ろうとするが、ほんの少しはずみが弱かったせいで、車両の縁を踏むことが出来ず、墜ちていく夢だ。

■78

***Charles

マリナは言った。

「言ったでしょ。ゼロもイチも、ムリよ。できない。」
「ゼロでもイチでもなければ、いいのかな」

シャルルは額を離し、乾き始めたマリナの髪の毛を少し、後ろに流した。

「じゃ、0.3 からだ。」
「え？」
「0.3 から始めよう。」

うん、と言って、シャルルはそう言った。
その答えが気に入った。

ぽんぽんと、マリナの頭を軽く叩く。

「証明学の初歩だよ。1 を 3 で割ると答えは3 分の 1 か、0.3 が無限に続く。
でも、各々の答えに3 をかけても、答えは同じにならない。
さて、君はこれをどう証明する？」

突然の問題に、マリナはそれまで涙を流していたことを忘れ、
きょとん、とした惚けた顔をした。

頭の上に、「？？」という読解不能の記号がたくさん出ているのが、見てわかる。

シャルルは吹き出した。立ち上がる。

うん、悪くない。
悪くないよ、マリナちゃん。

「シャルル？あの。・・・言ってる意味がわからないのだけど」
おずおずと、そう尋ねるマリナ。

「わからないのかい？」
シャルルはそう言って、マリナをソファから立たせた。

「うん・・・さっぱり」

まだ、首をかしげているマリナの顔はあどけなく、その仕草は8 年前のそれと同じだった。
先ほどまでの深刻さが、綺麗さっぱり流されていた。

ことり。
扉の隙間から、新聞が差し込まれた。

ーーー夜明けだ。

Mail ・Mail ・Mail　そして諸恋

***Marina

「ゼロでもダメ。イチでもダメ。それなら０．３だ」

シャルルがそう言って立ち上がった。
意味がわからない。

「シャルル。意味、わかならい。」
「わからなのか？」
にらまれる。

「・・・はい」
私は中学校時代の数学の授業で立たされている生徒のようだった。

「じゃ　知らない」
シャルルは意地悪くそう言った。

自分で理解しろ、ということなのだろう。
こういう言い方をされると、私は弱い。

「ねぇ、教えてくれたって良いじゃない」

疑問に思うことはそのままにしておくことができない。

「一体、どういうこと？」
「こういうこと。」
体が横に引っ張られた。

あっと思った時には、もうシャルルの腕の中だった。
先ほどの、撫でつけるかのような力加減ではない。
有無を言わさない、力が私を押さえつけた。
強引に、自分の胸元に寄せる。

「ちょっと！」

抗議したけれど、身動きが取れない。
部屋着に着替え薄着になったせいで、エレベーターホールで抱き留められた時より、彼の体が近く感じる。

胸の開いた襟の大きなシャツが、私の頬に押しつけられた。

そして、シャルルはその薄い唇を寄せて。

私に、大人のキスを、した。

両腕を彼の胸に押し当てて、体を引きはがそうとしたが、彼にそのまま、壁に背中を押しつけられて、両腕を掴まれる。

シャルルが寄りかかってきて、長身のシャルルに覆われてしまう。

完全に自由がなくなってしまった状態だ。
羽のような風のような軽いキスではなく。

今度は、息も出来ないくらいの激しいものだった。

ああ、ダメだ。
墜ちる。

体が離れるとき、シャルルは私の耳元で囁いた。

「わかった？」
私は、困ってしまって首を振った。

「これが、答え？」
「そう。」

シャルルはくすり、と笑った。青年の笑顔だった。
そしてその余裕はどこから沸いて出てくるのだろう。

「知り合わない他人でもなく、過去の恋愛を引きずるでもなく、

　オレと君は、０．３の距離にいる。」
「・・・・」
「友達より大きいけれど、恋人じゃない。友達じゃないけど、
恋人に近くない。
オレと、君と、それからあと少しの『何か』で、乗算して、ようやく1 に近くなるけど、1 になれない。」
「・・・うん」

そのかけ算くらいなら、私にも理解できる。
だがしかし、3 分の1 と 1 割る３ × ３なんて、考えたこともなかったけれど。

「でも、０．３ × ３と3 分の1× ３の解は、同じと見なされる
んだよ。
・・・・マリナちゃん」

涼しげに、シャルルは言った。

「だから、計算は終わりだ。そういうこと」

彼が何を言いたかったのか、理解は出来たけれど、なんだか言いくるめられたような気がして、
また、首をかしげた。

いけない。
完全にシャルルのペースだ。

■80

Mail ・Mail ・Mail　そして諸恋

***Charles

「朝、だね」

ティーを沸かして飲むことにした。

結局、朝を迎えてしまったけれど。
自分の出した結論には納得していた。

マリナが、シャルルを欲しいというまでは抱かない。

でも、彼女を捕らえて離さない。
絶対に。

確かに、マリナの言うとおりだった。
8 年前のあのときには戻れない。

かといって、お互いの人生に深く携わってきたカズヤの存在を消すことはできない。

でも、そんなことに遠慮しないことにした。

そもそも。

和矢が、シャルルにヘルプメールを送ってきたのが、始まりだった。

これが、マリナを宜しく頼む、という、彼なりのメッセージではなかろうか。
このことについて深く語ろうとしないマリナに、いつか尋ねてみたい。

君は、倖せだったんだろう？と。

だから、和矢との月日を、なかったことにして欲しくなかった。
和矢への想いと。
オレの想いと。
マリナの想い。

それらが重なって、ようやくオレは、最初の一歩が踏み出せる。

君の倖せがオレの倖せ。
君を倖せにすることがオレの倖せ。

それは疑いようのない事実だったから。

０．３は３倍しても、１にはならない。

でも、１にすることができる。

彼はそのフレーズが気に入った。
マリナを、なんとしても手に入れよう。

そう思った。

彼女が何を思っていても、最後には手に入れる。

この、シャルル・ドゥ・アルディの名をかけて。

## 81-86（最終話）

■81

Mail ・Mail ・Mail　そして諸恋

***Marina

なんだか、あれこれと悩んだり怒ったりする自分がばからしくなってきた。
睡眠不足とは恐ろしい、とつくづく思う。
いろんなことが、どうでも良くなる。

結局、今日は夜通し起きていたことになってしまった。

体の節々が、痛い。

シャルルとのことが、どうでも良いわけではなかったのだけれど。
空腹も感じてきた。

「・・・おなかすいた」
「・・・お茶を飲むだけじゃ満足できないのか」
「お茶にはお茶菓子だし、もう明るいから、これは朝ご飯ということよね」

大きくため息をついたシャルルが、モーニングを2 名分用意するように手配してくれた。
しかも1 名分は多めに頼むと言っていた。

ルームサービスが到着するまでの間、シャルルはシャワーに入ってくると言って、メインルームに入ってしまう。

「一緒に入る？」と言う申し出には、丁寧に断った。

程なくして、ルームサービスが届く。
シャルルがシャワーに入っているので、やむを得ず扉を開け、食事を運んでもらった。

ホテルマンはすべての配膳が終わると、それから、と言って私に包みを渡した。
「先ほどご依頼のございました件です」

着替え、一式だった。

「こんなに朝早くから、いろいろとお手配ありがとうございました。」
「いえ、いえ。おやすいご用ですよ。すぐには持ってこずに、朝のモーニングにお持ちするように、というご指示を受けてましたから」

そう言って恭しくお辞儀をするホテルマンが扉を閉めると、私は、ぎりっと唇を噛んだ。

・・・・。
・・・・。
・・・・。

シャ、シャルルぅぅぅぅぅ

どうりで。

モーニングを1 名追加、といっても時間がかからなかったわけだ。
あらかじめ、予定されていたんだ。

服の着替えを持ってこさせる時間を引き延ばしたのも、彼の策略ということなのだ。

彼の手の上でもてあそばれた気がして、今きっと鏡を見ると、
私は激怒で顔が赤くなっていたに違いない。

服のサイズはぴったりだった。
上から下まで。
肌着まで。

もっと腹が立った。

そうね、そうね。
シャルルはそういう人だったことを忘れていたわ、すっかり。

悔しいので、彼がシャワーから出てくる前に、2 人分食べた。

シャワーから出てきたシャルルは、すでに外出用のスーツパンツに、シャツを来ていた。

袖をまくり、半乾きの髪をタオルで拭きながらリビングに戻ってくると、
「おや、マリナちゃん。洋服、似合ってるよ」
と、涼しい顔で言うものだから、また、憤りを噴出させた。

「2 人分もまとめて食べて、服のサイズが入らなくなるかと思ってたよ」
元々、シャルルは朝に弱い。
寝起き、というわけではないので、闊達であったけれど、朝食は摂るつもりはなかったらしい。

カーテンを開けると、日差しが差し込んできた。

私は少し目を細めた。
まぶしい。

そんな様子にシャルルは関心がないようなかんじで、中国茶を透明なカップに注ぎ、色合いを愉しみながら、ゆっくりと飲む姿がとても優雅だった。

■82

Mail ・Mail ・Mail　そして諸恋

***Charles

よほど悔しかったのだろう。
マリナはまた、地団駄を踏んでいた。

用意した服が気に入らなかった訳ではなさそうだ。
彼女の茶色の髪によく似合う、小花柄のブラウスに、ヒダの大きめのプリーツスカート。
パンプスは、靴擦れしないよう、低くて幅広のロータイプを指定した。
パンツは足丈を採寸しないとわからないので控えたのだが、女性らしい印象になり、活発な印象を与えていたパンツスタイルとは違うマリナに目を細めた。

スカートからのぞく白い足がまぶしかった。

彼女はもっと早くに帰れたのに、どういうことだと抗議したが、どうしてそうできなかったのかという理由は一つだったし、それを言うつもりもなかった。

「2 人分食べておいて、その言いぐさは酷いな」
彼は笑った。

寝不足の頭がやや重い。
すっきりするためには、煙草を吸うことが即効かつ効果的であったが、熱い中国茶を濃く煎れて飲むことにした。

むすっとしたまま、マリナは同じ中国茶を口にした。

「それじゃ、私、帰るから」
マリナはそう言って立ち上がった。
シャルルもそろそろ支度を始めないといけない時間だった。

「じゃ。明日帰るのよね？忙しい中、会えて良かったわ」
彼女が、服に合わない大きめの鞄が完全に乾いたことを確認して、肩にかけると、「ちょっと、待って」
シャルルは、立ち上がった。

「何？」
マリナが身構えているのがわかる。
「キスマーク」
「え？」
「ついてるよ」
とたんに、マリナの顔が真っ赤になった。

「何を言ってるの！そんなものが付くようなこと、してない！」
シャルルはせせら笑った。

「おや、知らないの？唇にも、キスマークはつくんだぜ」
小さく悲鳴をあげて、マリナは口に手をやった。
くすくす笑い出す。

久々に、朝からこんなに笑った。
いずれ、その全身に、花が散るように、付けてあげるよ。

本当は。
こんな言葉の戯れではなく。
彼女を抱き受け、心ゆくまで彼女との時間を愉しみたかった。

でも、これが現実だ。

シャルルは明日、帰国する。
マリナは日本でこれから仕事がある。
レセプションを欠席してしまったので、帰国までは、時間が作れなさそうだった。

8 年前の彼であれば、そんなこともすべて放りだして、彼女と一日過ごすための時間を捻出するか、彼女のスケジュールを考えもしないで、パリ行きの飛行機に乗せていただろう。
これからのこと、話をすることができなかった。

彼女を前にすると、シャルルは「できない」ことが増えるような気がした。

彼女は好きだと言ってくれただけで、今のところは満足しなくてはいけない。

「待て。・・・・また、メールしても、良いかな？」

シャルルがそういうと、マリナはにこりと笑った。

「もちろんよ！私、あまり詳しくないので、頻繁には返信できないけど」

先ほどまで自分を好きだと告白したのに、無邪気にこういう返答をするマリナを、心底酷い女だと思う。

「また、機会があれば、食事でも行こう」
「そうだね」

別れの言葉はあっさりしたものだった。

このまま帰せば、いつ、また会えるのかわからないのに、彼女はちょっとそこまで、というよう

な軽快さで背中を向けて帰って行った。

彼女を扉まで見送った。
エレベーターの扉が閉まるまで見送り、そのエレベーターがロビー階に到着するであろう時間まで、エレベーターの前に立った。

■83

Mail ・Mail ・Mail　そして諸恋

***Marina

朝の電車は空いていた。

満腹で乗車してものだから、電車の適度な振動が心地よい。

すぐに睡魔が襲ってきた。

停車駅を乗り過ごすわけにはいかなかったので、結局、がらがらの車内を立つことにした。

地下鉄の車窓には、眠そうな顔が映り混んでいた。
天上からの照明で、思ったよりも疲れた顔に見えた。
仕事の締め切りで徹夜をすることは良くあったけれど、出先での徹夜がこれほど体に応えるとは思わなかった。

また、分不相応な贈り物をもらってしまった。
はぁ、とため息をつく。

シャルル・ドゥ・アルディからしてみれば、こういった出費は出費と思わないのかもしれないけれど、金銭的価値観が全く違う私からしてみれば、このような服を無償で提供されるいわれがないので、ただただ戸惑うばかりだ。

それにしても。
長い一日だったなぁ。

ひとりになって、初めて、思い返す。

8 年ぶりのシャルルの再会は、いろいろと、一言で言って、しんどかった。
予定されていないハプニングであって、夜に再会し、今朝には別れを告げる。
これまで、たくさんの人と出会い、別れ、そしてそのうちの何人かとは、再会することもあった。
永遠にお別れしてしまう人も、いた。

けれども、この再会は、私にとってとても、意味の深いものだった。

彼は「０．３から始めよう」と言ったけれど。
私は、今日の思い出だけでもう、十分だった。

なぜなら理由は簡単だ。
今日から私も仕事が始まり、彼も明日には帰国するのは間違いのない事実だった。
でも、メールするくらいのつながりなら、良いのかもしれない。
そのくらいのつながりは、持っていたかった。

そういう折り合いを付けることでしか、頭の中が整理できなかった。

ああ、矛盾しているな。

頭を振る。

濃い中国茶程度のカフェインでは、この、ぼおっとした感覚は払拭できそうにない。
朝の別れは、あっけないほど簡単だった。

「キスでもキスマークが付くんだよ」
そう言われたのを思い出して、思わず、私は口元を押さえた。

シャルルの抱合。

包む抱擁もあれば、奪うような抱擁もあった。

シャルルは、完璧だ。

再会してますますそう思った。

こうも簡単に私に近づき、そして離れていく。

奥底にあった感情をいとも簡単にはき出させ、心を乱していく和矢が穏やかな薫風であるのなら、シャルルは萩嵐だ。

掴まれた二の腕が痛む。
きっと、明日には内出血してあざができるだろう。

・・・消えなければ、良いのに。

■84

Mail ・Mail ・Mail　そして諸恋

***Marina　ふたたび

帰ってからというのは怒濤の一日だった。
朝からネームの打合せがあった。
一息ついたころには、姉のユリナから電話が入った。

昨日は夜に電話しても不在だったことを咎められた。
自由奔放な姉ではあるが、妹には身持ちを固くしてね、と親も言わないようなことを言った。

友人とは会えたのかといったようなことをあれこれ聞かれ、説明するにも体が疲れていて、早々に電話を切った。

明日までにどうしても仕上げなければならないカットの締切もあり、集中して、気を散らさずに居る状態が求められた。

気がつけば、机の上に突っ伏して寝込んでしまっていた。
そして、慌ててまた描き始める。

いつもと同じ状態がスタートした。

そして、それを何回か繰り返すと、日付は変わってしまっていて、カレンダーに走り書きのメモを貼り付けておかなければ、シャルルの帰国日だということにも、うっかり気がつかなかったのかもしれない。

だけど。

シャルルからは、メールが来なかった。
「メールするね」って言っていたのに。
彼のメールアドレスは、もう届かなくなっていたので、こちらからの連絡も、取りようもなかったけれど。
携帯電話も持ち合わせていないし、彼の連絡先も聞かずに戻ってきてしまっていた。

つまりは、連絡が取れない状況だということだ。
壁に掛かった洋服を見て、つと、ため息をついた。

夢とは、儚いものだ。

彼が私に残したものは、このパソコンと、洋服と靴と、そして、腕のあざだけ。
何か、残して欲しいわけではなかったけれど。

なんだか、慌ただしく過ぎ去った嵐のような時間を思い起こす余裕さえ、なかった。

本当に。

彼は、本当に、私の心を乱すことに関しては、超一流だ。

■85

Mail ・Mail ・Mail　そして二人の距離は

***Marina

シャルルの見送りには行かなかった。
ジルからの知らせで、彼が発つ時間もわかっていたけれど、
どうにもならないスケジュールで、とても見送りに行く時間を作ることができそうもなかった。

ごめんね、シャルル。

せっかく再会したのに。
後で、メールでも書こう。
ジル経由で伝えてもらえるかもしれない。

自宅で、せっせとネームの修正をしていると、パソコンにメールの受信が入ったことを知らせるランプが点灯していることに気がついた。
出版社からの問いあわせの待ち受けをしているので、メールも定期的にチェックした。

便利な世の中になったものね。
そう、思いながらメールをチェックすると、仕事用のアドレスであるにもかかわらず、ジルからメールが入っていた。

・・・・このアドレスは、仕事専用のアドレスのはずなのだけれど。

深くも考えず、ぽちっと開封した。

途端。

画面が一瞬真っ黒になり、何かが動き出した。
えっ
ラップトップ上部が、一瞬、光ったように思った。

そして、何か、ソフトが起動する。

「え？え？」

何が起こったのか、わからなかった。
しばし、画面を見入る。

やがて、「こんにちは。マリナさん」
小さなウインドウが立ち上がり、映像と、声がしてきた。
小さなウインドウが立ち上がり、その中には、ジルがいた。

「うわぁ、ジル・・・？ジルなの？」
思わず、声を出して、画面に顔を近づけた。
「マリナさん，マリナさん。落ち着いて。」

流暢な日本語で、ジルはマリナに声をかけた。
これ、動画じゃないの？
その疑問を読み取ったかのように、ジルが声をかけてきた。

「私の声、聞こえますか？」
「もちろんよ！」
「これは、シャルルが開発したWEB 会議システムを、個人用に
再開発したものです。」
「はぁ・・・WEB ・・」
「パソコンの、ディスプレイ部分をご覧ください。縁に、小さ
なカメラがついているのがわかりますか？」

ああ、本当だ。
小さくて気がつかなかったけれど、カメラ、らしい。

「見えるわ」
「そして、下部についている空気孔のようなものが、マイクと
スピーカーです。」
ジルは、ちょっと笑った。

画像は素晴らしく鮮明だった。
声も良く聞こえる。
久方ぶりに逢うジルの姿は、たおやかな女神様という言葉がふさわしかった。

年を重ねて、ジルとシャルルは、最初はひとつであったものが、女性形男性形と各々変化した天使のようだった。

ということは、オンラインでこの会話が通じ合っているということだ。
聞けば、そのソフトの性能を更新するために、私にメールを送って寄越したそうだ。

でも、一向に受信通知が来ないので、仕事用のアドレスに送った、とのことだった。

どうしてこのアドレスを取得したかは、聞く気になれなかったので、そこは問わないことにした。

「ああ、そんな便利な機能がついているなんて、ちっとも知らなかったわ。
ねぇ、ジル。そうしたら、このシステムを使って、これからはジルといつでもお話できるという

ことなのね？」
「残念ながら」

ジルはまた、ちょっと笑った。

「これはシャルルの専用オンラインなので、普段、私は使えません。」
「どういうこと？」
「今は、調整のために、ここに座っているのですが、これは本来シャルルが使用するためのものです。」
「それは困るわ」
慌てて言った。

こんな鮮明な映像で、テレビ電話状態で話をするのは、メールのやりとりより始末が悪い。

家の中だって丸見えだろうし、何より、シャルルに会っていると変わらない状態を頻繁に続ければ、シャルルの言うがままに、あれこれ「ウィ」と言わされて、操られる気がしてならなかった。

そしてその予感は予測ではなく推測でもなく、確実に訪れる予定になるであろうことは明らかだった。

冗談じゃないわ。

久方ぶりに逢ったジルと話をしたい気持ちより、何かいやな予感がふつふつとこみ上げて、落ち着かなくなる。

「マリナさん。シャルルから伝言です」

ジルは、にこりとして言った。
こうして動かなければ、彫像の
ように、左右バランスよく配置された顔が、少し、面白そうに首をかしげた。

「そのままお伝えしますね。

『メールは復活したので、使用できる。このシステムは、24時間以内に起動しないと，プログラミングにより、自動起動し、きっと散らかっているであろう君の部屋が丸見えになるので、一日一度はアクセスするように。

もし、オレが不在の場合には、録画システムを使って、メッ
セージを残してくれ。
ああ、ノートパソコンだから扉を閉じれば良いかというと、音
声スイッチは入るので、これもムダだよ。』」

以上です。マリナさん、お疲れ様です。

どこぞの国のOL のような挨拶で、ジルは電源を切った。

マリナは少しぽかんとして、画面が閉じられて、いつもの壁紙になっているその魔法の箱を、ただただ眺めているばかりだった。

■86　（最終回）

Mail ・Mail ・Mail　そして二人の距離は

***Charles

帰国途中のこと。

「今日は機嫌が良いのは、誰かのおかげかしら」

WEB カメラによる会話であったのに、その声はどこか弾んでいた。
在日中は誰にもそんなことを言わなかったが。

やはり、彼女には隠し事はできない。
気取られるほど、シャルル・ドゥ・アルディの頬を緩めている存在が、大きいのかもしれない。

「ああ。マリナ・イケダに会ったよ」
「それは良かった」
最高のコンシェルジュは短く返事をした。

「連絡が行き違ったのでないかと、少し冷や冷やしました」

自分とよく似た風貌の彼女に、彼は次の「手」を指示した。

「マリナがパリに住めるように、手配を進めてくれないか」
「はい。」
「急がなくて良い。時期を待つ」
「と、いうことは速やかに、ではなく、徐々に住まわざるを得ないような状況を作れということですね」
「全部指示しなくても良いだろ。方法はまかせる。」

くすり、ウインドウの向こうで、彼女が手を当てて微笑んだ。

「ふたつ、確認なのですが」
「なんだ」
「ひとつめです。
　マリナ・イケダ嬢は本日、見送りに現れなかったとか。
　パリ行きのチケット、ムダになりましたね」
「想定内だ。予定は変更された。そしてそれは確認ではなく、事実にしかすぎない。コメントが欲しいならノンだ」
「ふたつめです。マリナ・イケダ嬢とは、どこまでお約束され
たのでしょうか」
「約束は必要ない」

長い足を組み直して、シャルル・ドゥ・アルディは言った。

「彼女と暮らす。これは決定だ。」
「本人の同意がない行為や契約は、婚姻を含めて、無効ですよ」
「チェックメイトは時間の問題だ」
「手強いクィーンを陥落できるかしら」

そのうち、彼女から逢いに来るさ。
シャルル・ドゥ・アルディは不敵な笑みを浮かべた。

「西から陽が昇っても、オレの決定が間違うことはない。」

そうして、会議システムのオンラインを切断すると、メールサーバーに接続して、一度は削除したアカウントを復活させた。

そして、長い指でアプリケーションボタンを押すと、新規にメールを書き始めた。

TO ：マリナ
Title ：（無題）
本文：マリナちゃん、元気かい？相変わらず、売れない漫画を
せっせと描いているのだろうな。
ところで、今度、休暇を取ることにした。
近いうちに日本に行く。
君の予定はどうだろうか。
食事をしよう。
From ：シャルル

そこまでタイプしてから、彼は、ふと微笑んだ。

次に逢った時には、オレと君の距離は、どこまで縮まるだろうか。
次に逢うときまでには、どこまで君の気持ちをこちらに向けておくことができるのだろうか。

次は、躊躇わない。
この手に絡め取ったら、そのままパリに連れて行くよ。

逢いたい。
逢いたいな、君に。

「死までの退屈しのぎ」が、楽しくなりそうだった。

（ FIN ）

# 静寂　おまけ

マリナとシャルルが、甘い朝の会話ができない理由はこれでした。

想望：在ることが到来することを予期すること
月天：月の世界　転じて夢の世界

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

【月天からの想望】

やがて静かな寝息が聞こえてきた。

　君は酷い女だよ、本当に。

シャルルは微笑みながら、その剥き出しの白い肩に毛布を掛けた。

未だ燻りが醒めない彼は、毛布を掛けながら、起こさないように、そっと、
その肩にキスをした。

そして、ややして、少し躊躇いがちにその茶色い乱れた髪にも触れた。

肘を立てて体を起こし、羽根枕を少し移動させて、彼女を見下ろす。
すでにその魂が体から抜け出して、夢幻の世界を彷徨う住人になったかのように、微動だにしない。

　今日は、よほど疲れたのだろう。

　朝までベッドで横になることはせず、彼を看病し、慣れない土地で歩き回ったのだ。

　そして、つい今し方の寂静ではあるが激浪の中にいたわけだから。

彼女は背中を向けて寝る。

これからは、こっちを向いて、その寝顔を見せてくれないか。
これからは。ずっと。

そうして、少し考えてから、彼は開いた腕で、彼女を引き寄せた。

それまで背中を向けていたマリナが、こちらを向く格好になる。

反転したせいで、毛布にくるまれた状態になったマリナの額が、こつん、とシャルルの胸にあたった。

やっと、手に入れた。

これまで、どれだけの夜を彼女を想って過ごしただろうか。
考えないようにしたってムダだった。今になって思い知る。

情動などではない、支配しがたい何かがあった。
マリナの髪を撫でながら、そう思う。

彼女が愛おしい反面、壊してしまいたいという情動を感していた。

長年焦がれた瞬間を迎えたあとは、一体どうなるのだろう。

興味を失うのだろうか。
これまで彼を突き動かしていたものから、解放されるのだろうか。

そうではなかった。

溺れるのだ。

ますます、絡め取られるのだ。

彼の心をとらえて放さない、唯一の人。

マリナ。
マリナ。
君が望むのであれば、オレは、君とこんな孤島で、一生君だけを見ながら暮らしても良いよ。

そうして、マリナの頬に触れる。
眠りを妨げるつもりは、ない。
睡眠時は寝返りを打つので、これを妨げると目を醒ましてしまう。

お休み、マリナちゃん。良い夢を。

シャルルは、しばらく眠れそうにもなかったけれど。

何時間でも、何日でも、君の顔を見飽きることはないよ。
そう、声に出さず、彼の胸に寄り添う彼女に語りかける。

どれくらいの時が経過したのか。

窓を見上げて、青灰色の瞳を細めて、ひとり、月天を眺める。
月は白くなり、傾き、間もなく没する。空が白んできた。
夜が、終わる。

うん、と声を出して彼女が少し動いたので、それまでゆっくりと髪を撫でていた
シャルルの掌が静止した。ぎくり、として。息を潜めて、彼女を凝視する。

マリナの閉じた瞼の際が、濡れていた。

愉楽の名残ではなかった。

夢でも見ているのだろうか。
悲しい夢なのだろうか。

「ひとりで泣くな、と言っただろ」

シャルルは指の腹で彼女の涙をぬぐおうとして、指を留めた。

細く流れ落ちる彼女の涙を、綺麗だと思った。

泣いても、良いよ。
・・でも、
オレの前でだけにしてくれ。

その夢の中にオレがいるのであれば、赦そう。

違う誰かが居れば、追い出そう。

やがて、彼女の顔を眺めているうちに。
いつの間にか、彼女が眠る現の世界から、静かな闇に、降りていった。

こんな一日の終わりを、これからも迎えたいと言ったら、君は笑うのかな。

****

目が、なんとなくくっついている違和感を感じて目が覚めた。
目が開かない。

朝なのは、その明るさと鳥の声からわかる。
彼女の体内時計が、朝食の時間だと告げていた。

むくり、と起きて、目をこじ開けようとしたが、目におもりでも下がっているかのように重たい。

そうして、はっと気がつく。

コンタクト、洗ってなかった！
潮風や汗で汚れたものを、メンテナンスもせずに付け続ければ就寝中に涙だって出るだろう。

あああああ！！！

マリナが目を押さえて、ベッドから立ち上がった。
自分が薄着であることに気がついて、手探りで羽織るものを探す。

そのときに、何か踏んだような気がしたけれど。

彼女はお構いなしに、バスルームに駆け込み、そして扉が破壊されていることを思いだして、
悲鳴を上げてゲストルームに飛び込んだ。

（FIN）

■01

Prologue ：最初はどうでも良い価値観から

物事に優劣をつけられない横序列が男。

恋愛を筆頭として優先順をつけられるのが女。

男女差別も甚だしいけれど、このカテゴリに、マリナ・イケダは当てはまらなかった。
彼女は長らく売れない漫画家を生業としており、最近、10 年近く久しぶりに再会したフランス人との恋の始まりに躊躇していた。
というのも、前述の「優先順位をつけられない事柄」で頭を悩ませていたからである。

彼女には優先順位がない。

もちろん、仕事の区別とは別であるけれど。
恋も仕事も趣味もつきあいも、みな同列なのだ。
だから、彼女とつきあう人は本当に大変だと思う。

マイペースな人格が災いして、これまで数々のトラブルに巻き込まれてきた。

そもそもの発端は、「何かがおかしい」というカンからだった。

いやな予感というものは　良い予感よりも確実に当たってしまう可能性が高いと思う。
でも、実際に現実となってからでないと、起きる前にわき上がった「いやな予感」というものが予感だったのか気分だったのか、わからないものだ。

「あんた、今、暇よね？」

姉のユリナからそう言われるときは、決まっていやな予感がする。
「いえ，暇って訳じゃないんだけど」

マリナは苦笑いした。
ここで「そうね」と言おうものなら、だからあんたはしがない漫画家なんだ、とか。

いい加減、自分の方向性を定めなさい、とか言い出すに決まっている。
さすがに、自分も未婚であるので、結婚して身を固めなさい、とは言わなかったけれど。
電話の向こうで、姉はため息をついた。

「今、夜の10 時。
　この時間に電話に出てくられるくらいの余裕は、きっと、締切がないということで、
　OFF なんでしょ」

何でもお見通しだったら、わざわざ説明することないじゃないの。
我が姉ながら、この人の観察眼の鋭さは感心するものの、その眼力はこちらに向けて欲しくないと、心底願った。

■02

「そういうことで、当分連絡が取れません。あしからず」

あらかじめ書き出した内容を棒読みして、パソコンの電源をOFF にした。
オフにしても、本当に電源が切れたかどうか、あやしいものだけど。

ああ、これで、また戻ってくると、大量のメールが届いているんだろうなぁ

げんなりした。

正直、拘束されることは好きではない。
状況報告として、淡々と今日の天気やニュースや気温や仕事のことなどを吹き込む毎日は、少々疲れた。

シャルル・ドゥ・アルディが開発したWEB システム。
時差を気にした時間帯に接続しても、シャルルはいつも、WEB カメラの向こうにいなかった。

それでも常時接続はしているのであろう。
いつ接続しても、薄暗い室内が映っていた。

メールで良いじゃないの

そう思うのだが。

長年逢わずにいたシャルルの半身、ジルから、まめにメールをもらっているおかげで。

シャルルは毎日、ちゃんと画像をチェックしていること。
長らく取得していなかった休暇を取ろうとして、今、猛烈に忙しいこと。

等々、近況報告は聞いていた。

彼が休暇を取ろうとするなんて、これまでなかったことですよ

ジルはそう言って微笑んだ。
そういうほほえみをされると、マリナは弱い。

シャルルが休暇を取得しようという気になったのであれば、この上なく良いことであると思ったし。
ジルもその間は休めるだろうし。
メリハリは、大事よね。
でも、その休暇の先は、日本、じゃないよね？

これまた、いやな予感が、した。

大きくため息をついて、荷造りする。
NO とは言えない。
言おうものなら、この先30 年くらいはずぅぅっぅぅと言われ
続けるんだよね。
ユリナちゃんのことだから。

自分も結構、自由気ままだと思うけど。
よそう。
あの実姉のおねだりには、結局逆らえない。

■03

*** シャルルの逆鱗　ジルの転楽

「なんだと？」

聞き返すことは決してしないシャルル・ドゥ・アルディが、あり得ない問いをした。

「復唱した方が良さそうですね。」
ジルは吹き出しそうになるのを押さえることに全力を傾けた。
「マリナ・イケダ嬢から連絡がありました。
後で録画動画を観ればわかることですが、彼女は、一週間の予定で取材旅行に出発しました」

「どこに」

「日本国内です。
行き先は・・ああ、最近、トライアスロンで
有名な、諸島ですね。」

「手配しろ」

「終わっています。7 時間後に出発です」

「わかった　仮眠する。出発1 時間前に連絡しろ」

「はい」

シャルルは小さく舌打ちした。

明日から、日本で休暇を過ごすつもりだった。

目的は、休暇ではなく、マリナ・イケダをパリに移住させるための手続きのための訪日だった。
この三日間を捻出するために、どれだけの調整と、時間外労働と、政治的配慮が必要だったのか
を彼女に言おうものなら「そんなものだったら　いらない」と放
棄してしまうだろう。

最後に日本から戻ってから、彼は忙しかった。

でも、日々のマリナからの動画メッセージが彼の心を静めた。
彼自身、何年ぶりかに取得する休暇をマリナと過ごせるということを夢想していたし、
この3 日間で彼女にパリ永住を説得させる材料をどうするかということに心砕いていた。

■04

****それはずっと後のことではないけれど　まだ　もう少し先のことから

壁により掛かりながら、シャルル・ドゥ・アルディはマリナをにらみつけた。
「もう一度だけ、いう」
挑戦的に、青灰色の瞳を光らせた。
ぞくり、と背中に奔るものがある。
「マリナ。オレと、始めてくれ。できないなら、終わらせてくれ」

****

取材旅行という、素晴らしい名前の、お使い旅行だった。
「私がここ数年、【失われた自然】という題目で、ドキュメンタリーのナレーションしているの、知っているでしょ？
今度の題材が、この島の文化、なわけ。
ああ、もちろん、クルーが今度、撮影に行くんだけど。
あんたちょっと行ってきてくれない？」

はぁ？

マリナは、電話の向こうでまくし立てる姉に向かって、すっとんきょうな声をあげた。

姉よ・・・

妹は、あなたが何をおっしゃってるのか、わかりません。

要するに、こういうことだ。

忙しくて自分は行けないのだけれど、どうしても仕事上取材しておきたいから、代わりに行け。

普通なら、その場で電話を切って、断ったかもしれない。
でも、姉の指摘通りに、自分の仕事は今、オフだったし、何より羽を伸ばしたい気持ちが大きかった。

旅費や経費は姉が持ってくれるという太っ腹な申し出でもあったし、最近、旅行だってしていない。

マリナは、少し間を置いて、「しょうがないから行ってあげる」と返事をした。

姉には頭が上がらない。

その特権を使って、普通の人が入り込めないテレビ局だったり、録音スタジオを見学させてくれたこともあった。

銀座の画廊で開かれる講師の口利きをしてくれたのも、姉だった。

■05

結局、来ちゃうんだよねぇ

マリナはため息をついた。
かれこれ、移動時間に何時間費やしていることだろう。
天気が悪くて、ダイヤは大幅に乱れていた。

ダイヤ、といえば聞こえはいいかもしれないけれど、そこは空港から降りたって、ジェットホイールに乗り、さらに移動船に乗っていかなければならない場所にあった。
乗り物酔いはほとんどしない、三半規管が頑丈な彼女であっても、さすがに船の長旅というのは、疲れた。

ようやく港に降り立ったとき、足もとが少しふらついた。
いわゆる、陸酔いという感じだ。

これからしばらくの間は、少し、波揺れのような感覚を味わうだろう。

降り立った島は、日本最後の楽園といわれる場所だった。
全周は、15 キロ程度だと思う。

地殻変動で今の形になったというその島は、ぐるっとリアス式海岸に囲まれていた。
港の周辺だけ、いかにもリゾート地、というかんじで豪奢な南国風のホテルだったり、ヘリポートだったりあるが、急な斜面を超えてしまえば、そこはトライアスロンで有名な、入り組んだ傾斜地と、青い海と、通年穏やかな波と、一面の蒼い色彩が広がる場所だった。

入島人数を制限しているらしく、できたばかりだというホテルでチェックインを済ませるが、比較的、来島者が少ない気がした。

■06

ここに到着するまでに、丸1 日半かかってしまった。
本当にここは日本語圏の場所なのだろうか。
それくらい、遠くに来てしまった感がある。

帰りも、同じ時間だけかかるだろう。
そう考えると、少々うんざりした。

6 日間の取材旅行、と言っても。

最終日の昼には戻らなくてはいけないから、移動時間を差し引いて、正味3 日くらいしかいられないはずだ。

しかし、この天候の悪さだと、あれこれ、動き回るのも難しいかもしれない。

どうりで、ユリナがマリナに代わりとして行かせようという気になったはずだ。
ここは、船と飛行機を乗り継いでようやく到着できるところだったし、天候が悪かったり、どこ

かの乗り換え交通手段が遮断されてしまえば、
簡単に戻ることはできない。

ユリナの仕事柄、戻れるか戻れないかわかならい外出というのは、プライベートでは避けなければならない、というわけだ。

だったら、ほかの人に頼むとかすればよいのに・・・・

いやしかし、最近、物思いに沈むことが多かったので。

いい気分転換だと思い直した。

少しのびをした。

雨が近いかもしれない。
空気が湿っていた。

仕事も落ち着いたので、あれこれとゆっくり考えたかった。

これが今回の話を受けた理由だ。

これからのこと。
これまでのこと。

考えたかったのは、もちろん、シャルル・ドゥ・アルディのことだ。

■07

シャルルにいくらメールしても、返事が来ない。

強制的にログインさせられているWEB カメラには、返事のないことがわかっていながら
毎日のことや天気のこと、仕事の進み具合などを話しかけるのは、そろそろ飽きてきた。

逢いたいなぁ
逢いたいなぁ

堕ちてしまった恋は始末が悪い。

そもそも、これは恋なのだろうか。

8年間も逢わずにいた、大切な友人が、思いもかけず、今までよりもっとすてきに立派になって、白馬の王子のように、彼女の窮状を救ってくれた。

それに、酔ってるだけじゃないの？

自分に問いかける。

どうなんだろう。

かつて、女子同士でそんな夢物語のような空想話につきあった頃もあったけれど、
彼女には具体的なビジョンが思い浮かばなかったので、もっぱら、ただただ聞くばっかりだった。

何にも取り柄のない女の子に、すてきな王子様が微笑んでくれる。

取り柄のない子なんて、いないのに。

このシチュエーションが、マリナには理解できなかった。
それなりにいいところがあるから、愛されるわけで。

この説が正しいのであれば。

私のどこを、シャルルは愛でてくれていると、私は理解しているのだろう。

シャルルは嵐だ。

今の曇天のように、突如としてやってくる。

静かに、気配を隠したまま、雷を散らすことができる人。

シャルル。

逢いたいな。
逢いたいよ。

ずるいよね、こんな気持ちにさせてしまったのに。
連絡さえ、よこさない。

間接的に聞く消息というものは残酷だ。
ジルがから聞くシャルルの生活は、まるで夢物語のような、まるで自分に当てはめることのできないような生活だった。

元気にしているのかな。

この気弱な気持ちが、単に船酔いからくるものでないことを、祈った。

■08

***シャルルの逆鱗　ジルの転楽　02

天気が悪ければ、文字通り孤島になってしまう、リゾート島にマリナが向かったという知らせを、日本行きの飛行機の中で受け取ったとき。
シャルルはしめた、と思った。

そのできたばかりのホテルは、シャルル・ドゥ・アルディのよく知るさるホテルグループの出資だったし、彼が親日家であることを知るや、「是非、逗留してほしい」というオーナーの誘いを受けていたばかりだった。

マリナと時間を過ごす場所にはよいかもしれないと思っていた候補地のひとつだ。
最後の楽園と言われているそのリゾート地で、マリナとゆっくり話ができる。

これからのこと。
話しておかねばならない。

そのまま、マリナをパリに連れて行こう。
そんなことさえ、想像した。

ここしばらく。

マリナとは時差の関係もあるのだが、行き違ってばかりだった。
彼女からの録画メッセージは欠かさずチェックしていたし、こちらもかなり頻繁に返信していたのだが。

機械に疎いマリナは、きっと、シャルルからの返信メッセージを、1 通も観ていなかった。
サーバーに保存されているメッセージファイルを、1 度もマリナのIP アドレスはアクセスしていなかった。

彼女は、待っていてくれているだろうか。
いや、オレが待っているんだけれどもね。

シャルルは、軽く目頭を押さえた。

ここ数週間の激務が、さすがに堪えていた。
この3 日間を確保するために、シャルルは寝る間も惜しんで、その頭脳をフル回転させていた。
その疲れが、日本に向かう機内で、徐々に現れ始めていた。

マリナ。
今度、逢ったら。
今度、二人になったとき、自分が抑えきれるかどうか、保証できなかった。

彼女の隙のありすぎる行動が、彼を余計に焦らしている。
そして、焦らしていることに、自覚がないのだ。

・・・・やっぱり、君はファム・ファタルだよ。

彼は、彼女を何度も酷い女だと思った。

こんなに、彼を倖せにもすることができたし。
こんなに、彼を憔悴させることも、簡単だ。

今度は、酷い男だと、言わせてみたいねシャルルはそう思った。

何度となく、別の女たちの口から聞いた言葉を、彼女に言わせてみたい。

■09

***シャルルの逆鱗・・・のみ

宿泊者名簿を照会すると、確かにイケダという人物が宿泊しているという。
しかし、名前がユリナ・イケダであったから、同一人かどうかは怪しかった。
彼女が偽名を名乗る理由もないから、ひょっとすると宿泊していないのか。

・・・それとも、誰か別の人物と一緒、なのか。

いやよそう、それは考えたくなかった。

たとえ、女でも、男でももちろんのこと、彼女と時間を共有する人物がいること、
彼女がそれを許すことが、受け入れられなかった。
長逗留で、1 週間の予定で宿泊しているということだった。

まぁ、部屋数が膨大なわけでもないし、ちょっと調べてみればわかることだ。

ああ、こういう時のために、携帯電話を持たせておくべきだった。
必要がないからといって、彼女は携帯電話を所持していなかった。

自宅と決まった場所とを往復しているだけだったから、経費がかかるとして、持たないことにしていたらしい。

まったく、マリナ、君は歩く化石だよ。
シャルルは少し笑った。

彼女にどんなに罵詈雑言を浴びせても、結局は、こちらが折れてしまう。

8 年ぶりにあった、彼女はシャルルを魅了してやまなかった。
そして、彼女の口から、彼に好きだと言わせたことが、彼を充足させていた。

静かに涙を流すマリナ。
相も変わらず好奇心を抑制できないマリナ。
少し、大人になり、それなりに距離を保つ術を覚えたマリナ。

オレが知らない8 年間を、この3 日間で壊すよ。

君が君でいるよりどころが、その8 年間であるのであれば。
オレだけが知る、君に塗り替えて見せよう。

そのための、見極めの時間を、作ってみせた。
彼は実行に移した。

これが自分なりの愛し方だ、とシャルルは一人、思いを馳せる。

座席にもたれかかり、シートを倒す。
疲れからか、仮眠をとったはずなのに、体が重かった。
目をつぶれば、先般、「じゃぁね」と言って軽やかに背中を向けた、世界で唯一、シャルル・ドゥ・アルディに「残酷だ」と言わしめるただ一人の女性を思い浮かぶ。

ああ。
ふと。

シャルルは思い出した。

彼は気がついてしまった。

オレは、まだ、再会してからマリナに愛していると言っていない。

■10

墨色の空が広がってきたかと思うと、あっという間に大粒の雨が落ち始め、やがて目の前が白く

なるくらいの豪雨になっていった。

天気が変わりやすい季節であるんだなぁ。
夏が近いのかもしれない。
といっても、ここは亜熱帯だから、かなり暑い。

半袖を着て、ちょっと動き回ると湿気のせいもあって汗ばむ程度には気温が高い。
念のために一週間の予報を調べてきたのだが、どうも天候はあまりよくないらしい。

そういう変わりやすい天候対策なのか、ホテル内にはトレーニングジムや、スパなどが充実していた。

ここは小さい島だが起伏が激しい斜面や、波が穏やかな遠浅の海岸があるせいで、トライアスロン競技に向いている。

観光のトップシーズン以外は、トライアスロン競技の選手たちに、格安の宿泊料で宿泊施設を提供しているとのことだった。

夏が訪れる前だから、観光客は少なかった。いや、ほとんどいなかった。
どう見ても、アスリートの風体の外国人が多く、マリナは日本にいることをしばし忘れてしまうくらい、外国語が行き交っていた。

かろうじて、英語やフランス語やドイツ語で「喋っているな」というのがわかる程度だ。
彼らはマリナを見かけると、明らかに、「こんな場所に子供がいるなんて」というような、保護者の監督不行届を責め立てるような顔して眉をしかめた。

東洋人で、小柄なマリナは、屈強な彼らからみたら、確かに、こどもにしか見えない。
こんな遠方まで、入島制限までされて予約を入れる宿泊客は、みな、ホテル最上階のヘリポートで気軽にやってこられるセレブか、酔狂な自然愛好者のどちらかに違いない。
それとも、マリナのように、取材を目的とする人もいるのかもしれないが。

■11

だから、スコールのような通り雨が止んで間もなく、ばらばらばらっとヘリのプロペラ音がして、ホテル上空で着陸態勢の動作音がしたときには、また、気まぐれなセレブが来島したのだと思った。

ここ数日、この島は天候に恵まれていないようだ。
ホテルには、有名なアスリートがトレーニングで来ているという。
ホテルのオーナーがスポンサーで、ＰＲポスターの撮影の目的もあるそうだ。

スポンサー。
フランスの、ホテルオーナーだそうだ。

フランス。

シャルルの知り合いかな。
彼の交友関係なら、それもあり得るだろう。

その国の話を聞くと。
その国の言語を聞くと。

思い出さずには居られない。
思い出すというよりは、記憶がぶり返すのだ。

雨の間は、どこにも出歩けない。

トレーニングジムに行く気にもなれないので、ホテルの中を隅々くまなく歩いた結果、
こういう情報だけは得ることができた。

「ユリナ・イケダ様あてにメッセージです」

ホテルの中は、散策するにも大変だった。

まだ周り足りないけれど、そろそろ食事の時間だったので、ホテルのロビーを移動している時に
。

ホテルマンに呼び止められて、マリナに一通のメッセージカードを差し出した。

どくん。

心臓が、違う回路で彼女の鼓膜に大きく振動を送った。

いやな、予感がした。

■12

いやな予感。

それは根拠のない直感的感覚だったけれど。
間違いなく、その予感は的中した。

メッセージカードには、受付日時と時間が書かれていた。
つい、今し方到着したメッセージだった。
ユリナの仕事関係の人なのだろうか。

いやいや、姉は、この取材旅行は完全プライベートで、誰にも言っていないはずである。
それに、通常の通信手段はもっぱら携帯電話であろうから、こういうメッセージを残すような程度のつきあいの人には、ここに滞在する予定である、などとは一切明かさないはずだ。

「君が　マリナ・イケダであるのならば、ロビーで5 分、待て　C」

・・・シャルル。

ときめくより、ため息が、出た。

でも、そのため息の意味を考える間もなかった。
それは瞬間という以外に、表現ができない「間」だった。

その瞬間。

それは本当に瞬間。

一瞬のことだった。

ぐい、と腰を引っ張られた。
いや、後ろから腹部を持ち上げられたといった方が良い。

「ひゃぁ！　なにっ？」
すっとんきょうな声を上げてしまう

「一体どこから声を出してるんだ」

その声を聞いて。

どくん
どくん
どくんどくん

また、鼓膜に響き渡るくらいの心臓の音がした。

驚愕というものは、体のパーツの操作を狂わせてしまうらしい。

動脈が、激しく振動する。
鼓動では、この震えを表現できない。

でも。

猫か犬を抱きかかえるかのような体制で。
靴が、中を浮いていた。
自分を抱きかかえている人物の、足元しか見えない。

それでも。

声でわかる。
声だけでわかる。

すぅぅぅぅぅっと、自分がゆっくり、下降していく気がした。

恋に堕ちるというよりは、降りていったのだ。
体は半分浮いているというのに。

「ちょっと！何するのよ！シャルル！シャルル・ドゥ・アルディ！」
次に発した言葉はこれだった。

「見つけた。」
シャルルの笑いを含んだ声が、背中から降りかかる。

それは、ずっとずっと、聞きたかった音。

言葉でなくて、この音域を持つ人の唇から発する「音」が、ずっと聞きたかった。

■13

「それで、私が今ここにいる理由と、シャルルがここにいる状況の説明をして欲しいのですけど」

マリナは腕を組み、憤慨して言った。

「じゃ、順番にひとつずつ。」

シャルル・ドゥ・アルディはうっとりするような笑顔を浮かべながら、サングラスをはずし、少し目を細めて、歌うように言った。

こういうときのシャルルの笑顔は信用できない。

プライベートであることは一目瞭然の出で立ちだった。
七分丈のカットソー。
ヴィンテージのブルージーンズ。
体のラインは、先ほどたくさん見かけた鍛えられたアスリートと同じように、無駄な肉はなかった。

目の色が薄い外国人らしく、サングラスをかけていた。

車で5 分ほどの、観光客やトレーニング中のアスリートには気がつかないであろう、島の反対側にこのコテージはあった。

マリナは、シャルルに抱き上げられたまま、まるで首根っこをつままれた子猫のように、そのまま待機していたベンツに投げ込まれ、ここに連れてこられた。

マリナの主張では「拉致された」になる。

「ここは、プライベート・コテージで、オレが3 日間確保した」
「はぁ」
「ああ、君の部屋は引き上げさせて、荷物も程なく届くよ。
食事や身の回りの心配はいらない。
ホテルと同様の待遇が受けられる。」
「そういう心配は、してないけど。」
「それなら、どういう心配をしているの？」

シャルルは、コテージの窓を開けて、風を部屋に入れながらそう言った。

■14

マリナが返答に詰まっていると、サングラスを机の上に置き、シャルルはマリナの座っているソファの肘掛けに、ごく自然に、腰掛けた。

それは、恋人であれば普通の間合いの取り方であろう。

さらり、とシャルルの白金の長髪が、マリナの顔の前に広がった。

・・・距離が、近すぎるよ。
マリナは心の中で呟いた。
ちょっと目をつぶった。

こういう距離で、自然に振る舞わないで。
こういう距離で、そばに寄らないで。

惹き付けられる。
惹き付けられてしまう。

どんなに、どんなに拒んでも。
どんなに、どんなに冷静を装っても。

「・・・次の質問だけど」

シャルルは、続けた。
淡々と。
でも面白そうに。

「ここにいるってどうしてわかったかって？ＷＥＢメッセージに残してただろ。
　オレの休暇の話のメッセージは、どうやら聞いてないらしいね。
　オレとしては、ジェット機の行き先を東京から、ここの最寄り空港に変更して、そこからヘリにちょっとだけ乗っただけだよ」

やっぱり。
あのヘリ音は、シャルルのチャーターヘリなんだ。
こういう手間は、惜しまないのよね。

「で、宿泊者の名簿に、ユリナ・イケダという、マリナに非常によく似た名前で宿泊している、一人旅風の日本人女性がいるということを突き止めて」

・・・どうやって宿泊者名簿を突き止めたのかは、聞くのはやめておこう。

固く決心した。

「休暇は有意義に過ごさないとね。君と食事をする約束もしたし、何より、君を見ていると退屈しない」

・・・約束、なんてしてないわよ。

マリナはその説明の一つ一つに、毒づいた。

「・・・以上、終わり。・・・・要するに」

そこまで言って、シャルルは言葉を切った。

そうして、少し、黙っていた。
マリナは、まだ、黙っていた。

静かなコテージだった。
周囲には何もない。
森と、丘陵と、遠くで海波の音がするだけだ。

ざぁぁぁぁっという、波の音と潮の香りをかすかに運ぶ、風の音だけが、聞こえてくる。

「きっと・・・こうしたかっただけなんだよ」

シャルルの距離が、また近くなった。
青灰色の瞳が一瞬、ちかっと光ったかのようになったのが見えて、次には、目を閉じてしまったので、その瞳を見つめることが出来なかった。

ふっ　と。

思いついたように。
軽く、軽く。
今、聞こえてくる風に、乗ってきたかのようだった。

シャルルは優雅な弧を描いて上半身をかがめると、座っているマリナの頬に、唇をあてた。

■15

怒りも疑問も何もかも忘れて、シャルルを正面から、見た。

「やぁ、やっとこっちを見てくれた」
シャルルは、微笑んだ。
マリナが少し微笑んだような気がした。

前にあったときより、前髪が伸びて、額が出ていた。
相変わらずの、おしゃれとはほど多い、実用的な服装の彼女は、それでいてなお魅力溢れていた。

ホテルのロビーで、「ユリナ・イケダ」という人物を見かけたら、教えて欲しいと、
わざわざ尋ねて来たＶＩＰに、フロント係は手柄を見つけた子どものように、
「ちょうど、今、あそこにいらっしゃいます」と差し示した。

別のフロントマンが、今、預けたばかりのシャルルのメッセージカードを、マリナに運んでい

った。

見間違うはずがない。

何かの理由で、違う名前で宿泊しているが、彼女はマリナ・イケダだった。

確か、姉がいて、ユリナという名前であったはずだ。
姉の代理で、来られなくなった用事を済ませに来たのかもしれないな。
シャルル・ドゥ・アルディは、瞬時に判断した。

それならば。
予定されていない取材旅行であるから、きっと、

同泊者はいないはずだ。
その事実を引き出すと、どういうわけか安堵の息をついた。

彼女がメッセージに目を落とす瞬間。
もう、体が動いていた。

でも、一瞬、躊躇ってしまった。

抱き上げたとき、思ったより軽く感じたので、このままパリ行きのジェットに乗せてしまおう、
と思っていたのに。

もう躊躇わないと決めたのに。

・・・はしゃいでるな、オレ。

自分でもよくわかっていた。

この気持ちを、止めることができない。
少なからず、マリナはこの状況に対して、反発はしていないようだ。

良かった。
シャルルはほっと息をついた。

「さて、と」

シャルルは立ち上がった。
マリナは無言だった。

「君のベッドルームは、あっちだ。オレはそっちを使わせてもらう。」
「・・・私の荷物。」
「ああ」
くすっと笑って、シャルルは髪をかき上げた。

ぶすっとした物言いからすると、マリナはこの状況を手放しで喜んではいないようだ。

「手配は済ませた。
　部屋を決めてくれれば、そちらに運ぶよ。
　・・・それとも」
挑戦的に、シャルルは言った。
言葉を句切って、首を少し傾けた。

その仕草が、どれほど魅惑的であるか、よくわかっているかのようだった。

「一緒のベッドルームで良いのかな」
「結構です！」
「結構。素敵な日本語だね。ウィにもノンにも解釈できる」

マリナは顔を真っ赤にして、それこそ「赤鬼」のようにかんかんに怒って立ち上がった。

「ノン！ノンったらノンなの！」

■16

赤い顔のまま、マリナは自分にあてがわれたベッドルームに足を運んだ。
荷物がないので、何をするでもないが。

オーク調の扉を開けると、小さく感嘆の声を上げる。

部屋は、女性が好ましいと思うような、繊細な感じのする部屋だった。
贅を尽くしたものであるのだろうが、品が良く、各々が主張過ぎることがない、静かな和を感じる部屋だった。

広過ぎもなく、それでいて十二分な空間である。家具の配置や壁紙や、照明などの調和が取れているからだろう。

そして、バルコニーからは、海が見えた。

今、泊まっているホテルの部屋も、相当に洗練された部屋ではあったが。
グレードが違った。
こういう部屋は正直言って好きだ。

彼女の好みを、シャルルはよく知っていたから、この部屋を勧めてくれたに違いない。
ホテルに戻る、アシもないわけで。
荷物もこちらに到着するのであれば、なおさらのこと。
こちらに滞在することを決めた。
都合が良い、とは思わなかったけれど。

位置関係からすると、彼女が取材をするべき場所に、こちらの方が近いらしい。
それに、シャルルに専属している車を使えば、雨でも移動が可能だ。

姉との約束もあったし、話を聞いたときに自分も興味が湧いたのは、忘れていない。
でも。

このまま、あの場所で、風になびくシャルルの髪を見ながら、シャルルの近くに居ることは・・・なんだか少し怖かった。

同じ部屋で、と言われたときは、胸がつぶれそうなくらい、亢奮した。

体の中で、何かが蠢いた。
殻に入っていた何かが。

シャルルがここまで来たことは、正直言って、びっくりした。

女の子であれば、誰もが狂喜乱舞するかもしれない。
でも、マリナはただただ戸惑うばかりだった。

かつての級友たちが想像に胸をふくらますように自分に都合の良いハッピーエンドをもたらしてくれる王子様を、彼女は想像したことがなかった。

ただ、無条件に愛されることの難しさや悲しさを知ってしまったから。

■17

*** シャルルの苦慮

「そんなに気に入った？」
軽くノックする音が聞こえてきた。

マリナはバルコニーで風にあたっていたので、振り返ると、扉にシャルルが寄りかかっていた。

「ええ、とても」

マリナは笑った。
きれいな、笑顔だった。

マリナを綺麗だと思うのは、その造作ではないのだな、と思う。
マリナは「育ちの良さ」がにじみ出ている。
上流社会の中で、洗練されているという意味ではない。
健全な家庭で育ち、精神が健康で、善悪がはっきりしている。

人を思いやる心を持ち、好奇心が旺盛で、自分の信念を曲げない強さもある。
そして、人に同情して泣き、人なつっこくすぐに心を開く。

・・・白黒善悪で区別できない何かがあることも、大人になって学んだようだ。

マリナは、この曖昧なやりとりの答えを、性急に出すことをしない。
意図したかのように。
シャルルと距離を置こうとする恥じらいを、シャルルは愛おしいと思う。
でも。

同時に、初雪を汚す最初の一歩になりたいという獰猛な欲望も感じるのだ。
こういう、まどろっこしいやりとりは、しなかったなそう思い当たって苦笑した。
シャルルはブライトリングの腕時計をちらと見た。
そろそろ日没で食事の時間だ。

「支度しておけ。そろそろ、迎えが来る」

「え？迎え？」
「今日は、急遽、ホテルで壮行会をやるらしい。」
「壮行会・・・」

フランスを代表するトライアスロンの選手が逗留している。
この慰労会に出席することを条件に、このコテージを借り切った。
独身で、華やかな噂が絶えないシャルル・ドゥ・アルディが、一人で出席するわけにはいかない席だ。

彼はそこにマリナを同伴させるつもりだった。
この機会に、彼女の存在を少しずつ露出する、という思惑もあったわけだが。
マリナが戸惑っているのがわかる。
行きたいのはやまやまだけど、そんな席に出席する服もないし。
そんなつもりもないし。

・・・ああ、考えていることが漏れているよ、マリナちゃん。

少しだけ、部屋の中が、薄暗くなってきた。

「どうかな？気が進まない？・・・それなら」

久々の再会なのに、嬉しいのか、迷惑なのか、怒っているのかさえわからないマリナに、シャルルは少し苛立ち始めていた。
マリナまでの距離を、普通なら10 歩でいく距離を、8 歩と半分でたどり着いた。
彼女が小さく悲鳴を上げた。

肩をつかんで、少し強めに押しただけで、小柄な彼女は、簡単に、その勢いでそのままベッドに倒れた。

彼の名を呼ぶ。
フルネームでも呼ぶ。

でも、シャルルは無視した。
彼女の上に覆い被さり、両手首をねじり上げた。
小さい呻きが、彼の「スイッチ」をON にした。

強引に、深く口づけた。
息が出来ないくらい、強く深く。

長い長い口づけだった。
長身のシャルルがのしかかると、彼女は身動きが取れない。
その間、彼女は抗い続けた。
でも、マリナの意志なんて、関係なかった。

逆らっても、ムダだよ。

さっき。
彼女の腰を抱き留めたときに。

もう止めることの出来ない自分を、決して抑えることはしないだろうと思った。
「ベッドルームに男を入れるって、どういう心づもりなんだろうな」
意地悪く言った。

マリナが、茶色い瞳をこちらに向けた。
強い光を放つ。
その光は、愛の督促などではない。
そんなつもりはない、と瞳で抗議しているのがわかる。
体が熱くなった。
「酷いオンナだ。」
シャルルは耳元で呟いた。

誰に言うわけでもなく、自嘲しているのだ。
「逢いたかったわ、とか。嬉しいとか。
期待していたような言葉は、言ってくれやしないんだね」
彼女の白い首筋に唇を這わせる。
抗う彼女は顔を背け、全身を一度、反らせたかと思うと、次には硬直させた。
柔らかな、茶色い髪が、ぱっと乱れた。
かっと全身が熱くなった。
理性が飛びそうになる。

「・・・言わないわ、ぜったい。」

それまで、抵抗の悲鳴を上げていたマリナが短くそう言ったの
で、はっとして、我に返った。
瞬間、彼女を痺れて壊れるほど抱きしめていたシャルルはその
力を緩めた。

■18

***シャルルの囁き

マリナの抗う力を抑えることは簡単だった。

白い首筋が、薄暗くなった室内で、浮かび上がる。
それは、彼への合図にも思えた。

何の合図かな。

夢中になる、とか
我を忘れる、とか

そんなことに溺れることなんてね、なかったんだよ。

でも。

今こうして、彼女の意志に関係なく、マリナという蕾を
強引に開かせようとしている。

理性が初めて、他の「何か」に劣った獣のような愛慾からくるものなのだろうか。
彼女を愛おしいと思う気持ちがそうさせるのか。

わからなかった。

■19

「・・・言わないわ、ぜったい。」

それが、マリナのいらえだった。

****

シャルルはベッドに横たわっていた。
先ほどの熱情の後。
体が、火照っている

熱い
熱い
熱い

でも

寒い
寒い
寒い

君の、ぬくもりが欲しい。

「だから、言ったでしょ」

マリナは、シャルルにグラスに注いだペリエを差し出しながら、言った。
「熱があるんだから」
マリナはふぅとため息をついた。
「何をどうしたら、そんな熱が出ているのに動き回れるのか、秘訣を教えて欲しいくらいだわ。
」

・・・・・・。
・・・・・・。
・・・・・・。

シャルルが、発熱していたのに、先に気がついたのはマリナだった。

頬に触れた唇が、異常に熱いことに気がついたのだ。

いつもより饒舌なシャルル
いつもより性急なシャルル

それで確信した。

先ほどの抱擁でも、シャルルは熱に浮かされたように（実際に、熱に浮かされていたのだが）マリナではない、誰かを抱いているかのようだった。

シャルルは、額にあてられた濡れタオルを目の上に当て直し、ぼそっと呟いた。

「地団駄踏む女性も初めてだけど」

そして、ふうっと。
どうしようもないな、という風に、独りごちる。

「ラブシーンの最中に、頭突きを食らわせるオンナもどうかと思う。」

だって。
マリナが、ドモりながら反論した。

「熱で、おかしくなってたよ！確実に！熱があるんだったら、どうして休まないの」

■20

頭突きねぇ
シャルルは　くすくすと笑った。

***

あのとき。

我を忘れて、マリナを奪おうとしたとき。
彼女は、一言、強く言うと、

がつん！

と頭突きをしたのだ。

こともあろうに。

シャルルに。
シャルル・ドゥ・アルディに。

「だって、動くところないでしょ、頭しか」
彼女はけろっとして言った。

ムードも何もない。

ああ、なんでこんなオンナを欲しいと思うのだろう。
悔しいというよりは、むしろ自分自身を疑ってしまう。
シャルルに、効果的で派手な攻撃を与えたあと。

マリナは、起き上がって、息を整えると、驚きで頭を抱えているシャルルに、言った。

「シャルル。熱があるって、言ってるでしょ。
　あなた、発熱しているわ」

確かに。

———疲労熱だった。

ここ数週間の激務が、いつまにか疲労として蓄積されていた。
心なしか、関節も痛い。これは高熱の証拠。

だからといって。

「頭突きでムードをぶちこわすなんて、さすがマリナだよね」
皮肉を言ったつもりが、口をきくのでさえ、つらい。
額に乗せられた濡れタオルが，心地よかった。

「今日の慰労会、休んで、横になってないと」
マリナは言った。

「できない」
シャルルは言った。

マリナは、呆れたように、言葉を失った。

濡れタオルを目の上にあてているので、彼女の表情がわからなかったが、雰囲気でわかる。

■21

額に手をやるマリナの手が、冷たいなと感じた。

実際には、シャルルの体温が高かったから、そう感じるだけだったが。

「仮にも、オレは医者なんだよ」
そう言っても，マリナは取り合おうとはしなかった。
「だから、何？ここには、薬もないのよ」

だから。
だから。

ただ、冷やすだけ。

この、気持ちも、冷えれば良いのに。

「そうもいかないんだよ、マリナちゃん」

シャルルは、脂汗の浮いた額を軽くぬぐって、起き上がった。
部屋の中は、完全に暗くなっていた。

周囲には建物がないから、完全に暗くなってしまう。

マリナが、そろそろと、慣れない手つきで、照明のスイッチを探す。

やがて、スイッチを入れると、ちかちかと照明がともり、お互いにまぶしい目つきで、瞬きした。

風音に交じっていた、野鳥の声も聞こえなくなった。

ただ、満ち潮になるであろう波の音だけが近づいてきたのを感じるだけだった。

■22

何もかもが、思い通りにならない人間がいる。

それは、シャルル・ドゥ・アルディにとって、受け入れがたい状況だった。

彼の財力・知力や魅力。

そのうちの彼の持っているひとつにでも、感応しない人間はいない。

けれども。

それが、まるで特定免疫を持っている人間にはきかないウイルスであるかのように、
その魅力に取り憑かれない者が、この世には数名いる。

それが、マリナだった。
まだ、ずきずきする額を抑えて。
高熱による頭痛なのか、マリナの頭突きで痛いのか、今ひとつ区別が付かなかったけれど。

そろそろ時間であることは間違いない。

あれから、それほど時間は経過してないはずだ。

シャルル・ドゥ・アルディが、8年ぶりにマリナに再会して、驚いたことを後に語るときに。
この時のことが、やはり印象的だった。

「じゃぁ　しょうがないわよね」

マリナは、そう言って、シャルルのタオルをそっと持ち上げた。

彼女は、どんなに体調が悪くても、遂げなければならないことがあるということを理解していた。

「大丈夫？音がしたから。車、外に、いるみたい。迎えに来ているみたいだよ」

マリナはそう言うと、身支度を調えた。

彼を癒す道具も薬もないのであれば、彼女が付き添って、ホテルの待機医師に、詳細を説明する

しか他がない。
熱があっても、事情があっても、やらなければならないことがある。

10 代には思いも至らなかった考えだ。

仕事をして、周囲の環境に縛られて、でもそれをおろそかにすることが出来ない状態。
そういうときには、「体を優先」でなくて「そのときをやり遂げたあとのフォローを優先」とするようになった。

それは、マリナが身をもって学んでいた経験だった。

熱があっても、どんなに親しい友が逝っても、締切は待ってくれない。

だから、その瞬間を頑張る。後悔しないように。

予期せぬハプニングに関しては、それを優先してしまえば、失うものの方が多いことは
十分わかっていた。

だから。
だからこそ。

熱でうなされているシャルルを、看病することは誰でも出来た。
でも、彼がそれでも行かなければならないと判断するのであれば。

そのやりたいことを、成し遂げることに尽力する方が、彼の望みであるように思った。

■23

また、雨が降ってきた。

あたりは、暗くなっていて、車はライトをスモールライトからフォッグランプ点灯まで切り替えた。

移動中の車の中。

ほんの、5 分程度の距離の中。

シャルルとマリナは無言だった。

シャルルが、高熱を発していると気がついたのは。彼が、マリナの頬に触れたとき。
いや、彼女を抱き上げて、コテージへと向かう車に、マリナを投げ入れた時。

顔が、疲れているな、と感じた。
次に、体が熱いことに気がついた。

シャルルは、明らかに失調している。

通されたゲストルームのバルコニーで、思い当たる節を整理していたとき。
シャルル・ドゥ・アルディがやってきた。
嵐のように。

ほんとに、彼は嵐だ。
いや、竜巻だ。

音もなく近づいて、考えつきようもない、力の作用で、いろいろなものをめちゃくちゃにする。

その、壮行会に是が非でも出席しなければいけないというシャルルの主張に、
否定をする材料はなかった。

彼ほどの人であれば、アルディ家の当主として、何かと避けてはいけないことがたくさんあるのだと。
マリナはそう理解した。
彼女の父も転勤族で、慣れない土地で、良く熱を出した。

それでも仕事に行く姿に、小さいころはずいぶんと反発を覚えたものだ。

でも、大人になるにつれ。

姉が、盲腸でも笑顔でテレビ画面に出るたびに。
妹が、インフルエンザでもマスクをしながら試験勉強に勤しむたびに。

彼女自身も、締切前の体調不良は自分の責任だということで、まるっきり重視しないように。

シャルルにだって、自分のことより優先しなければならない、

何かがあって。

その理由を問う前に、マリナができることと言えば。付きそうだけだった。

そばにいるだけだった。

その行く末を見届けるだけだった。

■24

車の中の、5 分ほどの時間。

シャルル・ドゥ・アルディと、マリナ・イケダは後部座席の、端と端に座っていた。
シャルルは、その高熱の具合を。

どんどん、集中することができなくなってくるこの感覚を彼女に悟られたくなかったから。

マリナは、彼の発熱を案じつつも、一挙手一投足に、全身の神経を集めながらも、
彼の負担にならないように。
できるだけ気配を消したかったから。
お互いに無言だった。無音だった。

ただ。
ただ。

シャルルが、動いた。

マリナも、そっと応じた。
ほんの5 分間の、逢瀬。

そっと、シャルルの長くて細い指先が、マリナの短く切りそろえた小さな指を捕らえた。

そうして、そうして。

握りしめることはしなかった。
指先までが熱いシャルルの手が、マリナの指先を、静かに触れた。

握ることさえ、ためらわれた。
マリナの指先が、少し動いた。
涙がこぼれるほど嬉しい。

吸い込まれる。
惹かれてやまない。

この感情を、私が感じていることを、シャルル・ドゥ・アルディは、わかっているのだろうか。

先ほどの情欲とも言えるような荒々しさより、よほど、伝わる何かがあることを、彼はわかっているだろうか。

ガンバらなきゃいけないときは、その人のことよりその人の周囲を心配するべきだ。
よく、そう言っていた人がいた。

確かに、そう

具体的には、この壮行会に出席すると言い張るシャルルにも、理由があるのであろう。
だったら、今、一番近しい場所に居るであろう、自分のできることは、サポートするだけだ。

このリゾート島は、フランスのホテルオーナーの資本で。
フランスのトップアスリートが来島している。

で、かつ、その人々（人、かもしれないが）は、ホテルのイメージキャラクターであるという。

そんな中。

フランスの華と称されるシャルル・ドゥ・アルディが顔を出さないわけにいかない。
将来の政治的判断だったり。
シャルル・ドゥ・アルディという人物よりも、アルディ家という、旧家のつとめなのかもしれない。

理由は知ってもしょうがないことだが。

彼にも、やむを得ない事情というものが、存在することは、学習した。
マリナは、少しだけ、ほんの少しだけ力を入れて、シャルルの熱い指先を、軽く握った。

シャルルの指先が、少しだけ、動いたような気がした。

■25

このまま、ずっと、車が到着しなければ良い、と思った。

心地よい、冷たい小さな指先が。

彼の指先から体中に、何か心地好い波を送っているようだった。

「シャルル」
「なに」
「・・・ムリしても良いから。その後は、休息を取ってね」

彼女が他のどんな誰より違う点がここにある。
彼女は「ムリしないで」とは決して言わない。
ムリしても良い、という。
この希有な女性を、運命の人と決めたのは、間違いじゃない。

失いたくない。

シャルルは微笑んだ。

「わかってる」

***

あらかじめ決められた賓客ではないので、おもてなしが不十分かもしれませんが、と。
ホテルの総支配人が出てきて、アルディ家の若き当主を案内した。

シャルルは用意されていたタキシードを身につけ、髪を後ろになでつけ、胸には胡蝶蘭の生花を差し、颯爽と登場した。

周囲に極上の微笑みをかえしながら、その輪の中心にごく自然に入っていくシャルルを見て、マリナはほっと息をついた。
本当に、熱があるのか、まったくわからないわね。

マリナは、その何でもないという様子のシャルルの強靭な精神力に舌を巻いた。
でも、それでこそ彼はシャルル・ドゥ・アルディなのだ。

■26

彼女は少し離れた、目立たないけれど会場全体を見渡せる場所を確保し、差し出されたカクテルをちろちろと舐めながらシャルルの様子をうかがっていた。

今日は、トップアスリート達が集まる、内輪のレセプションということだった。

彼らは、スポーツ界のホープであると同時に、社交界の華たちでもあった。
完璧な骨格と肉体を持ち、スポンサー達に、感謝と隠した存意が混ざった魅惑を振りまく。

今後も変わらない援助を乞うために、時と場合によってその配合を変えながら、彼らは群がり、散り、そして本来の戦う選手となる。

そう言えば。

マリナは今になって気がついた。

彼が人に囲まれている姿はほとんど見たことがない。
けれども、こうやって、距離を置いてみると、彼がいかに非凡な人間であるかが、離れて遠目なのによくわかる。

優雅な身のこなし。

洗練された会話。

広くて深い知識。

きっと、今日のレセプションのために、あらかじめ下調べをしてあったに違いない。
何かコメントしているのであろう。

彼が口を開くと、周囲がわっとどよめいたり、歓声が発せられる。

■27

目の端で、マリナを探す。

彼女を伴って、この苦痛なパーティーに参加しようとしたが、マリナは頑として受け入れなかった。

「近くで、待機してるから」

しかし、タキシードに着替えたシャルルに同伴しないから、と言っても、
ドレスコードがあったので、彼女の格好は、かえって目立つ。

マリナは渋々着替えることに同意した。
彼女が選んだのは、いたって地味な服装だった。

黒レースの膝丈のワンピースに、黒の背の低いミュールを履いている。
彼女はワンピースを選んだときには「目立たないように」と言い、彼女は靴を選んだときには「ふかふかの絨毯の上では、ハイヒールでは転んでしまうから」と理由を言って、彼の選んだ豪奢な服は固辞したのだった。

そのワンピースも十分に高価なものであったけれど。アクセサリーもつけていない。
茶色い髪の毛を少しゆるく巻いているだけだった。

伸びてた前髪は、軽くサイドに流されて、額が見えた。

化粧も、ごく薄く施している程度で、遠目に見ればほとんど化粧をしていないようだった。
かえって、目立つよ、マリナ。
くすり、とシャルルはひとりで笑う。自然と、笑みが漏れる。

外国人が多いこの集まりで、まるでティーンエイジャーのような幼い風体の彼女が目に入れば、どんな服装をしていたとしても、目立つことこの上ない。

きちんとした格好をすれば、それ相応なのに。

シャルルは、彼女を遠くから眺めた。
入り口近くの、緞帳の奥から、彼女がこちらを見ているのがわかる。
時々、飽きて、きょろきょろと周囲を見回してよそ見しているのもわかったが。

シャルルの体調は最悪だった。

直前に、注射と錠剤を併用したが、頭痛と悪寒と関節痛は、ちっとも改善されない。
周囲の口々にひっきりなしに話しかけられる言語は様々で、いちいちその言語でもって答えていかなければならない神経の使いように、少々うんざりしていた。

何より、マリナ・イケダをひとりにさせておくというのは、彼の一番気にしていることだった。

彼女は付き添いで、大事な客人だから失礼のないように扱って欲しい、と十分に念を押したのだが。

それでも、マリナがこちらの輪に加わってくれないことに。

彼の当初の思惑が外れてしまったことに。

シャルルはもどかしさを感じていた。

■28

***彼女の呟き

シャルルが自分のことを「大切な客人だから、そのつもりで」と総支配人に言い含めていたとき、周囲にいた者が一斉にマリナを見て、次には、彼女に恭しく礼をしたことを、気恥ずかしく思った。

もちろん、嬉しくないはずはない。
でも。
うまく言えなかったけれど。

彼女は、こんな風に、人から、かしずかれる人間ではない。

だから、同伴者として、一緒に出席して欲しいとシャルルに言われても、「そんなひらひらした服を着たら、あなたが倒れた時に、どうにもできないでしょう」とムリに理由を言って、その傍らの場所を放棄してしまった。

彼は彼女を様々な表現で呼ぶ。

「運命の人」とか
「femme fatale （ファム・ファタル）」とか
「酷いオンナだ」とも言った。
だけれど、酷いのは、シャルルの方だよ。

どうして、私に微笑むの。
どうして、私に逢いに来てくれるの。

・・・どうして。

どうして、私にキスをするの。

自分が、他の人よりも少しだけ、シャルルに近いところにいるのは、わかっている。
私はこうやって人に見られることに慣れていない。
見るのは慣れているけど。
だから、戸惑う。

彼の光がまぶしすぎるからだ。
嵐のようにやってきて、その嵐は、まばゆい雷光とともに、彼女を強く照らし出す。

それは。

自分の本当の姿だったり。
シャルルの姿だったり。

照らし出すものはその時々によって違うけれど、彼女の見たくないものを、明るく映し出すのだ。

しかも、ほんの一瞬だけ。

パーティの間、マリナの姿が目に入った人から、声をかけられ
たが、外国語はまるっきり話せないので、ただ笑ってごまかしている
と、そのうち、肩をすくめて、彼らは離れていった。

これが、普通の反応なんだよ、シャルル。
宴が、ようやく終わりを告げる頃。
時間にして1 時間程度か。

あとは、歓談の時間だ。

挨拶をすでに終えていた主賓や来賓は退出して良い時間になった。

マリナは、何をするでもなく、彼の姿を眺めているだけだった。
彼は、こういった場で、決して失調していることはおくびにも出さないはずだとわかっていた。

でも、見届けたかったし。

いえ、違うかな。

私が、シャルルを、見ていたかったんだ。

■29

「今日の仕事は終わりだ」

少し、むすっとしたような声色で、シャルルがタイを無造作に緩めた。
「これ、おみやげ」
胸に挿した胡蝶蘭を、ぽいっとマリナに投げた。

ぞんざいに髪の毛をかき上げる。
発熱のせいで、暑いのだろう。
上着を脱ぐと、腕まくりをした。
移動中は終始無言だった。

よほど苦しいのだろう。

シャルルはじっと目をつぶっていた。
心なしか、息も少し
荒い。
車を降りるときに、手を貸そうとしたが、シャルルは「いらない」と言って、
ひとりで歩いて行ってしまった。

そして、コテージに戻ってきて、最初に言った言葉が、これだった。

「あと2日間しか、ないな」

シャルルが明らかに気分を害しているのがわかった。
おそらく、彼女が同伴者としてエスコートされることを断ったからであろう。

「それより、早く横にならないと。」
マリナは、忙しく動いた。

周囲の電気を付け、空調を整える。
悪寒を感じても良いように、毛布の予備を用意し、大量の水を用意した。
顔を、あわせるのがつらい。

シャルル・ドゥ・アルディは、怒っている。
思い通りにならない自分に、怒っている。

でも、それはマリナにはどうすることも出来ないものであったし。

彼に。

何から何を、どう伝えていけばよいのか、皆目見当も付かなかった。

シャルルは「マリナちゃん」と、低い声で、言った。

「そんなことは良いから、こっちを見てくれ」

その言葉に、休まず忙しく動き続けた動作を止めた。
そうして、ひとつ、大きく瞬きをして、シャルルを見た。
ああ。この黒目がちの目が、この気持ちを加速させる。
シャルルは軽く目をつぶり、大きく息をついた。

まだふらふらするが、注射と薬のおかげで、ずいぶん良くなってきた。
頭の中はクリア、だ。
一晩寝れば、翌日にはほとんど回復しているだろう。
医師でもある彼の診断結果に間違いはないはずだ。

「なぁに」

マリナは、目をそらしていたけれど、やがて思い切ったように、ふとシャルルを見た。

強い眼光。色素の薄い、茶色い瞳。
双眼の先が、彼に定まった。
シャルルも、見返した。

ゆらり。

ゆっくりと距離を詰めながら、彼は云った。

「君は、オレを好きだと言った。」
「・・・」
「マリナ。マリナの好きの定義を、確認したい。」
「定義って。」

マリナは言い返した。

「好きは、好きだよ」
「そうじゃない」

シャルルは、静かに、言った。
１０代の青春の輝きの頃は。

こんなときは、壁に拳を打ち付けていただろう。
今は、静かに、言葉を続けることが出来た。

「それは、答えじゃない。」
「シャルル。」

困ったように、マリナが名前を呼んだ。

「マリナ、オレと始める気はあるの？」
「それは・・・」
答えに詰まる。

「答えろ」
シャルル・ドゥ・アルディは、静かに、だが拒むことの出来ない強い口調で、マリナに言った。

壁により掛かりながら、シャルル・ドゥ・アルディはマリナをにらみつけた。

「もう一度だけ、いう」
挑戦的に、青灰色の瞳を光らせた。
ぞくり、と背中に奔るものがある。

「マリナ。オレと、始めてくれ。できないなら、終わらせてくれ」

■30

「答えろ。
　マリナ。
　返事によっては、君をこのまま、ホテルに帰す。
　いや、オレが出て行く。」

そんなことを言い出すのは、熱があるから。

笑ってごまかそうとして、唇の口角を少し上げたが。

張り詰めた空気が、そうさせることを赦さなかった。

シャルルの張り詰めた空気が、マリナにも伝播してきた。

どくんどくんどくん。

まただ。

体のパーツが、部分部分で言うことをきかない。

動脈が激しく脈打つ感じが、全身を覆う。

今が「そのとき」なのかもしれない。

これは、いやな予感なのだろうか。

大きく息を吸って、吐いた。

シャルルが、答えを求めている。

私は、答えを知っている。

■31

「私は」

ゆっくり、一句一句言葉を選ぶ。
選べば選ぶほど、言葉が出てこない。

「私は。」

目を瞑る。
息を止める。
拳を握る。

そして私は、堕ちる。

「・・・私は、始められない」

シャルルのブルーグレーの瞳が、少しだけ細くなったような気がした。

「・・・私は、終わらせられない」

それだけ言うと、マリナの茶色い瞳から、涙が出た。

悲しいからではない。
嬉しいからでも、もちろんない。

・・悔しいからでもなく。

ただただ、苦しかった。
ただただ、遣る瀬無い気持ちが、苦しかった。

息が出来ない。
息が出来ないよ。
彼女の涙腺というパーツを操縦不能にした。

「始めることなんて、できないよ。
　だって、もう始まってる。
　終わることなんて、できないよ。
　こんなに苦しいのに終われないんだよ」

シャルル・ドゥ・アルディは黙ったままだった。
今度はマリナが、目の前の相手を強くにらみつける番だった。

「私の中のこの気持ちは、とっくに始まっている。
　私の中でこの気持ちは、とっくに終わらせられないものになっている。
　そんなの、そんなの。
　わかっているんだと。気がついていると思っていたよ。

　なんで、こんなことを言わせるの？・・・シャルルの、シャルルの、ばかやろう」
そうして、涙を、ぬぐった。

声が、鼻声になってきた。
後から後から、涙が出てくる。

「シャルルはひどい。ひどいよ、シャルル」

どれくらい時間が経過したのだろうか。
ホンの数分のことだったかもしれないし、
何十分にも感じられた。

「マリナ」

シャルルは静かに声をかけた。
彼女を抱きしめるのは、簡単だった。

そのまま抱き受けて、彼女の緩く巻いた髪の毛を乱すほど、強く顔を押さえて、
その顔に頬を近づけたいという衝動が彼を襲った。

しかしながら、シャルルはマリナとの距離を、詰めることはしなかった。

「マリナ。顔を上げて」
マリナが涙をぬぐい、顔を上げた。

緩く巻いた髪は乱れていた。

強く握ったせいだろう、レースのワンピースの裾を強く握ったので、しわだらけだった。
まったく、君は。
少し笑った。
なんて、思い通りにならないオンナなんだろう。

やっと言わせることができた。

彼女に。

酷い　と。

でも、それはシャルルの求めていた意味の言葉ではなく、マリナが精一杯、その頭で考えることが出来る罵倒の言葉なのだ。

でも、どうしてだか、シャルルはそれで満足だった。

「おいで。」

左手をあげて、彼女を招いた。

その仕草は、壁画や画集に描かれている天使の仕草と同じだった。

「今度は、君からだよ。君から、オレに来るんだ。」

■32

おいで、とシャルルが言うと。

彼女は躊躇った。

この、嵐に。
この人の嵐に。

自分から近づいて来い、というのだ。

これまでは。

嵐に巻き込まれただけだ、と言えば良かった。
でも、今度は、シャルルが自分に歩み寄れと言う。

この一歩を踏み出せば、彼女はもう戻れないことを十分に承知していた。

シャルルの差し出した手を取れば、もう、この冥夜を一人出過ごすことが出来ないであろうとわかっていた。

もっと苦しい思いをすることになるということもわかっていた。
マリナは、なかなかシャルルとの距離を縮められない。

他の人に対してはこんなこと、決してないのに。
これまでたくさんの人と知り合ってきた。
彼女は，どんな人とでも接することができた。

そうでなければ転校を繰り返して環境がくるくる変わる学生時代を生き抜けなかった。

それでも。

距離を置かせる、唯一の人。
それがシャルル・ドゥ・アルディだ。
気むずかしく繊細で高潔な、彼女の、大事な人たちの中でも特に気にかける存在。

自分も、そんな存在になれるのだろうか。
愛を乞うシャルルに応えられるだろうか。

自分は、愛を与え続けることができるだろうか。
変わらずにいられるだろうか。

この瞬間を、反省することはあっても後悔せずに、いられるだろうか。

マリナは、一歩を踏み出した。

■33

「君は逢うたびに、泣いているね」
シャルルは微笑んだ。
「そうだね。大人になって、なんだか、涙腺が緩くなったみたいだわ」

少しムキになって言い返した。

本当だ。

彼に逢うたびに、涙が流れる。

掌を差し出したままのシャルルの手を、取った。
小さな掌だった。
短く切りそろえられたマニキュアもしていない爪が、シャルル
の大きな掌に乗った。
ゆっくりマリナの指先を、軽く握った。

冷たかった。

そっと、壊れ物でも扱うかのように、緩く掌でくるむと、唇を近づけた。

どんなに大切に持てなさなければならないレディへの挨拶よりも、もっと丁寧に恭しく。
親愛や敬愛の情のキスではない。

これは、約束だ。

彼女と彼との約束でない。
そんなものは、いらない。

自分自身への。
もう、いいかな。

彼女を唯一の人と定め、まだ想い続けていることを、隠さなくても。
この気持ちを、マリナが戸惑うことに臆さなくても。

彼女と約束しに来たわけでない。
自分自身へ約定するために。

そして、彼女と彼の距離は、限りなくゼロになった。
ゆるく腰を抱くと、彼女は抗わなかった。

「ああ、髪が、乱れているよ」

片腕を腰に回したまま、シャルルはマリナの額に降りかかる髪の乱れを整えた。
この黒目がちの瞳が、こんなにも近くに、在る。

前回マリナと別れてから、何度彼女のその表情を思い返しただろう。
何年も経過してなお、変わらない幼い顔立ち。
気の強そうな唇。
化粧慣れしていないきめの細かい象牙色の白い肌。
意志の強そうな眉に、思ったより長いまつげ。

すべてをひとつひとつを記憶したはずなのに、今もまた彼の記憶分野に、
新規情報更新が始まっている。

「シャルル」

マリナが、シャルルの背中に腕を回した。

拙い、慣れていない動きだった。
シャルルは、びくっと、体を動かせた。
彼女の頬が、胸に触れる。

顔を、埋めた。

身長差があるので、表情がまったく見えなかった。
シャルルも、腕を回して彼女を包んだ。
自分が覆い隠してしまうほど、こんなに小さい彼女が、自分を包んでいるような気がした。

ただ、静かに。
二人は抱擁した。

8 年分の抱擁だった。

でもそれは、8 年分の重さはなかった。
ただただ風のように軽かった。

嵐の中心は、こんなにも穏やかで静かだったのだ。

■34

今度は、マリナが、彼に触れる番だった。
小さな掌を、そっとシャルルの頬にあてる。
背伸びをしないと、届かない。ミュールの底と、踵が離れた。
そうして、ゆるやかに、頬のから顎へ、その輪郭をなぞった。
シャルルは、背中に走る愉絶な感触を感じ、息を吐いた。

こんなにも。

触れられることが心地好いと感じたことがあっただろうか。
触れられているだけで、ため息が出る。

そうして、マリナの白くて小さい掌は、彼の顎を伝わり、タイをほどいて少しはだけたドレスシャツからのぞく首筋へと、移動した。

体が、徐々に火照るのを感じる。
これは決して熱情ではない。
いとおしさが、伴う。全く違う感覚。
背中から、彼女の腰に回した両手にぐっと、力が入った。

***

「だから、早く休んでねって言ったじゃないの」

マリナが、シャルルによく冷えた冷凍ゲル入りの枕を差し出した。

はいはい。
自分でやれってことだね。
枕をあてがう。

「ああ、もう、信じられない。こんなに熱があるのに。」
「もう、大分良いんだよ」
「冗談じゃないわ。」
マリナは目を三角につり上げた。

「私は頑張れとは言ったけど、体調不良を治さないで良いという応援はしてないわよ。」

それから。

彼女は茶色い背中まで伸びた髪の毛を後ろで束ねながら、冷たく言い放った。

「あたしに感染さないでくれる？
今回はバカンスでここにいるのではなくって取材なの。
明日には仕上げないと。
疲労熱って言ってたけど、大丈夫よね？
感染しないわよね？」

・・・この女を絶対に、泣かせてやる。

シャルルは誓った。

「ダメだ」
「何がダメなのよっ」
「君はオレと一緒に居るって言っただろ」
「言ってません」
「私はそろそろ休まないと、明日朝早いのよね」

ぷいっと横を向いて、なんとマリナはシャルルを寝かしつけると、部屋を出て行ってしまった。

頬に触れたとき。

腰に手を回し、顔を傾けて彼女にもっと触れようとしたのに。
彼女は目を見開いて、一言「熱がまだある」と言って、彼に横になれ、と命令口調でわめきだした。

マリナの答えは、冷たかった。

これが先ほどまで、抱擁を交わした相手なのだろうか。
でも、これがマリナ・イケダなんだけれどもね。

シャルルは苦笑いした。

まったく。
君ときたら。

いつになったら、オレは君と一緒のベッドで朝を迎えられるんだい？

■35

*** シャルルの焦り

目が覚めたとき、とうに日は高くなっていた。
はっとして、身を起こす。

そうしてぼんやりする頭がクリアになる間、サイドテーブルの水を飲み、膝を立てて、しばらく周囲を眺めていることにした。

ああ。
そうだった。

熱を出して、ベッドに入るなり、薬の作用で眠ってしまったんだ。
疲れていたのもあるかもしれない。

何しろここ何日もロクに眠っていなかった。

オレがこんなに苦労していること、マリナはちっともわからないんだろうなぁ。

そうだ。
マリナ。

周囲を見回す。
ソファに、誰かが寝ていた痕跡がある。

この部屋にはない、クッションが2 つ。毛布がたたまれて置いてあった。

————ここで休んだのか。

きっと、シャルルの状況を気にしていたのだろう。

熱冷ましのための冷凍ゲルを入れた枕が、まだひんやり冷たかった。

夜中に、マリナが交換したのかもしれない。

徐々に痺れていた頭の霧が、薄れてくる。
体をゆっくり起こした。

昨夜感じていた頭痛も、頬の火照りも、関節痛もなくなっていた。
夜着に残る大量の発汗の痕跡で、ずいぶんとうなされたことを思い出した。

次に、聴覚が戻ってくる。

部屋にも、コテージ全体にも人の気配がしないことに気がついた。

「マリナ？」

起き上がり、彼はコテージ内を見て回る。

マリナのゲストルームは、やはり使用した様子はなかった。

ホテルから届けられた荷物がほどけられていて、何かを取り出した跡がある。
シャワーを浴び、着替えて、どこかに出かけたようだ。
リビングルームはすでに届けられた朝食が2 人分あった。
1 人分は手を付けずにあった。

そして、その朝食が、マリナの食事とは違い、病人食で刺激の少ないものばかりであることに気がついた。

マリナが、モーニングサービスのリクエストをあらかじめ出してあったようだ。
そういう、気遣いができるようになったんだな。

シャルルはクスッと笑った。

マリナちゃん。
オレはね、日が高くならないと起きないし、朝はそれほど食べないんだ。
そのうち、徐々に覚えれば良いことだ。
それに、彼女が食事の心配をすることは、今後ないはずだ。

今回は、2 人分食べなかったんだな。

シャルルはまたひとりでくすくす笑うと、まずはシャワーを浴びることにした。

マリナがどこに行ったのかは、だいたい想像がつく。

特に問題はない。

まだ、時間はあった。

■36

そろそろ、起きた頃かな

マリナは、腕時計をちらりと見て、帽子を深くかぶった。
強い紫外線が照りつけ、帽子なしではいられないくらいの晴天だった。

「昨日までの天気が嘘みたい」
マリナはつぶやいた。
最初は徒歩で移動しようと思っていたのだが、この照りつける
太陽と斜面の急なアップダウンに辟易して、あきらめた。

結局、ホテルまで戻り、電動バイクをレンタルした。
免許を持っていないマリナでも、これならバイクを使用しないで島を回れる。
それに、排気ガスなどの心配もない。
サイクリングは至極快適で、時々、アスリートの選手達がチームで練習したり、
軽く走ったりしたりしている風景を見かけた。
それ以外は、まるでこの島を丸ごと貸し切ったかのように、静かだった。
小さな島だから、車の往来はほとんどない。

信号だってないくらいなのだ。

そういう交通機関がまったくないからこそ、彼らははるばるここまでやってきて、
調整しているのだろう。

地図を見るまでもなかった。

長い長い坂を登り切ると、ぱぁっと視界が開けて、島の外れに到着した。

海に出た。

コバルトブルーの海が遠くまで続く。
今日は、少し白波があったが、ごくごく穏やかだった。
リアス式海岸で狭まった湾に、鳥が魚を求めて集っているのが見える。
日差しも強いし、雲は入道雲で、もうすっかり夏の空だった。
島で一番、標高が高いところだ。
潮風が、昇ってきて、肌に当たる。

少し汗を掻いたので、帽子を脱ぎ、木陰で水分を取ることにした。

「完全に、運動不足だなぁ」

ぱたぱたと、帽子をはたいて涼を取る。

昨夜はソファで夜を明かしたこともあり、なんとなく体がだるかった。
でも、ベッドで高熱にうなされているシャルルを見ると、部屋に戻って自分だけ快眠を貪るわけにはいかなかった。
枕を交換し、ベッドサイドに水を備える。
注射も投薬も終わっているから、徐々に楽になるだろう。
先ほどよりかはずいぶん顔色が良くなっていた。

顔をのぞき込んだり、ベッドのそばに行って人の気配でシャルルが起きてしまったりすることを避けるために、少し離れたソファに座ることにした。
シャルルの眠りは深くて、少々の物音では起きないとは思った

けれど、やはり慎重になった。

毛布と、クッションを持ってくる。
これでうっかり寝込んでしまっても大丈夫だ。

それにしても。

こんなに高熱が出るまで、誰も気がつかなかったのだろうか。
いや、ジルがそばにいれば、体調不良には気がつくはずだ。
それならば、日本への移動途中で具合が悪くなった、ということだ。

なんてこと。
こんなに摩耗するまで、働いているのだろうか。
きっと、訪日のスケジュールを確保するためにムリをしたのではないのだろうか。
おこがましいとは思ったけれど、きっと、それは自分に逢いに来るため、だ。

彼女はずしん、と　のしかかる重さを感じた。
これが、シャルル・ドゥ・アルディの愛し方なんだ。

それまでの、穏やかな恋とはまるで違う。
激しくて、強く惹き付けられる。
そばに寄ると「いけない」と何かが警告するけれど、近くに寄らずには居られない。
そして、彼の、綺麗な、綺麗な笑顔を見ると、どうしようもなく泣きたくなる。

————彼は私を泣かせるのだろうな

そう思った。
かつての恋人には「泣かせるな」と激昂した本人なのに、ね。

「酷い人」
マリナは、呟いた。

■37

一週間も滞在する広さじゃないよ、ねぇ
マリナはそう思った。
電動自転車であちこちを走り回り、「指令」を実行する。
すでに、ユリナから指定された場所の写真を納めてある。
彼女の気に入るような画像であると良いのだが。
いかんせん、マリナは機械に疎い。
ユリナの指示は具体的で、廃社になった神社の灯籠を斜め右、とか。
島随一の古木の全体像を逆光にならずに、とか。

写真を撮る場所の周り方順から、その写真の必要最低枚数まで、いちいち細かい指示が入っていた。

こういう画像から、どういう切り口で説明をしていくのか考えるのだという。

「すぐ、終わると思う。一日あれば十分でしょう。
　え？長く滞在する理由？
　天気が変わりやすくて、帰りの日程がわからないのと、時たま、お忍びで絶対取材に　応じないVIP が来ることがあるって聞いてね。
　・・・まぁ仕事半分。プライベート半分ってところかな」

苦笑いをしていたので、どうやら一人で旅をするのではなく、誰かと落ち合うつもりだったのかもしれない。
それが、急遽マリナに行けというのだから、何度目かの破局なのだろう。
もう、数えるのも面倒なので、姉の心配をするのは止めることにした。
南中をとうに越えて、差すような日差しも、幾分和らいできたようだった。
夕方の陸風が、海に向かってそよいでいた。

さて、と。

あと一カ所を残すだけ。
これが終わったら、帰りますか。

シャルルを長い時間、一人にしてしまった。
大丈夫だろうか。

いや、大丈夫でしょう。

相手は医師で、立派なおとななのだから。

■38

最後の一カ所。ここもやはり、地殻変動で、この島が一度無人島になってしまったときに廃れてしまった、廃社だった。

神社。

こういうものを見ると、ここが日本であると思う。
風雨で痛んでしまった神社の鳥居はまだ朱さを残していた。

神社の名前も、その札からでは、もうわからない。
鳥居から本殿までは長い道のりで「鳥居は産道を体現したものである」という説も頷けた。
かつては玉砂利だった砂を踏みながら、マリナは中に入っていった。
日がかげると、手入れのされていない伸び放題の木々の枝葉が陰を作って、道をはじめ、周囲を薄暗くした。
手水も封がされていて、誰も使用していない。
かつては白かったであろう。
手ぬぐい用の布の切れ端らしきものが、繊維となってひらひらと、手水の庇の下で、風で踊っていた。
ただ、持ち込んだのか自生なのかわからなかったが、真っ白なハイビスカスが群生していたのが目を引いた。

まだ夏本番とは言えないこの時期に、ハイビスカスの花が咲いているということは、ここはよほど年間を通して暖かいということだ。

灯籠は倒れている。陰陽を表す太陽と月に型抜きされた灯籠の窓が左右に配置されていた。狛犬も、顔が判別できない。

阿吽の形式だ。

祠と言った方がよさそうなくらの、小さな建物がお社ということだろう。
全体的に、女性的な印象のある建物だった。
ここは誰を祀っているところなのだろうか。
坪鈴は銅製で、黒く錆びてしまい、所々が朽ちて穴があいていた。

桐枠も紐巻も朽ち落ちていた。
お賽銭は・・・賽銭箱がないので、しょうがない。

これは省略することにした。

忘れ去られていくんだなぁ　とユリナが「忘れられた遺産」に熱中する理由が、なんとなく理解できた。

手水も鈴鳴らしもお賽銭もないけれど。

マリナは、二拝二拍手一拝の作法にて拝礼する。

何かをお祈りするとしたら。

神様。

日本の神様だけど。

彼女は軽く目を閉じて、手を合わせた。

・・・どうか、シャルルが、倖せになりますように。

彼の傍らに、たとえ自分がいなかったとしても、彼がどうか健やかに、倖せに暮らせますように。

■39

さて、帰ろう。

不謹慎だけれど、境内の写真も納めた。
これで、ここでの目的は達成されることになる。
あとは、この画像を元にスケッチ起こして自分の資料集に加えるだけで良い。
感想とか気がついたことなどの雑記その他細々したものを、記憶が薄れないうちに書き足す作業だった。

これは夜でもできるな。

ああ、おなか空いてきたなぁ

まだ陽は差し込んでいたが、そろそろ夕暮れ時の時間だ。夕食の時間だ。
そう思って、カメラを移動用の鞄に収めていたとき。
鳥居の向こうから、砂利を踏みしむ音が近づいてきた。

「シャルル」

その姿を見定めたとき、マリナがびっくりして小さく叫んだ。

ブラックの下地に、白地で細かい格子模様の入ったコットンのパンツに、半袖のシャツ。

袖から、筋肉のほどよく付いた腕が、すらりと伸びていた。
軽装に着替えた彼は、白金の髪は軽く後ろで束ねて、硬質なダイバーズウォッチをはめていた。
色の濃いサングラスをかけているので視線の先や表情がよくわからない。

「具合は？もう大丈夫なの？ああ、今日くらい休んでいれば良いのに。」
駆け寄りながら、彼女が矢継ぎ早に言う。

「それにしても、どうしてココがわかったの？」
「衛星写真から。」

にんまりと笑って、彼が空を差し示した。

「・・・・・！！」

「鮮明に映ってたよ。
　君が、一生懸命モータサイクルで坂を上っているシーンとか。
　坂の途中で我慢できなくって、ホテルに用意してもらったサンドイッチを頬張ってい　る画像とか。」
「しゃ・・・シャルル・・・」

口をぱくぱくして、その大きい瞳の瞬きの回数が、通常の3 倍程度に到達したのを見て、
シャルル・ドゥ・アルディは、満足したようにちょっと頷いた。

そして、ぽんぽん、と帽子の上からマリナの頭を軽く叩いた。

「ああ、ずいぶん日焼けしたね。もう、若くないんだから紫外線対策はしないといけないよ。
メラニンを侮ってはいけない。」
そう言ってから、マリナの最初の質問に回答した。
「具合は、もう完治。今日は日中を静かに過ごせたので、疲労
はすっかり抜けたよ。
騒がしい君がいなかったせいもあるね。」

・・・皮肉は相変わらずだ。

でも、元の調子に戻っているようだ。
マリナは、ほっと胸をなで下ろした。

「ところで、マリナちゃん。ここが、どういうところだか、知ってるの？」
「廃れた神社跡」
「調べて来なかったの？」
「何を？」
その間の抜けた答えに対して、サングラスをわざわざ外し、シャルルは冷たい視線を投げかけた
。

「ちょっと、おいで。」

■40

「ここは、地霊信仰と神道が融合しているところなんだ。」
シャルルは説明した。

「その昔、人間の男に懸想した女神が、思いあまって、男の妻を殺めた。
殺人は大罪で、神籍を剥奪された女神が人間に堕ちて、これで男と添い遂げることができると思
ったところ、大津波が発生した。海に出ていた男を救うために、自らの命を海神に捧げてこれを
鎮め、この島を救ったということで、再び神籍に戻ったということだ。」

そこまで言うと、シャルルは、腰ポケットに両手を入れて、その廃屋と化した社をじっと見つ
めた。

「それが、この神社。だから、ここは女神社なんだよ。」

「女神社？女神が祀られているのね」

「そう。女が男の倖せを願うと、叶わないと言われている。」

どきり。

さきほど願った、あの願い事。叶わないことになってしまうのだろうか。
マリナは落ち着かない気持ちになった。
衛星写真は、彼女の心の中まで撮影していないだろうか。
そんなありえない妄想で、気が静まらない。

「・・・でも、すごく、悲しいお話ね」
「そう？ものすごく生々しい話だよ」
シャルルは素っ気なく言った。

「自己中心的な女神が、男を手に入れるために、あれこれ策を
尽くして、最後は、男を助けるためだけに自分の命を差し出した。
結果的にこの島を救ったという功労で神籍に戻ったとしても、男とは添い遂げられなかったわけだし。」
「そういう解釈もあるけれど」

「ここに祀られているってことは、島の人たちは、この女神様を赦していたと思うよ。それに、その男の人も」
マリナは反論した。

そう願いたかった。

その人のために出来ることが、自分の命だけしかなかったら。
それくらい、その人が好きだったら。
周囲がどうでも良くなるくらい好きだったんだと思う。
それだけ、彼女は激しい恋をして、道を外してしまったんだ。

「オレなら、絶対に赦さない。
　愛する人を奪った者が、たとえ島を救った英傑であっても。
　たとえ、自分を救ったとしても、
　絶対に赦せない。」

短く彼がそう言い捨てたので、その女神神社にいるというのに、不謹慎だよ、とマリナが少しだけたしなめると、「・・・そうだね。」シャルルは小さく笑った。
綺麗な、笑顔だ。

この笑顔が好きだ。
ずっと、笑っていて欲しい。
そう思った。
これは、願い事になるのだろうか。

「もう一つ、二つ、この神社には話があって。」
シャルルは続けた。

「やがて、男の子孫がこの神社を護るようになった、とか。」

そこまで言うと、シャルルは物憂げな青灰色の瞳を、マリナに向けた。
「叶いそうもない恋を成就したいときには、津波のあった夜と同じ、満月の夜に、ここに来て願うとか、ね。」

その瞬間。

まるで、そのタイミングを待って居たかのように、強い風が吹き荒れた。

「わっ！」

マリナが帽子を押さえるより、風が速かった。

帽子が一瞬高く巻き上がり、ハイビスカスの群生の頂上に、落ちてしまった。

見上げた拍子に、空に浮かぶ白い月が見えた。

あ。

今夜は満月、だ。

■41

彼女の身長では、とうてい届きそうもなかったので、シャルルがハイビスカスの木まで歩み寄り、ひょい、と帽子を持ち上げた。

「ほら」
「ありがと」
もう帽子が必要がないくらい、陽がかげってきた。
日没が近いのだろう。
ハイビスカスの白い花が、その花弁を閉じ始めていた。

「白いハイビスカスか。こんな大きな群生は、珍しいな」
シャルルがそう言った。
「この花だけ、忘れられても咲き続けるんだね・・・」
白いハイビスカス。

昨日シャルルが身についていた胡蝶蘭も素敵だったけれど、私はこういう花も、好きだなぁ。

摘んでいくこともできたけれど、それは忍びなかった。
この花は、ここで咲いているからこそ美しい。
写真には納めたので、後でデッサンでもしようかな。
そんなことを思いながら眺めていると、シャルルが、
「ちょっと、腕を出して」というので、考えもなく、何の気なしに、左手を持ち上げた。

ん？

ポケットから、シャルルが、何かを取り出した。

「ちょっとじっとしてて」

そこで初めて、マリナはシャルルが自分の左腕に、何かをはめたことに気がついた。

赤い紐だった。

長さを調節して、「これでよし」と言うと、「気に入った？」と尋ねる。

「気に入ったも何も」

マリナは絶句した。
赤い紐は古代紐だ。

手首に回された紐には、ハードプラチナの小さなリングはまっている。
手彫りであることは明らかで繊細な模様が彫られていた。
留め具はなく、今、シャルルに留められてしまったので、外れそうもない。
完全オーダーメイドの最高級の品だ。

「日本風ミサンガ、だね」
シャルルが笑った。
マリナの左手を取ったままだ。
「あげる。取材旅行を邪魔したお詫び。」
「シャルル！・・こんな高級なもの、受けとれないよ！」
マリナがそう言うと、シャルルはマリナの左手を強く握った。
「いらないなら、捨ててもいい。ハサミで簡単に切れる。」
「いるとかいらないとか。そういうことではなくて」
マリナが口を開くと、シャルルは帽子をマリナにかぶせた。
お詫びの品なんかじゃない。

これは元々準備していたものであることは、マリナも十分よくわかっているはずだ。
でも。
シャルルは全部を言わせなかった。

「マリナ。今日は満月だよ。叶わない恋を成就させるために、
女神が海から戻ってくる日だ。願い事をした者は、このハイビスカスを供えたそうだ。だから、賽銭箱がないだろ」
シャルルは、そう言うと、まだ閉じきってないハイビスカスの花をひとつ、摘むと、かつてここに訪れた誰もがきっとそうしたように、その花を祭壇に捧げた。
ここは神社だったけど、祈りを捧げる祭壇だった。

願うことは、ただ一つだ。
そうして、サングラスをかけ直すと、帰ろう、とマリナに言った。

「紐が切れたら、持っておいで。

特殊な結び目だから、オレしか結べない。
言ってくれれば、結び直すから。
予定しておくよ」
「パリまで持って行くの？」
マリナはくすくすと笑った。

それこそ、WEB カメラでお知らせするから、何とかして、とおどけて言う。
彼は、その問いには答えなかった。
彼の予定は決定だからだ。
「この紐が、色あせて、切れる頃には・・」
その先の言葉は言わなかった。

「今度は、サイズ違いを作らないとね。・・・君の薬指に合うように。」
小さく、心の中で呟いた。

■42

<hr size="1" />
▼男性が女性に赤い紐を結ぶことを知らないんでしょうね。
ちなみにここで蘊蓄をひとつ。

*** 高麗錦　紐解きあけて　夕べとも　知らざる命　戀つつあらむ
『互いに紐を解きあって抱き合った夜が愛おしい。
この先があるかどうかわからない契りかもしれないけれど、この命が続く限り、あなたを愛したい』
この歌には解釈いろいろとありますが。
古代日本人は、腰に深紅の紐をつけていました。
この紐を「解く」ということは、その紐を解いて、契りを結ぶということです。
この紐をお互いに交換し合って結びあう習わしもあったようです。
現代に通ずるものがあるかと思います。
契りを終えた後に、紐を自分流の結び方にして自分以外の誰にも解かせなくするといったこともありました。
とまぁ、古代紐を結ぶという行為は、シャルルにとっては「契りを結びたい」ひいては「プロポーズ」なのですが。

・・・・わかってないでしょ。

長い前置きがございましたが、シャルル猛攻、まだまだ続きます。

<hr size="1" />

その夜は至って、穏やかだった。
コテージの部屋で摂った食事は最高のフルコースであったし、天気が荒れることもなく、本当に静かな夜だった。
復調したシャルルは、マリナが興味を惹かれるような話しかしなかったし、マリナは今日一日で収穫を得た様々な見聞録をシャルルに披露した。
シャルルは、マリナの左手首に光るリングに目を細めて、満足だった。
今度は、その薬指に、はめてみせるよ。

「・・・ル。シャルル？」
呼びかけられて、我に返った。
「なに？」
「呆れた。あなた、まだ発作があるの？」
マリナがおかしそうに言う。

彼女の言う『発作』というのは、思考中の自分のことだそうだ。
何も聞こえないし、何も感じなくなる。

違うよ、マリナ。
今は、君のことだけ、考えてたんだ。

そう言っても、彼女は「アムールの国の人は、これだから」と言って相手にしないだろう。

「明日は、いよいよ帰国だね」
少し寂しそうに、マリナが言った。
飲みかけのワイングラスを置いて、シャルルは言った。

「まだ、日程が残っているようだけど、マリナはどうするんだい」
う～んと首を振って答えた。
「本当ならここに来るはずの人であったなら、ぎりぎりまで居たいと思うのでしょうけど。
　こうも天気が変わりやすいのであれば、帰りの交通機関のこともあるし・・・。

　早めに帰ろうかと思う。」
「じゃぁ、オレと一緒に、ヘリに乗って帰る？」
「いいの？」

ぽっとマリナが弾けるように言った。移動時間も旅費も大幅に省略できる。
パリ行きの飛行機に乗り込む直前まで、最上級のもてなしを受けることができるのは、大変に魅力的だった。

持つべきは、財力のある友、なのかもしれない。

明日はシャルルが帰る。
このコテージも引き払わなければならないし、やらねばならない仕事は済ませてしまった。
帰りの日まで、デッサンをしたり散歩をしたりしてのんびり過ごそうかなと思っていた矢先の申し出に、一も二もなく飛びついた。

■43

月見酒をしよう、とシャルルが言い出した。

食事も終わり、デザートも終えて、さて、明日帰るなら荷造りしないといけないね、
という話をしていた時のことだ。

これから夏、というときに月見酒、ねぇとマリナが笑ったが

「今日は満月だしね。星空も眺められる」

シャルルはそう言うと、冷たく冷やした酒と竹杯を持ってきた。
ここの土地の湧水から作った酒だそうだ。
そう説明しながらゆっくりと注ぐ。
冷凍直前まで冷やしたのだろう。
とろり、とした感じの液体が注がれ、甘い芳香が漂ってきた。

「バルコニーでこうして上を見上げながら、月見酒。なんとも贅沢よね」
マリナが火照った頬に竹杯を押し当てながら、そう言った。
照明を落として、星空と大きな満月を眺める。

目の弱いマリナでも、たくさんの流星と満月の輪郭がよく見えた。
東京ではこんな空は見ることができない。
パリでもそうかもしれないけれど。

それから、左手首に留められた環を見ながら、マリナは礼を言った。

「これ、ありがとう。切るのももったいないから、切れるまで使わせてもらうね。
　ああ、また今回もいろいろと出費をさせてしまったわ。
　いろいろとありがとう。
　まあシャルル・ドゥ・アルディなら、大したことないんだろうけど。
　お礼もできないわね」
アルコールが入って、少し饒舌になっていた。

「看病のお礼も込めてだし。」
シャルルは、竹杯を置いて、マリナを見つめた。
マリナはその視線に気がつかない。

「返礼は日本人の美徳でもあるけれど、やり過ぎると時々損をするよ。
そういう時は、素直にもらっておくものだ。」
シャルルが脚を組み直した。
肘をついて、頬を傾け、ふわりと笑う。

月の光に白金の髪が照らされて、何とも言えない光波を出していた。
月夜見の神様だって、見とれてしまうかもしれない。

実際、マリナはこうして彼の姿に見とれていた。

「・・・それでもお礼と言うのであれば」
ちかり。瞳が光った気がする。

竹製の長椅子で寛ぎながら杯から先をちろちろと舐めていたマリナが、ぎくり、として顔を起こした。

「月が出ている時間だけで良いから、君の今夜を、オレにくれないか」

「ダメかな」
「ダメかなって・・・」
マリナが絶句した。

しばし瞬きを忘れて硬直していたが、ゆっくりと茶色い瞳を瞬かせた。
そして、次に、杯に注がれていたアルコールを、一気に口に流し込んだ。

「え～と。今、アルコールを大量に摂取してしまいました。」
えへへ、と彼女が笑う。

明らかに、ごまかそうとしているその素振りに、シャルルは激昂した。
「はぐらかすのはやめろ」
青灰色の瞳を見開き、強い口調で言う。

その言い様に、マリナも少しむっとしたらしく、口を開きかけて、そしてぷいっと顔を横にそらした。

「顔をそらすのもやめろ」
たんっと杯をテーブルにたたきつけた。
中身が勢いよく溢れて、シャルルの掌にかかった。

「アルコールだって？だから何だって言うんだよ。
　アルコールの効き目はそんなにすぐ出ない。
　それでも判断に鈍るなら・・・」
　ぎらり、とマリナを強く見据えて、低く言った。

「酔いなら、今すぐ醒ましてやる。」

シャルルは急に立ち上がると、マリナの腕をつかんだ。

「何するのよ！」

マリナを引きずるようにして、連れて行った先はバスルームだった。
ドアを荒々しく開けると、シャワーカーテンを引きちぎらんばかりに力一杯開き、

よう磨き込まれたバスタブにマリナを軽々と乱暴に放り込む。

そして、シャルルはシャワーに手を伸ばし、栓を一気にひねった。
勢いよくマリナにかける。

小さな悲鳴は水音にかき消される。

シャルル・ドゥ・アルディは冷たい青灰色の瞳でマリナを見下ろし、なおもかけ続けた。
見る間にマリナの髪からも肌からも、水が滴り落ちてきた。
服も水を含んで重たくなり、ぴったりと肌に張り付いていく。
彼女の体の線があらわになった。

ああ、もう、堕ちる。

今度はシャルルがそう思う番だった。
自分も濡れるのも気にせず、そのままバスタブに乗り込む。

「冷たいよ！シャルル！やめて！」
「こっちを見て。」
「やだ！！」
「いいから、見て」
「・・・！！」

シャルルは、マリナの後頭部をつかみ、暴れるマリナの両方の手首をもう片方の手で捕らえた。
そうして、濡れたマリナの唇に強引に自分の唇を押し当てた。

「んんん！！」

マリナは顔をしかめて抵抗したが、シャルルはお構いなしだった。
唇を強引に押し開いた。
顔を押しつけ、舌根まで彼女の中に挿れる。

先ほどまで一緒に飲んでいた酒の甘い芳香が、彼の鼻腔に流れ込んできた。

まるで、媚薬のように甘露な味わいと香りに、シャルルは我を忘れそうになる。
彼女の髪の香りと、酒の匂いと、そしてこの月が、オレを狂乱させる。
ひとしきり彼女の唇を貪ると、ようやくシャルルはマリナを離した。

離したというよりは、引きはがした。
すでに、彼自身もぐっしょりと濡れて水が滴っていた。

濡れそぼった青灰色の瞳が、暖色の間接照明の下で、濡れそぼっていた。
泣いているかのようだった。

「痛い」

マリナの両手首は、赤くなっていた。
さすることも出来ないくらい痛かったのだろう。
彼女は両手首を自分の胸に押しつけた。

彼が自ら結わえた赤い紐は水分を含んで、より一層濃い色合いになっていた。

二人はしばし無言だった。

流れ出るシャワーの音だけが、室内に鳴り響く。

「マリナ。今、決めろ。今、すぐに決めるんだ。」
「決めろって・・・」

何をどう決めろと言うのだろうか。

マリナは途方に暮れた。

■45

「何を決めるというの」
「オレと一緒に居ること」
シャルルは即答した。

「今、一緒にいるじゃない」
「そういう意味じゃないって、まだ、わからない？」

答えを待って居るはずなのに、シャルルは、彼女の口を自らのそれで塞いだ。

長い、長い口づけだった。

力が抜けてしまうくらいの甘露なキスだった。

がくがくがくと脚が崩れ、膝を立てていることができない。
やがて彼は渾身の力で彼女を抱き留めると、まぶたの上、額、こめかみ、髪、頬と場所を移して彼女に嵐を起こし、乱して、荒らした。
その綺麗な唇をマリナの耳朶へ移し、軽く噛む。

「オレと、始まってるんだろ？」

耳元でそう囁くと、彼女を抱き寄せたまま、眉根を寄せて、しばらく目を瞑っていた。
が、やがて開いた瞳には、もう、逡巡の光はなかった。

濡れたような、マリナの瞳が本当に涙で潤んでいるのかどうかはもうどうでも良かった。
二人の体は濡れそぼり、そしてシャルルはマリナを激しく求めた。

「もう、君の意見も了解もいらない。責めるならそれも受けよう。
　・・・でも今は。」

そしてその次には、首筋から鎖骨へ向かい、ゆっくりと、甘美な刻印を一つずつ付けていくように、等間隔に這わせてそう言った。

「オレは気が長い方じゃない。本当に、始まっているかどうかを、今。確かめたい」
そうして、彼女から体を離すと、バスタブの中にびしょ濡れのマリナを残し、シャワーカーテンを勢いよく引いた。

「体が冷える。シャワーに入っておいで。
　ああ、でもこのバスルームから20分以内に出てこなかったら、扉を蹴破るよ。
　もう、覚悟してくれ。」

何を、確認したいというの。

マリナは服を乱暴に脱ぎ捨てながら、ため息をついた。

自分がシャルルを好きかどうか？

明日には帰国してしまう人と、気の迷いのように過ごしても、何も確認できないし、何も約束できないし、安心できない。

・・安心？わたしは、安心したいのだろうか。

逆に言えば、シャルルは確認して安心したいのだろうか。
シャルル。

青灰色の、強い光を持つ、昔からの、大切な人。
傲慢で強引で繊細でそれでいてこの上なく優しい。

ねぇ、シャルル。
そんな関係になれば、もう、戻れないんだよ。
一夜を愉しむほど、彼女はシャルルのことを割り切れないのはわかっていた。
シャルルが引き戻すつもりがないことは十分わかった。

今の衝撃で、彼女の首や肩には、赤い花びらが散っていた。
バスローブを羽織っても、その間からその花痕が見え隠れする。
そっと、その部分を押さえた。
彼の残した痕が消えなければ良いのにと、思ったことがある。

今、再び彼女の封印が解かれてしまった。
シャルルの熱い烙印によって。
躊躇わない彼に躊躇っていた。
どういうわけか、穏やかな、日溜まりのようなあの人の笑顔を思い出していた。
彼とシャルルを比べることはできないし、しようとも思わない。
けれども、なぜか、彼の笑顔が浮かんできた。

涙が溢れる。
嗚咽が漏れる。

ごめん。
ごめん。

私は欲深い。

今、こんなにもこんなにも、シャルルを求めている。
かつての恋人の親友である、その男の寵を欲している。
もう、堕ちてしまったんだ。
始まっていると言ったのは、彼女の方だった。
その始まりが、どこへ続くのかは、わからない。
けれども加速を上げてシャルルに気持ちが向いていくのがわかる。

どきどきする、を越えて。

彼と一緒にいるだけで。

その綺麗な笑顔を見るだけで。

息が止まりそうになる。

もっと見ていたいと思う。
もっと・・・触れてみたいと思う。

もっと。
もっと。
もっと。

欲深い私は、きっとずっと、そう想い続けると思う。
手で口を覆い、嗚咽を堪えたけれど、どうにもならない猛悍な感情がマリナを襲った。

そのときだった。

だんっ！と音がして、勢いよく扉が開いた。
留め具が外れて、飛散した。

振動に驚いて、声を止める。
そこには、文字通り、扉を蹴破ったシャルルが立っていた。

彼もバスローブに着替え、まだ濡れた髪の毛を掻き上げていた。
息が乱れ、一撃で重い扉を蹴破ったシャルルを見る。

「ひとりで泣くな。」
シャルル・ドゥ・アルディは短く言った。

わかっているんだよ、シャルル。
わかっているんでしょ、シャルル。

泣き笑いになった。

「もう時間？」

「27 秒過ぎた。もう待たない。」

■47

*** シャルルの独白

マリナがシャワーを浴びているころ、シャルルは濡れた服を脱ぎ捨て、バスローブを羽織った。
濃いグリーンのバスローブが、彼の白金の髪とよく合っていた。

そうして、小さな子どものように、バスルームの前に、膝を立てて座った。

相変わらずシャワールームの水音は途切れないが、水からお湯に切り替えたようだ。
時たま、その水音に交じって、マリナが小さく何か怒っているような声で独り言をはき出しているのが聞こえる。

じっと、青灰色の瞳で、瞬きをすることも極力控えて、そのドアを見つめる。

一瞬でも目をそらしたら、まるでマジックのように、彼女が消えてしまうかもしれない。

毎年、ジルが、お祝いだと言って封筒を渡してくれる。

マリナ・イケダの報告書と写真が入っていた。
でも、シャルルは一度もその封筒を受け取ることはしなかった。
封筒を差し出されるそれだけの行為で、彼の知りたい結果がすべて得られたから。
マリナが生きていて、「マリナ・イケダに関する報告書」と書かれていること。
「イケダ」姓が変わっていないこと。

それだけ確認できれば良かったんだ。

いつか、それが「マリナ・クロスに関する報告書」となった時
点で、気持ちに区切りがつくはずだった。

でも、どうしてその中身を見ることをしなかったんだろう。
シャルルは、思った。

彼女は大人になった。
彼女は綺麗になった。

そして、彼は一度はあきらめたのに、もっと欲しくなった。

その一年一年を、自分があえて素通りさせてしまったことが口惜しかった。
失われた時間が、手からこぼれる砂のようで、それを今、慌てて拾い上げようとするかのように
、彼女を見つめ続ける。

好きなんだ
好きなんだ
好きなんだ

どうしようもなく。

別の誰かと倖せにしているだろうかと、まだ誰のものにもなっていないのだろうか、
そんな懸想する時の方がまだ、穏やかだった。

あれから、再会してから。
どうしようもなく心が傾いてしまった。
小菅で別れたあのときとは比べようもないくらい、君を好きになってしまった。
シャルルはその薄い唇をぎゅっと結んだ。

もう、待たない。
もう、待てない。

シャルルがそう思ったとき。

バスルームの向こうから、マリナの嗚咽が聞こえてきた。

マリナ。

シャルルは立ち上がった。
何かを考える余裕を自分に与えなかった。
時間は　彼が与えた制限時間を超えていた。

20 秒。
越えている。

もう、十分に待った。

マリナ、泣きたいなら泣けばいい。
でも、オレはもう、止めない。

だから。

君を泣かせてしまったことを後悔しない。
これからも。
君を泣かせるだろう。

でも、ひとりでは泣かせない。

それだけは、絶対だ。

次の瞬間、シャルルは扉を勢いよく蹴破った。

■48

*** 静寂

「おいで」
シャルルが、マリナの手を取った。

その手は、冷たかった。

もう、熱はないんだね、とマリナは安堵したものの、自分の熱が掌から彼に伝わりはしないかと思った。

彼は少し息を切らしたが、すぐに穏やかになり、そうして青灰色の瞳で、マリナを見つめた。
悲しいくらい、美しく微笑んだ。
ほんの、数十歩の距離だった。
バスルームから、ベッドルームまでの距離は。
外出している間に、ベッドメイキングが完了していた。
整えられたシーツと、広いベッド。羽根枕。
それらの上に、シャルルはマリナをそっと座らせた。
昨日、シャルルのベッドルームには、気軽に入った。

ただ、高熱を出して泥のように眠る彼が心配で、ソファに横たわり距離を置いて、
物音を極力立てないようにしていた。
今は、どうだろう。

脚を交互に出すことさえ、ままならない。
こうしてシャルルが手を引いてくれなければ、
そのまま姿勢を保つことなんてできないくらいだった。

もっともっと、心臓が破裂するくらい、落ち着かない気分になるかと思った。
もちろん、体や頬は火照り、自分の体温の上昇とこのぎこちない動きから、かつてないくらいに

体も心も緊張しているのは承知している。

でも、・・・静かだった。

シャルルは、ベッドに浅く腰掛けているマリナと、少し距離を置いて同じように浅く腰を下ろした。

窓から、月光が差し込んでいる。

満月の光が、彼の白金の髪を照らし、その端正な顔を冷たく照らしていた。
差し込む角度なのだろうか。シャルルにのみ、月光が注がれているような、そんな感じがした。

先に動いたのは、シャルルだった。
少し、距離を詰める。

「ああ、月が、高いね」
シャルルが、窓から見える月を見上げた。

その姿は、月を乞う天人のようだった。
マリナは、その横顔をじっと見つめた。

「マリナ」
シャルルが口を開いた。

その視線は、マリナに注がれていた。

熱い視線だった。

こんなに静かなのに、彼の内なる何かは、それが何かはわからなかったけれど、
とても激しいのだ。

「もう、聞かない。君がオレを憎んでも、いい。恨まれても責められても、かまわない。」
「・・・」

マリナは答えなかった。
泣きそうな表情だった。

「いいよ。泣いても」
シャルルは笑った。

「オレの前なら、泣いてもいいよ。」

彼女は、唇を噛んで、少し潤んだ瞳をして微笑んだ。
きれいだよ、シャルルは心の中で呟いた。

マリナが愛おしかった。
頬にかかるマリナの髪を、シャルルは長い指を通して梳った。

「まだ髪が濡れてる」
くすくすとマリナが笑った。初めて、声を出した。

「シャンパンの次は、シャワーをかけられたしね。
　次は何をかけられるのかしら」
「決まってる」

この上なく、魅惑的な表情で、シャルル・ドゥ・アルディは言った。

「次は、フラワーシャワーだ。」

そうして、彼女の背中に腕を伸ばした。

マリナは、こわごわ、シャルルのバスローブの袖をつかんだ。

「この夜だけ欲しいと言ったけれど。」
彼は、彼女を抱きしめた。
「君の泣き顔も、笑顔も、全部欲しいんだ。
　マリナ、全部をもらうよ」
マリナは、ぎゅっと目をつぶった。

ああ、やはりこの人は私を荒らして散らす、嵐だ。

激しい情熱も、冷たい横顔も、何もかもが私を惑わすんだ。
ぽつり、とマリナが呟いた。

「・・・酷い人」

くすり、シャルルが耳元で笑った。
「やっと、言った。それは合図だ。」
「なんの？」
「合図は合図だよ・・・愛してるっていう言葉を言うための、ね」

シャルルは頬を傾けて、マリナの唇の上に自分の唇を落とした。

■49

遑（いとま）短い時間のこと

*** 静寂から、長くも短い遑（いとま）へ

長い長い、優しい接吻だった。
それはキスとは違う、まさに接吻だった。
最初は軽く啄むように。
次は下唇を甘く噛む。
マリナの唇全体を覆うように、シャルルの唇が重なる。
息苦しさは感じない。
ただ、胸の最も深いところが苦しいだけだった。

やがて、彼女の内部に、シャルルが潮のように満ちては引き、引いては溢れ、
そして渦のように絡まる。
ほんのわずかな時間、角度を変えるたびに口唇が離れることが、惜しいかのように。
シャルルは矢継ぎ早に、その甘美な動作を繰り返した。
両の頬を押さえていた掌が、片方は肩に回り、片方は、背中に回った。
先ほどの思いもかけない強引なキスは、立っているのもやっとであるほど、強い引力で引っ張られた。

今度のキスは、座っていることそのものが困難になるほど、自分自身が解放されて、何かが外へ

出ていくのを感じる。

何がだろう。

これまでの、わだかまりや、戸惑いや、憤慨や、その他いろいろな、彼女を8 年も支配していたものから、解き放たれて、その代わりに、違う感覚を手に入れたかのようだった。

シャルルの背中に、そっとぎこちなく回した腕と指先が、ぶるぶると細かく震える。

これが、快絶であると、思い知る。

回したはずの手が、いつの間にか、しがみついた格好になる。

シャルルは唇を離すと、今度は軽く、マリナの頬に、彼の頬を擦りつけた。

そうして

先ほどと同じように。

でも、この上なく、軽く、軽く。

彼女に短く唇をあてていく。

頬。

耳朶。

こめかみ。

額。

まぶた。

鼻。

顎。

すべての部位に、軽く唇を押し当てる。

それが、点となり、やがては線となって、マリナの体を囲み、徐々に火照らせていく。
背中に回されたシャルルの掌が、マリナの肩胛骨の下に触れる。
「ん・・・っ。」

思わず、声を漏らす。
顎を上げて、体を反らしてしまう。
それを反動とするかのように、マリナの背中を支え、シャルルは彼女を横たえた。

ギシ、と。

ベッドがきしむ音がして、そこでマリナはようやく、自分が横たえられたことに気がつき、これまでつぶっていた目を、あけた。

目の前には、これまで見たことがない角度のシャルルが、いた。

■50

***そして再び静寂

シャルル。
シャルル・ドゥ・アルディ。
彼は、彼女を静かに見ていた。

まるで、一枚一枚、素早い動きで捕らえどころのない動く被写体を連写撮影するカメラが、その素早い瞬きであるために、静止しているかのように。
青灰色の瞳が、瞬く速度がゆっくりだった。
見られているだけで、体中が火照り、何も触れられていないの

に、どういうわけか、彼女の、様々な「点」に灯がともる。

「・・・何も、言わないのね」

マリナは、その愉絶に耐えられず、口を開いた。
シャルルは答えなかった。

その代わりに、愛おしそうに、壊れ物を扱うかのように、また、髪の毛を梳いた。
そうして、ベッドに散った、マリナの茶色い髪の先を掬い上げると、
彼はそこに口づけた。

髪の毛に神経がないのはわかっていたけれど、マリナはその口づけられた髪の先から、
電流のように何かが迸るのを感じた。

ああ。
私は、墜ちた。
わかりきっていたことを、再認識する。

私は、この人が欲しい。
酷い人だ。

こんなことを思わずに、生きてこられたのに。
もう何年も思い返すことはなかったのに。
たった、これだけの仕草で、私のすべてを覆してしまう。

本当に、酷い人だ。

シャルルは、マリナの首筋から鎖骨にかけて、人差し指と中指で、なぞった。
マリナが、顔を背ける。

その羞恥から、顔を背けるかのように。

顔が赤らんで、明らかに彼女が含羞から眼を反らしているのがわかる。

指の軌跡を延ばし、バスローブの襟元に指をかけて、彼女の肩を、露わにした。
きめ細かい、象牙色の肩がシャルルの眼に眩しかった。少し、眼を細めて。
その肩に、口づけした。

そうして、流れるような仕草で、バスローブを広げた。

「・・・ああ・・」

声にならない声を、マリナが上げる。
その声を聞くか聞かないかの瞬間、シャルルの白金の髪が、マリナの胸元で広がった。

「マリナ。」

双丘の間にシャルルが顔を埋めた。

表現できない感覚が、マリナを襲う。
彼女は、その両腕を上げ、羽根枕をつかんだ。
あまりの陶酔の渦に、もはや体のコントロールがきかない。

いつの間にか、何かから耐えるために、羽根枕の縁を強くつかんでいた。

■51

***静寂

愉楽のあまり、羞恥とは反対に伸びて露出した肢体を、シャルルは抱き留めた。

そうして、自分のローブも、脱ぐ。

それは決められた順番のように。

でも、それはとても、自然な動作であるかのように。

彼の体が、ほんのり暗闇に浮かび上がった。

マリナの体の上に、彼はいた。

もう、止めることは出来ないし、止めるつもりもないよ。
彼はそう想いながら、彼女の体を抱きしめた。

直接に肌を重ねた瞬間。

鍛えられた鋼のようなその体が、マリナの肌に接合した。
彼女は、びくっと体を弾かせた。

熱いな・・・
熱くて、吸い付くようなマリナの肌の感触に、シャルルの理性が失われていきそうになる。

そっと、羽根枕を握りしめ居ていたマリナの左手を取った。

手首には、あのとき彼が自ら縛めた紐が、細いリングをきらめかせて、彼女の腕に絡まっていた。

シャルルはその手首に、唇を押してる。
やがてその唇は手首の内側に移動し、掌に移り、彼女の短く整えられたつま先へと動く。
その都度、彼女が小さく吐息を漏らし、顔を背けて、耐えるように眉根を寄せた。
自分で締めたのに、オレはこの紐にさえ、嫉妬している。
そうして、また肘から二の腕に唇を這わせる。

シャルルが触れたところから、徐々に体が火照っていくようだった。

■52

***静寂

シャルルはまるで嵐のようだと思った。

でも、彼の愛撫は、まるでそよ風のようだった。

きわめて軽く、そして淡い。
――にも関わらず、その風を受けると、キャンドルに火が灯ったように、ぽうぅっと小さな灯

火が、やがて大きな漁火となって、彼女の体を、その炎がじりじりと焙る感じがした。

遠くで聞こえる海音がそう錯覚させるのかもしれない。
時間の経過をまるで感じなかった。

シャルルの唇が、体中に烙印を押す。

這うときは軽く。

印は一瞬、熾烈に。

シャルルの長くて細い指は、やがて彼女の背中に回り、水滴が流れ落ちるかのように、
背中から腰へ、移動する。

烙印は、再び彼女の双丘に戻り、そして、シャルルはそっと、掌で包んだ。

限りなく静かに動いたはずなのに、マリナはまるで突然押されたかのように、大きく背中を反り返した。

彼は次のステップに性急に移動したい気持ちを堪えた。

————これまでに、こんなに、愛でた人は、いただろうか。

■53

***静寂

抑えることが出来ない。

ただ、堪えるだけだ。

シャルルは、その唇を、彼女の頂上に押しあてる。
小さな悲鳴が聞こえてくるが、彼はそのまま、対岸のそれを、ゆっくりと撫でた。
マリナの象牙色の肌が、短く痙攣するたびに、少しずつ湿り気を帯びてくる。

やがてその湿り気は露となり、月の光が時折、その露に乱反射して光った。

今、ファム・ファタルと定めた人が、腕の中に居る。

シャルルの待ち望んだ瞬間だった。

これまで幾たびも、彼女を夢想して、違う人形を抱いた。

でも満たされなかった。
だが、今はどうだろう。

マリナに口づけ、マリナを愛撫し、彼女の快楽の渦の中心に自分が居る。
言葉はなかった。

いくつもの言葉を、寵眷しながら、彼女を心置きなく貪ったのであろう。
でも、今は、言葉に出来なかった。

目元に淡く涙を浮かべ、唇をかみしめて自分を保とうとする彼女を、いかに籠絡するかではなく、いかにこの愛おしいという気持ちを伝えられるのか、ということに

シャルル・ドゥ・アルディは全身全霊をかけている。

彼の知能指数をもってしても、それは瞬時に判断できなかった。

■54

***静寂

やがて、彼女の一番皮膚の薄い場所に到達した。
軽く吸うだけで、赤い花びらが散る。

ああ、あの祠では、白い花を捧げないと、祈りは通じないのだっけ。
この、赤い花では、思いは通じないのだろうか。
そんなことを思ったけれど、それもすぐにかき消された。

我を忘れる瞬間というものは、「最後のそのとき」だけだと思っていた。

だが、今、こんなにも、こんなにも、彼を何も考えることの出来ない状態にさせるなんて、思いもよらなかった。

慣れた手順ではない。

彼の、ひとつひとつが慎重で、彼女の反応を確認しながら進む。
そして、そのひとつひとつに安堵しながらも、彼の内なる荒々しい愛慾を抑えるので
それだけで精一杯だった。

白い象牙色の肌を、赤い軌跡で散らす。
内腿、ふくらはぎ、そして足先でさえ、彼は丁寧に接吻した。
そして、その順路をいきなり変更した。

マリナが大きく。
大きく吐息をついた。
そして小さく、呻く。

彼女は恥辱のあまり、脚を閉じそうになるが、シャルルはぐっと、両の脚を開いた。
彼女の中心は、濡れていた。
その瞳と同じように。
憐恕できず、彼は彼女を荒らした。
散らして荒らす。

もう、それしかできなかった。

彼女を壊すことしかできない自分が止められなかった。
彼女の涙声も、細かく痙攣したままの震える体さえも。

抗議するかのように、シャルルの肩にあてられた力ない手も。すべてが、乱された。

■55

***烈々

何も考えられなくなる
そんな瞬間が来るとは思っていなかった

シャルルは愛おしむように、そして奪うように、マリナの体の上を駆け抜けた。
糸を纏わないその肌が、直接にマリナに触れたとき。
彼女の回路は、遮断した
止めどもない流れが彼女を押し寄せた。
シャルルの動作すべてが、彼女を押し流す。
そのときが、来た。

「マリナ。もう、戻らない」

彼女からのいらえはない。
ただ、薄い涙を流し続ける彼女が、じっとシャルルを見つめていた。

「赦してくれるのなら、キスして欲しい」
彼はねだった。

ねだる。

久しぶりの行動だ。

彼は半分冷静で、半分傾注していた。
「オレを。オレを欲しいと思ってくれ」
願いやねだりでなはく。
シャルルは、目の前の運命の女に語りかけた。
欲しいと思ったことはある。
でも、欲しいと思って欲しいと思ったことはない。

ああ、これが「烈々」というのか。
彼はそう悟る。
彼女は、微笑んだ。

そして、小さく頷いた。
茶色い瞳が、シャルルを捕らえた。
そうして、彼の頬に、小さく口づけた。
それが、彼への証だった。
暗闇の中で、赤い紐に結ばれたハードプラチナの小さなリングと、赤い紐だけが、浮かんでいた

。

彼の戒めであり、愛の証であり、そして束縛の象徴。

「戻らないよ。戻れないよ。・・・最初からそのつもりはないが」

シャルルは小さくそう言うと、密着させていた体を起こした。

・・・屹立した彼を、彼女の中に納めた。

■56

***静寂

そこには理論だってなかった。

彼女を、自分の内なる情欲で満たす、その瞬間。
それは、シャルル・ドゥ・アルディであるにもかかわらず。

計算できなかった。

彼女は融楽で、全身の力が抜け、涙を淡く浮かべて、彼を見つめ続け居ている。
「欲しい」サインだ。
でも、この期に及んで彼は躊躇した。
キスに戸惑ったように。
もう、躊躇わないと思ったのに。

君は、こんなにオレの特別な人なのに。

オレは、君を荒そうとしている。
オレは、君を怖がらせるかもしれない。
オレは・・オレはこんなに、今、苦しい。

その誘うような茶色い瞳や、芳香漂う髪や。
どうにもならないほど狂おしい渦が、彼を襲うことを、彼女は気がつかない。

どうして、どうして君なのだろう。
シャルルはそう思った。

マリナの中心に。
最も基軸に居るというのに。
運命の人と定めたのは、自分のはずなのに。

こうして、流されている。
自堕落に流されているのでなく、抗えない何かに後押しされるかのように、マリナを愛でることを止めることが出来ない。
彼ができないことは、これまでだってひとつとしてなかった。

でも、唯一、できないことがあった。

マリナ・イケダへの想いを断ち切ること、だった。

■57

***静寂

最初は小さく浮動した。
やがて、少しずつ、そのストライドを大きくしていく。

マリナは、眉根を寄せて、苦しそうに、でも声を上げずに呻いた。

それは強引な浸食でなく、彼女の囁きが、決して苦しいことだけではないことを、恍惚とした表情から悟る。

その表情が、彼を満たしていく。
それだけで、何かが壊れそうだった。

シャルルは。

組み敷いてなお、彼女がどこかに行ってしまわないように捕らえるかのように、

マリナの肩を抱く。
マリナは。

彼のため息や肌の温度が夢でないことを確かめるかのように、腕を背中に回した。
彼女は十分に湿されて、そして、彼に征された。
体を貫く、衝撃よりも。
彼の汗ばんだ肌。小さな吐息や、そのほかすべてが、彼女の中だけの幻のようだった。

シャルルは、マリナの半（なか）に居た。
今までは、夢の中にしか居なかったのに。
彼の律動や、時々ため息にも聞こえる声や、マリナの肩や腕をつかむその両の腕が、
徐々に力を帯びて、制御できなくなる様が愛おしく切なく、そして嬉しい。
そのすべてが、マリナは愛おしかった。

まるでどこかに行かないように、という願いであるかのように。
彼女の左手首を押さえ、彼は蠢く。

徐々にシャルルの背中は熱くなり、汗が小さな玉となって幾筋も流れ落ちる。

その律動は、彼女にとって苦痛ではなく、ただただ愉楽だった。

シャルル。

ねぇ、私、今、とても倖せなのだけれど
マリナがそう呟いたことにさえ気がつかず。

シャルルは、そのまま。
彼女とひとつになった。

■58

目が醒める。

いつもの動作だ。

寝返りを打ちながら、途切れがちな記憶を集めて、やがてはっとした。
羽根枕に沈んでいた頭を持ち上げる。

夢？

彼は普段夢を見ない。
けれども、この気怠い体の重みが。
夢でないことを物語っていた。

ぼんやりとした曖昧な感覚が、徐々に薄れていくのを感じながら、彼は青灰色の瞳でゆっくりと周囲を見廻した。
窓の外は、すでに明るい。

遠くで潮音がすることで、ようやく、ここがどこなのか蘇ってきた。
ああ、そうか。
月は沈んでしまった。
シャルルは起き上がり、乱れた髪を後ろに流した。
「マリナ？」
人の気配がする。

シャルルはベッドルームを出て、リビングに脚を向けた。
ガラスボードの上には、乱れたナプキンと、銀盆だけが置いてあり、
モーニングが届けられて、それをマリナが受けとったことがわかった。

おいおい、食器まで食ったんじゃないだろうな
彼女なら、やりかねない。

とにかく、熱いシャワーを浴びなければこの気怠さが取れない。
いつもの習慣だ。

そこで、気がついて、小さく笑った。

ああ、そう言えば。

バスルームの扉は、壊してしまったのだったな

仕方がない。

ゲストルームにあるバスルームを使うしかない。
マリナの気配がするから、荷造りでもしているのかもしれない。
バスローブを緩く羽織りながら、廊下を進むと、ゲストルームの扉が開いていた。
窓を開けているのかもしれない。

中に入ると、潮の香りと、それを運ぶ風が吹いた。
「おはよう」
シャルルは、言った。

極上の微笑みで。

彼女とこの挨拶を交わすことになるなんて。
ゲストルームに赴くと、そこにマリナがいた。

■59

「おはよう」

小さなテーブルに正座して、マリナはモーニングを頬張っていた。
二人分を平らげたようで、最後の一口だったようだ。

窓は開け放たれて、外からの風で窓際のレースのカーテンが揺らいでいる。

「マリナ。ここは洋室なんだけれど」
おはよう、と小さく言った後、シャルルがそう付け足すと、ああ、と軽く頷いて、彼女はにんまり笑う。

「だから何？日本人は正座でご飯だよ！」

その屈託のない笑顔に呆れるも、彼女の明るさに苦笑いする。
その割りには、メニューは洋食だったけれど。
マリナは、すでに身支度を終えていた。

相変わらず軽装で、七分丈のハイネックのカットソーに、ストレートのコットンパンツ。
食事の邪魔にならないように茶色い髪の毛はサイドを緩く留めていた。
何事もなかったかのようにこの言葉がぴったりだった。

「あんまり遅いから、先にいただいてました。
ごちそうさまでした。」
礼儀正しくぴょこんとお辞儀をした。

「シャルルは？」
「シャワー。ゲストルームのバスルームを使う。」
ああ、とマリナが頷く。

その肯定は「昨日、その扉が壊れるまでの工程」を差し示しているのではなさそうだ。
単純に、ゲストルームのシャワールームを使いたい、というシャルルの主張を理解した、という感じの肯きだった。

彼女のそのさばけた対応に、シャルルは今、自分が夢の中にいるわけでなうことを再確認しなければならなかった。
「そう。じゃぁ、今、ここを片付けて、部屋を出、る・・・・！！！」
丸テーブルの縁に手をかけて、マリナが立ち上がりながらそう言うと。

・・・マリナが眼を向いた。

シャルルは、おもむろにバスローブを脱いだのだ。

■60

「何やってるの！」
マリナが絶叫する。

「だから。シャワーを浴びる」

シャルルは平然として、優雅な足取りでバスルームに向かった。
マリナが見たのは、その後ろ姿だけだったが。

やがて、バスルームからシャワー音が聞こえてくると、マリナは我に返った。

外は明るく、窓もカーテンも開いている。
誰が見ているわけでもないが、そういう問題ではない。

「何なの、一体。もう。」

文化の違いか。
生活習慣の違いか。

マリナは、中腰になったまま硬直していたが、やがて　ため息をひとつはき出すと、
食べ終わった食器をトレーごと持ち上げた。

朝早く目が覚めた。

微睡んでいた神経が、朝の光や鳥の声で、徐々に復調する。
今日はここを引き払わねばならない。

荷造りだってしなければいけないし、この格好のまま、迎えの車に乗り込むわけにも行かない。

さぁ

片付けようか。

いろいろなことを、ね。

■61

シャルルが程なくしてシャワールームから出てきた。
バスタブが小さいだの、好みのバスソープやオイルがないことを彼はひとしきり文句を言っていたが、白金の髪をタオルで拭きながら彼は上半身をはだけて、下は薄いルームパンツに履き替えていた。

「そろそろ、用意しないと。」

シャルルがバスルームから出てきて、すっきりした研ぎ澄まされた感覚を取り戻す頃。
マリナはゲストルームの荷物を、リビングへ運んでいる途中だった。

「もうすぐ時間だよ？」
マリナは目を合わせずに、シャルルに声をかけた。

シャルルがタオルを肩にかけて、ゲストルームのソファに腰を下ろした。

テーブルの上に備え付けたミネラルウォーターを手に取り、そののど元に流し込んだ。
マリナは、この時間制限がなかったら、是非、スケッチしたいと思った。

窓から、心地好い風が吹き込んでくる。
今日は湿った潮風ではなく、乾いた風だった。

天気も上々で、さぞかし、ヘリから見える景色は素晴らしいのであろう。

「・・・からだ。」
「え？」
シャルルが、ぽつっと言った。
「大丈夫？」
マリナは、そっと視線を落とした。

それは、性が違うからこその発言ではなかった。
彼は医師で、何よりシャルル・ドゥ・アルディであった。

その意図が読み取れて、マリナが口ごもった。

「・・シャルルは早く着替えないと。
　ああ、荷物はまとめたの？」
そう、尋ねると。

「質問の答えがないよ」
とシャルルが言った。

マリナは、返答に窮した。

■62

「・・何のことか、わからないよ」
それだけ言うのがやっとだった。

シャルルにしてみれば、気を遣った発言なのかもしれないが。

今のマリナには、この上なく意地悪な質問だった。

シャルルはそう、とだけ言うと、タオルを持ったまま、部屋を出た。

表情がわからない。

扉から出るとき、ああ、そう言えば。というようなさりげなさで、シャルルは言った。

「君のベッドルームは使っていなくて。
　オレのベッドルームは乱れ放題で。
　この状況証拠から導かれる推論から、
　君の体調を心配するオレは、よほど妄想好きなんだろうね」

シャルルは、意地悪だ。

思い通りにならない自分に、憤懣やるかたなしといった状態だった。

子どもなのか、大人なのか。
彼が、よくわからなかった。

■63

シャルルはほんの少しだけ、いらついていた。
これが、初床を迎えた男女の会話なのだろうか。

悖徳を伴う朝でもないだろうに。
やっと彼女を手に入れたと思ったのに、彼女が自分が想うほどには、
大切な時間であったと認識していないかのように思えた。
期待をしても始まらない。
それは十分わかっていたけれども。

それでも。

シャルルは、シャルル・ドゥ・アルディという男が、長年待ち焦がれた相手が目の前にいることだけでは、飽きたらずになっている自分を発見した。
メインルームに戻り、彼は着替えを始める。
ベッドシーツの波のうねり具合が、如実に事実を語っていた。

「シャルル。」

マリナが、声をかけてきた。
振り返ると、彼女が立っていた。

マリナは月の光よりも、陽の光が似合う。
そう思って、眼を細めた。
「怒っている理由が、わからないよ」

「オレは、怒ってないよ」
シャルルは小さく笑った。

今日は天気がよいので、暑くなりそうだ。
薄いサマージャケットを着ようと思ったが、やめにした。

ベージュのパンツに、濃紺のシャツを合わせる。同系色の異素材で、襟と袖に縁取りがしてあるものだ。
風の強いホテルのヘリポートで髪が巻き上げられてしまうかもしれないと思い、白金の長髪を軽く後ろで束ねる。

その一方で。

彼の神経は、違う場所に注がれていた。
ちらり、とマリナを流し見る。

彼女は、少し離れた場所から、少し困った、という様子でこちらを見ていた。
相変わらず、瞬きがゆっくりで、茶色い黒目がちの瞳が印象的だ。

茶色い髪は食事の際に留めていたバレッタを外し、今は小さな耳にかけているだけだった。

マリナ。
本当に、君は。

用意周到という言葉からは、ほど遠い人間だね。
シャルルは小さく笑った。

よそう。
大人げないことをして、彼女を困らせるのは。

そうだ、オレは困らせたいんだ。
そのとき、合点した。

彼女を困らせて、彼女の関心を集めたいだけなんだということに。

「髪は束ねた方が良い。今日は、風が強いところばかりを移動するからね」

■64

その言葉が、マリナの何を刺激したのかは、最初はわからなかった。
彼女の行動に理由がないことはしばしばであったから、また何か思いついたのかもしれない。

マリナは、見る間に顔を赤らめた。
口を、ぱくぱくさせている。

隠し事を見つけられてしまった、逃げられない幼子の様だった。

「・・・いいよ、いらない！」
「いらないなら、良いけど。」
現象に対して、理由及び原因を調べるのが、彼の職業だった。

「マリナちゃん？」
その慌てぶりがシャルルの興味を引いてしまった。
マリナはしまった　という顔をした。
「何？そろそろ、支度、しないと本当に・・」
そこまで言ったマリナは隙だらけで、彼女の後ろに回り込むのは簡単だった。

「シャ、シャルル！！！」
小さく、彼女が悲鳴を上げた。

肩を片腕で押さえ、彼は体を密着させて、マリナの自由を奪う。
後ろから羽交い締めの状態になったマリナは、少し暴れたが、シャルルには敵わなかった。

「・・・なるほどね」
シャルルは面白そうに言った。
「・・・！！！！いや！」
マリナが、その場から逃れられないと観念して、目をつぶった。
眼をつぶっても、事実は隠せない。

残った腕で、彼女の髪を掻き上げた。

茶色い髪の毛から、シャンプーの香りがする。

それは、シャルルが使ったバスルームのもので、彼の髪から漂う香りと同じだった。
同じ香りを、共有している。

何かを共有するというのは、これほどまでに甘美なんだな、と改めて思う。
こんな風には、一度も思ったことがなかった。

見れば、耳からうなじ、首筋には、赤い花びらが散っていた。

「なるほど。どうりで、髪も結びたくないし、この暑くなりそうな陽気に不釣り合いな、
ハイタートルを着ているわけだ。」

シャルルは悶えるマリナの耳にそう囁いた。
マリナの首筋に朱が刺す。

耳朶が、あっという間にバラ色に染まった。
見れば、今の抗いからめくれあがった七分丈の袖から見える、二の腕にも同じような
文様が舞っていた。

「こんなにたくさん散ってるなら。」
シャルルは小声で言った。
「もうひとつ、散っても構わないね」
そういうと、マリナの首筋に、彼の唇を押し当てた。

マリナが悲鳴を上げた。

■65

移動中の空間では、シャルル・ドゥ・アルディは始終、何かを思い出してはひとりで笑い、マ
リナ・イケダはそれに反応して青くなったり赤くなったりし
ていた。

マリナ、君を怒らせるのは、とても簡単なことなんだよ。

シャルルは破顔した。
彼が笑ったのは、マリナのその反応が単純で、8 年前と大して成長が見られな
かった点。
あまりにも、夜と昼とでその態度にがあまりにも違う点。
これに尽きる。
余韻を味わうこともないほど　慌ただしいな
通常は、移動船、高速船、飛行機と乗り継いで行くところを、彼らはアルディ家所有の自家用ヘリで帰路を急いでいた。
彼は、外界と遮断するために、一切の通信手段を絶っていた。
モバイルもパソコンも持って行かなかったし、コテージに伝令も電話もするなと言明してあった。
その申し出は忠実に守られた。
熱を押して、交換条件を飲んだ甲斐は、あったらしい。
その一方で、休暇を終えようと、ヘリに乗り込んだ彼に、矢継ぎ早に緊急を要する書類の束が手渡された。

爆音する中では、話もできない。
おまけに、彼女はへそを曲げてしまい、窓ガラスにへばりついて、外の景色を眺めるのに熱心になってしまっている。
舌打ちしたい気持ちを抑え、シャルルは恨めしげにマリナの後ろ姿を見る。
シャルルとマリナの座席の間には、まるで柵か境界線のようにマリナの大きな黒い鞄が置いてある。
荷物は別便で送るよ、と言っても、大きな画材道具がいろいろと入った鞄だけは持ち歩くといって聞かなかった。

空港までは、仕方がないか。

シャルルは軽く吐息をついた。

今回、得たものが大きかった。
それが、彼をやや寛容にしていた。

本当にごくわずかな「やや」ではあるが。

■66

怒っていたわけではない。

どうして良いのやら、まったくわからなかっただけだ。

それなのに、こんな態度でしか表現できない自分が酷く矮小で幼稚に思えた。
左手首にはまった古代紐を、少し、さする。

赤い紐には、繊細な文様が彫られたハードプラチナの、小さな環が、着いている。
その環が回り込んで手首に移動しないよう、シャルルは計算して長さを調節して
結んだようだ。

今は乾燥して、少しゆとりがあるが、濡れると紐が固くなって縮まり、
少しその存在を意識する程度に絞まってくる。

意識せざるを得ない、ということも彼の計算なのだろうか。シャルルはごく冷静な顔つきで、仕事の書類を見始めてしまった。

顔は無表情になり、その膨大な書類を、ものすごいスピードで読み、指示であろう書き込みをし、次々と処理していった。

青灰色の視線が、その書類に注がれている間は、彼と言葉を、交わすこともない。
今のうちにスケッチしちゃおうか。
シャルルの端正な横顔を眺めながらそんなことを考えていた。
だが、ヘリコプターはマリナが思っていたよりも揺れと振動があって、
スケッチやデッサンなどという行為は考慮されない状況だった。
言葉も交わさない、視線も交わさない。
けれど、同じ空間に居るというのは、何とも妙な気分だった。
落ち着かない。
気を紛らわせるかのように、窓の外から見える景色をぼんやりと眺めた。
ほんの、つい、さきほどまでいた、その島が小さく見える。
神社やコテージ、ホテル、そして滞在中の宿泊客の姿も小さくなっていき、やがて見えなくなった。
島岸に打ち寄せる波は穏やかだったが、海面は強い日差しが乱反射して、所々が眩しかった。

もうすぐ、お別れの時間だね

マリナは目の端で彼の姿を捕らえながら、小さく、呟いた。

■67

ヘリポートに着陸すると、そのまま自家用ジェットに乗り換えることが出来るように、
移動車が待機していた。

ふわり、と上昇する感覚の後に、足下が不安定なヘリのタラッ
プから降りるときだけは、シャルルが先に降りて、「ほら」と手をさしのべてくれた。
そうして、シャルルはマリナを見下ろすと、「だから髪は束ねろと言っただろ」
と、それみたことかと言わんばかりに言い放った。

強風に煽られて、広がり放題になってしまった髪を手でなでつけながら、
シャルルの後ろをついて行く。

十分なスペースを確保された車は、わずかな距離を移動するためだけの用途とするのは
心苦しいくらいだったが、シャルルは、背もたれが固そうだ、と乗る前から文句を言った。

向こうがわに見えるジェットが、きっとアルディ家の所有機なのだろう。
眼が弱い彼女にはよく識別することができなかったが、フランスの国旗が描かれているようだ。

「マリナ。さ、乗って。時間がない」
「私は、こっちの国内線よ」
マリナが困惑して言った。

「それに乗ったら、フランスまで行っちゃうわ」
「それもありだろ」
シャルルが、顔を斜めして、マリナの顔をのぞき込んだ。

さらり、と言ってのけるシャルルに、マリナは首を振った。

「パスポート持ってない」
「それはどうとでもなる」

「そういう問題ではなくて」
そこまで言ってから、彼女は、彼に向き合った。

束ねていない茶色い髪が、解放された広いアスファルトの上に吹く風に棚引いた。

「私には、覚悟ができてない」

そうはき出した彼女の言葉に、シャルルは嘘だろ、と白金の髪を掻き上げて信じられないといった風に首を振った。

「この期に及んで、何を言ってるんだ。君の言っていることの方が、説明になってない」
マリナは、一歩、前に出た。
今までとは少し違う、ほんのつま先分の、距離だけ詰めた。

■68

泣きそうな顔を一瞬見せたので、シャルルは反撃の言葉を
溢れるほど用意していたにもかかわらず、口をつぐんだ。

シャルルとの関係や、これからのことについて触れると、彼女はとたんに気弱になる。
これじゃ、堂々巡りだ。
シャルルは、必ずマリナを側に置くと決めていたし、
それは願望でも予定でもなく決定になるはずなのだ。
それも、近い将来に。準備は、進んでいる。

だから。

彼は、何が何でも、このジェットにマリナを乗せるつもりだった。
たとえ拉致してでも。

「うん。だからね。」

マリナはやや下を向いていたが、明るい声で、そう話を切り出した。
「今は、いけない。仕事がある。この取材データをも待っている人が、いる。
　自分のことだけで精一杯だけど、目の前のやるべきことをちゃんと片付けたら、
　きちんと考えようと思う。」

マリナは、一語一語、自分に言い聞かせるかのように、ゆっくりと言った。
上空をよぎる爆音と強風が、彼と彼女にも容赦なく降り注いだ。

だから、少し、大きな声で、ゆっくりとシャルルに言う。
彼の前に、左手首を上げて、赤い紐を見せる。

太陽光の下で、彼女の手首にのったその紐は、彼にしか結べない結び目を作り、
彼女がそれを切断しない限り、緩めることも、一度緩めて復元することもできない
それを。

彼女は、そっと撫でた。

昨夜の出来事を彷彿とさせる、マリナの指先の動きに、シャル
ルは苦しくなる。

「この紐が、切れる前に、行くよ。シャルルに会いに。パリに。
　そうしたら、話をしよう。こんなに慌ただしくではなくて、
ゆっくり時間をかけて。」

シャルルは無言で彼女の手を取った。

音も風も振動も何もかもが、そこにはないかのように。

あたかもフランスの古城の大広間で意中の賓客をもてなす主のように。

優雅な手つきで、長身をかがめて、彼女の手首に口づけた。

マリナは、そのときだけ、少し悲しそうに眉根を寄せて、目をつぶった。

■69

シャルルはマリナを見つめた。
普通なら、マリナは「穴が開く」と言って逃げ出してしまうくらい、強く長く彼女を見た。

彼女は、笑ったりごまかしたりしないで、シャルルを見上げていた。

そこには、自分の意思と価値観と様々な状況を考えて行動できる自立した女性が、いた。

あの頃と同じで、でも違う。
もう躊躇わないと決めたのに、また心が揺らぎそうだった。
このまま、手放して、良いのだろうか。

また、彼女との距離が遠くなってしまうのではないのだろうか。

「気の迷いだった」と月没までの時間を否定されるのではないのだろうか。
きゅっと真一文字に結ばれたマリナの唇の感触を愛おしく思い出しながら。
彼は、じっと考えていた。

やがて。
長い沈黙のあと。
「わかった。」
シャルルは頷いた。

「今日は、帰る。・・・でも本当はね」
次の言葉は、上空の爆音でかき消された。

「パリに行くね、じゃなくて。
　パリに帰ろう、と言って欲しいんだよ。」

その言葉は、マリナに届かなかった。

「え？何？もう一度言って」
彼女が大声で叫ぶが、シャルルは小さく笑っただけだった。

「今度、パリに来たときに教えるよ」

■70

「ここからは、見送らないよ」
彼は別れ際にそう言った。

彼女を国内線搭乗口へ連れて行くと、シャルルは両のポケットに手を入れた。

その仕草が少年の様で、マリナがちょっと笑う。

その姿、いつか是非スケッチさせてね！

マリナが笑った。

顔がこわばり、自分が、彼との別れがつらいのだと認識する。でも。
別れるときは笑顔でさよならする。

これまで何度となく繰り返されてきたその時を彼女は経験から得た術で、乗り切ろうとした。

別れは、次の再会の合図だよ。
それに、これは別れじゃない。

今、シャルルについて行くことは簡単だった。
その手を取るだけで、これまでの自分と違う人生が待っているのは明らかだった。

でも、それでは駄目なのだ。

甘えて頼る人生は、自分にとって狭い檻であり、窮屈な枷でしかない。
・・・地に足ついて、きちんと、ゆっくりで良いから、考えなければならない。
自分はこれからどうしたいのか。
シャルルにどう在れば彼が倖せになれるのか。

シャルルに対して、淡泊な態度を取らざるを得なかったことを、どうかわかって欲しかった。
マリナはシャルルを憎からず思っているどころか、恋に堕ちてしまった自分の烈しい感情をコントロールできずにいた。

このまま駆け出して、彼に飛びつき、キスの嵐を求めることができたらどんなに良いだろう。

彼女の肩にかかる、画材道具の鞄が、おもりになってそれを阻まなかったら、迷わずそうしていただろう。

でも、彼女の今の生活を凝縮したようなその鞄の重みが、マリナの行き先の見えない路に行こうとする情動を押しとどめたのだ。

画材道具、スケッチブック、デジタルカメラにメモ帳。

仕事に必要なそれを、すべて放棄して、シャルルの元に行っても、その恋はすぐに凋落し、枯れてしまう。

だからこそ、きちんと考えようと思った。

こんな気持ちになったことがなかったから。
穏やかな恋しか知らなかったから。

これは必要なことなんだ。

自分に言い聞かせていた。

■71

約束をすることはなかった。
だがしかし、彼女はパリに行くと言い切った。
焦るつもりはない。
唯一夜の儚い花で散らせるつもりは、決してない。
じゃぁね、と。
捌けた彼女の物言いと、冷静さが恨めしかった。

こんなにも。
こんなにも君が恋しい。

君の肌が、もう、恋しい。
君の唇が、もう、欲しい。

笑顔も泣き顔もすべてが愛おしい。

・・素懐を果たすことができるのは、いつのことだろう。

明日になれば、シャルルも普通の生活に戻る。

分刻みの日々を過ごし、毎日彼女からのビデオレターを眺め、次に彼女に会える時間をいかに捻

出するかを考えて、短い休息を取る。

見送らないよと言ったのは、そのまま引き留めてしまいそうだったからだ。

彼女は、わかったと言って、手を差し出した。
「またね。」
抱合したい衝動を抑えながら、彼も手を差し出した。
彼女の掌は温かかった。

マリナがどれほど自分を蕩かして満たしたかを、彼女はわかっているのだろうか。

この肌の摩擦が、暫くの間、再現されることがないことを。

「あっ！」
そんな一瞬の辞儀の間に、何か閃いたように、マリナが黒目がちな瞳を大きく見開いた。

「ちょっと待って！」

マリナが、鞄をごそごそと探り出した。

整頓されていない鞄の中から、何かを探し出そうとしている。

「なに？もうすぐ、搭乗時間だよ、マリナちゃん」
シャルルはくすっと笑って言った。
この仕草は、昔と変わらない。

下を向いて、鞄を一生懸命漁る姿が、初めてであった頃の小さな少女とかぶる。

「シャルル。手を出して頂戴。」

■72

そろそろ時間だな。

彼が時計に眼を移しているその狭間に、マリナが彼の手首をつかんだ。
「！」
今度は、シャルル・ドゥ・アルディが驚く番だった。

揮発性顔料独特の匂いと、蒸発する際の熱の移動を、自分の手首から感じる。
マリナは、揮発性の高い油性のマーカーで、シャルルの左手首に線を描き始めたのだ。
そして、呆気にとられているシャルルを無視して、細かく模様を描き始める。
この、時間がない飛行場の喧噪の中で。

彼女の行動は予測不能だった。

マリナ・イケダは周囲の好奇の視線もまったく気にしないかのように、嬉々として線を一気に描いた。

「おそろいよ」
シャルルの手首に、赤い環が出来ていた。

キャップを元に戻し、無造作に鞄に投げ込んで、得意げにマリナが言う。

「特殊な結び目だから、私しか結べないのよ。言ってくれれば、結び直すから。予定しておくわ」

それはかつて、彼が彼女に言った言葉だった。

・・・なるほどね。

くつくつと、シャルルは堪えきれずに笑った。

マリナちゃん。
完敗だよ。
してやられた、ということはこういうことなんだね。

「面白い。気に入った」

シャルルは笑いながら、そう言った。
その笑みは、何度も見た彼の笑顔の中で最も幼かった。

マリナは少し顔を傾けて、にっこり微笑んだ。
満面の笑みだった。

「それじゃ　行くね。」
「また会おう。･･･マリナ」

そのときの彼の顔は挑戦的で歓娯に溢れていた。
やっぱり、どうあっても、早く彼女が欲しくなった。

彼を欲しいと思わせたくなった。
心も体も、そしてその先の未来も。

今日は負けでいい。
勝ちを譲ろう。

でも、次は、必ず。

シャルルは決心して、やがてマリナの姿が視界から消えると、背を向けた。

さぁ、帰ろう。

■73（最終回）

*** 彼女の瞋怒

「それで？」
この言い方で始まる姉は、大抵機嫌が悪い。

「たまたま、取材旅行で古い友人に会って。
　取材旅行で取ったホテルも引き払い。用意した船のチケットもムダにして。
　そのまま遊んでたら、こんなピントがずれた画像写真ばかりになりました。
　とまぁ、こういうわけなのね」

ユリナがデジカメの画像をチェックしながら、そう言った。

呆れた表情の姉に、マリナは弁解した。

「指示されたとおりの取材はしてきたわよ！」

ふうん、と意地悪く、ユリナがちろりとマリナを見る。
少し日焼けした顔に、汗たらしちゃって。
ユリナはデータさえあれば良かったのだが、旅の感想もあまり詳細を話さない妹に、何かがあるとは感じていたようだった。
でも、それ以上は追求しなかった。

「一枚だけ、良く取れている写真があるわよ」
ユリナは妹に言った。

そうして、持っていたデジカメの向きを変えて、ディスプレイ画面を見せる。

「・・・あああああああ！！！！」
マリナが、頭を抱えた。

それは、最後の画像。

目を閉じて、撮影されていることにまったく気がついていない、無心に眠る姿。
マリナが、眠っている画像だった。

ぜったい。
ぜったい赦してやるもんか。

マリナは大きくため息を、ついた。

**** 彼の怡々

機内で。
シャルルは、左手首を見ながら、また少し笑っていた。
君は、一体どういう思考回路をしているのかな。
右手でそっと、そのぎこちない環を触る。
油性顔料だから、強く擦らないと落ちないだろう。

でも、彼はその軌跡がまだまだ残れば良いのに、とさえ思っていた。
紐をお互いに結わく、ということの意味を、きちんと理解しているのかどうか。

高麗錦　紐解きあけて　夕べとも　知らざる命　戀つつあらむ

古い歌を思い返していた。

紐解きあけて。

君を恋河に浸そう。

これは決して泡沫にはできない。

気紛れの恋ではない。

だから、彼女とは距離を置く。

彼女がやってくる日まで。

彼は思恋し続ける。

ジルからの接続承認サインが入った。
シャルルは入室許可モードに入った。WEB カメラの接続をONにする。

「やぁ。」
「収穫はありましたか」
「十分に、ね」
「その割りには、イケダ嬢が隣にいませんが」
「その手はずは、君が整えているはずだろ」
ややあって、含み笑いをする声が聞こえてきた。
「つまりは、また、逃げられたのですね」

「訂正してくれ。蝉脱しただけだ。」
「マリナ嬢の心だけは、シャルル・ドゥ・アルディでも捕まえられないのね」
そうだね、とシャルルは小さく頷いたが、声に出すと、ジルに認める発言をすることになるので、そのまま黙っていることにした。

「少し、寝る。」
「お休みなさい、シャルル。良い夢を。」
ジルがもったいぶって、そう言った。
彼が普段、夢を見ないことを知っているのに。
どんな夢を見たいのかは、知っているようだった。

さて。

時間が、あまりないね。
紐の寿命は、そのまま付け続けて半年程度。
大事に使っても1 年、だろう。
そんなに待つつもりは当然無い。
1 勝1 敗。

次が勝負だよ。

（FIN）

【あとがき】

全73話です。
終わりました。
これもきっちり2週間で完結した作品です。

恋泡：はかない恋心のこと　泡沫の恋こと
思恋：心を惹かれて恋しく思うこと

リゾート地で再会するマリナとシャルルが、距離を縮める話ではありますが、
前回の「邂逅編」では気持ちの吐露だけで終わってしまった彼らが、一緒に時間を過ごす話です。

う～ん

両思いであってそうではないのかな・・・

彼らが成長して、何が変化したのかなということを書いてみました。

シャルルは、休暇を取るために体調不良になるまで仕事を続けて、滞在先でも失調を隠している姿を見て、マリナは「無理するな」とは言っていないシーン。
マリナはじっとただ見守っていて、帰ってきてから看病もどきをしています。
これが、彼らの「今」を書いているのかと思いました。

無理をしなければいけない時もある。
それを見守る人が居て、無理した後は休みなさい、と言ってくれる人が居る。

原作のマリナだったら、シャルルの頸根っこをひっぱって、「何やっているのよ！あんたはひとりしか居なくて、代わりが居ないのよ！」と言うでしょう。
シャルルはそんなマリナを冷笑するのかもしれません。
彼のアイデンティティと言うか、彼が「これこそ自分」であることを否定も肯定もするマリナのことを、シャルルはこよなく愛しているので、彼女の言葉にはきちんと耳を傾けると思います。

で、現代の「シャルル」と「マリナ」ですが、きっと・・・マリナは「頑張ってね」とは言わずに「今だけ無理して行って良いよ」と言うのかな、と妄想。

しかし今回はアルディ家の強権発動(笑)
マリナの所在地を突き止めてしまうなんて(･∀･)

ユリナは、この頃はまだI氏に心を許していない状況なのでしょうね。
蛇足だけど。

■朧神社
秘する恋　秘するが花　O-side　でサイドストーリーを書きました。
これももうちょっと新作アップ予定。
あの話はファンタジーでもありますが、すごくテーマの根が深いと思います。
「土で死んだ者は土に還る　海で死んだ者は海に還る」
これかキーワード。

その神社で、恋愛に対する考え方を交換するふたりですが、彼らの恋愛観はまったく違っていて

、それでもなお惹かれる。
人種も年齢も育った環境も違うふたりが、変化しながら、ずっと一緒に居るために必要なことって何だろう。
これが今後も書いていく上でのテーマになっていくのかもしれません。

tomogonは、あのときの幼い二人がそのまま一緒に居たら、破局を迎えていたと思うのです。嫉妬深くて独占欲の強いシャルルの気質はそのままなのに、彼はマリナを再会したら、彼女のどんな部分を、愛していると再認識するのでしょうかと妄想。

恋をして破れたマリナに深くは尋ねず。
いろんな人と関わり合いを持って、生きているからマリナを愛し続けることができる。
そんなシャルルが書きたかったので、すごく満足＆充実しました。

■古代紐

なんどか解説を入れましたので、ここでは説明を省略します。
前述の「独占欲」の話ですが、シャルルは剥き出しの独占欲を彼女に見せることがまだできていません。
二人で深い仲になればそうなるかというと、彼の気質からは難しいと思います。心を許す相手であるということを告げるために、彼は「自分だけしかできないこと」で表現します。

これも、先ほどの「あなたはたったひとりだけだから、もっと自分を大事にしなさい」というマリナのメッセージを受けて、だと思います。
シャルルは自分は唯一絶対だとは思って居るのでしょうが、マリナにとっては「絶対の唯一の恋人」になれないかもしれないと思って居るでしょうし、実際、マリナには昔に恋人が居て。ま、シャルルにも恋人が居たけれど。

ああ、そういう意味で言いますと、シャルルは絶対的マリナは相対的なのでしょうね。

赤い紐は契りの証です。
環を作るというのは、血管を疑似表現しているのでしょうか。
この辺、考察を深めていきたいところですが今回は省略。
なぜならO-sideの新作で出てくるから。
それを知ってか知らずか、マリナは最後のシーンでシャルルに赤い紐を。
確かに、マリナだけしか結ぶことのできない縁の紐ですね。
赤い糸、ではなく赤い紐(笑)

朧神社の色である白色との対象的です。

■頭突き

マリナが本気で抵抗するとなるとシャルルは体格的にも精神的にも抗うことのできない人物ですから、彼女はこれで気まずい雰囲気を回避(笑)
地団駄とともに、彼女のDNAに組み込まれている行動なのでしょう。はは。

お酒を飲んで「酔ったから無理」と言ってシャルルを怒らせてしまっていますので、マリナはまだまだあしらえないですね、いろんな事が。

それに、機転を利かせるなんて、シャルルの前では無理でしょう。
tomogonは無理だよ(笑)

■水攻め

シャルルも実力行使。
シャンパンの次はシャワーの水。
次はフラワーシャワーだよ、と言った彼の気持ちがマリナに伝わりますように。

大変に楽しく書いてました。
とにかく、次から次に妄想が出てくるという状態で、脳みそがパンクしそうな時期でした。

再会してゴールインということでは済まされない、いろんなことを解決していって欲しいと願いつつ。

04バージョンに突入します。

みな様

最後までご覧くださいましてありがとうございました。

次へGO！

# 秘するが恋 恋河徒情編　01

■01

突然、急で腑に落ちない話かもしれないけれど。

オーナーは申し訳なさそうに、そう言った。

マリナがアルバイトで、時々講師を務めている画廊のオーナーが困ったように電話をかけてきた。

「パリに、買い付けに行ってとお願いしたら、引き受けてくれる？
　宿泊交通費すべてウチが持つから。」

そのうまい話に、おかしいと思わざるを得なかった。
一介の講師に、画廊の買い付けをお願いする経営者がいるだろうか。

海外まで足を運んで売買に携わるのであれば、相当の値段の物件のはずだ。

こういうときのマリナの「いやな予感」という、摩訶不思議な第六感は、これまではずれた試しがなかった。

「フランスの大物実業家がね、日本の絵画を何点か所有してて。
　その中に、夭折した幻の画伯の絵が、あるんだよ！」

オーナー、普段は穏やかなのに、やや興奮気味ねぇ

そんなことを思いながら、マリナは話を聞きながら、広告の裏で作ったメモ用紙に、鉛筆で単純図形を書きながら、あれこれ次の漫画のネタを膨らませていた。

「今なら、それほど有名になっていないんだけど、いずれ、日の目を見る絵なので。
　今のうちに是非手に入れたいんだ。
　初期の作品と言うこともあって、ものすごく、欲しいんだ」
と熱心に言う。

「・・・ご自身で買い付けにいかないんですか？」
いやな予感が、じわじわと足下から昇ってくる。

そうこう考えると、この予感というものは非常にやっかいだった。

「いや、それがね。先方からの指名で、イケダさんを寄越して欲しい、というんだ」

「・・・どこの実業家でしょうか」

「今や『フランスの華』と呼ばれる、あのシャルル・ドゥ・アルディ氏だよ！
　君、知り合いなのかい？」

ぽき。

持っていた鉛筆の芯が折れた。

■02

「説明を求める権利が私にはあると思うけど」
マリナは極力、抑揚を抑えるようにして言った。

「いいお話ではありませんか」
ジルは歌うように言った。

シャルルが開発したWEB 会議システム。

これにより、マリナは日本に居ながらにしてフランスの麗人たちと話をすることができる。
いつもなら、そのカメラの先には誰もいない。
この便利さと引き替えに、彼女は毎日の報告を日課とすることを課せられた。
淡々と今日の出来事を話して切断するのだが。

今日は、予定したかのように、今日はジルが出た。
メンテナンスがあって今日はログインしているんです、と彼女は言った。

マリナの抗議をあたかもかわいらしい子供の癇癪だと言うかのように、シャルルと同じ造作の彼女は、軽く受け流した。
そうして、ジルは微笑む。

ありふれた言葉ではあるが、まるで天使のように。
けれども、このときほど、この天使の笑みが恨めしく思ったことはなかった。
この話の段取りをつけたのはジルに違いない。
マリナは確信した。
マリナはため息をついた。

「私の仕事に干渉しないでほしい。そういうことにアルディがかかわるのは、違うと思う。」
「干渉？これはビジネスですよ、マリナさん」
ジルは言った。

こういう、文言を訂正させるところはアルディ家の特徴なのだろうか。
「それに今般の渡仏は、アルディ家にもマリナさんにも損のない取引です」
たたみかけるようにジルが説明した。

「今般、オークションに出す前の作品です。
10 年以内には、100 倍150 倍の値段がつくでしょう。あなたのボスは、ずいぶんと先見の明がおありになります。
　日本人で夭折した画家の、繊細かつ剛胆なタッチと色彩感覚については、やはり日本人で率直に意見の交換ができ、絵心のある方に観ていただくのが一番、と我が一族の当主が・・シャルルがあなたを　指名したのですよ。」

逃げ場がない説明だった。

■03

「ちょっと、シャルル。どういうことなの？返事くらいしなさいよ！」

マリナが憤慨して、ウインドウの先の、受け止める相手のいない、むなしい叫びを何回か繰り返した。
いらだたしげに、パソコンの電源をOFF にする。
ああ、こういう一方通行は、本当に疲れる。
ため息をひとつ、はき出した。

「倖せが逃げちゃうよ」
そう言った人もいたけれど。

こういうときには悪い気　とともに、はき出さなければならない何かがあった。

確かに。

いろいろと、調べたり資料を取り寄せたりすると、これは願ってもない良い機会なのだという結論しか導けなかった。

夭折した画家は多い。

でも、セイジ・マクドゥガル　は。
いろいろと謎の多い画家でもある。

35 歳にしてこの世を去った彼の残した作品は、1000 点とも10 点とも言われている。
そのうち、3 点も所有しているアルディ家と接触しない理由はない。
そして、このオークション前の、値段が最安値であり、出自がアルディ家秘蔵の品ということであれば、転売されるうちに贋作とすり替えられる心配もなく、信用度も高い。

どうしようかなぁ

断る理由がないので、困った。
オーナーには大変にお世話になっている。

しかも、フランスのパリ。
アルディ家に行ける。

シャルルに会える。
シャルルに会える。
シャルルに会える。

困った。

彼女は、左手首にはまる赤い紐を見つめた。

切断するしか取り外しができないので、そのまま身につけている。
少し、色が褪せてきた。

ハードプラチナの、細かくて繊細な文様が入った輪が結ばれている。

この紐を結び直すのは、オレだよ・・・

そう耳元でささやいた人がいた。

でも、こういうやり方は好きじゃない。

好きじゃない？

彼に会えるチャンスを。
そのスタイルの好みで決めるわけ？

自分の中のもう一人の自分がささやいた。

■04

結局のところ、ビジネスだからと割り切って、この話を受けることにした。

「シャルル・ドゥ・アルディ」という単語を差し引けば、この上なくありがたい話であったから。
その奥深くに、人に説明できない存念があることは、間違いなかったけれど。

なにより、あの画廊にお世話になっている手前、断るわけにはいかなかった。

この間、シャルルと別れた後。
彼女は日々の仕事に忙殺された。

相変わらず、毎日の天気の報告は欠かさなかったし、時折、ジルがよこすメールでシャルルが元気に過ごしていることはわかっている。

でも、返事ができないくらい忙しい日々で、マリナ自身も同じくらい忙しい日々を送っているうちに、あの島で過ごした日々のことが、だんだんと夢じゃないかと思うようになってきた。

夢でない証は、この紐だけ。

マリナはつと、その左手首をなでた。

どんなに散らされた花も。強く捕まれてできたアザも。

時間が経過すればそれらは消えてしまう。
証が欲しいわけではない。約束はお互いの束縛になるだけだ。

でも。

恋しいよ、とマリナは思う。

■05

「・・と、言うわけで、そちらに伺うことになりました。
滞在先は追ってお知らせします。
パソコンは持ち歩きませんので、毎日のビデオレターは、当面更新されません。」

短いメールがシャルル・ドゥ・アルディの元に到着した。

「ジル、君は優秀だな」

アルディ家の参謀に賞賛の言葉をかける。

自分の私室の近くに、ゲスト用和室を用意するように、と指示を出す。
それから、料理は和食を中心とし、ゲストが不便に思わないように、屋敷内は日本語で統一すること、邸内の花は日本にゆかりのある花にすること、等々細かく通達した。

通常、賓客の接遇方法については、ジルが方針を決めて、細々指示するのは、別の者にまかせている。

それが、今回は当主であるシャルル自らの指示ということもあって、アルディ邸は、明日から騒然となるだろう。

ただし、主がそのような喧噪を好まないために、水面下でひっそりと、ではあるけれど。
距離を置くと決めたのに、やはり待ちきれなかった。

左手首の「証」はとうに消えてしまっていた。
君はまったく予測不能だよ。
そう言って笑って別れたけれど、またすぐに逢いたいと思う。

「さて。」

シャルルはディスプレイの電源をOFF にして、長身の彼の体が埋もれるような重麗な椅子から立ち上がった。

今回は、やっかいな問題も含んでいる。

でも、マリナちゃん。
これはビジネスだ。

■06

かつては、身軽に、着の身着のままでパリに行った。
時差もほとんど苦痛にならなかった。

だが、今はどうだろう。

こうしてフランスに行く、ということだけでもかなりの準備がいる。

荷物が多いというわけではない。
雑事が多いのだ。

仕事を調整し、姉や妹に緊急連絡先を知らせ、家内の戸締まりと郵便物の受取を大家さんにお願いする。

それだけでも「身軽に」渡仏できなかった。
そうこうしているうちに、出発の日がやってきて、出かける直前まで慌ただしく準備に追われていた。

気がつけば、パリに居た。
これが正しい表現だ。

オーナーの用意してくれたアパルトマンはこじんまりしていた。
うん、この程度の広さがちょうど良い。
清潔で、広すぎず狭すぎず、道の反対側にはカフェやショコラ専門店が建ち並ぶ。

・・・さて。

荷物もほどいて、一息つく。

体を休めたいところではあるが、スーツケースからいつもの鞄を取り出して、必要最低限の荷物をそこに詰め直す。
と言っても、仕事道具に加えて、アルディ家までの地図や、パスポートや、今回の仕事に関する資料を加えたところで。

日本での外出時の格好とさしてかわりがあるかと言うと、まったくと言っていいほど代わり映えがなかった。

■07

アルディ邸に行き着くのは簡単だった。

タクシーのおじいちゃんは「観光？同級生は？」と笑って気さくにその場所まで連れて行ってくれた。

こういうオーダーは多いのかもしれない。

言葉がほとんど通じないマリナが、アルディ邸の地図を差し出すと、ああ、わかった、と言うようにうなずいてすぐに出発した。
童顔で化粧っ気のない小柄なマリナをみて、日本の修学旅行のついでの、好奇心による立ち寄り程度と思っていたのかもしれない。

程なくして目的地に到着した。
オーナーとアルディ家との間にどのようなやりとりがあったかどうかはわからないが、入り口でID を提示し、事前に申請してあったであろう入館許可申請にサインをすると、比較的あっさり邸内に通された。

ある程度、邸内を進んで行くと、バラを模した大きな門に突き当たった。

ここでサインをもう一度する。

セキュリティガードが外れ、監視の付き添いがなくなった。

どうぞ、お入りください。

どう見ても生粋の外国人に、恭しく日本語で挨拶をされて、マリナは飛び上がった。

シャルル！

あなたまた、こういうおかしな日本びいきで邸内の使用人を困らせているの！
がつんと言ってやらねばやらない。

■08

ジルに会えないか、という話に、案内係の品の良い老紳士は困ったように眉をハの字にした。

この表情、いつか漫画のカットに使おう。

そんなことを思いながら、彼の説明を聞くと。
ジルは今、シャルルからの直接の依頼で、出張中ということだった。
国外にいるので、当分戻らないという。

「まずは、おくつろぎください。」
そう言って、小さなティールームに通された。

壁紙がピンクで、焦げ茶色の小花がくどくなく散っている。

パリの柔らかな陽光が差し込んでいて、サンルームとしても利用されているようだった。
家具も必要最小限のものであったが、そのひとつひとつが経年による光沢を放ち、よく手入れされていた。

ひっそりと飾られた花は芍薬だった。

この館で咲かせたものです、と老紳士は目を細めて言った。
この季節には咲かないから、邸内には温室があるのだろう。

暖かで柔らかな日差しに当たりながら、彼女はお茶がサーブされるまでの間、ほかにすることもなかったので、鞄から資料を取り出して目を通すことにした。
この部屋の構図は是非デッサンさせて欲しいものだけれどもね。

まずは仕事の話だ。

オーナーに買い付けが失敗したなどとは報告できない。

セイジ・マクドゥガル
母はアメリカ人。父は日本人。
35 歳にして夭折の画家。
そのタッチは斬新で、かつ剛胆で繊細で、緻密。
両極端の画風を巧みに織り込み、彼の作品は1000 点とも100点とも10 点とも言われている。

ずいぶん謎が多いのね。
マリナはこの謎めいた画家に興味がわいた。

渋々引き受けた話ではあるが、やるからには真剣に取り組まないといけない。

まずは、情報。

シャルルから支給された（とでも言うべきか）パソコンから検索しても、ほとんど情報を得ることができなかった。

■09

まじまじと資料を見る。

彼に関する資料がほとんどないので、そのタッチや質感がよくわからない。
唯一、日本に残されているのは彼の自画像だ。
彼女は凝視した。

母はオーストリア系アメリカ人で父親が日本人という彼の顔は、じっとこちらを見据えていた。
直毛ではあったが、当時にしては珍しくやや長目の髪で耳が隠れている。

髪の毛の色は、焦げ茶だ。
目は黒。
通った鼻筋に、きゅっと結んだ意志強そうな唇。
何か憂えているような眉。
二重のまぶたが物憂げに持ち上がり、こちらをじっと見据えている。
まだ、20代にさしかかったばかりかどうかの、そんな少年から青年にかわるその瞬間を、大胆に、繊細にとらえていた。

絵画であるのに。

何かしら、観られているような落ち着かない気持ちになる。
じっと、双眼がこちらを観ている。
そういう画風なのだと気がついていても、この目に惹かれてしまう。
この人のこの自画像のほかに、人物があるという。

是非、みてみたい。

そんなことを思いながら、小一時間ほど、寛いでいると、眠気が襲ってきた。
満腹になるほどショコラを食べて、薫り高いお茶を飲み、燦々と日の光が差し込む部屋で静かに時間を過ごせば、眠気も襲うというものだ。

このショコラ。

前に、シャルルと再会したホテルで振る舞われた、季節限定ショコラ、だね。
マリナは少し笑った。
注文して取り寄せたのか、館の者に命じて作らせたのかはわからなかったけれど、寸分違わぬ味だった。

シャルル、元気かな。

やがて、うとうとと、まどろみの世界に入ってしまう。

ん？

微睡みというものは、夢と現の狭間にいることを自覚していることだという。

マリナは、まさに微睡みの最中だった。
アルディ家に乗り込んでみたものの、ティールームに通されて、お茶とお菓子とケーキとそのほか諸々の食べ物で満腹になり、書類の文字という魅惑的な睡眠薬で、すっかり眠り込んでしまったことも、意識の中ではわかっていた。

そろそろ、誰かが来そうだな。

聴覚は完全に覚醒していた。

廊下を誰かが歩く音がした。
先ほどの老紳士より、歩幅が広く、早い足取りだ。
扉の開く音。

しばらくして。

目の前に上品に盛られたショコラに、ひょい、と誰かの手が伸びた。
すぐに、ひょい、とまた次のショコラに手を伸ばす。
また、次のショコラも。

少しずつ形を変えて遊び心をくすぐっているそのショコラのうち、楽しみに残していた
一番大きな形のショコラに、その手が伸びたとき。

「ちょっと！そのショコラは食べちゃだめ！」
マリナの両目が見開いた。
「わっ！」
声がして、マリナが狙っていたショコラを取り落とした。
「何落としてるのよ！」
マリナがまた叫ぶ。

とても、眠っていて、今、起きたばかりとは思えない反応だ。

「・・・・ショコラ」
彼は、そう答えた。

それが、彼との最初の出会いだった。

「あんた、誰よ！そんな盗み食いみたいなことをして！」
マリナは憤っていた。

ぼんやりしている感覚が、ぐっと堪える、ということを忘れさせていた。
「オレ？」

驚いたように、手を伸ばしたまま硬直していたその人物は、ようやくその呪縛から解き放たれたように、動き出した。

「そうよ。誰よ、あんた。」

もう他人様を「あんた」と呼ぶのはやめて久しかったが、ついつい、むきになってそういう言葉が出てしまう。

「オレは、セイジ。セイジ・マクドゥガルだよ」

はっ？

今度はマリナが硬直する番だった。

■11

「人に名前を尋ねておいて、名乗らないなんて。
　シャルルの客も、程度が落ちたな」

セイジがそう言って、ぱくり、とその目当てのショコラを無造作に口に放り込んだ。
マリナはむっとして、先ほどまで吸い込まれるようにして微睡んでいたソファから体を起こし、立ち上がった。

テーブルを挟んで、セイジと名乗る人物と向かい合う格好になる。

「マリナ。わたしは、マリナ・イケダよ。」

マリナは彼を凝視した。
焦げ茶色の髪も、黒い瞳も、整った鼻筋も、そのすべてを絵画から立体的に再現したような、その人そのものが目の前にいた。

アルディ邸の空調機能は完璧に調整されているので、薄着でも平気なようだ。
彼は、薄いブルーのボタンダウンシャツに、ダークグレーの細身のパンツを合わせ、飾りベルトを細い腰に巻き付けていた。

体型は外国人、顔立ちは東洋人という、アンバランスではあるけれど、素晴らしい組み合わせの容姿を持った人物だった。

絵画と違うのは。

長めの髪型少し、違うことと。
左右の耳にピアスをしていること。
その表情が、非常にシニカルであることだった。
口角をちょっとゆがめて、男性にしては赤い唇で薄く笑う。

睫が人形のように、密集していて、瞬きをするとばさばさと音がしそうだった。

そして、特に。
目が。

その二重の瞼の下から放たれる眼光が強い。

ちょっと気の弱い人間であれば、眼を反らしてしまうくらいの、視線の強さだった。
絵画の中の自画像もこの上なく瞳に惹き付けられたのだが、こうして立体的なセイジを見ると、その絵と違った種類の、どうしようもなく目線がそこに注がれてしまう、いわゆる「カリスマ性」を感じてしまうのだった。

「不躾な女だな」
セイジが口悪く言った。

■12

この年齢になると、いろいろな人と会う。

特に、マリナは幼少の頃から全国津々浦々渡り歩いてきただけに、人の特徴をつかむことだけは、人一倍俊敏だった。

けれども。

セイジは、これまでの誰よりも、口が悪かった。
アパートの大家の息子も、これほどシニカルではない。

「あなたがセイジ・マクドゥガルであるという証拠はあるの？」
「お前がマリナ・イケダだという証拠はあるのか？」

オウム返しのような問いかけに、ますますマリナは不機嫌になる。
一方、セイジは腕組みをして、にやにや笑っている。

ああ、相性があわないタイプというのは居るんだわ。

自分はあまり人の好き嫌いがないと思っていただけに、この不愉快さがどうにも心地悪かった。
マリナは、苛々しながら、パスポートを鞄から出して、顔写真と名前の部分を提示した。

「ほら。」
セイジは無遠慮にマリナのパスポートを取り上げて、眺め回し、「写真写りが悪いというのか良いというのか、わからないな・・」

と独り言を言って、マリナをさらに憤らせ、そしてすぐに興味がなくなったかのように、ぽいっとパスポートを投げて返した。

「順番よ。こっちが身元を明かしたんだから、そっちだって証明しなさいよ」

そう言うと、セイジは、う～んと首をひねって、その良く整えられた指先を軽く顎にあてた。

「今、あんたが見てるその資料。そこにある「自画像」はまさしく、オレだろ？」

マリナは、真剣に取り合うのがばかばかしくなってきた。

どすん、とソファに座り、すっかり冷えてしまったティーの残りを一気に飲み干した。
そうして、資料と、セイジを見比べる。角度を同じにしてみても、結論は同じだ。

―――確かに同じ顔だ。

でも。

マリナは、セイジをにらみつけた。

セイジは、まだ年の頃は20 歳前後だろうか。
彼女より、明らかに年下だった。

立ち居振る舞いが、明らかに幼いのだ。

なのに、初対面からこの無礼な態度は、一体どういうことだろう。

「でも」
マリナは、声を少し低くして、言った。

「セイジ・マクドゥガルはもう、30 年近く前に、死んでいるんだけど。」

■13

「Bravo 」
セイジが発音した。
「足し算引き算は、できるらしい」
「ちょっと！さっきから、失礼じゃないの？その言いぐさ」
マリナは沸点に到達した。
「顔を真っ赤にして、メスゴリラみたいだ。」
セイジは吹き出した。
ますます噴火する。

「あんた、初対面の人間に礼を尽くすって、習わなかったの？

　その綺麗な顔と頭は、帽子かけなわけ？少しは処世術とか礼儀とかいうものを発揮したらどうなのよ」
「おお、大噴火だ」
まったく取り合わないセイジに、マリナはただ口をぱくぱくさせて驚き呆れるだけだった。
「あんた、どうせセイジ・マクドゥガルの孫とか、親戚か何かなんでしょ。
　だから、顔立ちが似ているんだわよね。」
「オレは、嘘は言ってないよ」

しれっとして、セイジが答える。
「その画家のセイジ・マクドゥガルは「誠次・マクドゥガル」というんだ。オレは「青磁・マクドゥガル」だ」

　空中で漢字を書いて、マリナに教える。
　同じ音を持つ、マクドゥガル家の子息。

　それなら、合点がいく。

この絵の売買に関し、アルディ家から召喚されたか、絵そのものを持ち込んだのが、マクドゥガル家なのかもしれない。

事情を聞いた方が良さそうだったが、とにかく、今は聞く気にもなれないくらい憤っていた。
「あ、マリナ。オレのことは、セイジで良いよ」
そう言うと、マリナが口を付けたカップに、冷えた残りのティーを注ぎ、喉が渇いたと言って、一気に飲んだ。

マリナは、ますます呆れて、何も言うことが出来ない。
「・・・・呆れた」
それだけ言うのがやっとだった。

すると、カップをかちん、と置いて、セイジがマリナを見つめた。
彼は自分の魅力について、その若さで熟知している。
そう思った。
黒い瞳は、よくよく見ると濃い焦げ茶色だ。

髪の色は地毛で、日本人にはない色合いなので、おそらく彼も日系人なのだろう。
少し伸びている前髪の奥から、物憂げな瞳が、こちらをじっと見つめていた。
下瞼も上瞼も、通常の人より、大きく開くので、見る者には凝視されているという印象を与える

のかも知れない。
「つれないこと、言うなよ。オレのパートナーになるんだからさ」
こいつと仕事を一緒にするのだけは、絶対にイヤだ。
こいつにパートナーと呼ばれるのだけは、絶対にイヤだ。
後になって、なぜこのときこの言葉を吐き捨てなかったのか、マリナ・イケダはずいぶんと反省することになる。

■14

相性というものは本当にあると、この年齢になってから思い知った。
これまで、人に合わせることも苦痛に感じたことはないし、自分が合わせてもらっていたことも多々あると、思う。

けれども。

ボタンの掛け違いというのだろうか。

磁石のプラスとプラス。
凹凸の凸同士。

そんな相手がいるのだということ自体、考えに及ばなかった。

「天敵」
今、目の前のセイジ・マクドゥガルは、この言葉がぴったりだった。

「・・・年上に向かって、その口の利き方は改めるべきよ」
マリナはそう言って、軽くにらんだ。

つい先ほどの眠気など、とっくにどこかに去ってしまっていた。
「年上、ねぇ」
ちろり、と小馬鹿にした目つきで、セイジはせせら笑った。

「背もオレより小さい。無教養で無学で無知で不作法な不細工に、説教されるとは思わなかったよ。」

かぁぁぁぁぁぁ
マリナの目の前が真っ赤になった。

シャルルや薫や、そのほか彼女の友人は、たいていが口が悪い。
しかし、こういう馬鹿にするような言い方はしなかった。
マリナは、沸点を超えて一瞬で水蒸気になった。

人間、怒るときは、目の前が真っ赤になるのだと身をもって知った。
「つい。かっとなって」

そういう台詞を自分が使うとは思わなかった。
つかつかつかと歩み寄り、ちょっと背伸びをして、ぱちん！とセイジの頬をひっぱたく。

■15

「まったく予想どおりの動きだね」

いってぇ、とちょっと頬をさすってから、セイジはにやりと笑った。

テーブル越しではなく、距離近くみる彼は、やはり魅力あふれる人物だった。

とにかく、瞳が印象的だった。
見方によっては、物憂げにも、闊達にも見える。

張った二重の瞳。

憔悴という言葉など無関係かのような、弾んだ目の下から頬にかける弾力が、
彼の若さを証明していた。

しかも、よくよく見ると、彼の瞳は、片方の瞳がわずかに薄い。

オッド・アイだ。

マリナは息をのんだ。
初めて見る。

「なに、じろじろ見てるんだよ、野蛮女」

セイジはにらみ返した。

■16

「あんたの言い方は、いちいち損をしていると思う」
マリナは言った。

なんだ、近くで見ればすごく幼いじゃない。

「初対面の目上の人間に、そういう口の利き方は、良くないと思うわ。もう一度だけ言うけれどね。
　それから、このアルディ邸の中を自由に出入りできるということは、あんたもシャルルから招かれた客　人なわけでしょう。
もうちょっとおとなしくするか、品よく過ごすかした方が良いわ。」

「へぇ　ずいぶんとシャルルのことを知ってるわけだ」

セイジへのダメージ値は、ほとんどゼロ、だった。

はぁ

こういうどこまで行ってもねじれの関係の人物というのは、存在するのだ。
本当に。

マリナががっくり肩を落としたとき。

「そろそろ、話しかけても良いかな」
透き通るような声が、した。

「！！！」

・・・シャルル。
マリナは、扉にすかさず目をやる。

■17

声がする。

シャルルの。

マリナは声のした方に視線を向ける。
扉には、スーツ姿のシャルルがいた。

きゅっと、唇を噛む。

こういうとき。

自分は大人になったんだな。
自分は、大人になってしまったんだな。
と、思う。

駆け寄って抱きしめることもできないし、ほほえみを返すこともできない。
久方ぶりに逢うのに気の利いた言葉で挨拶することもできない。

きっと、今の気持ちを彼に言ったのであれば。「それは『感無量』と言うんだよ」
と澄ましていうのであろう。

シャルルは、濃紺のスーツを着ていた。
でも、野暮ったくなく、まったく洗練されている。
白いシャツには細かく花柄の刺繍が施されていたし、

タイは白っぽいともグレーっぽいとも言えるような柄つきのものだった。
色味を抑えて、彼の瞳と白金の髪の色を最大限生かした出で立ちだった。

シャルル。
「久しぶり。」
彼女が言うよりも早く、あでやかに笑って、シャルル・ドゥ・アルディが、そう言った。

■18

久しぶり。

ええ、本当に。

マリナは泣き笑いしたい気持ちを抑えた。
そうして、目をきゅっと見開く。

閉じるのではない。
開くのだ。

こうすると、涙が抑えられる。彼女が学んだ術だった。
その仕草が、シャルル・ドゥ・アルディにとっては、ファム・ファタルの誘うような瞬きであると気がつかずに。

「・・・久しぶり」
そう言って、ちょっと首をかしげる。
きっと、今の自分は無表情で無愛想だろう。
表情のコントロールが、うまくいかない。

「シャルル。この進化し損ねた野蛮人を追い出してくれよ」
セイジが張り詰めた空気を、この言葉で破った。
マリナを、思いっきり人差し指で指さす。

「なんですって！！！！」

マリナは、このまま脳の血管が切れてしまうのでないかと思うくらい、また憤った。
「人を指さすのはやめなさい！」

「ああ、おまえはいつからオレのマミーになったんだよ。
偉そうに。
もうちょっと修行して来い」

セイジに、そう言われ臨界点に達した。

ああ、昔の日本人は、憤って死ぬとか、憤死とか悶死とかあったけど。

私、今、その状態になるかもしれない。
そう、真剣に思った。

はぁ、とシャルルがため息をつく。

「ずいぶんと意気投合しているじゃないか」

■19

「はぁ？意気投合？」
セイジがマリナの言おうとしていることを、言った。

「シャルル、どこか具合でも悪いの？
なんだってオレをアメリカから呼んでおいて、このゴリラ女と引き合わせたんだよ。
　まるっきり役に立たないじゃないか」
「なんですって！！！！」
マリナは、もう一度手を振り上げる。
その手首を。

セイジが、待ってました、というように、ねじり上げた。
「・・・痛い！」
マリナが悲鳴を上げる。
「だから想定内行動だって、言っただろ」
手首をねじり上げられて、ぐっと、彼の胸元まで引き寄せられる。
「あんたの行動は、手に取るようにわかるんだよ。」
そう、耳元でささやかれた。

「そう。あんたのことは、わかりたくもないわ」
「・・・シャルル。止めなくて良いのかい？これって、どうみても、痴話げんかだよ」
セイジは意地悪く言った。

シャルル・ドゥ・アルディは、ちょっと首を斜めにして、腕を組んだ。
「・・・青磁。君は何をして欲しいんだい？事実に反することを言って、困るのは青磁の方だ」

「ん・・・何って、かまって欲しいだけ」
「はぁぁぁ？なに言ってるのよ！」
マリナの目が、三角になった。

「ちょっと！シャルル！この状況、何とも思わないの！止めようとも思わないの！」
感動の再会より、文句の方が先に発せられた。

「・・・同族嫌悪で憤っている日本人女性を、救出するのが急務なのかな」
シャルルはつんと横を向いて、そう言った。
「誰が、同族嫌悪よ！」

ふんっと、セイジの腕を振り払った。

やはり男の子だ。
力が強い。
肘をさすりながら、憤っていた。

この、無礼なセイジ・マクドゥガルに。
この、冷徹なシャルル・ドゥ・アルディに。

ああ、この館でまっとうな人に会いたいよ。

心底、そう思った。

■20

彼女の言う、「まっとうな人」はすぐに現れた。

「そろそろ、お食事の時間ですが、皆様大広間にお越しくださいませ」

・・・・眉毛がハの字の、執事さんだ。

好々爺、という言葉が何よりも似合う老紳士は、その緊迫した雰囲気を一瞬にして打ち消した。

「マリナ、どうする？」
「もちろん、ご招待いただけるなら。いただきます」
シャルルの短い問いかけに、一も二もなく回答する。

もう、周囲は薄暗くなり、ディナーの時間であることを告げていた。
マリナの滞在するアパルトマンでは当然のように食事は自炊だから、一食でも食費が浮くことがありがたい。

「こいつ、食費が浮いてありがたい　って思ってるぞ」

セイジが見透かしたように言うので、マリナがまた、目をむいた。

はぁ、と大げさに吐息をついて、シャルルが主としての威厳を発揮する。

「セイジ。君は考えていることが耳から漏れている」
「なんだよ、その言い方」

今度はセイジ・マクドゥガルがむっとする番だった。

■21

「まず、君はマリナに謝罪しなければならない」
シャルルはそう言って腕を組んだ。
「何を謝るんだ？」
「『背もオレより小さい。無教養で無学で無知で不作法な不細工』」
うう、マリナが唇を噛む。
復唱されているとはいえ、シャルル・ドゥ・アルディの口から言われる方が、よほど堪える。
それに、そのあたりから聞いていたのであれば、口を差し挟む
タイミングはもっと早くても良かったのではないのだろうか。

「手に入る可能性やチャンスがあるものを、怠惰であるが故に入手できなかった特徴は、事実を言っても良いと思うが。」

シャルルはそう言って、いたずらっ子のように、青灰色の瞳をじっと、セイジに向けた。
「身体的特徴や、努力しても得られないものについて批評するということは、ルール違反だろ。」

セイジは何か言いかけて、ぐっと詰まった。身に覚えがあることらしい。

「たとえば、君のオッド・アイは。」

そう言って、シャルルはセイジに近寄り、その精悍な顎を、くい、と長い細い指でつまんだ。

「下々の卑しい血が混じった証という者も居れば、神が授けた奇跡の瞳という者もいる。」
セイジは、シャルルから目を反らした。

彼の瞳の色が違うことは、どうやら彼の中でコンプレックスのようだった。

「それに、オレから見たら、君だって背が低いし、ね。」

そう言って、シャルルはセイジの焦げ茶色の髪の毛をくしゃくしゃとなで回した。
「さ。これからビジネスの商談をする相手だろ。
わざわざ、機嫌を損ねてどうするんだ。
　そういうところが、まだまだだって言われるんだよ」

天使のような、綺麗な微笑みで、シャルルはその場を取りなした。ｓ

■22

「セイジ。ビジネスの相手だ。君は謝罪するべきだ。」
セイジは小さく舌打ちした。

渋々。
そう、渋々、「ごめんなさい。」
セイジが深々と、と頭を下げる。

マリナがまたむかっと腹を立てる。心からの反省はないようだった。

「まぁ、『無教養で無学で無知で不作法な』は許容するとして。」
シャルルは冷徹に言った。

「セイジ。そもそも、君がマリナ・イケダを指名したんだろ。」

えっ？
マリナが驚いたように顔を上げる。

「シャルル。どういうこと？私は面識がないんだけど」

「指名することそのものは、お互いが知っているかどうかは、意味がないんだよ。」
シャルルは微笑んだ。

「さ、食事の時間だ。野暮ではあるが、続きはこの後で話そう。」

シャルルが扉を大きく開けた。

マリナはあまりにも憤っていたので、彼がほんの少し扉を開けて入ってきたことすら、気がつかなかったのだ。

この後、シャルルにずいぶん皮肉というか嫌みを言われることになるのであるけれども。

■23

「大広間は、この廊下の突き当たりだ。」

シャルルは、そう言って、マリナだけにその行き先を指示した。

どうやら、セイジ・マクドゥガルは、その場所をすでに知っているらしかった。
「彼は数日前からここに滞在している」

シャルルは、マリナの疑問を読み取ったかのように、補足説明した。

セイジは、気分を害した様子はなく、あっけらかんとして「今日の食事は何だ」
と老執事と一緒に部屋を出て行ってしまった。

ああいう気分屋で、ムラがあって、反省もしない、思いやりとか想像力とかに欠けている人とは、とうてい。
とうてい合いそうもない・・・。

今回の商談の相手はシャルル・ドゥ・アルディか、その系列の代理人であると思っていたから、思いもかけない人物との交流を余儀なくされて、彼女は困惑していた。

「シャルル。ちょっと。」
部屋を出て行く前に、マリナはシャルルを呼び止めた。

「何？」
薄暗くなってきたので、シャルルは部屋の照明を、日没後に合わせて光源を絞った。

白金の髪が、間接照明に当たって、とても光って見える。

どうして、彼はこんなによそよそしいのだろうか。
目を、合わせようともしない。

いや、目を合わせても、その瞳の奥は遠くを見ているかのようだった。
マリナを拒絶しているのではない。

でも。

これが彼の「ビジネスの顔」であり「マリナの知らない友人と接する時の顔」なのかもしれない。

彼女はそんなことをちらり、と思った。

■24

「青磁のことだろう？」
シャルルは薄く笑って、ソファに腰を落とした。

タイを緩めて、浅く座る。
後ろで緩く束ねていた白金の長髪が窮屈であった、と言いたげに、その拘束を緩めた。

「青磁は、マクドゥガル家の子息だ。アルディ家の所蔵美術品にある絵画の作者と、似てるだろ」

そう言い始めて、シャルルは、ちょいちょいと、マリナを指先で呼び寄せて、

正面の椅子に腰掛けるように言った。
説明が長くなるからね、とちょっと笑った。

「一体、何なの、あの子は」
呆れて、マリナが腰を下ろしながらそう言うと、シャルルはそう言うと思った、とくすくす笑った。

「いわゆる、先祖返りって現象だ。直系血族でないけれど。
　彼は縁戚関係にある。
正確には、彼の大叔父が画家の誠次・マクドゥガルにあたるのだが。」
シャルルはそのまま説明を始めた。
「詳しい説明は省くけれど、彼の親族とアルディ家は懇意でね。
小さい頃からよく知ってる。でも、あの容姿に口の悪さだろ？
スキップして今は大学院生なのに、ふらふらして、いろんなところを放浪してる。
たまたま、今は休み中なんだよ。で、これまたふらりとフランスに立ち寄った。
　自分の親族の絵画がアルディに在るのは元々知っていたけれど、　この買い付けに立ち会う、と言い出した。」

シャルルは説明を続ける。

■25

透き通るような声で、シャルルが説明を続けた。

彼のこんな長い説明を聞くのは、一体何年ぶりのことだろう。
彼から発せられる音声というのは、謡うようで囁くようで、この上ない波長で彼女の耳をくすぐった。

「しかも、今回の商談には、マリナ。君を指名してきた。」
「それが不思議なのだけれど」
マリナは、首をかしげて、率直に疑問をぶつけてみた。

「セイジには、初めて会うし、今回彼という存在も初めて知ったのに。」
「言っただろ。両方が知り合っている必要はない。少なくとも、青磁はマリナのことを知っていたのだし。」

「そこが不思議なのよ。そういうつながりが、思いつかないの。」

シャルルは白金の髪を揺らして、くすくす笑った。
その理由を知っているようだ。

「もったいぶらないで教えてくれたって良いじゃない」
「自分で見つける答えにこそ、価値があるんだよ。」
シャルルは微笑んだ。

あでやかな、大輪の花のような微笑み。
ああ、やはりいつものシャルルだ。

マリナは少し安堵した。

シャルルは笑った顔が一番魅力的なのだから。
彼のつんとすました顔を見続けるより、ずっと良い。
「なぜ、彼が君を知っているのか。なぜ、彼が君を指名したのか。
なぜ、彼がこんなにも口悪く君を怒らせるのか。
・・・こういう謎解きも、時には重要だよ。マリナちゃん」

シャルルがそう言うと、まるで最初から仕組まれている気になってしまう。
いや、きっと、大抵の部分は予想どおりで、そうに違いないのだろうけれども。

■26

どうあっても教えてくれるつもりはないらしい。

それが、最終的には円滑な売買交渉に繋がるのであれば、と思い直した。
気むずかしい相手ではあるが、気むずかしさと言えばシャルル・ドゥ・アルディの右に出る者は居ない。

まぁ、セイジ・マクドゥガルの良いところもあるかもしれない。
マリナの今回の用事は、売買契約を交わしてくることではなく、絵の存在（贋作の恐れは
アルディ家所有の美術品には、考えられなかった）の確認と、実際にセイジ・マクドゥガルの
作品を目の前にしての印象をレポートすることであった。

商才があるとは言えないマリナができることは、絵画の印象、状態、及び作成時代の特定または

推定であった。

要するに、インスピレーションを働かせて、ネット画像ではない、印象を、オーナーに伝えて欲しいということなのだ。

それだけ、アルディ邸のセキュリティは厳しく、通常の者は出入りできないことになっているのだが、セイジはそんな中でも、自由に出入りしているらしい。

「わかった」
マリナは頷いた。

「自分の目で耳で確かめないとわからないってことね。」
「そういうこと。」
シャルルは頷いて、立ち上がった。

「それでは、商談成立だ。君は暫くの間、青磁と一緒にアル
ディの所有する絵画の鑑定レポートを作成して欲しい。
彼は、日本語は話せるし、ああいう口の悪い単語は流暢だけれど、日
本語の読み書きはまるで駄目なんだ。それをサポートすることも含めて、依頼したい。」

「承知しました」
そういうと、シャルルは満足げに頷いた。
少しタイを緩めて、今度は少し顔を傾げて微笑む。
「それでは、マリナ。宜しく頼む」
シャルルが手を差し出した。
「こちらこそ。」

マリナも微笑んだ。そして、立ち上がり、自分よりずいぶん長身の、館の主と
条件成立の握手を交わそうと手を差し出した。

しかし、シャルルが握ったのはマリナの小さな掌ではなかった。
手首をつかみ、一気に自分の元に寄せる。

あっ

そう思ったのも一瞬だった。

バランスを崩して、シャルルの胸に飛び込む格好になった。
まるで、彼はその角度を計算していて、マリナが転げ落ちるそのベクトルをも操作していたかのように。

ぶつかる！本能的に瞑った。

次に自分が瞬きをした時には、シャルルに、息も出来ないくらい強く抱きしめられていた。

■27

「久々に会うというのに」
シャルルが、マリナの額にキスをした。
苦しいよ、と呻くマリナは完全に無視された。

「君は、オレにも気がつかないで、青磁と口げんかしてる。挙げ句の果てに」

君の体に、触れたんだよ、青磁は。
オレより、先に。

シャルルは声に出さずに言った。
マリナにはきっと聞こえてなかった。

「こちらの反応を愉しそうに見物している青磁に、予想通りの反応を見せるのは、不本意だしね」

シャルルはそう言って、マリナの左手首を取った。

少し色あせているが、間違いなく、彼が彼女に結んだ赤い紐が、まだ手首に絡まっていた。
手首の内側を親指で、つと、なぞる。

そして。
中指と人差し指を環の中に入れて、ゆっくり、掌に向けて指を滑らせた。
まだ、はめていてくれたんだね。

切ろうと思えば、切っても良いそれを。
彼女がまだ身につけていてくれた。
それを思うだけで、彼は破顔する。

「ビジネスの話は、これで終わりだ」
シャルルはそう言うと、腕の中のファム・ファタルが逃げ出さないように、再び姿勢をかえて抱きしめる。

「シャルル！私、そういう切り替えスイッチがないんだってば！」
マリナが小さく叫ぶ。

彼女の言い分は、わかっている。

ビジネスの時のシャルルは、この上なく無表情で誰の肩も持たない。

批判はするが賛同はしない。

こういうマリナには普段見せないシャルルが、青磁とのやりとりを冷静に傍観していたことに、彼女は異議を唱えているのだ。

「スイッチ？オレは、とっくに切り替わってる」

シャルルはそう言うと、苦しさのあまり悲鳴を上げるマリナの茶色い髪に、その綺麗なカーブを持つ頬を埋めた。

■28

そうして、環の中に指を埋めたまま、頬を髪に埋め、シャルルは彼女に最大限、触れた。

君は本当に酷い女だよ、マリナ。

そう恨みがましく思う一方で。

彼を決して穏やかにさせない彼女の存在に、穏やかに彼女を迎えたいという願望に背く存意があった。

激しい渦に身を任せることが、愉しくてたまらない。
それでこそ、オレのファム･ファタルに相応しい。

どこまでも遅鈍で残酷な、運命の人。
顔が見えない位置であるから
挑戦的にシャルルが微笑んでいることに。
マリナは気がつかない。

「さぁ、オレに再会のキスをしてくれても、良いんじゃないのかな」

腕の力を緩め、ようやく彼と彼女は向き合って、近い距離で視線を交わすことができるようになった。

でも、その両の掌は、軽く緩くそれでいて頑なに繋がれていた。

シャルルの軽くそう言ったささやかなおねだりに、マリナは小さく微笑んだ。

「シャルル。改めて。　　・・・・・本当に、久しぶり。」

そうして、軽くかがんだ彼の頬に、精一杯背伸びをして、唇を寄せた。

これは友情のキスなのか？
それとも、もっと違う意味なのか？

マリナ、オレはこういうキスを望んではいないけれど。
マリナをじっと見つめるが、彼女は頬を染めたまま、うつむいて、照れくさそうに笑った。

「なんだか、照れてしまうわね。
パリに来るのも久しぶりだから、こういう挨拶も恥ずかしいわ」

それが、マリナ・イケダではあるのだけれども。
それが、彼女らしい特徴ではあるのだけれども。

シャルルは、少し切なげに、息を吐いた。

がっかりしたという感情を、彼女に悟られないために。

「さぁ、食事の時間だよ。・・まずは、君のその騒いでるお腹の蟲を抑えないといけないね」
マリナは赤面した。

■30

しょうがないな、と言いたげに軽くため息をついて、シャルルは繰り返した。
通常、彼は二度は繰り返して話をしない。

「明日からの日程の話。
　まず、地下にある美術品管理倉庫で絵画の状態を確認してくれ。
　もう、回復室で梱包も解いてある状態だ。状態はまず良い方だな。
　暫くの間放置されていたものを保管してあるから、その際の、経年による劣化は致し方ない。
」

それから、と区切って、シャルルは緩く足を組んで、手を膝の上で組み合わせる。

「青磁が今回持参した、関連資料を一緒に見てやって欲しい。
彼に持たせると宝の持ち腐れだからね。
　当時の日記というか創作メモやスケッチも残っているから、これらを勘案して、絵画の組み合わせをして欲しい」
「組み合わせ？」

マリナが最後の言葉に反応した。
ということは、絵画は複数点あることになる。
「そう、組み合わせ」
セイジ・マクドゥガルが頷いた。

彼はテーブルに肘をつき、指を組んで、顎を乗せ、マリナとシャルルを交互に眺めていた。

お行儀悪いわよ、とたしなめてから。
マリナは、シャルルに今一度質問した。

「組み合わせということは、その作成年月日を割り出せば良いと言うこと？
そんなに劣化が激しいの？」
「見てみれば、わかる」
シャルルは意味深げに、ゆっくりとそう言った。

「作成年月日が問題ではないんだよ。彼の作品には作成順序は関係ないんだ。
何しろ、活動期間がとても、短いからね。
その、絵画の組み合わせいかんでは、この絵には最高の価値もつくし。」

シャルルの言葉を引き継いで、セイジが口を挟んだ。

「オマエ次第では、ゴミくず同然にもなるってことだよ」

にやり、と笑って目を細める。

・・・やっぱり、組まないと駄目なのだろうか。
マリナは心底、憂鬱になった。

■31

それでは今日は、この話は終わりだな。

食事が一通り済むと、明日の邸内の美術品修復作業室で集合することとして、時間を確認した。

セイジが立ち上がって、退室の挨拶をした。

「じゃぁ、マリナ。明日から宜しくな」
セイジがそう言って、またな、とマリナに軽く挨拶する。

彼の長めの髪が動いて、ピアスがちかり、と光った。
口は悪いけれど、魅力的な人物であることには変わらない。
そして、画家の誠次・マクドゥガルも、同じような気質の人物だったのだろうか。

自画像を、思い起こす。

あの画力は、並大抵の素養の持ち主であるとは言い難かった。
もう少し、長生きしていたら、ずいぶんといろいろなことが変化していたに違いない。
吸い込まれそうな瞳を開いて、彼はマリナを見た。

見る、というだけなのに。

この行為がこれほど、落ち着かない気持ちにさせるのは、なぜなのだろう。

知的な会話で心弾んだわけではない。
相性も良いとは言えない。

でも、彼に吸い寄せられる。これは、一緒に居ればいるほど、
そう強く感じていくのだった。

「じゃ、シャルル。マリナを遅刻させないように、ちゃんと朝起こすんだよ」
そう言って、セイジは軽く片目を瞑って、シャルルに微笑んだ。

冗談なのか本気なのか。

セイジ・マクドゥガルという少年が、ますますよくわからなくなってきた。

■32

「さて、と」
シャルルに案内されて、隣の談話室に移動する。

「少し、飲むかい？」
暖炉があり、そこに集うゲストが主とまんべんなく会話できる

ように、それほど広くなくかつ狭いと感じない程度には広い空間を持っていた。
円形に配置されたソファがいくつか大理石の丸テーブルを囲んでいる。

食事の後なので、軽くつまむ程度の軽食が用意されていた。

焼酎からワイン、リキュールまで揃った小さいけれども立派なミニバーが、目を引いた。
ここで、彼は寛ぎながら、何か物思いに耽りながら酒を愉しむこともあるのだろうか。
いや、一人でなくても良い。
誰かと一緒、笑ったり話をしたり、「ちょっと飲み過ぎたね」と言うほど時間の経過を忘れる様な体験をしているのだろうか。

「いただくわ」

マリナは答えてから、ちょっと考えて、それならアルコールの低いカクテルが良いなと言った。

「へぇ　珍しいね。」

マリナが苦笑した。
珍しいと言い出すくらい、彼と頻繁に飲んでいるわけではなかったと思うが。

毎回逢うたびに相当飲んでいるから、そう言われても仕方がないかも知れない。

「明日から早いでしょ。集合時間に遅れるといけないしね」

澄ましてそういうと、シャルルは軽く、何かの次いでというような言い方をした。

「オレが、起こしてやるよ」

何言ってるの、とマリナが吹き出した。

「朝の弱いシャルルに起こしてもらうなんて、ありえないわ」

「あいにくと、オレは早起きなんだよ。」

シャルルがその綺麗な唇を緩めて笑った。

「一人じゃない朝は、早く目が覚める。・・・知らなかった？」

■33

「確認してみればいい。」
シャルルは薄く、挑戦的に笑った。
でもその青灰色の瞳は、笑ってなかった。
マリナは、慌てて眼を反らして、ソファに座り直した。

「・・・シャルル、シャルルは何を飲むの？」

話題をそらす。
彼には通用しないとわかっているけれど。

その青灰色の瞳を見ていると、自分が一体何をしにパリに来たのか、それすら忘れてしまいそうになる。

「久しぶりだから、ブランデーにしよう」

思ったよりあっさり、シャルルはその彼女の無言の申し出を受け入れたようだった。
彼はそう言って琥珀色の液体の入った瓶を取り出した。

日本メーカーの有名酒造で作られているブランデーで、樫の香りが気に入っていた。
マリナには、リクエスト通り、アルコールの低いカクテルを作ることにする。

シャルルは手際よく、生ジュースとリキュールを混ぜた、オリジナルのカクテルをシェーカーで作った。

「すごい！シャルルはカクテルも作れるのね！」
マリナが目を見開いて、喜ぶ。

・・・何ならできないと思っているのだろうか。

お褒めにあずかり光栄です、と答え返す。
「はい、どうぞ」
グラスに注がれた液体を目の前にして、マリナは小さなこどものように手を叩いて喜んでいる。

シャルルはブランデーを自分用に注ぎ、そしてグラスをマリナに向けて掲げた。

「乾杯」
「再会に、乾杯」
屈託なく笑うマリナを、彼は見つめた。

再会に？違うだろう？

シャルルは言い直した。

「乾杯。君がパリに来てくれたことに」
もう、帰さないつもりだった。

アパルトマンに滞在していることは承知していた。

彼女が、アルコールの低いカクテルを希望しているのも、これから滞在先に帰って準備をするつもりであることなのも、わかっていた。
けれど、この館から出すつもりは、もう、なかった。

彼女が彼の申し出に「ウィ」と言うまでは。
彼女が彼を欲していると言うまでは。

彼女を、満足するまで十分に賞翫するまでは。

■34

「ねぇ　セイジってどんな人なの？」

マリナがそう言うと、ブランデーグラスに口を付けていたシャルルが、ふうっと目を上げた。

「どっちの？」
「やんちゃできかん坊の方」
なるほどね、シャルルがくすくす笑う。

「主観的表現は、しないよ。」
「もちろん。その判断は私自身のもので、決して情報には影響されないわ」
そう言うと、シャルルは上品で辛辣な笑みを浮かべた。
「そうだと良いけれど」
なによ、とマリナが頬を膨らませる。その豊かな表情に、シャルルはほっと息をついた。
彼女と再会したときには、彼女があんまりにも表情を動かさなかったので。

何かあったんだろうか。
何かしてしまったのだろうか。

いや。
何もしていないから、心が変化してしまったのだろうか。

そんなことを考えていた。
彼の脳裏には、最後に別れたときの、満面の笑みを浮かべるマリナの姿が強く焼き付いており、その微笑む様子と、今のこの戸惑う表情にあまりにも差が出ていることに、困惑していた。

困惑。
そう、オレは困惑している。

顔の筋肉は結構当てにならないもので、そのときの感情とは別の表現をすることだってある。
愛していないのに恋しているような潤んだ瞳を相手に向けることも出来るし、おかしくもないのに大声で笑うことも泣くこともできる。

しかし、彼女がそれほど器用な人間であるとは思えなかった。

■35

「彼は、私を指名したと、言っていたけれど」

ああ、と小さく頷いて、シャルルは笑った。

「結果的にはね。
　選んでもらったんだ。
　買い付けの日本人オーナーと話をするか、代理人を立てるか。」

・・・・売買の商談であれば、オーナーと話を付けた方が手っ取り早いように思うけれど。

「彼も含めて、マクドゥガル家が、誠次・マクドゥガルの絵を売買することは、あまり気にしていない。まぁ、何十年か経過して、値打ちがついたら買い取るかも知れないけれども」

世間で値打ちがあると言われるものは、大抵が、贋作の危険を知りつつ、転売を繰り返して、たくさんの人にその真価を知らしめないと、本来の価値が伴わないものなんだよ、と彼は
言った。

そこまで言って、シャルルはまた、一口ブランデーを含んだ。

からん、と丸く削った氷が音を立ててグラスの中で泳いだ。

要するに。

マリナのボスと、青磁は同じグラフィック業界で知り合い、ボスが画廊のオーナーも兼務していて、やりとりをするうちに、若手画家の買い付けを行っていることを知った。
アルディ家で所有する絵画に、ボスが探している条件に合致したものがあり、同時期にアルディ家がその溢れんばかりの美術品を整理しようとしていたことから、今回、青磁が仲立ちをして、直接買い付けをするという運びになった、というのだ。

何か、いろいろ説明というか言いくるめられている気がしないでもないけれど。
マリナは、そのカクテルの味が気に入り、すでに2 杯目を飲んでいた。

少しずつ体がぽかぽかしてくる。ジンジャーが入っているからね、とシャルルは言っていたが、果たしてそれだけであろうか。

「・・・アルディ家と懇意のマクドゥガル家の者の遺品だからね。
　一応、品を返却した方が良いかどうか、確認した上で、売却することにした。
　でも、そこで青磁がひとつ、条件を出してきたんだ」
「なんて？」
「絵画の鑑定レポートを行うこと。青磁が指名した人物であること」

「なぜ、彼自身が、鑑定を行わないの？
専門家でないなら自分で専門知識がある人を呼んでくれば良いのに。」
「青磁が、虹彩異色症なのは、わかっただろ。」
ええ、そうね、とマリナが頷く。明るい場所で、かつ近くで見ないとわからないが、彼はそのことを気にしている風だった。

「つまり、彼が見ている世界と、オレ達が見ている世界は、ちょっとだけ、色が違って見える。
　元々、美術系を志望していたんだ。

　知識も豊富なんだが、疾患のせいで、色覚異常を起こしているが故に、その道に進むことをあきらめざるを得なかった。」

もし。

自分が、色の区別がわからないもしくはわかりにくい状態であったのならば。
漫画家としての道を、断念せざるを得なくなるのであれば。
それは相当に苦しいであろう。

マリナはちょっと下を向いた。

これまでのやりとりの中で彼にそれを指摘するような、無神経なことを、自分は言わなかっただろうか。
そんなことを考えた。

「で、こういったナイーブな話は誰にでも出来る訳じゃないから。
それならアルディ家で準備した鑑定士ではなく、青磁が納得のいくような方法で、結論を導ける人物が、もし居るのであれば、連れてこいと言ったんだ」
「どうしてそれが私になるのかが、まだわからないのだけれど」
「それは、これを見たから。」

シャルルは、ことんと、胸ポケットから小さい人形を取り出した。

あ。

以前に、彼女が贈った、シャルルを模したマトリョーシカだった。

彼女はカクテルグラスをテーブルに置いて、手の水気を払い、小さなシャルルのマトリョーシカを手に取った。

久しぶり。

自分の作品に再会するのは、何となく照れくさい。

■36

そのマトリョーシカは、4つの入れ子になっていた。

そのうちの一番小さい人形を、彼は持ち歩いていたのだ。大事にしてくれていたようだが、日々持ち歩いているせいで、
ところどころ塗装が剥げ落ちてしまっていた。

「ありがとう、このお礼をずっと、言ってなかった」

シャルルが綺麗な微笑みで、マリナに礼を言った。

彼女は少し照れくさそうに、人形をテーブルの上に置いた。
一番小さいマトは、シャルルの笑顔をデザインしたものだ。
8年を経過して、どんな表情になっているのか、邂逅する前の、想像していたシャルル。

「これを青磁が見て、是非この作者に依頼したいと言ってきた。」

・・・ボスと青磁が知り合いで。青磁とシャルルが知り合いで。
ボスと私が知り合い、ね。
うまくできてるわね。

そう言い返そうと思ったが、結局はこういったことも、すべて含み済みの商談なのだということがわかっただけだった。

それに、この話がたとえ、いろいろな偶然や縁やそれらを装った何かの力であったとしても、
全員が満足できるのであれば、それは問題になることではなかった。

「まぁ、最も、最初に、そこのオーナーのところに、知り合いがいるよという情報を漏らしたのはオレだからね。縁は奇なり、とは言わないけれど」

でも、ボスのことも知っていて、マリナの作品も見ていて。
かつ、青磁が知りたいと思っている誠次・マクドゥガルのことについて、役に立てるのであれば、それは願ってもない話であった。
「彼の目の疾患は後天的なものだけれども、青磁の実家がある
地域は、ああいう疾患は『血の穢れ』と言って忌み嫌う傾向が強くてね。
しかも、マクドゥガル家というのは女系家族で今のところ、一族の直系男子は彼だけなんだよ。」

それで、いろいろなことを持て余しているのだろうか。

「以上。
これは情報だから、これをどう利用するかはマリナ次第だよ」
シャルルはそう言うと話は終わりだ、とまた小さく言って、この会話を終了させた。
「それより、マリナちゃん。青磁の話ばかりしていないで、君の近況を聞かせてくれないか。」

毎日WEB で話しているでしょ、とマリナは横を向いた。

■37

「・・・今日は、そろそろ帰るわね」
マリナがそう言って、空になったカクテルグラスを置いた。

シャルルのブランデーグラスも、小さくなった氷だけになっていた。
シャルルが忙しい人間であることは、承知していた。

この時間を取るために、彼はきっと予定を入念に調整しているのだろう。
ジルが不在であるのなら、なおさら、忙しいはずだった。
明日からのスケジュールも、当面はシャルルが不在の間は調査を進め、彼が帰って来た折に報告を入れるという、すれ違いの日程になるはずだ。

「じゃ、また。会えれば明日。」
マリナが立ち上がった。
「泊まっていかないのか？」

え？まるで思い至らなかったかのように、マリナが目を見開いた。

シャルルはマリナと目を合わせず、ブランデーを新しいグラスに注いだ。
独り言を言っているかのように、軽く、言う。

「君のためのゲストルームを用意するのは簡単だよ。
　明日もここで作業なのだから、わざわざ移動すうことない。
　泊まって行けよ。」
そこまで言うと、シャルルは言葉を句切った。

マリナが困った、というように苦笑いし、吐息を一つはき出したのを聞き漏らさなかったからだ。

「こんなに遅い時間に、そういう準備をさせるということは、準備をする人もいるってことなのよ」
アルディ邸の使用人は24 時間シフト待機の者もいるであろうから、実際にはそんなに困ったオーダーではないのかもしれないが、彼女はそういう待遇を好まなかった。

すでに部屋を用意してあることをシャルルは言わなかった。
彼女がますます困惑するであろうということは避けたかったし、話の運びようによっては、帰ると言い出しかねないからだ。

まったく、予測不能な相手というのは、次の手を考える楽しみを与えてくれる存在だな。
そんなことを思いながら、提案してみることにする。

「それなら」

それなら。

「オレの部屋に泊まればいい。」

■38

この申し出が何を表しているのか、マリナは察して顔を赤らめた。
アルコールが低いカクテルとはいえ、2 杯も飲んでしまった。
体が火照って、少しぼおっとしている。

アルコールで顔が赤くなった、と思ってくれれば良いのだけれども。

「どう？」
「素晴らしいご提案だけど」
マリナは困って口ごもった。

この顔の火照りを、彼に悟られたくなかった。
シャルルに背中を向けて、小さく答える。

「やっぱり、遠慮しておくわ」
「・・・そう。」
少し間を取って、彼はそれだけ言った。

ずしん、と何かが重く胸を叩いた。
突き刺すような痛みではない。
重く、立ち直れないほどの一撃。

傷つけた。

そう思った時には、もう、遅かった。
彼は、拒絶されたと思ったのだ。
考えなしの自分の言葉が、行動が、彼を傷つけた。
思い上がりを赦してもらえるのであれば、彼がこのように提案することは、

ねだっているのだ。
願っているのだ。
そうしたい、そうしてくれ、と。

彼が心を許せる相手というのはとても少ない。

仕事上のパートナー、アルディ邸の使用人達、彼が活躍する輝かしい分野の同じ研究者達。
どんなに彼を取り巻く人々が多くても、彼は決してすべてを信じない。

それは、わかった。

昔からそうだったし、きっと今も変わらないのであろう。

彼の本質を理解し、彼を受け入れたほんの数人だけが、彼の真の言葉を聞くことが出来る。

自分は、その声を、聞いたことがあったはずなのに。

■39

その引き際があっさりしているので、マリナが拍子抜けした顔をしていた。
イヤだという相手を無理に引き留める方便はいくらでもあるけれど。
彼女はパリにいる。
もう、手放すつもりはない。

マリナに駆け引きは通用しない。

素直に言った申し出を断られて、未練がましく引き留める方が、彼女を意固地にさせるだけであろうという結論を導いた。
青磁のことが気になっているというのも理由の一つだ。

あの二人は、惹かれ合っている。

男女としてなのか、同じものを志す者同士としてなのかは、判断に迷う。
でも、青磁は間違いなく、マリナに興味を持っている。

彼の口の悪さにマリナは閉口気味ではあるが、青磁の状態や、彼女の助けが必要であるという状況には、マリナは理解を示した。
彼女がシャルルを好きだと言ったことは嘘ではないだろう。

断言できる。

でも、青磁の魅力はなんと言っても、シャルル・ドゥ・アルディと両極端にあることだ。
マリナ・イケダは、人の心の垣根を飛び越える。
でも、自分の垣根は荒らせないほどに高い。

青磁は、その「踏み込んではいけない距離」を計ることができない。
距離があることそのものがわからないのだ。
だからこそ、踏み込んでいく。
その危うさが好きだし、気に入っている。
マリナと距離を縮めるのも、時間の問題だ。
踏み込むなよ、青磁。

心の中で、釘を刺した。
あの夜。

あれは、お互いの一時の情欲がもたらしたわけではない。
少なくとも、シャルル・ドゥ・アルディにとっては。

「扉を出て、少し廊下を進むと、誰かがいるから。車を手配してもらってくれ。
　オレは見送らない。・・・少し疲れた。」

そう言って、彼女に背を向けたまま、ブランデーグラスに口を付け、一気に喉元に流し込んだ。

胃が、かっと熱くなる。
マリナが、何か言いかけて、口をつぐんだ。

背中を向けていてもわかる。

自分の態度が硬化したことを察したらしい。
情けない。シャルル・ドゥ・アルディともあろう者が。

この、一人の女性のために、翻弄されて、期待して失望して、そしてまた切望する。
もう離さないと決めたから。

・・・今日は良いよ。

■40

彼女が動く気配がする。

彼は目を瞑った。足音さえ、彼の記憶に完璧な音声として留めておきたかった。
さぁ、帰るんだ。自分を制御することが出来なくなる前に。

繻子織のクッションから体を起こし、もう一杯、ブランデーを飲み干そうとして、シャルルが手を伸ばしたとき。

「飲み過ぎだよ」
ふわり、と香りがした。

彼女の香りはどの香水よりも甘美で、懐かしく、彼の鼻腔を心地好く刺激した。
彼女の足音は、扉の外ではなく中へ向かっていたことに気がついていたはずなのに。
後ろから、腕が伸びて、シャルルの動きを止めた。

シャルルは、息をのんだ。
驚いたのではない。

彼女から彼に触れたという事実が、彼の神経に刺激を与えたのだ。

マリナが、ソファに座ったままのシャルルの首に、腕を緩くからめた。

細かく腕が震えている。

彼の後頭部にマリナの顔がある格好で、彼女に後ろから絡め取られた。

マリナ。
シャルルは、目を瞑った。

絶望の後の悦喜というものはこんなにも、捨てがたいものなだろうか。
回された腕に、そっと、自分の手を添えた。

「ごめんね。・・・傷つけたわ」
マリナの、声が耳元に回る。
その言葉の後、マリナはシャルルの右頬に唇を寄せた。
「ごめんね」
もう一度、そう囁く。
でも、彼にはそれは囁きではなかった。

■42

彼の愛のシャワーとでも言うべきキスの嵐を受け止めるだけで精一杯だった。
彼の背中を見たときに。体が、自然に動いていた。

こんな熱情は、かつて感じたことがなかった。

穏やかな戀しか、知らなかったからかもしれない。

身も焦げるような思いや、どうにもならない切ない気持ちに、この身を置くなんて思っても見なかった。

穏やかな、穏やかな人生が送れると思っていた。

そう、太陽の日溜まりのような、彼を愛している間は。
でも自分は夏の灼熱の太陽を選んでしまった。
場合のよっては、マリナ自身さえ焦がし尽くしてしまうような、激しい物思いを受け入れてしまった。

大聖堂の天使のような容姿を持ちながら、彼の手を取った瞬間、煉獄の炎を味わう。
それを覚悟していたのに。

何度か繰り返すうちに、その炎の強さに、酔いしれてしまう自分が怖かった。

シャルル。

今なら、わかる。
私は、恋に堕ちている。
あなたに逢うたびに。

恋に堕ちるとは、「底」に堕ちることでなかった。

そのつらさや激しさや、静寂や、幸福を味わうごとに、さらに深みに堕ちることなんだ。

底深い場所に、彼女は堕ちた。

■43

「言うとおりにして。泊まって。一緒に居て欲しい」
彼が腕の力を緩めて、そう言った。

マリナが小さく笑った。あでやかな花ではない、小さな白い花を連想させる。

「シャルル、私にはスイッチの切り替えが出来ない」
マリナはシャルルの背中に腕を回して、そう言った。
「プライベートとビジネスは、一緒に出来ない」

そう言うと、彼女は御願い、というように、微笑んで少し顔を傾けた。
久方ぶりに目の前にいる、本物のマリナ・イケダ。

やはり、君はずるい女だよ。
シャルルはくすくすと笑った。
このまま、彼の激情に流されてしまえば良かったものを。

でも、もう、そういう流されることもできない、いろんなしがらみが彼と彼女を取り囲んでいることを思い知った。

このまま、マリナとシャルルが深い仲であることを知ったら、損をする者は多いが、得をする者はいない。

マリナがそこを計算したかどうかはわからなかったが。
自分にも分が悪い。

損得計算ではなく、ひいてはアルディ家の親族に彼女を認めさせるためにも、このプロジェクトで、彼女の名前を残すことは必須であった。
彼女には、これまでとは違う意味で、創る才能がある。

「承知した」
腕の力を緩めて、彼は一息つく。
「ああ、でも、忠告しておく。これ以上、オレを焦らさないでくれ。
はやく、この仕事を解決して、そのご褒美に、君という素晴らしい贈り物がアルディ家にもたらされんことを。」

大げさね、と彼女が笑った。

「それはともかく、このすべてが終わったら話をしたいわね。・・・・反対かしら？」
こんなにも、あでやかで魅力的な誘いをファム・ファタルが提案してきたのに、何を断る理由があるのだろうか。

「ウィ。君に従うよ」
恋の奴隷というものはこういう状態を言うのかも知れない。

■44

強い力で抱き留められ、彼女は、再び、息も出来ないような激しい抱擁に酔いしれることになる。
「シャルル！私にはそのスイッチがないって、言ったでしょ？」
マリナが叫ぶ。
シャルルは聞かない。
唇を寄せながら、返事を返す。

「君を心ゆくまで確認したいということと、それは、関係があるかな？」
「あああ、あるわよ！」
マリナがもう一度、腕の中で身じろぎした。

彼の腕の戒めを解き、彼女は立ち上がった。

「宿泊させてくれるという申し出は、ものすごく魅力的ではあるけれど」
そう言って、息を整える。
彼に散らされた唇をぐい、と袖でぬぐった動作が、こどものようだった。
「帰ります！」
いいよ、とシャルルは笑う。

彼女の仕草が幼かったこともあるが、お互い、もう、こどもでもない年齢であってなお、このようなちいさな女学生のような彼女の反応が愉しかった。

そういう余裕は、彼の体の燻りからは、まったくないことはわかっていたけれども。
シャルルはアルディ家の当主として、可能な限り彼女をもてなさなければならなかった。
こういう、理性が先行することで、青磁に足下をすくわれるかも知れないな、と思ったけれど。
彼は、その彼の生き方しかできないことを十分に理解していた。

「すべて終わったときに。」
シャルルはマリナの唇に、自分の指を押し当てて、そう言った。
「明日からは、オレの助言も知識も役に立たない。青磁・マクドゥガルは、御しやすい相手ではないことを十分に注意してくれ。
　それから仕事のことも、簡単な仕事ではないであろうから。」

シャルル・ドゥ・アルディは、そう、忠告した。

■45

「もっと寝不足の顔をしているのかと思った」

青磁がそう言ったものだから、マリナは下唇を突きだして、極力素っ気なく言った。

「何を誤解しているのかわからないけれど、今日からちゃんと仕事として応対するから、
そっちもちゃんとわきまえてよね」

待ち合わせの時間ぴったりに青磁・マクドゥガルが訪れた。
昨日までの軽装よりさらにラフな出で立ちだった。

プリントされたT シャツに、グレーのデニム。
革製のスニーカー。
左腕には、赤と紺の靴に合わせた紐色のブレスをしている。
耳に飾られているピアスはそのままで、濟然と輝いていた。

彼の長めの前髪が顔に触れてはいるが、これが絶妙な長さであった。
瞳の強さは、朝であれ変わらなかった。

大きな二重の瞳からは、強い眼光が発せられていて、話をするときには相手の目を見て離すべきだ、というマリナの信条を大きく揺るがしかねないほどの、魅惑的な視線だった。

「わきまえる? 何を？」

青磁が意地悪く微笑んだものだから、マリナは申し立てをした。

「その口の悪さは何とかして。」
「・・・悪かった」

ぺこりと青磁が頭を下げたものだから、マリナは拍子抜けして、口をぽかんと開けた。
「ごめんなさい！」
そういって、絶句するマリナの顔を見ると、下から見上げた格好で、ぺろりと舌を出した。

「これで赦してもらえる？」

マリナが吹き出した。
赦すも何も。

彼のその幼い所作が、とにかく呆れてしまうくらい、拙いのだ。

憎めない人だ。
そう思った。

最初に朝の挨拶を交わしたときから、この話をしよう、と彼が思い付けていたことが、手に取るようにわかった。

後になってわかったことではあるが、シャルルに随分お灸を据えられたらしい。

ビジネスとして成功したいのであれば、マリナ・イケダの仕事を妨げてはならない。
そう言い聞かされたようだった。

それが不本意なものだったのか、彼の謝りたいという気持ちを後押しするものだったのかは、マリナにはわからなかったけれど。

少なくとも。

この、片目だけ色素の少し薄い、希有な少年は、今日から一緒に仕事をすることを承諾したらしい。

それならば、断る理由もない。
マリナが、このまま彼と一緒に、ずいぶん長い時間を過ごすであろうことを、決心した。

■46

「まずは、絵を見ないとね」
セイジはそう言った。

それから、彼は、マリナに向かって、深々と頭を下げた。
おもむろというか、静かな日本の「礼」。

「聞いてると思うけれど、オレの目は、病気で色の濃淡がよくわからない。

だから、信用できる人に、絵画の判定をして欲しいと思う。
・・・マリナ、オマエにオレの光の変わりをして欲しい」
そう言うと、また、深くお辞儀をした。

「セイジ、これはビジネスよ」
マリナは困ったようにそう言った。

そういう割り切った言い方でないと、彼は壊れてしまう。
「信用してくれて、嬉しいと思う。でも、すべては終わってからよ。
　期待する答えを出せないかも知れないから、そういう挨拶は、最後にしましょう」
そう言って、彼女は手を差し出した。

「ビジネスの握手よ」
そう言って、差し出したマリナの右手を、青磁・マクドゥガルはじっと見つめていたが、ややあって、その手を、軽く握り返した。

やさしい、あたたかさがあった。

その眼光強い瞳を、マリナに向けたけれど、彼女は眼を反らさずに、微笑んだ。
この、小さなこどものような青磁の願いを聞き入れてあげたい。

シャルルの望む結果を出したい。
燦爛と輝く青磁の瞳が眩しかった。

彼の光になれればこの上ない喜ばしいことだ。
彼女はそう思った。

■47

アルディ家の所有する美術品については別館で保存している。

直近の美術品については、本邸の地下倉庫で保存し、修復し、そのランクを定めて改めて館に送る。
誠次・マクドゥガルの作品は、そのすべてがアルディ家の地下に保存されていた。

作品は全部で4 点。

日本で確認されている自画像を合わせる
と、5 点の作品が残っているだけだった。

何しろ、活動期間がないからね。
青磁はそう言った。

10 点とも100 点とも1000 点とも言われる、誠次・マクドゥガルの作品。

そのうち、初期の作品がここに保存されている。

マリナも青磁同様に、高揚した気持ちになる。
誰も見たことがない、その作品に触れることが出来る。
これは。特殊な業界に携わった人間でないと味わうことのできない気分なのかも知れない。

「いいのかい？」
青磁が、そう忠告した。

「作品を見ると、普通でない感覚に襲われるという。
だから、マクドゥガル家の人間はこの絵に近寄ろうとしない。
何十年も、封印していた絵だからね。・・・心の準備はできているの？」
準備もなにも。
マリナが少し笑った。

「見ないことには、始まらないでしょう」

それはどうだろう。
青磁が薄く笑う。
こういう時の笑みは、彼女よりもずっと年上のように感じる。

青磁の安らかな微笑みを、いつかは見届けたい。
こんな年端もいかない少年とも青年とも言い難い人物の、寂しい笑いだけを目に焼き付けておく訳にはいかなかった。

青磁。
あなたの、光になると言ったでしょう。

■48

ひんやりとした地下倉庫に案内された。
入念にセキュリティチェックを受けて、その室に入る。
薄暗い、マリナのアパートくらいの広さだった。

そこには、完全に湿度と温度と明度を管理された部屋が、さらにひとつ、用意されいて、ガラス越しにしかその絵を見ることができなかった。

誠次・マクドゥガルの絵が、かけられていた。
絵画は全部で4 点あった。

保存状態を劣化させないために、直接に照明はあたらないように配慮されていた。
それがまた、彼の作品に幻想的なイメージを付随させていた。

青磁は少し目を細めていた。
薄暗い中の絵画は、彼には見えにくいのだろう。
マリナは、口を開いて、説明をすることにした。

「青磁。良く聞いて。左から、説明するわね」

彼の目である以上は、彼の不便にならないように、配意しなければならない。
できるだけ客観的に淡々と伝えることにする。

「全部で4 点在る。これはわかるよね。左から、『男』『女』
『花』『麒麟』と題名がついている」

その絵画は、各々が違う題材で描かれていた。

■49

「このいずれかが連作なのね」
そう、と青磁が言った。

「残っているのは、オレが持ち込んだ誠次・マクドゥガルの日記だけ。あとは写真が数枚。」
「マクドゥガル家の当主の割りには、随分と、文献が少ないのね」
「それはおいおい話すことにするけれど」

彼はそう言って少し笑った。

「含みのある言い方ね」そう言ってみたけれど、今は彼に従うしかない。
場所を変えようか、と言って、隣の部屋を使用することにする。

そこは至って殺風景な部屋だった。
元々が美術品を荷解きする場所として使われていたようで、急遽運び込まれた大きな机の上には、黄色く変色したノートがうずたかく積まれていた。

後は、手元を照らすデスクライトに、筆記用具。
それだけしかなく、隣の部屋とガラス張りの壁で仕切られていて、目を上げれば立てかけられた絵画を見ながら、検分することができるようになっていた。
机の脇には小さなサイドテーブルがあり、そこには水やお茶、軽食が運び込まれていて、「食べたら手を拭うこと。
資料が傷む」とシャルルの走り書きがあってマリナを破顔させた。

できるだけ労力を使わないように、というシャルルの配慮がありがたかった。
「さて、始めましょうか」
そうして、膨大な資料を見てため息をつく。
「これ・・・全部日記なの？」
「随分、筆まめだったみたいだよな」
青磁は表紙を見ながらそう言った。

「一日一頁じゃなくって、数頁にもわたって書き込んでいる。
そうでない日は簡単なメモや、デッサンの構図や、そのほかもろもろも記録というわけだ。
随分と几帳面だったようだね」

はぁ、とため息をついた。
一体、何年分の記録なのだろう。
彼が死ぬまでの時間、このノートに向かい続けた時間は膨大な時間であったはずだ。

それを今、時間を経て、彼女たちが彼の秘密を明かそうとしている。

海外にあって日本語で日記を書くのだから、これは秘するものとして秘匿されるべきものなのでないのだろうか。

そんなことを思いつつも、マリナは最初の一冊目を手に取った。

これから、長い長い、誠次・マクドゥガルの夢想の世界に誘われることになるのだが。

▼誠次・マクドゥガルの日記は、「秘する恋　秘するが花M-side」をご覧ください。

■50　迷夢01

どこに書こうか迷って結局ここに掲載することにしました。
マリナの困惑のつぶやきが入ります。
迷夢：どうしていいのかわからず困惑すること

「秘する恋　秘するが花S-side」　内の下記のお話をマリナサイドで書きます。

マリナがシャルルにキス出来ないことを吐露する場面
■深浅　編

シャルルに話をしようと言われて薔薇園から泣いて飛び出してきた場面
■紫電　編

<hr size="1" />

「私が、約束したの。彼が言ったわけではないの。
　もう一度恋をして、本当にその人が好きだと思えるとき、その人にキスをしてごらん。
　そうしたら、それはオレ以上に好きな人ができたっていうことだから、オレを忘れても良いよって。
　オレも君を忘れるからって。・・・それなら、私は、一生、誰にもキスできないわね、と言ったの。」
青磁・マクドゥガルにこのことを尋ねられるとは、夢にも思っていなかったので油断していた、というのも理由の一つだった。
私が秘めたる約束を口にしたのは、青磁だからということも私の口を軽くさせる理由の一つだった。

青磁は、あの人に似ている。

性格も物言いも、容姿も似ても似つかないけれど。
そう、魂の何かが似ている。
まっすぐにこちらを見つめ、太陽のように明るい。
辛いことがあったはずなのに、それを語らない強さがあった。

その強さはシャルル・ドゥ・アルディも同じものを持っていたけれど、距離を測らない青磁のまっすぐさが、眩しかった。

かつての私たち。
8 年前の私たちは、こうだったよね、シャルル。

ぶつかり合って、けんかして笑って泣いて怒って喜びを分かち合った。

そのときのシャルルが好きだったし、だからといって、今の彼を愛せないかというとそれはまったく形の違うものであることは十分にわかっていた。

シャルルはその孤独さも静寂さも・・激しさも変わらずに持ち合わせていた。
その大人びすぎた精神に体がようやく追いついて、そうして8年という歳月を元気で生きていてくれたことに、私は感動を覚えずには居られなかった。
彼の倦怠と虚無がにじみ出た生き方が改まったころ、私たちは別れを迎えた。
いつものように、彼は胸が痛くなるほど綺麗な笑みを浮かべて、姿を消した。

一生分の夢を見たという彼。

今もあの言葉を忘れることができない。時々、夢を見て、涙が出る。
一人で泣くなと彼は言ったけれど、彼のために一人で泣くことはせめて赦して欲しいと思った。
その後の当主として復権するまでの苦労は並大抵のことではなかったはずだ。
それなのに、あの邂逅の後。

シャルルはそんなことはおくびにも出さずに、ただひたすら穏やかな時間と、激しい感情を私に与え続けた。
8 年の月日よりも遙かに短い時間で私とシャルルの距離は近くなった。

私の気のせいかもしれないが。

「マリナ。薔薇園へ行こう。今夜は薔薇が綺麗に咲いているはずだ」
久しぶりに一緒に過ごす夕食の後、彼はそう言った。

私の中のはしゃいでいる気持ちを見透かされたようで、少し恥ずかしかった。
シャルルが忙しいのは知っている。
きっと今も、分刻みのスケジュールをこなし、そのスケジュールをこなしている最中でさえ、その頭の中は様々な事柄を瞬時に判断し同時に進行させているに違いない。

彼が設けてくれた貴重な時間。
「話をしよう」と言われて、胸の内が高鳴った。
期待と軫憂が混じった複雑な渦が私を包んだ。

青磁が遠慮して部屋を出て行った。
先ほどあんな話をしたばかりだったので、少しばかり気まずかったからかもしれない。
シャルルは私と青磁ではなく、私に話をしようと言って、アル
ディ邸の薔薇園に案内してくれた。立派な設備の整った温室があり、品種改良実験も兼ねたものだ、と彼は説明した。

久方ぶりに会う。

青灰色の瞳に白金の長髪がよく似合う、端整な顔立ちのシャルルを見て、ちょっと足がすくんだ。

表現が悪いとは思うが、それが正しかった。
シャルルが怖いというより、彼がこれから立ち入ろうとしている私との距離の近さが怖かった。

■51　迷夢02

遠慮がない人ね、そう言われることが多かったし、実際に、傍若無人であった10代を振り返ると、自分のしでかした数々の言動について後悔はしないが反省をする日々だ。

でも、誰も私の中には入ってこられなかった。
太陽のような彼でさえも。

開けっぴろげだと言われることもあったが、私の中の信念とか信条とか気持ちの行方などは、誰も乱せないし、それは誰にも侵してはならない聖域だと思っている。

私に聖域がないので、余計にそう思うのだろうか。

誰にもここまで入ってはいけないという距離がある。

それは誠次・マクドゥガルが日記に書いてあったように、どの時代のどの人にも当てはまることだと思う。

「今、薔薇の開花時期が集中していてね」
彼はそう切り出した。
薔薇園の温室は、見ればたくさんの鉢が並び、ひとつひとつが他の花との受粉防止のための透明なカバーが取り付けられていた。

彼は少し笑いながら、つぼみを膨らませた花を指して言った。
私は今日にも咲きそうなその花をのぞき込み、声を上げた。
素晴らしい薔薇だった。

これがシャルルの作り出す世界なのかと思うと、ため息が出た。
花の色も形状もどれをとっても美しく気品に溢れ、それでいて優しい色あいだった。
薔薇の刺は柔らかく、葉は完璧な左右対称だ。

素晴らしいわね。
ため息をついて、感嘆の声を放つ。

これを商品化すれば、世界中で彼の創った薔薇が咲き乱れることになるだろう。
いくつか、名前をつけたの？
その問いに。シャルルが薄く笑った。

全部、君の名前がついている。

え？と顔を上げると、シャルルが笑っていた。
そうして、言った。

「全部がファム・ファタルという名前だ」
私は声を詰まらせた。

シャルルの青灰色の、冷たい湖畔のような瞳を見ることができずに、横を向く。
「髪。切ったの？」

シャルルが唐突に話題を変えたので、私はえ？と聞き返して、そして自分の前髪をつまんだ。

「ああ、青磁に切ってもらったの。
前髪が伸びて、凄く鬱陶しかったから。すっきりしたわ」
前髪を揃えて後ろも少し短く切ってもらった。

随分、髪の毛の収まりが良くなったはずなのだが。

「似合うよ、凄く。・・・昔の君くらいの長さだね」
そう言うと、彼は一歩、私との距離を詰めた。

私はこの距離が怖くて、話を続ける。
「青磁って、器用ねぇ。当分美容院に行かなくて済むわ。」

そう言ったが、彼の甘やかな視線は私から外されることがなかった。

こういう時が、一番、困る。

どうしていいのかまるでわからない。
自分が何をしたいのか、まるでわからない。
わからないって、この年齢で言うことではないのだけれど。

体が強張り、目も耳も神経も嗅覚もそのすべての五感が、彼に向かって意識を集中する。
苦しい。
彼が、その細い長い指で、私の髪を撫でる。
目を瞑った。直視できないくらい、近い距離にいる。

シャルル。私は、こういうのに慣れていない。
そう言ったでしょう？

そう言うと、彼は、わかったと言って、ふわり、と距離をまた置いた。

心臓がどきどきと早鐘を鳴らし、通常の心拍数よりはるかに拍数があがっていることを知らしめる。

そして。
ようやく目を開くと、シャルルは少し笑っていた。

自嘲的な笑い。
彼と出会った頃、彼はこんな笑みをよく浮かべていた。

シャルル。
あなたは、またあのときに戻ってしまっているの？

自分のことより、他のことを優先させた毎日なの？
私の贈ったマトリョーシカは、メッセージが届かなかったの？

そう思っていたとき。
彼は意外な言葉を口にした。
腕を組み、静かにこちらを見るシャルルはため息が出るほど美しかったけれど、
どこか悲しくて、どこか諦観していた。

彼はおもむろに言った。
「アイツがパリにいる」

■52　迷夢03

アイツがパリにいる。
この空の下に。

シャルルはそう言った。
私は、息をのむしか方法がなく、ただただ、その告げられた一言に自分を律することができず、
立っている足元がぐらぐらと揺れ動くのを感じた。
シャルルはそんな私にたたみ掛けるように、続けて言った。

「パリの大学院に留学してるんだ。今、元気に通ってるそうだ。」

わざと、シャルルは伝聞形式に言った。
シャルルのことだから、自分で確かめたはずだ。
シャルルが外出気味だったのは、彼に会っていたからなのだろうか。

「会う気はない」
私は即座にそう言った。

シャルル、私を試すのは、止めて欲しい。そう思った。

「マリナ。アイツと最後に何があったのかは聞かない」

そう言うと、シャルルは私を抱き寄せた。壊れ物を扱うかのように、そっと、静かに。

「今、ここに居る君は、過去の経験も含めて、今の君なんだ。
　だから、オレは君の選択を否定しない」
シャルルはそう言った。

「君を試していない」
私の心を読み取ったかのように、彼は言った。

今、目の前に、愛おしいという人がいて、その人の口から、かつて愛おしいと思った人の話を聞いて、平然としていられるだろうか。少なくとも、私は冷静になれなかった。

まだ、このときは。

穏やかな愛が懐かしかった。
でも、懐かしいのと戻りたいのは違う。

私はこの灼熱の炎のような、嵐のような激しさを内面に秘める男性を望んだ。

彼のこの激しさは、一生続くだろう。
未来永劫。

でも、その炎に身を焼くことを選んだのは他でもない私自身だ。
選んだという問題ではない。選ばれたとも少し違う。

望んだから。
欲したから。

今の私は、目の前の男性に焦がれていて。
その人の口から、ありえない言葉を聞いて衝撃を受けている。

ただ、それだけだった。

試してない、確認したいだけだ。
シャルル・ドゥ・アルディはそう言った。

夜の、静かな薔薇園で。
彼の言葉は震えていた。
いつも正解しか言わない彼が、確認したいと言う。

私を胸に抱きながら、そう言う。
私は。

シャルル、私は、数日ぶりに会うシャルルにどきどきしたり、はしゃいだりしている。

あなたの腕。
あなたの声。
あなたのその視線。

ひとつひとつに、これまでにない高まりを感じ、そしてまた会いたいと願う。
シャルルにとってはつまらないであろう、そんなささいな感情の起伏が、私を左右している。

そうして、今、あの人が近くにいるという事に胸を高鳴らせているのではなく、その事実を告げなければならないと思い悩んでいるあなたを心配している。

この気持ちを、どうやって表現したら良いのだろう。
この物思いをどうやって散らしたら良いのだろう。

「逢う気持ちはないわ」
もう一度、強く、言った。

■53　迷夢04

たとえ、このパリの空の下でばったり再会することがあっても、それは、あの人がもたらしたシャルルと私の邂逅とはまったく違う偶然の再会でしかありえない。
今、目の前にある恋にのめり込んで冷たく思っているわけではない。
それは言い切れる。

あの人が困っていれば助けになりたいし、思わぬところで会うようなことがあれば、元気？と笑顔で挨拶したいと思う。

でもね、シャルル。

私はあなたへのこの気持ちに堕ちてしまったんだよ。

恋は、堕ちたらそれが最後じゃないとあなたが教えてくれた。

更に深みに堕ちることもあって、それがやがて恋から愛へ転じるのだと、シャルルが教えてくれた。

まだ、あなたに愛していると伝えていないけれど。
この気持ちは、8 年前のそれと違う。

でも、どうにもならない悶絶が私を襲うその激しさを、どういう方法なら、シャルルに伝えられるのだろう。

伝えたいのは、あの人でない。シャルル・ドゥ・アルディなのだというその言葉さえ、私は上手に伝えられない。

上手か下手かは関係ないけれど、それでも、私はシャルルの綺麗な、涙が出そうになるくらい綺麗な笑顔が好きだ。

だから、今の気持ちを捨ててまで、過去の思い出に浸るつもりはないんだよ。

シャルルが聞きたいと思っているかも知れない、あの人との別れの理由は、まだ言うべき時期ではないと思っていたし、シャルルもそう思っていたのだと思う。
だから、今、あの人がこのパリにいるという事実だけを告げて、逢いに行けとはシャルルの口から勧めなかったんだと、そう信じたい。

私は自分の言葉の限りを尽くそうと思ったけれど、シャルルにその言葉を発しようとすればするほど、うまく言葉に出来ないことにもどかしさを感じていた。
シャルルは続けて言った。

「君が、あいつと会うことで、ケリがつけられるのであれば、オレはとめはしない。
　この話を君とするのは、最初で最後だ。」
私は少し黙る。

ああ、どうしたら、彼にこの言葉を伝えられるのだろうか。
もどかしい。
そうして、シャルルは私にそっと、触れる。
まるで、壊れやすい砂の城に触れるかのように。
シャルル。私はそんなに壊れやすくない。

「マリナ。オレを見て。」

私は彼を見た。
青灰色の瞳が、近くにあって、どきりとする。

そうして、彼はそっと、頬を寄せて、戸惑う子供のように、私の唇に唇を寄せた。

何度目かの、けれどもぎこちないキスだった。あの夜のような、啄むキス。

私は目を閉じる。
唇を離して、彼は言った。
いえ、囁いた。

苦しそうに眉根を寄せて。

「これまで、君の気持ちを聞いたこともあったけれど。
仕事が終わったら、きちんと話そう。
　でも、オレの気持ちは決まってるから。・・マリナ。」

彼が声に出さずに言ったその言葉を、私は忘れることはないだろう。

それは私がシャルルにずっとずっと言いたかった言葉だった。

■54　迷夢05

言葉を覚えたての子供が上手に言葉を伝えられずに泣く様を、何度かなだめたことがある。

私の自宅に入り浸っていた大家の息子は、かつて、そのもどかしさのために、何度も泣いた。
今、私はその子供のもどかしさを体験している。

上手に伝えなくても良いんだよ。
そのときの私はそう言ったのに。

今、自分が相手に自分の気持ちを正確に伝えられないことが歯痒い。

言葉というものは難しい。

その言葉の組み合わせ、その言葉の間合いの取り方、相手への言うタイミング。
そのすべてが絶妙でないと、本当に言いたいことは伝わらない。

拙くても良いと思う。
言葉少なくても彼には十分伝わると思う。

でも、私は彼にこの気持ちを伝えたかった。
正確に。

シャルルが時期を待っていることはわかっていた。
私も時期が来たら、話をするつもりだ。

でも、それは今じゃない。

その話をする前に、自分の気持ちを言葉にすることは彼に正確に届くのだろうか。
もどかしい。その一言に尽きる。
シャルルが愛しているのは、8 年前の私なのだろうか。
聞きたい言葉を飲み込む。発したい言葉もあるのに。
仕事のことを考え、様々な制約に縛られた今の私。

身一つでフランスに気楽にやってくる自由だった私が好きなのだろうか。
お互いに、言葉で確認しないと、いけないのだろうか。
いろいろなことを考えると、言葉が頭の中で渦になり、混じり合い旋回する。
そして本当に言いたかったことを忘れてしまう。
このもどかしさを彼は受け止めてくれるだろうか。

「もう8 年待った。少しぐらい待つのは想定範囲だ」
彼はそういって小さく笑った。

私は言葉を飲み込む。彼が始めたいと思うこれからは。
続けたいのは、8 年前の続きからなの？
小菅で手を離されたときのあのときに痛みを、私は忘れない。
でも、痛かったから今の私が居る。
あのときに、私は大人になってしまった。
少女から大人へ、否応なく変化した。

それはシャルルも同じだったはずだ。あのとき、私たちの輝きは終わった。
終わったことが悲しいのではなく、これからやってくる次の輝きに目を向けられなかった。
暫くの間は。

それでも、私は生きている。

シャルルと別れてから、出会ったり別れたりを繰り返す友人を含めた、たくさんの人達と関わりになりながら、私は生きていた。

それが今の私なのだ。

「泣くな」

目の際に浮かんだそれを見て、シャルルは困ったように言った。
私は目を見開いた。

こうすると涙が乾燥して蒸発してなかったことになるのかもしれない、というおまじないめいた行動だったけれど。

「泣いてないよ」
私はそう言った。
「その涙腺から出ている水分と成分は、俗に涙と言う」シャルルがそうまじめに言ったので、私はちょっとだけ笑った。

そうして、シャルルも、気が強い女だな、と一言漏らすと、ふと微笑んだ。

「泣くなら、一緒に泣こう。ひとりで泣くな」

私は唇を噛んだ。
でなければ豪快に泣いてしまいそうだったから。

また、言葉を伝えられなかった。
「帰るわ」
答えを返さずに、私はそう言うと「わかった」とシャルルは言っただけだった。
静かに、その青灰色の瞳でこちらを見ていた。そうして薔薇園に立つ彼が本当に薔薇の神様に見えた。

こんなに綺麗な人を見たことがない。
土に還らず薔薇に還るというシャルル・ドゥ・アルディというその人を、私は失いたくないと思った。

あの人には会わないから。

温室を出るときに、もう一度言った。
シャルルは三度もいらない言葉だよ、と言った。
私はそのままそこを逃げるように離れた。
一歩一歩、足を前に出す都度、涙が溢れた。
一緒に泣こうと言ってくれた人を置いて。

難しい。

恋に恋している頃はまだ良かった。この切ない窮屈な気持ちでさえ甘美だった。

でも、今は苦しい。
すごく、苦しい。

今の私にはこれが精一杯だった。

■55

その言葉を聞いたとき、一瞬息が止まり、そして次に、最高級のダージリンティーが鼻から抜けそうになった。
口と鼻と目は繋がっているんだと思う。むせて、涙が出る。

「ああ、本当に子供みたいだなぁ」
青磁・マクドゥガルがゲラゲラ笑いながらポケットからハンカチを取り出して差し出した。

結構よ、とマリナは言って、自分の膝上にあったナプキンで口と鼻を押さえる。

涙までも出てくる。

そうして、ひとしきり咳き込むと、その原因になった彼を睨み付けた。

青磁・マクドゥガルはその疾病のために、片目が薄い。

でも近くでないとわからない。

彼の薄い世界に、シャルルや自分やその他取り巻くすべてのものがどう映っているのか、
尋ねてみる勇気はなかった。

絶妙な長さの前髪はその忌まわしき瞳を隠す砦であり、そのつらさや苦しみを覆ってしまいがちである。
彼の弱音というか、つらさは耳にしたことがない。この若さで老成したその意志の強さは、シャルルに通じるものがあった。

・・彼はその反面、陽気で激昂しやすく喜怒哀楽が激しい。

その現れが、これだ。
「青磁が変なことを言うからよ」
「何が？結婚しようって言ったこと？」
心外だな、と青磁は目を細めておかしそうに言った。
「・・・青磁、何か、変なものを食べたの？それとも具合が悪いの？」
途中でティーを片付けていた執事が、失礼な！と言った。
アルディ家でそんなものはお出ししませんよ！

確かにそうだ。
給仕のお仕着せを着た者達が、笑いを堪えて退室していく。

・・・一日のうち、睡眠時間より青磁と過ごしている時間が長くなっていた。

でも、未だに、落ち着かない気分にさせられる、青磁の瞳。

長めの前髪から除くその眼光鋭い視線に、未だに長く見つめていられない。

ああ、本当に相性が悪い。
そう思わずにはいられない。
「どうかしちゃったとしか思えない」
彼と彼女は、最後の仕事に取りかかっていた。

誠次の日記を読み終えて、メモを起こし、そして絵画を眺め、かなりの時間を費やした。

5 点のうち3 点を選ぶ。そのうち1 点は亡き妻に捧げられた自画像であるから、これは除かれる。

4 点のうち3 点を選択すれば良かったのだが。
難しい。

「麒麟」「花」「女」「男」どれが正しいのだろうか。
その組み合わせを間違えれば、アルディ家は売却を拒むはずだ。
たとえ、マクドゥガル家の次なる当主が良いと言っても。

どれもこれもが愛に溢れたその絵画を選ぶ事なんてできなかった。
それが正直な気持ちだ。

でも。
あえて、選ぶ。
どれだろう。

テーマを探らなければいけない。

議論を交わしていたときに、ふと、ああ、そうだ、と思いついたように青磁が言った。

まるで、今日は良い天気だね、とでも言うように。
本当にさらっと。

「結婚してくれ」
この言葉に、マリナがむせたのである。

■56

くらくらしてきた。眩暈がする。
「・・・寝ぼけているの？」
「夢ならもうちょっとロマンチックな夢を見るよ。少なくとも。
　プロポーズの言葉にむせる女は夢に見ない。」

青磁が少し笑って、目の前に摘まれたボンボンに手を出して、ひとくち、つまんだ。

「マリナも食う？ほら、オレが食べさせてやるよ。口を開けて」
「・・・青磁。寝ぼけるなら、暗くなってからにして。」

「今はそういった話をしているんじゃないと思うけど。」

だからさ。
長椅子に長い脚を投げ出して、彼は行儀の悪い姿勢で言った。

「マリナがイエスと言うまで、毎日でも言ってやるよ。」
「あんた、頭がおかしくなったの？」

おっ　良い反応だね。
そう言って、青磁がぱちんと指を鳴らした。

「恋はすべての人間の感覚を狂わせる。オレもその一人に成り下がったわけだ。」
「ああ、もう、こっちがおかしくなりそう」
「マリナがオレに恋したってこと？」

・・・駄目だ。話がかみ合わない。

青磁がからかっているとしか思えなかった。
どう考えても、何を基準に何を合図に何を根拠にそんなことを言っているのか、ちっともさっぱりわからない。

理解できない人物ほど、恐ろしいものはない。

でも、青磁を理解していないかというと、ちょっと違うと思う。
青磁のこの冗談のような攻撃は後で考えるとして。
彼は普段、こんなに一緒に時間を過ごす人間がいないのだ。
邸内の人間も使用人以上の会話はしないし、たまに、ふらりとパリの街に繰り出したとしてもすぐに帰ってきてしまう。

フランスに親戚がいるようではあるのだが、そこに逗留せずにシャルルの屋敷に長居するというのは、よくよくの事情というか理由があるからなのだろう。

でも、それは彼の事情であるから、彼に尋ねることはしなかった。
様々なことから想像するに、彼は、孤独なのだ。

だから日頃、主が家を空けることの多いアルディ家に、こうして休みのたびにふらっとやって来て、居候のような状態を続けているのだと思う。

そもそも、この家の主はここに居を構えているのか。
そのことそのものが怪しい。

「青磁。あと2～3日でレポートも仕上がるし、あんたも大学の休みはそろそろ終わるのでしょ？
　実家に戻るのでしょう？」
「実家に戻るときはマリナも一緒だ。」
「青磁！」
マリナが強く睨んだ。
「ちゃんと会話して。」
「大学院には戻るよ。でも、実家には戻らない。」
ふと、笑いをとめて、彼は短く言った。
「オレはオレのやり方で生きる。マクドゥガル家は継ぐ。でも、相手は自分で決める。」

■57

「そういう言葉は本当に好きな人のために取って置いた方が良いわ」
マリナはいつか言った言葉を改めて繰り返した。

「今、目の前に居る」
困り果てて、会話する気になれない。

マリナから見ると、「おかあさんとけっこんする！」とだだをこねてぐずる子供のようにしか、見えない。

「だめ？」
「だめと言われても・・・」

マリナは答えに窮した。
とにかく、弱った。

青磁の強さは、その距離感のないことだ。

人には言えないつらさや悲しみや、もどかしさを彼も抱えている。
でも、それを出さずにいる強さを持っていて、かつ、その暗い感情より、「今」を懸命に生きようとするいじらしさが彼にはある。

誠次の日記を読み終わったとき、いろいろなことを考えた。

感じる時間、考える時間が足りなかった。

だから、シャルルに上手に気持ちを伝えることが出来なかった。
でも、青磁は上手でなくても良いと言う。
青磁は、伝えることこそ意味があると言う。

・・・・長らく忘れていたことだった。

「もっと、同年代の子に言ってみれば絵になるのにねぇ・・」

しみじみとそういう事を言ったものだから、青磁が少しむっとしたように言った。
「マリナは同年代だと思っていたけど、どういう根拠と境界線がそういう区分けをするわけ」
青磁の幼いところだ。
スキップで大学院まで進んだのに、子供扱いされると途端に怒り出す。
「同じ学校の子は、一緒にいたいと思わない」
ぽつり、と青磁が言った。

「一緒に居たいと思うのは、こんなに長い時間を一緒に居てもまだ居たいと思うのは、マリナだけなんだ。不思議なことに」
不思議なことには余計だわ。

彼女が抗議すると、そら、その反応が面白い、とまた笑う。

彼の笑った顔は、年相応の若い、まだ少年の顔だった。
彼の笑った顔は良いと思う。微笑んだ顔は、落ち着かなくなる。
怒った顔は、いたたまれない。無言で何かを考えている顔は遣る瀬無くなる。
煙草を吸う表情は大人びていて、もっと自由に振る舞えば良いのにと思うし、日本食に喜んで箸を上手に使えない彼を見てほほえましいと思う。

最初の出会いの時にあれほど口汚かった青磁がこれほど心を開いてくれることは嬉しいことだったが、このあたりがそろそろ、引き際なのかもしれない、と思った。
彼よりほんの少しだけ生きて、ほんの少しだけ青春の輝きを先に経験したマリナだからこそ思う、その物思いに、青磁の方が先に気がついた。

「これは気紛れじゃない」
そう、言った。
笑いはなかった。

投げ出した足を降ろし、前屈みになって、膝の上で手を組む。

そうして、長い前髪からこちらを。彼女だけを見つめるその表情に、いたたまれなくなった。
ああ、自画像と同じ、顔だ。

憂いと、悲しみと、そしてたくさんの愛情を与えたいという気持ちが溢れている、あの絵に。

青磁。私たちは誠次の愛に深く関わりすぎた。

そう思った。

■58

この若い物思いに悩む青磁に、日記を読ませることをシャルルが反対しなかったことが恨めしかった。

彼がこうして愛に飢えていて、本当の恋かどうかも見定めずに、恋そのものに夢中になることをシャルルが想定していなかったとは思えない。

マリナは少し自嘲気味に笑った。
自嘲気味に笑う。
自分が。
これまでの自分にはありえなかった。

想定？
私はシャルルが想定したとして、彼にどうにかして欲しいと期待していたのだろうか？

「青磁。私には、生まれたてのひよこが親と間違えて刷り込みされているようにしか思えない」
ため息をついて言う。
「マリナは親じゃないだろ」
「だから親と間違えて刷り込みされてるって言ったじゃない」

青磁はほかに兄弟姉妹がいないという。
3 人姉妹の真ん中でもまれて成長したマリナとは、まるっきり感覚が違っていた。

「親じゃないよ」
くすくすと青磁は笑った。

「少なくとも、彼らよりは、愛してくれる相手を見つけたと思ってるけど」
マリナは目を瞑った。
青磁が親を「彼ら」という。
その寂しさが伝わった。

親を「彼ら」と言う人達は、大抵が、最初は愛されていて、徐々にその愛を失った場合が多かった。

自分を産み育てた人達は万能じゃない。
それに気づくまで、大変な苦悩を背負い込むのだ。
でも、そういうことを知った顔で言うつもりはなかった。

青磁の心根は本当はとても優しい。
そして荒々しい。
自分は青磁くらいの時にはもう、大人になってしまっていた。
大人にならざるを得なかった。

シャルルと別れて、毎日過ごしていくだけで精一杯だった頃だ。

青磁。
青磁の今は、もう、かえらないから。
倖せになって欲しい、と思った。

「その話は今日はやめておこう。」
青磁から切り出した。

そして、とても美しい笑顔で、彼は片方が少しだけ薄い瞳を彼女から反らさずに、言った。

「マリナ。オレはマリナが好きだ。妻にしたいと思ってる」

はぁ。

マリナがぽかんとする。

やめようと言っている側からまた青磁本人は続ける。

「オレはマリナのことを気に入ってるし、これからもずっと一緒に居たいと思うし、このままさよならするにはとても忍びない。
この気持ちを、一緒に居て欲しいと思うことを、駄目だというのなら、オレを諦めさせてくれ。」
支離滅裂だ。
そう思った。
「・・・勝手にして」
「ああ、好きにするよ」

青磁が微笑んだ。
悲しいくらい、素敵な微笑みだった。
でも寂しい笑いだった。
彼のそのまなざしは、本当に心落ち着かなくなる。彼が本当に彼の年齢相応の笑顔を見せるようになったとき、彼は本当に解放されるのかも知れない。
これまでの、物思いから。すべてではないだろうけれど、少なくとも彼をこういう寂しい笑いをさせる何かから解き放ってくれるのかもしれない。

「青磁、あんたって本当にいやなヤツね」
「そいうオマエこそ、いやなヤツだよ」

青磁が笑った。
立ち上がって、両手に腰をあてて、マリナをちょっと斜め下から見上げた。
少し薄い方の瞳が、ちかりと光った。

「オレは、青磁・マクドゥガルの名前に誓ったんだ。
シャルルの前で。マリナを娶るって」
ぽかんとマリナが口を開けた。
青磁がにやりと笑う。
そうして、素早くマリナに近づくと、勢いよくキスをした。

「せ、青磁！」
「油断大敵って言うんだよね、こういう時」

青磁が挑戦的に言った。
「遠慮はしないよ。あと9回はキス出来る権利がオレにはある。」

青磁が片目を瞑って、ウインクした。

初めて見る、彼のいたずらっ子のような表情に、少し心が奪われた。
いや、彼はマリナの前では年相応の少年に戻れるのだ。
マリナの前でだけ。

■59

「それで？」

「それで頭をはたきました。3 回ほど。」

マリナがつんと横を向いて、そう言ったので、あまりの幼い仕草にシャルル・ドゥ・アルディは苦笑した。

マリナ・イケダは夜、シャルルが戻るなり、青磁の教育がなってない、シャルルの監督不行届だ、と顔を赤くして怒鳴り込んできた。

こんな時間まで、アパルトマンに戻らずに待っていたところを見ると、相当憤ったらしい。

・・・地団駄踏んだ姿が容易に想像できた。

青磁を子供扱いしているマリナだって、オレから見たら大して変わらないよ。
彼はまたひとつ、彼女にしか見せない微笑みを漏らす。

「嗜好は青磁の問題だからな。いくらオレが主治医でも、そこまでは治せないよ」
「そうは言ってないでしょう！」

マリナがまた目をつり上げて怒る。だから青磁につつかれるのだとわからないらしい。
青磁と同じ土俵に上がるマリナを、青磁が好きにならずに居られるだろうか。
彼と同じ目線で物事を見る人が周りにいないのだから。
それはシャルルも同じであったけれど。

とにかく。
マリナがそう言って話題を変えた。

「明日には結論が出ます。その報告は誰に？」
「それでは仲介者として、オレが立ち会おう」

わかった、とマリナが言って、それだけ確認したかったと述べる。
彼女の結論はすでに出ているようだった。
どんな結果になっても、君への評価は変わらない。
ランクSSSだ。
いや、ランクなんて君につけられない。

それを言おうものなら、即座に日本に帰ってしまうであろう、この女性を。
彼は心から愛おしく思う。
仕事の評価は別物だけれど、少なくとも彼女が誠次・マクドゥガルの日記を読んで何かを思い、途中まで書いていたレポートを最後に大分書き直したことを知って、彼は少し嬉しかった。

「マリナはその後どうする？」
シャルルは言った。
「その後・・って」マリナが尋ねる。
「明日には終わる。それを伝えに来たんだろう。
そうなると明日までで拘束期間が解除される。
その後のことだよ。
アパルトマンにはそれほど長く滞在できないだろうし、パリに来てからほとんど外も出歩いてない。
終わったら、観光でもしないのか？」

このフランスの華である男性の申し出を、マリナ・イケダは素っ気なく断った。

「明後日には日本に帰るわ。チケットも取った」
「ほぉ　それは早いご帰還だね」
いつものような辛辣な答えを返してしまう。

「シャルル。長居をして申し訳ないと思うわ。もうちょっと話をしたかったとも思うけど、これ以上は長くここに居られない」
「なぜ？」

シャルル・ドゥ・アルディになぜ？と聞かれるとは思わなかった。
彼女はそんな表情をした。
「ここにずっと居る訳じゃないから」

その言葉が、とても残酷でとても現実的で、そして、シャルル・ドゥ・アルディをとても傷つけたことを、彼女はわかっていたのだろうか。

■60

上手に言葉を紡ぐことが出来ない。
絵にすれば、あんなに簡単とまでは言わないが、伝えたいことを表すことが出来るのに。

マリナは下を向いた。

彼を、また傷つけてしまった。
でも、パリは、自分の居場所ではない。
そう思うのだ。

自分は、日本でやりかけの仕事があり、パリに拠点を移すほど様々な準備も度胸も何もかもが揃っていない。また、青磁に怒られてしまうかもしれないけれど、彼女の8 年間はそれだけ重かった。

ひとりで生きてきた時間。シャルルへの物思いに眠れなかった夜。
あの人への気持ちの区切りが訪れた瞬間。
それらすべてが自分のすべてであり、それらを捨ててしまったら、今の自分が好きだという自分が失われてしまう。そう思った。

シャルルが好きだと言うのは、8 年前の自分なのか、それとも今の自分なのだろうか。
青磁の求婚は確かに面食らった。子供の戯れ言というか気の迷い程度にしか受け止めていない。

でも、彼にはそういう躊躇いも、比較する昔のマリナも存在しない。
だから、彼の気持ちは疑うことはできないだ。
同じ事をシャルル・ドゥ・アルディにも感じることが出来ればよいのだけれども。

マリナとシャルルの過ごした時間は、あまりにも短かった。
時間が解決するわけでもない。青磁もそう言っていた。
ここでシャルルに飛び込んで、この切なくて遣る瀬無い感情を落ち着けるだけにのみ、心を砕いていれば、どんなに楽だったろう。

彼の側で微笑み、時には、一緒に笑い、泣いて、そして眠る。

そういう時間は望めば手に入るだろう。でも、それでは駄目なのだ。

誠次の日記。
あれを読んで、シャルルを想いだした。

彼と重なった。
彼の、その孤独や狂気を受け止められるだろうか。

そんな様々なことを思ううちに、自分は一度日本に帰らなければ、どうにもならないと思い至った。

何てことはない。
待っていて欲しい、とそれだけ言えば良かったのだ。

登の気持ちがわかる。
痛いくらいに。

シャルルの居るところが帰るところだと言いたかった。
パリに帰るんじゃないのだ。
彼のいるところに帰ると言うことができるようになりたかっただけだ。

「シャルル。」
「わかった」
シャルルの冷たい返事があった。

はっとして見上げれば、彼の冷たい、湖より深くて冷たい青灰色の瞳が、距離を持って注がれていた。

■61

ごめん。
言い方が悪かった。

慌ててそう言ったけれど、シャルルの表情もその冴えた瞳も、もう何も映していなかった。

少し息を吐いて、彼は言った。

この上ない、極上の微笑みで。
でも、とても冷たい微笑みで。

「この話は、すべてが終わってからだった。マリナちゃん。
この話は終わりだ。
明日は都合を付けておくから、地下に集合だ。
さ、もう遅い。車を用意するからお帰り。」

そう言って、冷たく。そう、冷たく彼女を拒絶した。

一見するとこの上なく流麗な紳士の所作であるかのようだったが、明らかに、これまでの彼女への態度と違っていた。

そうして背中を優しく抱き彼女を扉の向こうに追いやろうとした。

・・・！
撥ね付けられた。

そう悟った時には、もう、遅かった。

「シャルルあのね・・・」
「帰ってくれ」

ぴしり、と彼がマリナの言葉を遮断する。
厳しい顔だった。

何もかもを拒否する。
マリナの言葉は、もう届かなかった。

ゆらりと立ち上がり、それまでリラックスしてソファにもたれていたシャルルだったが、
そうして、マリナの背中を押し出すと、扉を開けた。青磁、青磁の言ったことは正しかった。でも半分間違っている。

言葉を発することそのものが価値があるときもある。
私はそのタイミングを逃してしまった。
そして、発した言葉が相手に届かなかった。
その前に、きちんと言わなければならないことだってあったのに。

自分が傷つくことを畏れて、シャルルに伝えるべき言葉を伝えなかった。
彼はこんなにも私に向かって語りかけていたのに。

「シャルル。話をしよう」

慌てて言うと、シャルルは冷たく薄く笑った。
冷笑とはこういう笑いを言うのだと思った。

「話は契約が終わってからだ、と君が言ったんだよ、マリナちゃん。
それに、君は明後日の朝一番で帰るのだろう。
話をする時間があるのかないのか・・作る気があるのかないのか。
　オレはあいにくと忙しくてね。そういう君の気紛れや突発的な申し出を通したいのであれば、ジルを通してアポを取ってからにしてくれないか」

彼の表情や言葉から何かを感じ取ろうとしたけれど、何も受け止められなかった。
ただただ拒絶されていることだけしかわからなかった。

■62

そんなつもりじゃなかった、とか。
言い過ぎたわ、とか。

そういう言葉で取り繕うことそのものがシャルルとの距離を開けてしまうと思った。

マリナは口をつぐんだ。それなら、自分はどんなつもりで彼に

その無神経な言葉を投げつけたのだろう。

「マリナ、オレも忙しいのでね。また明日会おう」

シャルルのその口ぶりが、ほんの少し前の彼のそれとあまりにも違っていた。
彼を傷つけたのは、私だ。
だから、きちんと修復しなければいけない。
今、すぐに。

「シャルル。今の言い方は酷かったわ。シャルルのことを考えてなかった」
「オレのこと？」

シャルルはくっと口角を歪めて自嘲的に笑った。
白金の髪が揺れて、青灰色の瞳が光った。

造作の美しい人間が、こういう仕草をすると、とても悲しくなる。

特に、シャルル・ドゥ・アルディのような完璧と言われる人間が自嘲している様は、こちらが息苦しくなるくらい、悲しい。

彼の瞳を見ていると、湖の底に沈んでしまったようなそんないたたまれなさを感じる。
怒ってくれた方がマシだった。
彼は、彼女を拒んだ。

「待って！シャルル。このままじゃ、帰れない」
「帰れない？」
シャルルがおかしそうに言う。

「それなら、君は、オレにキスしてくれるのかい？
　餌を待ち焦がれる飢えた犬か猫に哀れみを投げかけるかのように、もっともっと飢えると知りながら、君はオレにこのタイミングで口づけてくれるのかい？」

今度はマリナが絶句する番だった。
いけない。
ここで泣いたり心を乱されて逃げ出したりしてはいけない。
目に溢れる涙をこらえた。
彼が拒絶して、そうして彼女を傷つける言葉を言っても、傷ついて血を吹き出しているのは彼の

方なのだ。

マリナは、彼女を扉の外へ今にも押し出しそうな、背中に添えられたシャルルの大きな手から抜け出した。

どうしてそんなに機敏に動けたのかわからなかったけれど、マリナがそういう行動をする、というのをシャルルが予測していなかったからだろう。

「シャルル」
彼女が彼の胸に飛び込んだ。
彼の香りがする。

そうして、躊躇っている暇なんてなく、彼女は背伸びをして、彼の頬を両手でつかみ、そして、キスをした。
身長差があるので、背伸びをするというより、飛びつく格好になる。

だから、ほんの、触れるかのようなキスだった。
すがりつくようなそんなキスだった。

シャルルの唇に自分の唇を添える。
ただ、それだけで息が止まりそうなくらい苦しい。

頬に両手をあてるだけでも、卒倒しそうなくらい、心臓が激しく脈打つ。
鼓膜が破れそうなくらい、血流が良くなりいろいろな音が増幅されて聞こえてくる。
唇をあてる。これだけの仕草だったのに。

自分が考えても居なかった行動に出ることが不思議だった。
マリナはかつて誰も対してもこんな気持ちを持たなかった。
持ち得なかった。

ああ、人を想うというのはこういう事なんだ。
思い知る。

我を忘れる。

熱に浮かされたように自分の行動が自分の行動でないように感じる。

言葉で伝えられないなら、行動しかないだろ。

青磁がそう言ったことを想いだしていた。
シャルル、私の言葉は、伝わったのかな。

■63

でも。
シャルルは、マリナのキスに応えなかった。触れ合うかのような、そんな軽いキスではあったけれど、紛れもなく、彼が望んだ、マリナからの口付けであったのに。
彼女の肩を引きはがし、そして横を向いた。

少し肩を押したものだから、その勢いで小柄なマリナが少し後ずさった。

「君という女は本当に、苛立つよ。よくよく、神経が鈍いんだな。感心するくらいだ」

シャルルは冷たくそう言った。
唇を手の甲で軽く拭う。

「そういう行動がオレを侮辱しているって、わからないのか？」
シャルルは苛立たしげに言った。本当に苛立っていた。

「これがどんなにオレを惨めにさせるか、君はわかっているのか？惨め？このオレが？
　それともそんなにかわいそうだと思って憐れんでくれたのか。
　ありえない、そんなことはありえないんだよ、マリナちゃん。」
「違う！」
マリナが悲鳴を上げた。涙が出そうになり、鼻がつんとつまったけれど、ここで泣いてはいけないと思った。

「違う、違う！」
「何が違うと言うんだ。君はオレを拒んだ。ただ、それだけだ」
そこまで言うと、シャルルは一息ついて、首を振った。

「それだけなんだよ、ただそれだけのことなんだよ、マリナ」
「君は、君であることに変わりはないだろ。
　確かに昔の無鉄砲な自由な君に心惹かれた。

　でも、今のマリナに会って。変わらずに居てくれて。
　でも君は大人の女になっていて、嬉しかった。
　相も変わらず堕落した日々を送っていたオレより、ずっと輝いている。
　そんな君が良いと思う。
　君はそんなオレの気持ちも疑って距離を置いていたし、何より自分自身の本当の価値に気がつこうとしない。」
シャルルが言った。
長い、長い独白だった。

「いつも比べられているんじゃないかと思っていたのは、本当は誰なんだろうね。
オレなのか、君なのか。」
「・・・」

「さぁ。これが最後通牒だよ。このまま帰らないと本当に・・帰せなくなる」
「待って。話を聞いて欲しい」
「聞くつもりはない」
シャルルが遮断した。

「それとも、君のそのご大層な言葉とやらでオレを説得させられると思うのかい？
その言葉でオレを失望させないでくれ。
そうじゃないなら、君の体で答えてくれ」

シャルルが、蔑む様に彼女を見た。横目で彼は私室の奥の部屋を見て、顎を上げて差し示した。

「君が一夜の慰めとなるんだったら、それでも良いよ。
帰りたくないならここで朝まで過ごせば良い。

ああ、でも、オレは人と一緒に眠ることができないので、終わったら部屋から出て行ってくれ」
そうして、言った。

「さ、マリナ。脚を開け。」

扉が閉まって、彼女が帰っていく足音がした。
シャルルは目を瞑って、重い体を引きずるようにして、ソファに腰を下ろした。

ひとりで、泣くな、マリナ。
泣かせてしまった。
傷つけてしまった。
でもどうにもならなかった。

彼女の頑な殻を破るには、こう言うしか方法がなかったのだろうか。

唇を噛んだ。
噛みすぎて、血が滲む。
その血の味が苦かった。

彼女を娼婦と同じに扱うなんてどうしてできようか。

昔も今も、君は君だ。

だから、ファム・ファタルなんだよ。

■64

「追いかけなくて良いのか？」
足音が遠ざかると、シャルル・ドゥ・アルディは言った。
「気が合うな。同じ事を言うつもりだった。」
部屋の奥から、青磁の声がした。

見れば、部屋の奥からは青磁・マクドゥガルが姿を見せるところだった。
ゆらり、と怒りを秘めた顔でこちらを睨み付ける。
そして、怒号を浴びせたい気持ちを抑えて、青磁が言った。

「濡れ場というか、修羅場と言うのか。
　わざと泣かせた女を、別の男に追いかけろとけしかける心境が理解できない。」
「彼女を・・マリナをひとりで泣かせないでくれ」
「それがオマエのアキレスの踵ということなのか、シャルル。」
青磁が大きく深くため息をついた。

明日以降の予定が決まった、とマリナが青磁に話をしたのは今日の夕方のことだった。

彼女はすぐさまここを立ち去ると言う。そうはさせないつもりだったけれど。
青磁は、シャルルに今後の絵画の売買のことについて相談をするつもりだった。

マリナの出した結果は、まだ聞いていない。
最後まで随分と悩み抜いたようだ。

絵画の組み合わせなんて、青磁にはどうでも良いことだった。
彼女の選んだ決断がどんなものなのか知りたかった。
ただそれだけだった。

明日の立ち会いを改めて頼もうと思い、シャルルの帰りを部屋で待っていたところ、程なくしてマリナが怒鳴り込んできた。

真っ赤な顔をして。
面白いのでそのまま奥の部屋に気配を消して様子をうかがっていたら、今の現場に居合わせてしまった、という格好になった。
青磁は内心驚いた。
シャルルとマリナの会話があまりにも、稚拙だったから。
彼らは、何をそんなに悩んでいるのだろうか。

好きなものは好きと言えば良い。

上手に言葉に出来なかったら、態度で示せばいい。

態度で示すことが出来なかったら、拙くても言葉でも何ででも伝える手段はいくらでもあるのではないか。

そうしている内に、マリナをシャルルが、泣かせた。

彼女は涙を見せないで部屋を出て行ったが、決定的に立ち直れない言葉を、シャルルは言った。

壊したくないはずの運命の女を、彼自身が壊したのだ。

■65

何もわざわざ・・泣かせることはないだろう。

「オレはね、シャルル。誰かに涙を拭いてもらう女はいらないんだ。
　自分で涙を拭けるマリナが良いと思う」
青磁は続けた。

「前から思っていたけれど、どうしてシャルルは、彼女のことをそんなに温室の花の様にして大事にするんだ？大事にしすぎると花本来の強さが損なわれてしまう。
彼女は、そんなに弱くない。」
「青磁。そんなことはとっくにわかっていることだ。」
彼は言った。

唇の血を拭いながら。
唇を切るぐらい噛むほどの彼女を大事にしていて、その大事な彼女を傷つけたことに遣る瀬無い気持ちを持っているのであれば、こんなに彼女を傷つけることはなかったのに。そう、青磁は思った。

「追いかけないのなら、青磁の用事を聞くことにしよう」

シャルルは話を切り替えた。まったく何を考えているのか、わからない表情だった。
こいつ、と今度は青磁が唇を噛んだ。

「シャルル。オレは彼女を追いかける。」
青磁はそう言うと、足早に部屋の出口に体を向けた。
途中、シャルルに向き合う。

そうして、乱暴に、一冊のスケッチブックを彼の胸に投げ込んだ。
「ほら。話はこれだよ。シャルルに渡すものがあった。
・・・よく見てみろ。」
それだけ吐き捨てるように言うと、青磁は部屋を出て行った。
廊下を全速力で駆け抜ける足音がする。
彼は薄暗い廊下の濃淡がわからないから、それは危険な行為だった。
途中で何かにぶつかった音がする。
そのまま、足音が遠くなった。きっと、一直線に、マリナの後を追いかけたに違いない。
少しして、シャルルは押しつけられたそのスケッチブックを見た。

スケッチブックには、マリナ・イケダの名前があった。
マリナのスケッチブックだ。

ここのところ、薄暗い地下で一日のほとんどを過ごしていたので、気晴らしに数時間を邸内の散策にあてている、と青磁から聞いていた。

その際のスケッチブックだろう。日本から持ち込んだものらしく、かなり使い込まれていた。
表紙や装丁はごくシンプルだけれども、良質の紙を使用している。実用主義のマリナらしい選び方だった。

そうして、扉を、少しなでる。

彼女がずっと持ち歩いていた持ち物。
それだけで、その物体には意味があった。
思えば、彼女の持ち物にこうして触れたことがなかった。
贈られたものと言えば、小さな人形だけ。

それはシャルルにとっては記念の品であり、肌身離さず持ち歩く御守りであり、シャルルを模した天使であったけれど、彼自身にとっては、マリナの分身であった。

ゆっくりと、扉を開いた。

そうして秘密を開けるかのような後ろめたさと共に、彼女のスケッチブックを開いた。
なぜ、彼がこれを持っているのかはわからなかった。

マリナから託されたのか、中身をシャルルに見せようとして青磁がこっそり持ち出したのか。
シャルルの長くて細い指が止まった。頁をめくる必要がなかった。
そこには、最初の頁から、答えがあった。中身はほぼ黒かった。

びっしりと、埋まっている。

最初の頁ではない。
最初の、扉から。

ぎくり、とした。

目があったのだ。
自分と。

そこには、シャルル・ドゥ・アルディが居た。

スケッチブックをなぜ、彼女が滅多に人に見せないのか、まったく気にしていなかった。ようやく、わかった。

最初に再会した時も、彼女は鞄の中のスケッチブックが、シャンパンの水滴で濡れていやしないかと真っ先に心配した。

次に逢った時も、彼女はスケッチブックの中身を決して見せようとしなかった。
そうして、今。ここで初めてその理由を知った。

そこにはシャルルがいた。

無数の、彼だ。
小さいものから大きな絵、若かりし頃の少女のようなあどけなさを持つ自分から、今の自分まで。想像して想像して描いたものもあるのだろう。

髪型が違ったり、面立ちが少し違うものがあった。
めくっても、めくっても自分が居る。

小菅で別れた以降の自分を想像して、彼女が無数の自分を描いていたことがわかった。
使い込まれたスケッチブックではない。

8 年前のあのときから、大事に大事に持ち歩いて、あたかも使い込まれたようになっている古いスケッチブックだったのだ。

一つ一つの頁に、作成年月日が入っている。
8 年前からある。

筆跡もタッチも使用している用具も都度違うから、思いついたときに描いていたのだろう。
そうして、最後の頁までくると、また、最初の頁から、また描いて足しているのだ。
時々、用紙が足りなくて、継ぎ足しをしているところもあった。

それでも、余白が足りなくて、扉の裏にも描き込んでいる。

余白がまったくないので、初めて開いたときは真っ黒に見えたのだ。

そして、それでもまだ埋められる場所がある限り、描き続けようとする彼女の意志を感じた。

そして。

まだ描きかけの、日付が最近のシャルルが、いた。

・・・微笑んでいた。

下書き程度の荒いデッサンだったけれど、彼が笑っていた。

綺麗な、倖せそうな微笑みで。
そうして、小さく、乱れた字ではあったけれど。
間違いなく、彼女の字で。

「シャルルが倖せになりますように！」と書かれていた。

■66

青磁は走った。
そうして、今。

マリナを捕まえることができなかったら、きっと後悔すると思った。

彼は暗闇の中を走ることが出来ない。
夜目が利かないのだ。
けれども、彼は走った。

廊下の柱にぶつかり、館の主が指示した、日本にゆかりのある生花を活けた花瓶にぶつかっても、彼は走った。
シャルルと話した時間はほんの数分だった。
いや、数十秒だったかもしれない。

その間、マリナが遠くまで出てしまうことは考えられなかった。

第一、遅い時間なので、車で帰らなければ、至極物騒なくらい静かな夜だ。
なぜ、あのスケッチブックをシャルルに見せようと思ったのかは、正直自分の気持ちに説明がつかなかった。

マリナが席を外しているときに、こっそり持ち出した。
同じくらいの厚みの冊子を入れたから、しばらくはわからないはずだ。
庭園のスケッチをしようと言ったときに、彼女が風景用のスケッチブックと、その他に大事に使い込んでいるスケッチブックの2 冊を使い分けていることに気がついた。

少し観察していると、青磁の目の届かないところ。ひとりで居るときには、その使い込んでいる方を開き、なにやら描き込んでいる姿を見かけた。

青磁が近づくと、さり気なく扉を閉じてしまう。

気になるじゃないか。

その程度の好奇心だったけれど、マリナの閉じた心の様で、なんだかひどく気になった。
だから、こっそり、中身を見てみることにした。

今日はもうスケッチが終わり、その鞄の中身も当分の時間は開かないであろうというタイミングを見計らって、彼は彼女から秘密を盗んだ。

そう。
秘密を、奪った。
そうして、愕然とした。

青磁は、マリナの恋を過去の囚われた古びてしまった恋だと思っていた。
8 年も経過して、なおそのままの気持ちでいられるなんて、ありえないと思っていたのだ。

だから、シャルルに対する気持ちも。彼女が口を重たくする昔の彼のことさえも。

彼女はやがて懐かしい思い出として、それらと決別して自分に向き合ってくれるかもしれないと、信じ込んでいた。

少し考えて、シャルルにこの話をしようと思った。スケッチブックを抱えて、彼の私室に入る。
青磁とごく限られた人間だけがあらかじめ彼の許しを得て入ることの出来る私室。
この部屋の主は、長らくこの部屋に帰っていなかった。

ただ、夜遅く来訪して、薔薇の様子を見て、最高の状態の薔薇をゲストルームに飾り、そしてまた帰っていく。そんな日々を過ごしているシャルルと話をすることができるのは、今のこの

時間だけしかない。

彼が待っていると、やがてシャルルが部屋に入ってきた。
青磁は待っていたよ、と言うと、シャルルはオレは待ってないけれどね、と少し不機嫌そうに言った。

「シャルルに話したいことがあるんだ。ちゃんとアポを取っただろう？
話をしようよ、昔みたいに」

そう言った矢先のことだった。

マリナ・イケダが彼の部屋に入れてくれと荒々しくノックをして入ってきた。
アポイントを取らないで、この部屋に入れる人間がいるんだと思い知らされる。

マリナはシャルルにとって、何もかもが特別なのだ。

そうして。
あの問答を聞いてしまった。

彼らのやり取りが切なかったし、すぐその場で口づけを交わすマリナとシャルルの姿を見たくなかったので、できることならその場から立ち去りたかった。何も聞きたくなかった。

ぎゅっと、彼女の秘密を握りしめた。

でも。
シャルルが彼女を壊した。

ああ言って、なお、彼の姿を隠した寝室までマリナがやって来ることはないだろうと思った。
シャルルも、それを計算して言ったのかも知れない。
だがしかしあの激昂ぶりは、相当なものだった。

初めて目にするかも知れない、彼の荒げた声と姿を、彼は受け止めることが難しかった。
なぜ、そうまでして彼女を壊すのか、理由はわかっていた。
彼女との再生を望んでいるからだ。

そう確信した。

また、吐息を漏らした。

■67

青磁が走る。
走る。

マリナがただただ心配だった。
これほど、自分より他人が大切だったことがあっただろうか。

恋はこれが初めてではない。

何度か経験し、そして苦い思い出しか残らない。

けれども。

愛は、これが初めてだった。
どんなにどんなに焦がれても手に入らないものがある。

それはよくわかっていた。
すでに経験していた。

でも、これほどまでに彼女のことを想い、彼女の涙を憂え、彼女の笑い顔を見ていたいというこの気持ちに嘘がないことを青磁・マクドゥガルはよくわかっていた。

恋というのか愛というのか。
そして、もっと違う気持ちなのか。
それはどうでも良かったのだ。

少なくても、今の彼の気持ちには「放っておけない」という感情だけがあった。

いた。

マリナ。

彼女は、歩いていた。

「マリナ。待て」

彼がそう言うのと、腕をつかむのと、彼女が振り返るのは同時だった。
最初は、振り返った彼女が泣いているのかと思った。
でも、彼女は泣いているより始末の悪い表情をしていた。

裏嘆く

その言葉を思いだした。

甚泣くほうが、どれほど良かっただろう。激しく慟哭する方が、よほど、良かった。

「ああ、青磁」

彼女はそう言った。

そして、少し笑った。

こういう寂しい笑いは、彼女に実に相応しくない。
天真爛漫で闊達な彼女の笑い顔の方が何倍も良かった。

「なに？もう帰るところよ」
彼女がそう言った。

まさか、シャルルとのやり取りを聞いていたとは言えず、彼は口ごもった。

「いよいよ、明日・・・だね」

いきなり話を切り出したことに、マリナはちょっと返答に困ったようだ。

「ああ、その話ね。本当に。いよいよだね。ちょっと緊張する。」

マリナ・イケダが笑う。その笑いには力がなかった。
彼女の生命に溢れたエネルギッシュな微笑みではなかった。

マリナ。
君はオレの光なんだ。
どんなときでさえも。

この薄い世界で君の光がオレの世界を色濃くしてくれる。

そう、思った。

その寂しい微笑みでさえ、青磁にはもどかしくてそして眩しかった。

彼が恋に堕ちてないなんて、誰が言ったって、彼は認めなかった。

彼女が欲しい。そしてもっと弾けるような笑顔の彼女と一緒に居たい。
そう、願った。
願う。そのことそのものが、彼にとっては奇跡だった。
何かを願っても手に入らないものがある。

でも、願わずには居られない。

自分のものにしたいという願いではなく、彼女に笑っていて欲しいという願い。
それはもう、言葉にできなかった。

マリナが言った。
少し躊躇いがちに。

この、夜も更けた、渡り廊下で言うべきことではないと思っているらしかったけれど。
彼女は、少し間を置いて、言った。

「青磁。お願いがあるの。」

■68

「本当に、後悔しないね？」
「後悔？しないわ」
「後悔は起こってから、後でするものだよ、マリナ。」

「反省はするかも知れないけれど後悔はしない。」
マリナのその言い切りぶりが気持ちよかったので、青磁は少し笑った。
「そう言うのであれば、こちらも遠慮はしない」
そうして、彼女の茶色い髪に刃を入れた。

***

「ああ、さっぱりしたわ」

嘘つけ。
そう思ったけれど、青磁は無言でハサミを降ろした。

彼女が依頼したのは、「自分の髪を切って欲しい」ということだった。
昨日、切りそろえたばかりの髪をもっと短く切るなんて。

どうかしているにもほどがある。

青磁は最初、反対した。でも、彼女がどうしてもと懇願する。
最後はこの一言で押し切られた。

「切っても伸びるでしょ」

彼女らしい。

彼女の髪は、大分短くなっていた。
襟足は白い首筋が覗いていたし、茶色い髪はできるだけ自然なその軽やかさを出したかったので、横髪は頬にかかり、前髪は、前回切ったときよりほんの少し短くなって、サイドに流れている。

ますます、その顔が幼く見えた。
若く見えるのではない。
幼いのだ。

結構、似合うかもね。

小柄な彼女の顔が、小さく見える。
髪型のせいかもしれないけれど。

マリナ。
オレと出会った頃の、髪の先を捨ててしまうのだね。

そう思うと、彼女の決別の意味を考えるより、ずっと寂しかった。
彼女は、シャルルへの物思いと決別したのだ、とわかっていた。

そう。わかっていた。

そう。理解していた。

彼女の髪は、8 年前の髪の長さと同じだったと思う。

でも、それでは、いけないのだと思ったのだろう。

髪を切って気分転換、という程度の覚悟ではなかったらしいが。
シャルルの、どの言葉か彼女に髪を切りたいと言わせたのだろう。
わからなかった。

「青磁、本当に器用だね。スタイリストになれるよ、きっと」
そう聞いて笑った。
床屋じゃなかったっけ。
そうして、マリナは初めて入室する青磁の部屋を見渡した。

「オレだって、男なんだぞ」
青磁がそう言って、深夜の訪問を窘めたが。
顔が、笑っていた。

この年下の男性の甘さに、今はわがままを言って甘えているのだと思う。
それはわかっていた。甘えていることを申し訳ないと思った。
でも、どうしても、明日の自分は。

きちんと向き合っていたかったのだ。
自分にも、シャルルにも、青磁・マクドゥガルにも。

青磁。

こうやって、何も聞かずに、私のわがままを聞いてくれて、ありがとう。

それが、ただ、救いだ。

マリナはそう呟いた。

若かった頃は、何もかもを共有することが、お互いの仲の深さであったり、親密度の度合いであると思った時もあった。

でも今は、言いたくないことは言わなくても良いよ、というほどよい距離を保ってくれる人に、とても涙をながしたいくらいの感動を覚える。

どうして、こんなに、優しい人達がいるのだろう。
優しい。
その言葉は的確でないかも知れない。

何か下心を持つ人も居れば、本当に他人に興味のない人も居る。
でも、でも。
今の彼女には、この青磁の心根の深さが、嬉しかった。

ありがとう。

マリナがもう一度、呟いた。
「お礼しなくちゃね」
マリナが少し笑った。

車の手配を青磁がしてくれた。
そろそろ到着する頃だろう。

すっかり遅くなってしまったけれど、このままここに朝までいることはできなかった。

彼は、そう。望んでいたけれども。
話をするときが、きた。

■69

あと、9回キスできる権利がオレにはあるけれど。

それに加算しても良いのかな。

青磁は、マリナに言った。
マリナは困ったように笑った。

彼の鳶色の瞳が、おかしそうに笑う。
青磁はとても、魅力的な人物だ。

とにかく、その眼光鋭い紫電に巻き込まれて、惹かれてしまう。

彼の、手に入れたくても出来ない世界を渇望するその気持ちの表れかもしれない。
そう思うと、濃淡のわかりづらい世界に、突然放り込まれてしまった青磁の苦悩が、本当に不憫でならなかった。

自分が、もしそうなったら、一体どうなってしまうのだろう。

青磁のようには笑ったりすることがもうできないであろう。
そう思った。

不憫な気持ちだけがあったわけではない。

彼はとても魅力溢れる人間だ。
もう少し成長して、様々な人と関わり合いになる頃、彼はとても大きな器の人間になるであろう。
そんな予感とも期待とも持たせる人間であった。

青磁の部屋は、想像したより、殺風景だった。

もっと、おもちゃ箱のように、ごちょごちょした部屋を想像していたけれど。
彼の部屋には何もなかった。

製図道具と、読みかけの教材と。
性能のすこぶる良いであろうパソコンと、ほんの少しの着替え。
長逗留するような用意ではなかった。
部屋の中も、まるでホテルのような殺風景さを感じる。

彼は本当に何も持ち歩かないのだ。

あたかも、何も大切でないかのように。

でも。

マリナを快く招き入れ、そうして彼女の髪にハサミを入れてくれる。
その暖かさに感謝しないといけないのだ、とマリナは思った。

未婚の男性の部屋に入り込むことがとても、思慮の浅いことだとは思ったけれど。

彼女は、彼女が何かを変化させるためにはこれしかないと思った。

■70

マリナはその答えに、少し笑っただけだった。

「私のできることなら、青磁の倖せを応援したい」

ああ、それは君が欲しいと訴えているオレの望みをかなえられないということなのだろうか。
青磁の胸が痛むことを、彼女はわかっていたのだろうか。

たぶん、わかっていながら。
言葉を選んで、そういったに違いない。

彼女は無神経ではなかった。

そういう女性なら、もっと、楽だったのに。

でも、そんなマリナだからこそ、こんなにも心惹かれるのだと思う。
青磁は言った。

「それなら。」

青磁は、もう一度、言った。

「100 万回のキスの権利を、オレに与えてくれ」

9 回のキスなんて耐えられなかった。

もっともっと、彼女のキスが欲しかった。

ただそれだけの言葉なのに。

彼女が、凍り付いた。

笑みが凍結して、目が見開く。
茶色い、光彩の薄い彼女の瞳が、ゆっくり、瞬きをした。

そして。

そして、シャルルと同じ事をした。

短く髪を切り、今まで思い描いた彼女よりもずっと幼くなったマリナの顔から。

涙がこぼれ落ちたのだ。

泣く、と意識しない涙は、こんなにも切なく、そしてこんなにも彼を驚かせることを。

初めて、知った。

■72

どっと溢れる涙、というのはこういうことを言うのだと思った。

彼女が思わずして涙を流すという行為に、青磁・マクドゥガルは戸惑った。
彼は、単に、彼女の髪をカットしてあげた見返りに、ささやかな希望を誇張して求めただけだった。

それが重荷になってしまったのだろうか。
青磁は焦った。

「ごめん、・・・困らせたか。」
「いいえ、いいえ・・・」
マリナが、涙を流しながら、青磁を見上げた。

小柄な彼女は、青磁と対峙すると、見上げるような格好になる。

長身の彼は、マリナが萎縮することのないように、いつも、距離を保っていたのだが。
今回は、そんな余裕はなかった。

「マリナ？」
そう、尋ねる。
マリナがまだ泣いている。

髪の毛を短くしたマリナ・イケダは、とても幼かった。

あまり東洋人の事情を知らない外国人が見れば、中学生か高校生が泣いているくらいにしか思えないくらい、幼い顔立ちの東洋人が、困って泣いていた。

「100 万回のキスが、今、できないのなら」

青磁は笑った。
今の自分は、シャルルの言う、牡だ。
涙を流す彼女の気持ちを配慮することができない。

ただただ、この胸の内にけぶる暗い感情を、一気に押し出すのではなく、徐々に表していくことくらいしか、自分には抑えることが出来ないのだ。

「それなら、9 回分のキスで良いよ」
青磁はそう言った。

マリナの隙だらけの防御が、腹立たしかった。

未婚でそれなりに社会経験を積んでいる女性の、この浅はかさが苛立たしかった。

何をそんなに隙を作っているんだよ、マリナ。

それは、シャルルに拒まれたからか。
自分という人間が、彼女に安心と信頼をもたらしているからなのか。
まったく理解できなかった。

きっと、マリナはとても悪い女に違いない。

そう思う瞬間さえ、あった。

それでも。

彼女が上を向いて歩けと言う。
彼女が、しがらみに生きてはいけないという。

もう、自分は彼女に向かってまっしぐらに堕ちていくのがわかっていた。
いや、もうその状態なのだ。

■73

青磁はどうして良いのかわからなかった。

彼の人生の中で、どうして良いのかわからないときはそれほど多くない。
でも、このときばかりは。

自分が泣かせたのか、そうでない理由で泣いている女性をなだめるのか。
まったく理解できないまま。
そう、理解できないまま女性をかき抱くのは、初めてだった。

「なぜ。なぜ泣くの」

青磁が悪いわけではない、とマリナが泣きじゃくりながら言った。
青磁の胸に、マリナ・イケダが居た。でも、彼女は我を忘れて涙を流す。

シャルルにあれほど酷いことを言われて。
伸ばしていただろう髪を切って。

それよりも、辛い、涙することを、自分が言ったことに想いあたらなかった。
涙を流すどころではない。
彼女は堰を切ったように、泣きじゃくるのだ。
彼女の涙がとまらない。
自分の行動が彼女を悲しませたという自覚がない。

「マリナは遠慮ない」
青磁が困ったように言った。
泣いている彼女に言った。
「男なら、好きな女がこうして夜中に自分の部屋に入ってくることに平然としていられない。
そうして、その人が泣いているなら、もっと平然でいられない。
・・何をして欲しいんだ」

青磁がそう言った。
辛かった。

そんなこと、彼女に求めていない。
辛いときに、自分の元に来てくれる。
それだけで満足なのだ。

意味はない。

けれども。

マリナにとって、意味がないことは、青磁には同じように、意味のないことになってしまうのだ。

マリナがそうと望んだのであれば。

彼は、シャルル・ドゥ・アルディがどう言おうとも。

彼女を渡すつもりはなかったし、涙を流す彼女をシャルルの話し合いの席に着かせるつもりはない。

そうこう考えると、シャルルよりも自分の方が、彼女を温室の花と定めていることに気がついた。

■74

息が出来ない。
マリナがそう言った。

そうして、息を詰まらせて、こどものように泣きじゃくる。
青磁は、その様子にただただ驚いて、胸の内に囲んだ。

どうしてこんなに慟哭するんだ。

青磁の鍛えられた背中に回された腕は、とても華奢でとても心許なかった。

ごめん、ごめん。
マリナが謝った。

彼女の慟哭が、青磁にとってはとても拙い、昔の想いに対するものであることはすぐにわかった。

自分を通して誰かを見ていることに。

特にあのシャルル・ドゥ・アルディさえ気にする「彼」を幻としてみていることはわかった。

でも、彼女を責めることができるのだろうか。

彼女の、8 年間。
それはだれにも侵すことの出来ない時間なのだ。

彼女が何を思い、何を憂い、何を心配して生きたのかは、今になってみないとわからないことなのだ。

「私、青磁を、今、利用した」

マリナが言った。
そうして、ちょっと笑った。

泣いてくれれば。
まだ、そうじゃないよ、オレが利用したんだよと言えたのに。

「赦されないことなので、忘れて欲しい。でも、このお礼はいつかしないとね」
彼女がそう言ったものだから。
青磁は、思わず言った。

「100 万回のキスは、生きていればいつでもできる。
でも、今。今、その9 回分のキスを、ねだっても良いよね」

そうして、青磁はマリナの肩を抱き。
彼女の意志なんてまったく関係なく。
そして涙さえ、遠慮することなく。

彼は、口づけた。
彼の永遠の女性と定めた彼女へ、その持ちうる情熱をすべて込めて。

■75

ただ一度のキスだったけれど。

・・・9 回分のキスだ。最初で最後の。

青磁は思った。
目を閉じる。

彼女の悲しい瞳を見たくなかった。

これまでのこれからの彼女への想いをありったけ、その唇に刻み込んだ。
軽く触れるようなキスではない。
切なく甘くそして哀しい、涙の味のするキスだった。
青磁はこれまでこんな唇の重ね方を知らなかった。

この時間が、ずっと続けばよいのに。

でもこの時間が永遠に続くことはないのだ。

やがて、唇を離す。
ゆっくりと。

少しだけの、沈黙。

マリナが、ぽつりと言った。

「ありがとう」

充血していたけれど、綺麗なまっすぐなまなざしで青磁を見た。
とても近くにあるものだから、彼は、その瞳に吸い込まれそうになる。

彼女のゆっくりした瞬きがひとつ。

「それから。本当にごめんなさい。」
「謝らなくて良いよ」
青磁が言った。

これまでの、甘い、甘い、それでいて皮肉たっぷりの彼の空気は、もう、なかった。
いろんなことを詫びているのだと思った。

彼女が詫びるのは。

きっと、自分を通して違う誰かを見ていたこと。
そうして、青磁を拒みきれなかったことへの、謝罪。
髪の毛を切って欲しいと言った、青磁の複雑な心中への慚愧。

「謝るなよ。
　利用したって良いんだ。マリナにとって、それで良いのなら。オレは良いよ」
またひとつ、マリナが涙の粒を落とした。

オレのやっていることはシャルルと変わらないな。
泣かせた。

青磁は、思った。

マリナは本当にずるい女だ。
でも、本当にずるいのは、自分だ。

彼女の隙や弱さを責めながらも、その隙間に自分が入り込めると思い上がっている自分が、一番、狡いのだ。

成就することが恋の終わりではないと思った。

終えなければ、本当に倖せになって欲しい人が倖せになれない恋もある。

終えなければいけない。

でも、消えるわけではない。

そう。

・・・そして、この恋は秘する恋になる。

青磁は、そう、思った。
思わざるを得なかった。

このまま、情欲に任せて彼女を抱けば、きっと後悔する。

そして、二度と彼女は手に入らない。

この期に及んでまだ、自分は彼女のそばに居たいと思う。

だから、彼女を手放すことにした。

手に入れていないのに。
この恋を。

彼女を解放することにした。

今まで、囚われていたのは自分の方だったのかもしれない。
今、解放してあげよう。
自分を。マリナを。そしてこの恋を。
彼は、この瞬間。

彼の輝ける時代の最後の煌めきが、静かにその鮮やかに輝く光を落とした。

青磁・マクドゥガルは

少年から大人になった。

■76

「あ～～～～！！もうっ！」

突然マリナが叫んで、ぱんぱんっと自分の両頬を、勢いよく両手で叩いた。
あまりに勢いよく叩いたものだから、頬が赤くなって、ますます、幼く見えた。

突然の大声に、青磁がびっくりして目を見開いた。
少し、放心する。

「青磁！ごめん！うじうじしていた！だから、駄目なんだよ！」
マリナが元気よく言った。

その姿は、これまでの彼女だった。

マリナ・イケダは。

う～ん、と伸びをして。
屈伸して。
そして、大きく両手を挙げて深呼吸した。

・・・あれはどうみても、日本番組で見た「ラジオ体操」だ。

まるっきり青磁を無視したその行動に、彼はしばし唖然とする。

そうして、腰に手をあてて。
う～んと伸びをすると。
マリナが、振り返った。

顔は泣きはらしていたし。
先ほどの自分自身への叱咤激励で頬は腫れていたけれど。
すっきりした表情だった。

「髪の毛、すっきりしたわ」
マリナが笑った。

ありがとう、とまた言った。

そうして、ふと、真剣な顔に戻ると、ぺこり、と頭を下げた。
ごめんなさい！と言いながら。

「私、青磁を利用した。これは謝っても謝っても赦してもらえなくても仕方がない。」
「利用して良いってオレが、言ったんだよ、マリナ」
青磁は苦笑して、ようやくそこで声を出して笑った。

彼女の明るいテンポの口調がなんだか懐かしくて嬉しかった。

泣いているマリナより、よほど魅力的だよ。
そう思った。
そして笑った。

彼女のこの切り替えの早さは一体なんだろう。
まったく理解できない。
でも理解できなくて予測不能がマリナなのだ。

いつか、この日のことを、そんなことがあったっけ！と言って、笑って話をすることができるような気がした。

オレ達は、誠次の日記に囚われていたかも知れないね。

そう思った。

仄暗くて光のない戻れない路に、お互いに踏み込んでしまったようだ。

マリナの光り輝く笑顔が見たかった。
本当は、ただそれだけだったのに。

彼女に多くを求めてしまい、彼女の隙につけこんだ。

彼女の弱さやずるさや情けなさを受け入れようと思った。
それが自分自身のそれに向かい合う、一番良い方法に思った。

マリナ、オレも同じだよ。

君につけ込んだ。
そして自分の暗い路から、君に引っ張り上げてもらいたいと期待した。

でも、それじゃ駄目なのだ。

シャルルが彼女を泣かせたとき、まず、そう思った。

壊したくない相手を、あえて壊したその気持ちに眼を反らしてしまった。

そして、彼女が彼を想いながら綴った秘密を見てしまったとき。
また、思った。

こんなに相手を思い続けて、そして、言葉に出来ないと泣く彼女が、愛おしかった。

でも、その想い続ける相手は自分ではないことをわかっていながら、そこにも眼を反らしてしまった。

一番こどもだったのは、やっぱり、青磁だったのだ。

手に入らないものを願い、そして、眼を反らし続けた。
でも、それではいけないんだと、二人をみて思い知らされた。

この、秘めたる恋が、自分の中で楔を打ったとき。

彼は少年ではなくなった。
その代わりに手に入れた。

本当に本当に。
この二人が好きで好きでたまらないことに気がついた。

彼女への気持ちは間違いなく恋であり愛であったけれど。
シャルルへの怒りは、間違いなく彼の言うところの「牡」の感情であったけれど。

何かが、青磁を変えてしまった。
何かが、青磁を変えてくれた。
何かによって、青磁は自分自身を変化させた。

それは、言葉にするには、まだ時間がかかるかもしれない。

■77

「まったく、マリナの切り替えスイッチは直列なのか？並列なのか？」
そう言うと、マリナがちょっと笑った。

涙するマリナを見続けるよりずっと良かったけれど、彼女の何が、そんなに気持ちを切り替える要因になったのか、さっぱり理解できなかった。

また明日ね、と笑顔で車に乗り込むマリナ・イケダを送り出すと、青磁はふとため息をついた。
冷たくなった風が、心地好かった。

そして何となくだけれど、自分の体が軽くなったような気がした。
体なのだろうか。気持ちなのだろうか。
彼女は何かを見て、切り替わったらしい。
それが何なのか、わからなかったけれど。
そうして、帰り際。
マリナが言った。
結論を変更する、と。

わかった、と青磁は言った。
どうあろうと、彼女の結論は受け入れようと思う。

誠次・マクドゥガルの日記を一緒に読み解き、その光も闇もすべてを一緒に見てくれた彼女の結論は、きっと自分も納得できるだろう。

明日が、楽しみだね。
そう思った。

今日は、眠れそうにはないけれど。
でも、夢に出てくるのは、マリナ、君なんだよ。
そうであって欲しいと言う気持ちもあったけれど。

青磁は少し大人びた目線で、去りゆく彼女を見つめた。
夜目が利かない彼は、遠くまで見ることができなかったけれど、それでも、彼女を見送った。

明日は、もっと違った景色が見えるだろう。
もちろん、このまま眠れないのだろうけどね。
久々に、W氏のサイトを見ようと思った。
そうして、一度もその感想を送ったことがなかったW氏へ。

何かコメントを送信してみるのも悪くはないと思った。

■78　審察編　00

審察・・はっきり見抜くこと

＊＊＊

次の日。
青磁・マクドゥガルもシャルル・ドゥ・アルディもマリナ・イケダも一睡もしなかった。
それぞれの物思いによって。
だから、予定されていた時間より、かなり早く全員が集合したときに、一瞬気まずい空気が流れたが、青磁の「早く始まるに越したことはない。
日本的開始時間だね」と冗談めかした合図があって、彼らは会合の席に着いた。
3 人は、まるで示し合わせたかのように、ビジネス・フォーマルの服装だった。

シャルルがスーツを着こなしているのはわかる。
若き実業家であり、研究者であり、様々な政財界に顔を出す彼は、上品でかつ裁定者である立場を考慮した色のスーツを着ていた。

もちろん着ているスーツもシャツもタイも靴もすべてが最高級品であったけれど。
青磁は、その若々しい肢体によく似合う、細身のスーツを身に纏っていた。
やはりつま先が細い紐の革靴を履き、タイも細めに締めている。
髪の毛はゆるく後ろに結び、前髪は、これまでになく、サイドに流していたため、その片方だけ薄い瞳がはっきりとわかった。

耳を出しているので、その形の良い耳にピアスがきらめいて、ますます蠱惑的な表情を際立たせていた。

そしてマリナ・イケダは。
髪が短くなっていた。
これはシャルル・ドゥ・アルディには驚くべき事であっただろうが、彼は表情を変えなかった。
じっと、彼女を見つめる青灰色の瞳が、冴えていた。
ますます幼く見えるが、髪の毛を撫でつけて、落ち着いた雰囲気を醸し出していた。

シャルルも青磁も、彼女が前日に泣きすぎて、コンタクトが目に入らないことを察していてはいたけれど。
彼女のこれまでと違う、細身の眼鏡を見て、青磁は少し心落ち着かない気持ちになった。
泣きはらしたと見える充血した茶色い目に、寝不足とわかる白い頬。
ほんの少し施した化粧が、彼女が本当は、化粧の方法を知っている大人の女であったことを男達に知らせる。

彼女も、スーツを着ていた。
白い襟のブラウスに、濃灰色のスーツ。スカートは小柄な彼女らしく、やや台形のスカート。
小さな足には少しだけヒールの付いた靴だった。
彼らは、何か、それぞれの想いをもってこの席に着いた。

傍らには、誠次・マクドゥガルの日記。そして、4 点の彼の作品。
花、男、女、麒麟。

額縁から取り除かれ、剥き出しの作品が、シャルルの手元に。

ここに並んでいた。
アルディ邸の、地下。

日の差さない、間接照明だけのその小さな空間で。
それは始まった。
長い、議論の始まりだった。

こんな仕事の話を、3 人でするなんて思わなかった。
思えなかった。

でも、彼らの結論が、この物思いの行方を決めるのであれば、それは願ってもないことだった。
議論は始まった。

さぁ、始めよう。

■79　審察編　01

【マリナ・イケダの審察】

作品：「花」

朝顔の花。
花言葉は、「愛情のきずな」「はかない恋」「愛着、固い約束」

作品・「女」

登・マクドゥガルの絵。
黒い髪、黒目がちな瞳、憂えた乙女。
白い朝顔のイメージ。
誠次との間に一子を授かり死亡。神経耗弱？
自宅近くの河で溺死。
誠次の唯一の運命の人。

作品：「麒麟」

麒麟。中国の霊獣。
マクドゥガル家の象徴。吉兆と繁栄の証。
誠次も出自をこのメダルで開かす。
マクドゥガル家の男子はこれらの身につける何かを持っている
模様
妻である登に請われて作成。
麒麟は、マクドゥガル家の男子の象徴？

作品：「男」

もし、男児が成長したらという予想のもとに、誠次が作成。
ひょっとすると「女」も女児を想定したのかも。しかし、登の

特徴と一致することからこの想定は却下。
男は男児が誕生した後、すぐさま修正を施した模様。

<
■80　審察編　02

それでマリナ・イケダ氏の結論は？

シャルルがそう言った。

彼は長い脚を組み、彼のためだけに用意された椅子に深く沈んでいた。
性急な質問だと思った。

彼の青灰色の瞳は、遠くを見ていたし、マリナが彼を激情で見つめることはなかった。

静かな、静かな空間。

いたたまれないということはない。

彼らは大人のだ。
今、その路を踏み出した青磁・マクドゥガルには実感できた。

彼女は少し笑った。

結論は出ています。
そう言った。

そうして、彼女はしばらくコンタクトで慣れてしまったせいか、眼鏡を少し、押し上げた。

「私の答えは出ています」
マリナは短くそう言った。

前置きもない、回答のみの短い言葉。

「私の答え。というよりもむしろ、登・マクドゥガルの選定した答えです」
そう言った。

■81　審察編　03

「これは、誠次・マクドゥガルの選んだ作品でない。それは誠次の日記からわかります」
彼女は続けた。
ひとつひとつの言葉をあえて短く区切って。

「彼は日記の中で登・マクドゥガルに請われて作品を作成しています。
それが今回の作品の4 点です。
その他、最後のデッサンは完成していませんし、自画像については日本に流出しています。
となると、この4 点のうちの3 点が、セット作品であることが明瞭です。」

なおも続ける。
謳うように。
「セットと言いますが、誠次の手放したくない作品は一つだけです。
それは「女」・・最後の妻を描いた作品以外は、彼にまつわる作品ばかりです」

そうして。
彼女は結論を出した。

それは何度となく覆えされた、マリナの行き着いた結論の最終駅だった。

「だから。セット作品は、【男】【麒麟】【花】です」
「なぜ、「女」は入らないのか？最愛の妻の絵が、連作の中に入らないのは解せない」
青磁が即座に質問する。

シャルルは裁定者に徹しているのだろうか。

じっと、目を瞑って、足と手を組んだまま、彼は微動だにしなかった。
マリナは小さく笑った。

「それは、その作品達をよく見ていただければわかることかと。・・皆、登が愛した作品です。
そして、その中でも「女」は誠次にとって、最愛の人を描いた作品です。

これだけが、彼の作品の中で異質なのです。」

マリナは、自分が想像したシャルルを描き続けた日々と、そのスケッチブックを思いだしているのかも知れない。
そう思った。
愛する人のその後を想像して描く絵ほど、甘美でかつ惨めで、哀しいものはない。

誠次が何を思ったのかが重要だった。

この絵を選ぶのは難しい。
どれも作成年月日が近い作品だ。

それに、誠次が手がけたことでは間違いがないから、これらに意味を待たせる誠次の考えを理解しないと、この作品に順列なんて付けられない。

その瞬間は、シャルル・ドゥ・アルディでさえも舌を巻く冷徹な批評家であった。
マリナの物言いは短く冷静で、問答に動じない自信に溢れていた。
彼女がこの結論を出すまでには、その魂を削るくらい、涙を流し、物思いに耽り、そしてその誠次の愛の強さを知って、弱った彼女を青磁が抱き留めたのに。

「私の結論は変わりません」
「面白い」

初めて。

シャルル・ドゥ・アルディが声を発した。

■82　審察編　04

シャルルの発言が流れを変えた。

「その答えが、この作品に秘められているのであれば見てみよう」
青磁・マクドゥガルが横からそう言った。
シャルルは次にまた言った。

「青磁。その前に、君のその、マクドゥガル家の男子たる証を、説明してくれ」

ああ、それからなのか。
青磁は少し、頷いた。
マリナに説明していないことを、シャルルがきちんと覚えていたことが、何となく嬉しかった。
そして、自分がそのマクドゥガル家の忌まわしき血族の末裔であることを暴露することが少しだけ、躊躇われた。

だから。
だからこそ、彼女に未だに言うことが出来なかったのかもしれない。
青磁・マクドゥガルは説明した。

「マクドゥガル家の男子は、自分が当家の血筋だということを何らかの持ち物で表している。
そもそも、血族結婚か、他民族との政略結婚が多かったから人種の証というよりはむしろ、自分の子供は紛れもなく自分のこどもであるという確認、程度だったのかもしれないけれど」
青磁は薄く笑った。
自分の顔立ちが、誠次・マクドゥガルとそっくりで、安堵した両親。

でもこの病に対して「呪い」という非科学的な、その言葉でしか受け入れることのできなかった、かわいそうな両親。
今なら彼らの慟哭がわかる。
かつての一人の人を愛しすぎてしまった誠次とよく似た風貌の子供。
直系なのに、その挙動に驚きおののく毎日。

かわいそうな、かわいそうな両親。

彼らも、人間なのだ。
万能ではない。
そう、思い知る。

それでも彼らは、自分に残してくれたものがある。
青磁は、束ねた髪の毛から覗く、ピアスを示した。

良く見れば麒麟の刻印が入っている。
マクドゥガル家の相続人たる象徴。
それが彼の耳に入っていた。

「これはオレの出自を示すものだ。

麒麟を身につけるマクドゥガルの男子はその直系男子を示し、かつ、相続人であるという
証だ。これは誰も覆すことの出来ない、証だ」

■83　審察編　05

かつて、何度も子を流して涙した両親が、やっと授かった実子が自分であると言われていた。

その誠次と同じ風貌を持つ男子を産み出した両親。
彼らを思うたび、不憫に思う。

そして数年後。
簡単に数年後と言っても、彼らにとっては途方もない長い年月だったに違いない。

誠次の言っていた20 年以内に生まれた自分がいた。

青磁と名前をつけることで、直系の証を立てた。

誠次・マクドゥガルは、次の当主には、この名を立てることを条件にその当主の座を明け渡した
。

誠次は青磁を生み出した。

このピアスと自分の容姿が直系血族であり、どんなに呪われた遺伝子疾患を持とうとも、自分で
あることを表していた。

そんなときにマリナ・イケダに出会ったのだ。

彼女はそんな呪いはないと笑う。

そして、一緒に、誠次の果てしない路を見てくれと言った。

それだけでも、彼女に恋せざるを得なかった理由にならないのだろうか。

■84　審察編　06

「イケダ氏の回答を検証しよう」
シャルル・ドゥ・アルディは言った。
そうして、その4 つの絵を。額縁から外し、そしてマリナと青磁の目の前に示した。

【麒麟】【男】【花】彼女が望んだ。
登が望んだそれがそこにはあった。
かつて、慟哭した男児の誕生。
これが彼女を壊してしまった。

だがしかし。
その一方で望んでいたはずなのだ。

マクドゥガルという澱んだ血の濁りを清浄化してくれる存在を。
それが、彼女の生み出す、麒麟であり、男児であり、そして、彼女のこよなく愛した花・・朝顔の花の血脈であることを、マリナが理解した時点で、その回答は完結していた。
それはすべて「血脈」というカテゴリでくくられた。
それはマリナが女性であり、子供を産み出す機能を備えており、かつ、こよなく愛する人を持つ女性であるからこそ、言い得た結論であった。

青磁・マクドゥガルは、この希有な女性の存在を感謝した。
そしてシャルルは、この運命の人のことを誇りに思った。

どんなにどんなに傷つけても、引き離しても、それでも惹き付けてやまない存在が、彼女なのだ。

それは誰にも変わりが出来ない。
それでは。
解答はこの絵の中にある。
シャルルが微笑んだ。

マリナと、青磁が少し腰を浮かせた。

シャルル・ドゥ・アルディの彼らに対する採点結果は、SSSだった。
最高得点だ。
それはマリナ・イケダのみに値する評点ではなかった。

この幼くも大人の階段を上りつつある、若き当主に対しても与えられる賛辞だった。

青磁。
君は、こちら側に来てしまったんだね。
シャルルはそう思った。

それは、少しばかり哀しかったけれど。
でも、それ以上に、何か嬉しかった。

自分の憂いを理解できるような準備の整った青磁を受け入れたいと思ったのだろうか。
それとも。

彼の大人の男としての脱皮を喜び、改めて、シャルルが定めた運命の女の争奪戦を始めるきっかけにすぎなかったのか。
わからなかったけれど。

どちらにしても、シャルルにしてみれば退屈はしなさそうだった。

■85　審察編　07

「それでは、イケダ氏の結論を検証してみよう。」

シャルル・ドゥ・アルディが言った。
そうして、4 枚の絵を完全に額縁から外して、裏返しにした。

「！」

これには青磁とマリナが驚いた。
完全に席を立った状態で、その絵に見入った。

「これ・・・」

そう。
これが答えだ。

4 枚中。

誠次・マクドゥガルの作品の中で、「女」だけが異質だった。
その他には作成年月日と誠次のサインが入っていた。
そして短く「最愛の登へ」と登に捧げられたメッセージが入っているだけだった。

だがしかし。

「女」に書かれていた文言は。

それが何であるかすぐにわかった。

・・・・誠次・マクドゥガルと、登・マクドゥガルの結婚誓約書、だった。

誓いの言葉はただ言葉少なだった。
神を信じない誠次の言葉。

「誠次・マクドゥガルの名にかけて誓う。登・マクドゥガルを唯一の定めた妻に迎える。」
登はそれに答えるかのように。

The place to which it returns is here. （私の帰る場所はここだ）
二人の署名がしてあった。

二人だけで誓い、二人だけで書いた、誰に誓うでもない、自分たち自身への誓いの言葉と、サイン。

誠次の筆跡と、柔らかい登の筆跡が、互いの永遠を誓っていた。
こんな場所に、こっそり残すくらいの密かな願いを。
秘めたる願いを。

そして、脇には、生まれたばかりのこどもの手形と足形があった。
これは、彼らの息子のものであろう。

麒麟の出自を彼ら自身が与えることの出来ないかわりにこうして、彼らの永遠の側に、印を残したのだ。

「女」が唯一、セットでないという理由がわかった。
これだけは、売れないのだ。

売却できない理由がここにあった。
この絵の作成時期は、誠次が偽りの婚姻をした頃だ。

愛してやまない人と、彼らだけの本当の誓いを交わした時の気持ちを考えると、
張り裂けそうな遣る瀬無い気持ちが溢れていく。
そして、彼らの愛は、自分たちだけではなく、ちゃんと、こどもにも向いていたのだと思う。
マリナは息を潜めて、その文字に見入った。

■86　審察編　08

検証も議論も、もう必要なかった。
マリナの出した結論は、彼らの満足に足るものだった。
それだけだ。

「以上。検証は終わり。商談は成立でいいね、青磁」

裁定者であるシャルル・ドゥ・アルディの言葉で、青磁とマリナが我に返った。
そうして、青磁が微笑んだ。彼がこんなに穏やかな笑いをすることはこれまでなかった。

「ああ、もちろんだよ」
それでは、これでお開きだ。

シャルルが言った。

オレは行くよ。
それだけ言い残して、部屋を出て行ってしまった。
彼の冷たい横顔がマリナと青磁を横切った。何も表さない無表情なその様子に青磁は不満だった。

彼女のもたらした答えは、シャルルはかなり気に入ったはずだ。
それなのに。

シャルルが部屋を出て行った後、青磁がすぐさま憤懣を漏らした。

「なんだ？あれ」
青磁がタイを緩めながらそう言うと、マリナが、あれがシャルルなんだ、と言った。
そして、次に、たぶんね、と付け加える。

「マリナ、どうしてわかったの？あれが答えだって。」
「青磁のピアスをみたから。」
マリナが笑った。

麒麟の刻印のある、青磁のピアス。
彼の容姿とピアスと名前と、そうしてその誇りと。
それを見たときに、答えをこれにしようと思った。

閃いたわけではない。
これを自分の答えにしようと思っただけだった。

彼が愛してやまないもののうち、渡せないものがあるとしたら、それはきっと登その人なのだろうと思う。

写真も資料もすべて焼失してしまったので、本当に彼女なのかはもう誰にもわからない。
けれども。

この答えが自分は満足していた。
もし間違っていたら、オーナーには申し訳ないと思ったけれど。
結果を出さないのは仕事にならないとは思ったけれど。

でも、これしかないと思ったのだ。

登、あなたは、自殺なんかじゃない。
今なら、そう思う。

彼女は自ら命を絶った訳じゃない。事故死だ。マリナはそう思う。
これほどまでに。

帰りつく場所はここしかないと思い定めたのに、どうしてそこを離れることができようか。
マリナがそう言うと、青磁が静かに笑った。
そうだね、と言ったけれど、もう、彼女の頭を撫でることはしなかった。
その代わりに、彼は、彼女の目をまっすぐにのぞき込んだ。

初めて出会ったときのような、激しいまなざしではなくなっていた。

見る者を焦がすような、そんな落ち着かない視線ではなくなっていた。

彼の大人びた、少しだけ寂しそうだけれど限りなく魅力的な瞳を見て、これで良かったんだよね、と一人呟く。

「終わった、ね」
「そうだな。終わったな。」
彼が息を吸って、そして吐いた。
煙草が吸いたいのかもしれない。

「堅苦しいビジネスは終わりだ。少し外に出ようか。」
着替えてから庭園に集合するように、約束して別れた。

■87

堅苦しいスーツを着なければいけない時もある。
でもこの、脱いだときの開放感が好きだった。
すっかり慣れた道のりで、外に出た。
乾燥したさわやかな空気が彼女を包んだ。

それほど長い時間を過ごしたわけではないが、酷く消耗した感じだ。
気分はすっきりしていたけれど。寝不足がたたっているらしい。
大きく伸びをして、息を吸う。仕事で徹夜した時の気怠さと同じ感覚が出てくる。
今日、邸内に飾られた花は、朝顔だった。

その朝しか咲かない頼りなさげな花を、彼らの集うほんのわずかな時間のためだけに用意するシャルル・ドゥ・アルディを愛おしく思った。

愛おしい。

少し、違うかもしれない。
正確にこの感情を言い表すことができなかった。
囚われていた物思いが、この青い空に吸い込まれていくようだった。

シャルルは私を壊した。
私の壁を壊した。

高くて厚くてそして自分だけしか開くことの出来ない、自分でも気がつかない壁だった。
そうして、壊されることが怖くて、青磁にあの人の影を見た。
青磁が好きだと言ったことに、戸惑ったけれど、あの人に言われているかのような錯覚を起こした。

誠次の日記に囚われているよ、とシャルルも青磁も何度も私に教えきかせたのに、私は耳を塞いで目を閉じて嗚咽を殺した。

本当はもっと簡単なことだったのに。
シャルルに伝えなければならない。

何を？
何かを。
何かを伝えなければ。

そう思った。

「何をぼんやりしているの？」
振り返ると、青磁が声をかけてきた。
彼も普段着に着替えていた。
最初に出会ったときと同じ服装だった。

あえて、彼はこれを選んだのだと思った。

別れの時が近かった。

そうして。
「前髪。切ったのね」

どうりで遅いと思ったわ。
そう言うと。

うん、と青磁が照れくさそうに前髪を引っ張った。
前髪を切った彼は、年相応の若い青年だった。

その精悍な頬も、意志の強すぎる唇も、その、吸い込まれそうな瞳の光も同じだったけれど。

何かが決定的に違っていた。初めて出会ったあの時よりも、ますます魅力的になった。

「よく似合ってる。」
彼女が笑った。

そう？と青磁も笑う。

幼い笑いだった。
でももう大人の男の笑いだった。

また、思いついたように、青磁・マクドゥガルが軽く言った。

「マリナ。結婚してくれ」
そして次の言葉にマリナは即答した。

「できません。」
「どうして？」
「私からキスしたいと思う、大好きな人がいるから」
迷わず、そう答えた。

彼女の恋の呪縛が解かれたのだと、青磁は思った。
マリナ。
君は戻れない路から戻ってきた。
だから、そんな君を好きになったことは、後悔していない。

・・この気持ちを、ずっと、オレの秘密にしても、赦してくれるね。

「酷いな。オレ、名前に誓ったんだぜ。マリナ・イケダを娶るって」

「どうしてあんた達はそうやって簡単に自分の名前に誓えるのかしら」

信じられない、とマリナが首を振る。

簡単に誓った訳じゃないけれどもね。
青磁が苦笑した。
「マリナ、お別れだ」

青磁が手を出した。
フランスに在住の彼の親戚の家に行くという。

そこに、彼の両親が来ていると、彼は言った。
今度こそ、逃げないで、ゆっくりと話をしようと決めていた。

マリナはその差し出された手を見た。
まだ、若い手だ。

この手を握りかえせば、彼とはお別れだ。

彼が現れたとき、もうわかっていたことだったけれど。

なんだか胸が苦しかった。

別れはいつも辛い。

特に、今回は。

マリナはこの長い時間を一緒に過ごした少年のことを、見つめた。

そうして、彼女はとっておきの笑顔を見せる。
「またね！それまで元気で」

これが彼女の別れの挨拶だ。
もう会えないかもしれない。
けれども、次を約束して。

相手の健康と倖せを願って。
彼女は力いっぱい、彼のその手を握った。

手を引けば、彼女はまた簡単に青磁の胸に転がり込むだろう。
掌の感触を刻み込むようにして握手した手を、離した。

油断も隙もありすぎるよ、マリナ。
青磁がそう笑う。

もうちょっと、男に対しての警戒というか防御というか、そういうものを身につけるように、
シャルル・ドゥ・アルディにきつく言わなければならない。

「マリナ。最後にひとつだけ」
青磁が、最後に言った。

「スケッチブックは無事かい？」
え？と首を傾げるマリナに、青磁が笑いかけた。
闊達な笑顔だった。

「君の宝物は、温室にあるよ」

マリナが悲鳴を上げた。

青磁！あんたって子は！

そう叫びながら、温室に向かって走り去る。

その背中を見ながら。両の手をポケットに入れて。

歩き出した。

彼も、背中を向けた。

■88

温室にはシャルルがいた。手に鉢を持っている。
その鉢の花は彼の品種改良している薔薇ではなく、朝顔の鉢植えだった。
「何？」
シャルルは振り返らずに言った。

この館の中で走るのは、マリナと青磁くらいだ。

「それ・・・朝顔だね」
「これがオリジナルだからね。枯れるとやっかいだ。
　日が高くなってきたので、鉢を移したんだ。」
オリジナル・・・マリナが呟いた。

「誠次・マクドゥガルの蒔いた、朝顔だよ」
これが、誠次の朝顔。
マリナの胸が詰まった。
日記にあった、朝顔はすべて枯れてしまった。
ほんの少しの種を除いて。
それが、長い時を経て、ここに再現されていた。
誠次の捧げた「花」がここにあった。

「それで、何か用なの？」
シャルルに話しかけられてはっとした。

そうだ。
思いだした。

「スケッチブック！スケッチブックがここにあるって青磁が。」
ああ、とシャルルはひとつ頷く。
そして、これのことかい？と言って温室の奥のテーブルにあったそれを彼女に渡した。
使い込まれた古い表紙のスケッチブックには彼女の名前が書いてあった。
良かった。
安堵の時を漏らす。

「持ち歩いているものがないことに気がつかないなんて、迂闊
すぎる」
シャルルが短く言った。
作業をしながら。

彼女と話をしながら薔薇の様子を見るのではなかった。
薔薇の様子を見ながら、ついでに彼女と話をする。
そんな様子だった。
だから、最初は独り言のように聞こえた。

「・・・見たでしょ」
「何を？」
「中身。この、中身」マリナはスケッチブックを指さした。
「見て欲しいの？」

興味がなさそうに言うシャルルを横目でみた、その中身をきっと見ていると思った。
でも、他人に感心のない彼は本当に見ていないかもしれない。

「シャルル。こっちを向いて」
マリナが、言った。
いつか、彼が彼女に言った言葉だった。

シャルルが、こちらを見た。

ああ、私はこの気持ちを伝えきれるだろうか。

青灰色の瞳が、彼女を捕らえた。

シャルル。
どうか、もう一度笑って。

彼女はぎゅっと、目を瞑って、そして、何かを思いきった。

「シャルル。これはシャルルにあげるわ」
スケッチブックを差し出した。

これには少し、彼が驚いたようだ。
少しだけ目を見開いた。

でも彼をよく知らない者が見れば、それは本当に微妙な変化であった。

「見てなかったら、後で、見て。これはシャルルにあげる。
私はもういらない。迷惑なら捨ててくれて構わない。
私の8年分のシャルルが入っている」

「それほど大事なものを、どうしていらないと言い切れるんだ？」

彼が、ようやく口を開いた。

静かな、声だった。

「だって、それは本物のシャルルじゃないから。
私がぐずぐず悩んでいる8 年間のシャルルの形をした私のつまらない悩みしか入っていないから。
・・・新しいスケッチブックを買うわ。
そして、そこには、想像じゃないシャルルだけを描くことにする。
だから、迷惑かも知れないけれど、また会ったときに私が『スケッチさせて！』って言ったら。
ちょっとだけ、ちょっとだけで良いので、描かせて欲しいの。」

そこまで言うと、彼女は短くなった頭に手を当てて、あははと笑った。
そんな煩悩の固まりのスケッチブックなんて、いらないよね、と冗談ぽく言った。

そのとき。

「やぁ、本当のマリナ。ようやく会えたね」

シャルルが微笑んだ。

綺麗な、とても美しい薔薇のような微笑みだった。
この薔薇よりも脆くて美しいその人が、マリナに笑いかけた。

そして、おいでと言った。
手を差し出した。

マリナは躊躇わずにその手を取った。

別れの挨拶ではない。
迎えの手だった。

涙は出なかった。
ただただ、嬉しかった。

シャルルが微笑んだ。

そして、こんな矮小な自分を受け入れてくれようとした。

この笑顔を、いつも見ていたい。

そう思った。

シャルル・ドゥ・アルディは。
彼は、このマリナの変化に歓喜した。

髪の毛を短く切っただけで気分転換になったとは思えない。

何かがあったのだ。
何かが変わった。

そう確信した。

今まで頑なに見せようとしなかった彼女の秘密を、彼に差し出してもういらないと宣言する。
それは彼女の8 年間の妄執とでも言うかのような、囚われた感情だった。

それを壊して、彼女は新しく始めようと言う。
壊してしまった。
泣かせてしまった。

そして、彼女を突き放した。
それでも、彼女はここに来た。

・・・そして、シャルルの手を、取ったのだ。
まっすぐに、躊躇わずに。

そのスケッチブックが埋まったとき。

たとえ、埋まらなくても。

もう、絶対に、離しはしない。
お互いが、同じ事を思った。

■89

「それでまた逃げられたわけ？」
「シャルル・・・これで3 度目ですよ」

テレビ会議システムを複数箇所設置するためのアップデートをしたとたん、割り込んできた姦しい声が煩わしかった。

これで複数箇所と、ストレスなく会話が出来る利便性もあったが、今回ばかりはこの強制割り込みの機能は削除するべきだと思った。

「シャルルはマリナのことになると、とたんにヘタ・・」

ぶつっ。
回線を強制切断した。
やっぱりこの機能は削除しよう。

すると今度は別の回線からコールが入る。

相手の名前を見て、シャルルは回線接続許可のコマンドを送った。

「やぁ　今回は青磁が世話になったな。」
「まぁね」
「今、こっちに来ているよ」
「知ってる」

青磁とよく似た風貌の男性が微笑んだ。

フランスで成功し、今はホテルオーナーとしても日々忙しくしている彼は、先般シャルルに依頼されて、自分の経営するホテルのレセプションに出席することを条件に、リゾート島のコテージを貸し出した。

ところが、フランスの華と言われるシャルル・ドゥ・アルディが、そのコテージの分厚いドアを蹴破ったという。

面白すぎるじゃないか。

その口調は、シャルルの最愛のファム・ファタルを惑わした、若き青年にそっくりだった。

きっと、あと十数年したら、青磁はこんな風貌になるのだろう。

それくらい、彼らはよく似ていた。

そして似ているのは風貌や口調だけでなかった。

彼の耳に光るのは、ピアスだ。
麒麟の印の。

けれども彼がその権利を放棄して久しい。

出自を示すその印の隣に、彼が朝顔の刻印を入れたことをシャルルは知っていた。

ここに、2 頭目の麒麟がいた。

「要件は何だ。手短に」
相変わらずだな、と彼が笑う。
「彼に宜しくと言ってくれ。近いうちにそちらに行く」
「わかった」
それだけ言うと回線が切れた。

そうして、吐息をつく。

マリナ・イケダは帰国した。

だって仕事があるし、オーナーに今回のことを報告しないとね！と元気よく言って、残れと言うシャルルを振り切って帰ってしまった。

でも今回は、そうか、と言って見送った。

そしてマリナが次に逢った時には、髪が伸びていて、「スケッチさせて！」と懇願する姿を想像することにする。
スケッチは良いけれど、君の洋服の書き方は雑すぎるからね。

ベッドでなら良いよ。

そう言うとまた顔を赤くして怒るのだろう。
シャルルは少し笑った。

「だ、そうだ。」

シャルルは室内の『彼』にそう言った。

「そうですか」
「聞いていただろ」
「あなたがあまりにもおかしそうに笑っていらっしゃるから。
少し気を取られていました」
『彼』は穏やかに微笑んだ。

違うな。
そろそろ朝顔に水をやる時間だからだ。

マリナと青磁を残して、会合の席を立ち、隣のマジックミラーの小部屋に移動して、シャルルは本当に売却をして良いか『彼』に確認した。

『彼』の答えはウィだった。
若い彼らの一部始終を見て、それで心を決めた。

それに自分にはもう必要がないから。
あの1 枚以外は。
そう言った。

マリナは気がつかないのかもしれないが。

後になって、青磁は気がつくだろう。

なぜ、誠次・マクドゥガルの作品が10 点とも100 点とも1000点とも言われるのか。
なぜ、長らくアルディの館にその絵が保存されていたのか。
なぜ、今後価値が上がるであろうその絵を、青磁に見定めさせたのか。
そしてもう一度、青磁がここを訪れたときがそのときなのだと思う。

シャルルはマリナのスケッチブックを見たとき、すぐさま『彼』を思い出した。
そしてそのスケッチブックを『彼』にも見せた。
『彼』は少し無言であったけれど、少しして、彼女になら託せると言った。

アルディ家には損失はなかった。

なぜなら、作品は増え続けているから。

すべての作品が「女」であったけれど。

酷いやけどを負ってなんどか手術を繰り返したら、顔つきが別人になってしまった。
不思議なことに、あの父親や姉によく似た風貌になった。
そうして。
一生外に出ないことと絵を描くことを条件に、『彼』は名前を捨てた。
当主の権利を放棄するかわりに条件をいくつか出した。

次に生まれる当主になるべき相続人には、セイジと名付けること。
父と名乗れない彼の唯一残せる名前だった。『彼』の血脈は絶えたわけでないことを示したかった。

そして、残された子供の生存を確認できること。
こちらからはコンタクトは取らない。

自分の出自を示す、彼女との愛の証は、溶かしてふたつのピアスを作った。
ひとつは残された子に。
もうひとつはセイジと名付けられた彼に。

二つの麒麟が揃ったとき、彼らの因縁は浄化されるだろう。
そんな願いを込めて作った。
そして絵を描き続けた。
過ちが赦されるわけではなかったけれど。

我が子に、生きて生き抜いてくれと誓ったから、自分はまだもう少し生きて、彼女を描き続けようと思った。
以降、彼女の絵しか描かないことを誓った。

あの小さな女性が書き散らしたスケッチブックを見て、ここにも秘めたる恋に苦しむ人がいると思った。

そして、彼女がその殻を破って、若き当主との恋を成就できるのであれば、こよなく愛したあの人の哀しみを分かち合えなかったことを少しだけ、他でもない、もういない彼女に赦してもらえる気がした。

館の主は代替わりをして、そして2頭の麒麟を連れてきた。
決して深く関わってはいけないと念を押して。

だが年長の麒麟は気がついたのだ。
それとなく、毎回、宜しくとメッセージを残していく。

彼の毎日は同じだ。花に水をやり散歩をして、そして絵を描く。
大人になった彼女を想像して描く。

あの日本人女性と違うのは、これが、もう、彼女に伝わらないことだ。
部屋を出て行くとき、主が声をかけた。

「マリナと青磁がよろしくと。メールが届いていた」
そうですか、と『彼』は微笑んだ。

「マリナはいずれこの館に迎える。アルディ夫人として遇するように」

はい、とまたひとつ微笑んで、今度は本当に部屋を出た。

マリナ。

シャルルは微笑んだ。
美しい微笑みだった。

彼が見ていると気がつかずに、彼女が一生懸命ビデオレターに録画を入れている。

メモを読み上げるかたちだったけれど、内容はごく簡単だった。

帰国した連絡と売買契約のお礼。

そして、執事さんはじめ皆によろしくと伝えて欲しいこと、変な日本びいきで皆を困らせないようにと念押ししてあった。

マリナ、アルディ家には執事はいないんだよ。ジルが居るじゃないか。

そうして、ディスプレイの向こうにいる彼女の唇を、つと、その細く長い指でなぞった。

（FIN)

# 秘するが花02　邂逅編

http://p.booklog.jp/book/66424

著者 : tomogon
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tomogonn/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/66424

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/66424

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ